教育年報 2017

岡　山　県　立　大　学

はじめに

岡山県立大学
学長　辻　英明

グローバル化が進む中，IoT，ビッグデータや AI が世の中の仕組みを変える第 4 次産業革命が急速に進行していると言われています．特に AI は社会の様々な分野に浸透し，将来的に，現在人間の仕事として行われている作業が AI 化したロボット等に取って変わられることが現実味を帯びてきております．特に我が国におきましては，少子・高齢化がますます進展しており，社会，産業の能率化にコンピュータの技術革新を取り入れて行かざるを得ない状況になっております．このような社会情勢の中，人間は AI に任せる部分を任せ，人が行うべき新しい仕事を創出してゆく必要があります．人口知能を作り出した人間は，人工知能を進化させつつ共存の道を歩まなければなりません．過去の産業革命においても類似の社会的インパクトがあった筈で，我々はそれに学ぶ必要もあるでしょう．

斯様な情勢の中，社会は，今まで最も要求されていた高度な知識と専門性以外の要素を持つ新しい人材像を描いております．こうした社会的要求に対応して，大学におきましても，大学の本来の役割に立ち戻り，専門性を深めつつ，自立性，協働性ならびに創造性のある人材育成のための教育改革を断行することが強く求められる現状です．

このように大きく変化している社会状況を受け，本学は，平成 25 年 4 月より始まった第 2 期中期計画において，「体系的な教養教育の導入」，「グローバル教育の推進」，「戦略的な地域貢献の取り組み」からなる 3 つの人材育成と地域貢献に係る基本方針を策定し，それを推進するための大学の組織改革を進めてきました．また，かねて構想していた「地域連携教育」を進めるべく，文部科学省の補助事業である平成 27 年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進（COC+）事業」に応募し選定されました．今年度で第 2 期中期計画を終え，来年度からは第 3 期中期計画が始動いたします．そこでは，重点方針として，(1) 教育・研究活動推進，(2) 社会連携活動推進，(3) 教育・研究・地域のグローバル化活動，(4) 大学構成員の協働と活動支援，(5) 大学構成員の管理と運営の 5 つを掲げております．今年度は，今後十年を見据えた本学の将来構想が全学的に検討されました．第 3 期中期計画では，そこで練られた学部・学科構想，全学のシステム改革が断行され，地域から求められる人材育成と研究促進に向けた本学の強固な体制が確立すると思われます．

教育年報 2017 は，1 年間の本学の教育に関する実績を内外に示すためのものであります．

本年度は各部署における内容の充実に加え，本学の社会連携教育が，第 2 章地域連携教育（COC+）として独立して掲載されることになりましたが，これは当該方面の教育を推進する本学にとって大きな進展であります．本学の教職員一同は本学の教育改革方針をよくご理解いただくと共に，外部の学究の皆さまの英知を取り入れ，本学の教育を盛り立てていただくようお願い申し上げます．

2018 年 6 月

目次

はじめに
第１部　学部及び大学院における教育活動 1
第１章　学部の教育活動と成果 1
1　概要 1
2　入学者受入 1
2-1　概要 1
2-2　選抜方法 2
2-3　入学前教育 4
2-4　留学・転学受入等 8
2-5　まとめと課題 9
3　高大連携 10
3-1　概要 10
3-2　高等学校校長協会との連携 10
3-3　高大接続事業 11
3-4　まとめと課題 12
4　共通教育における学生の学習支援 13
4-1　概要 13
4-2　共通教育部 14
4-3　教養教育推進室 15
4-4　語学教育推進室 17
4-5　情報教育推進室 22
4-6　健康・スポーツ教育推進室 23
4-7　社会連携教育推進室 24
4-8　留学生・転学生 24
4-9　大学コンソーシアム岡山 24
4-10　まとめと課題 28
5　専門教育における学生の学習支援 29
5-1　概要 29
5-2　保健福祉学部 29
5-3　情報工学部 32
5-4　デザイン学部 36
5-5　まとめと課題 44
第２章　地域連携教育（ＣＯＣ＋） 46
1-1　概要 46
1-2　組織体制 47
1-3　授業の構築 49
1-4　学修評価 63
1-5　正課外での活動 68
1-6　教員の教育力向上に向けて 69
1-7　まとめと課題 70
第３章　教育活動と成果（研究科） 73
1　大学院における教育活動 73
1-1　概要 73

1-2　保健福祉学研究科 73
1-3　情報系工学研究科 75
1-4　デザイン学研究科 79
2　大学院における研究活動と国際交流 80
2-1　概要 80
2-2　保健福祉学研究科 81
2-3　情報系工学研究科 88
2-4　デザイン学研究科 90
2-5　まとめと課題 90

第２部　教育研究開発機構 92
第１章　大学教育開発センターの活動と成果 92
1　概要 92
2　各部会活動 94
2-1　概要 94
2-2　教育企画室 94
2-3　アドミッション部会 100
2-4　共通教育部会 123
2-5　FD部会 125
2-6　教育評価部会 144
2-7　キャリア形成支援部会 153
2-8　学生支援部会 161
2-9　まとめと課題 173
3　教育力向上支援事業 175
3-1　目的 175
3-2　本年度実施事業及び来年度実施予定事業 175
3-3　まとめと課題 191
第２章　国際交流センターの活動と成果 193
1　概要 193
2　国際交流における教育活動 194
2-1　国際交流協定校 194
2-2　語学文化研修等 194
2-3　教育交流 197
2-4　国際交流センター（建物）内での様々な活動 197
2-5　共通教育との連携 200
2-6　まとめと課題 200
3　国際交流における教育・研究支援活動 200
3-1　国際交流協定校 200
3-2　国際研究協力 201
3-3　基盤整備 201
3-4　まとめと課題 202
第３章　学術研究推進センターの活動と成果 203
1　概要 203
2　学術研究推進と教育活動 203
2-1　コンプライアンス・研究倫理教育に関する研究会の実施 203
2-2　科研費計画書作成研修会 203

2-3　科研費計画書の提出前検討会の実施 204
2-4　教員の研究活動に係る環境整備 205
2-5　まとめと課題 205

第３部 附属図書館の活動と成果 206
1　概要 206
1-1　図書館活用の推進 206
1-2　英語文献利用講習会 211
1-3　電子ジャーナルの利用 211
1-4　リポジトリ公開登録及び利用状況 212
1-5　まとめと課題 212

付録１
A 入試統計 214
B 卒業時・修了時アンケート及び授業評価アンケートの詳細 215
C 全学的就職支援の実施状況 219
D 国際交流 222
E 高大連携協定等に基づく授業に係る高等学校への講師派遣及び生徒の受入 225
F 高等学校への講師派遣及び生徒の受入（授業以外） 226
G 学生・クラブの表彰 227
H 委員会等の審議事項 231

付録２
A 学部ディプロマ・ポリシー,カリキュラム・ポリシー,
アドミッション・ポリシー 235
B 大学院ディプロマ・ポリシー,カリキュラム・ポリシー,
アドミッション・ポリシー 272

編集後記

第１部　学部及び大学院における教育活動

第1部は本学の教育,すなわち学部（学士課程教育-共通教育・専門教育）と大学院における教育活動と成果といった本学の教育活動状況を記録し，考察している場所であり,教育年報の中でも最重要の位置づけと見なしているところである．一昨年度の年報において第1部「学部及び大学院における教育活動」は大幅な改定を行った．それ以前は各学部及び研究科はそれぞれ独自の項目を立てて記述していたが,そのために見づらさや内容の濃淡が生じる傾向があったことを解消するためである．本年度も基本的には昨年度の記述の仕方を踏襲している．

昨年度の教育年報では実現していなかったが,平成28年度から本学では「地域連携教育」に係る副専攻「岡山創生学」が立ち上がっており,共通教育と専門教育,すなわち学士課程教育に広く跨って同教育が実施されることになっている．本年度はまだ共通教育課程に置かれている科目が開講されているのみで，専門教育課程における関係科目は平成30年度からの実施となる．昨年度,「地域連携教育」は第2部に置かれ，共通教育と専門教育とは別に取り扱っていたが,今年度は本学の教育の一つの柱として第1部に編入することにした．

また，従来本学では「地域連携教育」という用語で社会実践を含む科目を呼んできたが，今年度からそれを「社会連携教育」と呼称することとした．

なお,従来共通教育と専門教育は明確に区別する形でカリキュラムが組まれてきたが,両者の学士課程教育における連続性や一貫性について検討してゆくことが一つの課題である．

第１章　学部の教育活動と成果

1 概要

第 1 章では,主に学部の入学者受け入れ,共通教育における学生の学習支援,専門教育における学生の学習支援を扱っている．特に入学者受け入れについては，現在改訂中のアドミッション・ポリシーを視野に入れながら過渡期の対応を行っている現状である．

大学院の選抜方法,入学者選抜の変更-大学院入試については，一昨年度は第 1 章に置いたが，昨年度からは第 3 章研究科の教育活動と成果に移動した．

2 入学者受入

2-1 概要

平成 30 年度入学者選抜は，平成 29 年度に見直しを行った本学アドミッション・ポリシーに基づいて行われている．ポリシーの見直しが入試方法の変更を伴うものではなかったため，一般入試においては平成 27 年度における大学入試センター試験利用科目等改訂の内容を引き継ぐ形で実施された．

平成 29 年度における入学者受け入れに関する活動として，平成 32 年度の大学入学共通テスト導入を含む大学入学者選抜改革への対応に向けて，第 3 期中期計画を念頭におき抜本的に改訂した本学ディプロマ・ポリシー並びにカリキュラム・ポリシーを見据え，大学教育開発センター・アドミッション部会で実施した入学時アンケート結果や入試区分及び日程別の入学者における履修状況と入試成績の比較分析結果，高等学校校長協会との協議内容等も踏まえて，アドミッション・ポリシーの再度の抜本的見直しを実施し，それに基づき平成 32 年度本学入試制度を策定した．

2-2 選抜方法

2-2-1 平成 30 年度入学者選抜の概要

平成 30 年度入学者選抜における志願者数等は，付録 1-A のとおりである．

なお，平成 30 年度入学者選抜では，付録 2 に掲げるアドミッション・ポリシーを基準として，次のとおり試験を実施した．

(ｱ) 募集人員

（人）

学　　部	学科・専攻		入学定員	一般入試			推薦入試	帰国生入　試	私費外国人留学生入試
				前期日程	中期日程	後期日程			
保健福祉学　部	看護学科		40	20	−	8	12	若干人	若干人
	栄養学科		40	25	−	3	12	若干人	若干人
	保健福祉学科	社会福祉学専攻	40	24	−	4	12	若干人	若干人
		子ども学専攻	20	10	−	4	6	若干人	若干人
情報工学　部	情報通信工学科		50	14	23	−	13	若干人	若干人
	情報システム工学科		50	14	23	−	13	若干人	若干人
	人間情報工学科		40	12	15	−	13	若干人	若干人
デザイン学　部	デザイン工学科		40	30	−	−	10	若干人	若干人
	造形デザイン学科		50	38	−	−	12	若干人	若干人
	計		370	187	61	19	103	−	−

(ｲ) 選抜方法

① 一般入試

大学入試センター試験，個別学力検査等及び調査書の内容を総合して行う．

（大学入試センター試験の利用教科・科目）

学科・専攻	日　程	教　科	科　目			
看護学科	前期日程 後期日程	国語	国		必須	
		地理歴史	世Ａ，世Ｂ，日Ａ，日Ｂ，地Ａ，地Ｂ		から１	
		公民	現社，倫，政経，倫・政経			
		数学	数Ⅰ・Ａ		必須	
		理科	物，化，生，地		から１：①	①又は②
			物基，化基，生基，地基		から２：②	
		外国語	英(ﾘｽﾆﾝｸﾞ)，独，仏，中，韓		から１	
栄養学科	前期日程 後期日程	国語	国		必須	
		地理歴史	世Ｂ，日Ｂ，地Ｂ		から１	
		公民	現社，倫，政経，倫・政経			
		数学	数Ⅰ・Ａ		必須	
			数Ⅱ・Ｂ		必須	
		理科	物，化，生		から２：①	①又は②
			物，化，生	から１	から３：②	
			物基，化基，生基	から２		
		外国語	英(ﾘｽﾆﾝｸﾞ)		必須	
保健福祉学科 社会福祉学専攻 子ども学専攻	前期日程 後期日程	国語	国		必須	
		地理歴史	世Ｂ，日Ｂ，地Ｂ		から１又は２（理科の「基礎を付した科目」から２）	
		公民	現社，倫，政経，倫・政経			
		数学	数Ⅰ・Ａ，数Ⅱ・Ｂ，簿記，情報			
		理科	物，化，生，地			

			物基，化基，生基，地基	から２		
		外国語	英(ﾘｽﾆﾝｸﾞ)，独，仏，中，韓			から１
情報通信工学科 情報システム工学科 人間情報工学科	前期日程 中期日程	国語	国			必須
		数学	数Ⅰ・A			必須
			数Ⅱ・B，簿記，情報			から１
		理科	物			必須
			化，生，地			から１
		外国語	英(ﾘｽﾆﾝｸﾞ)			必須
デザイン工学科	前期日程	国語	国(近代以降の文章)			から２又は３（理科の「基礎を付した科目」から２及び理科以外の教科の科目から１）
		地理歴史	世A，世B，日A，日B，地A，地B	から１		
		公民	現社，倫，政経，倫・政経			
		数学	数Ⅰ・A			
			数Ⅱ・B			
		理科	物，化，生，地	から１：①	①又は②	
			物基,化基,生基,地基	から２：②		
		外国語	英(ﾘｽﾆﾝｸﾞ)			必須
造形デザイン学科	前期日程	国語	国			必須
		地理歴史	世A，世B，日A，日B，地A，地B			から１
		公民	現社，倫，政経，倫・政経			
		数学	数Ⅰ，数Ⅰ・A，簿記，情報			
		理科	物，化，生，地			
		外国語	英(ﾘｽﾆﾝｸﾞ)			必須

※　国語→国，世界史A→世A，世界史B→世B，日本史A→日A，日本史B→日B，地理A→地A，地理B→地B，現代社会→現社，倫理→倫，政治・経済→政経，「倫理，政治・経済」→倫・政経，数学Ⅰ→数Ⅰ，数学Ⅰ・数学A→数Ⅰ・A，数学Ⅱ・数学B→数Ⅱ・B，簿記・会計→簿記，情報関係基礎→情報，物理→物，化学→化，生物→生，地学→地，物理基礎→物基，化学基礎→化基，生物基礎→生基，地学基礎→地基，英語→英，ドイツ語→独，フランス語→仏，中国語→中，韓国語→韓

（個別学力検査等の教科等）

学部・学科・専攻		日程	教　科　等
保健福祉学部	看護学科 保健福祉学科 社会福祉学専攻 子ども学専攻	前期日程	小論文，面接
		後期日程	
	栄養学科	前期日程	理科（化学基礎・化学，生物基礎・生物から１）
		後期日程	個別学力検査等を課さない.
情報工学部		前期日程	数学（数学Ⅰ，数学Ⅱ，数学Ⅲ，数学A，数学B(数列，ベクトル)）
		中期日程	
デザイン学部		前期日程	実技（鉛筆デッサン）

② 推薦入試

学　部	教　科　等
保健福祉学部	書類審査，小論文，面接(栄養学科の面接では，理科に関する試問も行う.
情報工学部	書類審査，面接（数学，英語及び理科に関する試問も行う）
デザイン学部	書類審査，実技（鉛筆デッサン），面接

③ 帰国生入試

学　部	教　科　等
保健福祉学部	書類審査，小論文，面接（一般教科に関する試問も行う）
情報工学部	書類審査，面接（一般教科に関する試問も行う）
デザイン学部	書類審査，実技（鉛筆デッサン），面接

④　私費外国人留学生入試
書類審査及び実技検査等により実施する.

学部・学科		書類審査		実技検査等
		日本留学試験	TOEFL (iBT)	
保健福祉学部		日本語，理科(２科目)，数学(コース１)	課す	小論文 面接
情報工学部		日本語，理科(２科目・物理必須) 数学(コース２)	課す	面接
デザイン学部	デザイン工学科	日本語，理科(２科目)，数学(コース１)	課す	実技 （鉛筆ﾃﾞｯｻﾝ） 面接
	造形デザイン学科	日本語，総合科目，数学(コース１)		

※　保健福祉学部と情報工学部の面接では，一般教科に関する試問も行う.

2-2-2 入学者選抜の変更

学部の入学者選抜において課す教科・科目の変更等が入学志願者の受験準備に大きな影響を及ぼす場合は，2 年半前にはその内容を予告することとしている．その他の変更についても，入学志願者保護の観点から可能な限り早期の予告に努めている.

2-2-3 入試業務の改善

前年度の試験実施において整理した課題に対しては，学生募集要項や業務マニュアルの内容を充実する，面接室への受験者の誘導方法を点検するなどの対策を行った.

2-3 入学前教育

2-3-1 保健福祉学部

2-3-1-1 看護学科

看護学科では高校から大学における学習への移行を円滑に図るために，①大学生になる際に必要とされる基礎学力（英語）の充実と思考力の深化を図る，②専門基礎科目，専門科目への橋渡しをするという構成で入学前教育を実施した.

日程及び内容は以下のとおりである.

【第 1 回】
日時：平成 30 年 3 月 5 日（月）13 時～14 時 30 分
場所：6405 教室
担当教員：高橋幸子教授
タイトル：英語を使ったコミュニケーション能力
授業の概要：言語力・コミュニケーション力とは何かを考え，世界の共通語としての英語を学習する意味を確認する.
実施評価：世界で使われている英語（World Englishes）の概念を説明し，岡山県立大学で目指している英語教育を紹介した．母語と第二言語の違いへの「気づき」を促し，入学後に始まる県大英語プログラムの紹介と導入を行った.

【第 2 回】
日時：平成 30 年 3 月 6 日（火）13 時～14 時 30 分
場所：6405 教室
担当教員：荻野哲也教授，高橋徹教授
タイトル：体表から見た人体の構造と機能

授業の概要：体表から見た人体の構造と機能について解説し，実際に各人の身体で体表から触知できる骨格，筋肉，動脈などを確認する．
実施評価：人体骨格模型や配布資料を基に，実際に各人の身体で体表から触知できる骨格，筋肉，動脈を確認し，解剖学に対する関心を高めた．また，解剖生理の知識が臨床活動に密接に関連していることを解説した．
【第3回】
日時：平成30年3月14日（水）13時～15時
場所：6313（保健福祉学部棟3階）
担当教員：沖本克子教授，岡﨑愉加准教授，池田理恵准教授，網野裕子助教
タイトル：平成29年度看護学科（母性・小児・助産領域）4年次生卒業研究発表会
授業の概要：4年次生の卒業発表会に参加することにより，看護学の専門性を理解することに動機付けられ，卒業時の学生の姿に触れることで，その姿をロールモデルとして自己の学生像をイメージできる．発表会終了後の3，4年生との懇談会で，学習や生活に関して不安や疑問を解決する．
実施評価：看護学科（母性・小児・助産領域）4年次生卒業研究発表会に参加し，研究発表3題と質疑応答を体験した．4年次生の研究発表をする堂々とした様子にこれからの学習に向け，期待が膨らんだようであった．一方，現時点では理解が難しい専門分野の内容から，不安を抱く面もあったが，発表会後の3，4年生との交流を通し，不安が解消され，さらなる学習意欲につながったようである．
【第4回】
日時：平成30年3月14日（水）15時～16時30分
場所：6313（保健福祉学部棟3階）
担当教員：沖本克子教授，岡﨑愉加准教授，池田理恵准教授，網野裕子助教
タイトル：母性・小児看護学，助産学の技術
授業の概要：乳児に対する援助技術の一部を体験する．
実施評価：乳児に対する看護技術として，抱っこ，着替え，おむつ交換などを体験した．実際の新生児と同じ身長，体重のモデル人形を用いて演習することで，乳児の看護への関心を高めることができた．

2-3-1-2 栄養学科

栄養学科では栄養学を学習するために，高等学校で化学並びに生物学を習得しておくことが重要となるため，推薦入試においては，理科の基礎知識を尋ねる口頭試問を実施している．しかしながら，センター試験ならびに個別試験で理科の学力検査に対応するために，高校でこれらの科目を勉強している学生と比較すると，理科の知識が不足しているのが現状である．このような背景から，本学科では推薦入学者への事前教育として，化学と生物について，栄養学科で必要な基礎知識を補充する講義を実施している．

本年は推薦入学者13名に対して以下の実施要項に基づいて入学前指導を行った．

【第1回及び第2回】
平成30年3月14日（水）10時～11時30分（第1回）6117講義室
13時～14時30分（第2回）6117講義室
講義内容：化学（担当教員：伊東秀之 教授）
物質の成り立ち（第1回）及びその有機化合物の性質（第2回）について，「栄養科学シリーズ NEXT 基礎有機化学」（高橋吉孝・辻英明編）講談社サイエンティフィクを参考書として使用し，演習を交えて講義を行った．

【第3回及び第4回】
平成30年3月15日（木）10時～11時30分（第3回）6117講義室
13時～14時30分（第4回）6117講義室

講義内容：生物学（担当教員：田中晃一 准教授）

生命の基本単位（第 3 回）及びその生命現象のしくみ（第 4 回）について，「栄養科学シリーズ　NEXT　基礎生物学」（岸本妙子・木戸康博編）講談社サイエンティフィクを参考書として使用し，演習を交えて講義を行った．

本年度も演習を取り入れることにより，講義のみの入学前教育と比べると学習効果を高めることができた．また，共通教育科目の「基礎有機化学」及び「基礎生物学」で使用する教科書を参考書として取り入れた講義を行うことにより，導入教育も兼ねて，入学後の栄養学の修得に必要となる理科の基礎知識をより広範囲にカバーすることができた．今後は，より速やかな栄養学教育への導入を目指して，アンケートを実施する等，受講生からの意見も取り入れながら，教育内容と授業時間数についてさらに検討を行う．

2-3-1-3 保健福祉学科

保健福祉学科では，入学後の社会福祉学及び子ども学に関する専門知識習得のモチベーションを高め，また国際化に対応する英語教育を推進することを目的に入学前教育を実施した．具体的には英文和訳等の課題を課し，その内容に関して講義を行った．更に，福祉専門職や保育・幼児教育専門職に必要な情報収集，問題分析，コミュニケーション，伝達力を高めるためにグループ討議を実施した．日程及び内容は，以下のとおりである．

【第１回】平成 30 年 2 月 17 日（土）13 時～15 時　8902 教室

①オリエンテーション，自己紹介

②英文課題の提出

入学前教育では，英文の課題を用意し，英文の和訳，内容に基づく議論を行った．学生は自らの解答と模範解答との比較を行い，教員は学生による文章理解を確認した．なお，英文はすべて訳書が刊行されたものを使用している．

③大学教育の準備としてのミニ講義

社会福祉学専攻（竹本与志人准教授），子ども学専攻（中野菜穂子准教授）

ミニ講義では，社会福祉学専攻と子ども学専攻の特色を踏まえて，担当教員がそれぞれ約 30 分間実施した．

④次回課題の説明

1 回目と 2 回目の英文課題を通し，身近に起こっている問題（新聞やテレビ等からの情報）や関心のある問題（事例）をまとめることを課した．

【第２回】平成 30 年 3 月 9 日（金）13 時～15 時　8902 教室

①英文課題の提出

②グループ討議

英文課題の内容と「日本の社会保障と私たちの暮らし」について

③グループ討議の内容発表

④その他

2-3-2 情報工学部

情報工学部では，入学者の主な選抜は，推薦入試（11 月下旬），前期日程（2 月下旬），中期日程（3 月上旬）の 3 回に分けて実施される．このうち，推薦入試による合格者は，12 月上旬の合格発表から 4 月の入学までの期間，高等学校での学習内容を維持することにより，入学後の授業に無理なく移行することが可能となる．これをサポートするために，以下の 3 項目を主眼とし，3 学科合同で入学前教育を実施している．

- 高校卒業までの 3 ヶ月間の時間の使い方へ示唆を与える．
- 大学入学までの心と体の健康維持と教養の深め方を示唆する．

・　身の回りの現象を支配している物理や数学から理工系の勉強に興味を持たせる．

日程と内容は以下のとおりである．

【第 1 回】

日時:　平成 29 年 12 月 26 日（火）13:30～　約 2 時間

場所:　情報工学部棟 2202 室

内容:　まず，学部長補佐による挨拶が行われ，　合格者に英語と数学の課題を配付し，第 2 回目に提出することとした．その後，学科別(情報通信工学科は 2203 室，情報システム工学科は 2202 室，人間情報工学科は 2906 室)に分かれ，各学科長における講話及び数学の小テストを実施した．参加生徒数は，情報通信工学科 13 名，情報システム工学科 12 名，人間情報工学科 13 名であった．なお，情報システム工学科の欠席者 1 名に，配布物を郵送した．

【第 2 回】

日時:　平成 30 年 2 月 16 日（金）　13:40～約 2 時間

場所:　情報工学部棟 2202 室

内容:　まず，英語の課題に関する解説と小テストを行った．その後，学科別(情報通信工学科は 2203 室，　情報システム工学科は 2202 室，　人間情報工学科は 2906 室)に分かれ，第 1 回目に配布した課題を回収した．次いで，数学の課題に関する小テストを実施し，各学科の数名の教員で採点を行いながら個別指導を行った．さらに 4 月までの課題を配布した学科や，学科長の講話を実施した学科もあった．参加生徒数は，情報通信工学科 13 名，情報システム工学科 12 名，人間情報工学科 13 名であった．なお，情報システム工学科の欠席者 1 名に，配布物を郵送した．

2-3-3 デザイン学部

2-3-3-1 デザイン工学科

デザイン工学科では，大学教育へのスムーズな導入を目的に，推薦入学者に対する体験学習（ワークショップ）を行った．課題は，専門雑誌の読解とポスター制作で，実施効果としては，１）大学教員や在学生とのフェイス・トゥー・フェイスの交流を通じた大学への親近感向上と，２）大学施設を利用して，デザインワークの基礎的プロセスを修得させることが出来た．

・開催日・場所：平成 30 年 3 月 6 日（火）10:20～17:10，図書館グループ学習室，
　　デザイン学部棟 3311 教室
・参加学生：10 名
・担当教員：村木克爾教授（学科長），福濱嘉宏教授，河合大介准教授，
　　畠　和宏助教
・授業概要：ワークショップ形式による演習(専門雑誌の読解とポスター制作・発表)
・スケジュール：10：00～11：50　学科長挨拶，ガイダンス，2 人 1 組のチーム編制
　　（英語専門雑誌の選択）
　　12：40～14：10　専門雑誌の読解（デザイン学部棟 3311 教室へ移動）
　　14：20～15：50　要約資料の制作
　　16：00～16：50　発表
　　16：50～17：10　振り返り，教員による全体講評，アンケート記入

2-3-3-2 造形デザイン学科

造形デザイン学科では，　大学教育へのスムーズな導入を目的に，推薦入学者に対する体験学習（ワークショップ）を実施した．事前に２課題を準備させ，大学での発表とワーク

ショップを組み合わせることで，入学後の学修意欲に繋げられるよう，デザイン教育の基本となる観察力・視覚化と言語化・コミュニケーション力を集中的に習得できる機会を提供した.

・開催日・場所：平成30年3月5日（月）9:30～16:30　デザイン学部棟3305教室
・参加学生：　13名
・担当教員：　難波久美子教授（学科長），関崎哲准教授，　南川茂樹准教授，
　山下万吉講師，作元朋子講師
・授業概要：　ワークショップ形式による演習（事前課題含む）
・スケジュール：9:30～9:45　事前課題提出，教員紹介/ 当日スケジュール確認
　9:45～10:50　他者紹介トークセッションを経て，事前課題(2)
　「卒業制作展レポート」発表
　11:00～11:30　事前課題(1)発表
　12:30～15:50　ワークショップ「絵本の制作」
　16:00～16:30　成果プレゼンテーション/ 講評
・事前課題（1)「身の周りの○を見つけよう！」
　身の周りにある「まる」「まわる」に関するモノ・コトを見つけ出し，目標は100個として自分で画像撮影したデータをUSBに入れて当日提出.
・事前課題（2)「デザイン学部卒業制作展レポート」
　造形デザイン学科の展示から，気になった作品を２つ取り上げ，それぞれA4用紙に鉛筆スケッチと400字程度のコメントによるレポートを当日提出.

2-4 留学・転学受入等

2-4-1 外国人留学生の受入状況

本学では，国際社会に開かれた大学として外国人留学生の受け入れを進めており，主としてアジア諸国を中心に留学生の受け入れを行うとともに，国際交流協定を締結している韓国又松（ウソン）大学校からは学部への転学生や短期の交換留学生の受け入れを行っている．平成 29 年度は，南昌大学から２人，インドネシアのハサヌディン大学校から１人の留学生（情報工学研究科に大学院生）を新たに受け入れ，学部と大学院で合わせて現在 9 人の留学生が在籍している.

〔留学生の在籍状況〕　単位：人

年度	人数	学部･院別	所 属 学 部 等 別	国籍別人数
22	14 (2)	学部 6 (2)	保健福祉学部　2 (1) 情報工学部　1 デザイン学部　3 (1)	韓国　5 (1) 中国　1 (1)
		大学院 8	保健福祉学研究科　4 情報系工学研究科　1 デザイン学研究科　3	韓国　4 中国　3 ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ 1
23	7 (0)	大学院 7	保健福祉学研究科　5 情報系工学研究科　1 デザイン学研究科　1	韓国　5 中国　2
24	10 (0)	学部 4	保健福祉学部　2 情報工学部　2	韓国　4

		大学院 6	保健福祉学研究科　4 情報系工学研究科　1 デザイン学研究科　1	韓国　4 中国　1 ﾈﾊﾟｰﾙ　1
25	12 (2)	学部 6(2)	保健福祉学部　3(1) 情報工学部　2 デザイン学部　1(1)	韓国　4 中国　1(1) ﾍﾞﾄﾅﾑ　1(1)
		大学院 6	保健福祉学研究科　5 デザイン学研究科　1	韓国　3 中国　2 ﾈﾊﾟｰﾙ　1
26	10 (2)	学部 5(2)	保健福祉学部　3(1) 情報工学部　1 デザイン学部　1(1)	韓国　3 ﾍﾞﾄﾅﾑ　2(2)
		大学院 5	保健福祉学研究科　2 情報系工学研究科　1 デザイン学研究科　2	韓国　2 中国　2 ﾈﾊﾟｰﾙ　1
27	10 (2)	学部 6(2)	保健福祉学部　5(1) 情報工学部　1(1)	韓国　4 中国　2(2)
		大学院 4	保健福祉学研究科　1 情報系工学研究科　1 デザイン学研究科　2	韓国　2 中国　2
28	9 (3)	学部 4(2)	保健福祉学部　4(2)	韓国　2 中国　2(2)
		大学院 5(1)	保健福祉学研究科　3(1) 情報系工学研究科　1 デザイン学研究科　1	中国　4(1) ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ　1
29	9 (1)	学部 2(1)	保健福祉学部　1 デザイン工学部　1(1)	韓国　1 中国　1(1)
		大学院 7	保健福祉学研究科　5 情報系工学研究科　2	中国　5 ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ　2

※（　）内は留学生のうち研究生の数

2-4-2 外国人留学生の受入体制の整備

留学生の受入れは，留学生にとっては，専門知識や技術の修得，本学学生にとっては留学生からの異文化の新鮮なインパクトや国際交流の機会が得られるなど，双方の学生に大変有意義なことであり，グローバル人材の育成を進めていく上でも重要である．

大学院では，留学生の受入れを積極的に進めるために，平成 29 年度入学者から適用することを想定して，試験日程，選抜方法，修了要件などの受入体制を検討した．また，平成 28 年度入学者の学生募集要項の英語版を，全ての研究科で作成し，日本語版と一緒に本学ホームページに掲載した．

2-5 まとめと課題

平成 25 年度に抜本的な改正が行われ，平成 27 年度に小改訂を施したディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，アドミッション・ポリシーについて，平成 28 年度に受審した大学改革支援・学位授与機構による認証評価の訪問調査において，平成 29 年度 4 月にポリシーが義務化されるにあたり，国のガイドラインの観点から学士課程分の記述方式等の「一体性・整合性」に関する改訂の助言があった．これにともない平成 28 年度末までに改訂を施し平成 29 年 4 月に公表した．ただしアドミッション・ポリシーを含めて内容は従前のものであるため，平成 30 年度入学者の受入方法等についての大きな変化はない．本年

度は平成 28 年 3 月 31 日に発表された高大接続システム改革会議「最終報告」を受け，第 3 期中期計画を念頭におき，中教審のガイドラインに沿ったディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，アドミッション・ポリシーの再度の抜本的見直しを実施した．このうちディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシーについては，見直されたアドミッション・ポリシーに基づいた学力の 3 要素の多面的評価方法の導入とともに英語 4 技能試験を導入する方向で変更予定となっている，平成 32 年度本学入試制度と合わせて，平成 30 年 6 月に公表予定である．今後は，各評価方法について具体的な評価基準を策定していくことが課題となる

学士課程の入試については，平成 24 年度～平成 25 年度から新しい高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）が適用されたことから，平成 27 年度入学者における，大学入試センター試験の利用教科・科目の一部変更に伴い，これに基づいた一般入試を実施し，本年度はその 4 年目にあたる．入学者受入方法の妥当性について，全学的には履修状況と入試成績との相関分析結果を蓄積し分析を試みたが，入学者におけるディプロマ・ポリシーへの適合性に関して，十分な結果が得られたとは言い難いところがあるため，今後教学 IR 活動において，より詳細に入試区分及び日程別の入学者における履修状況と入試成績の比較分析を継続して実施する予定である．

大学教育へのスムーズな移行を促すための取組としては，推薦入学予定者への入学前教育を継続実施した．入学時アンケート結果は，第 2 部第 1 章大学教育開発センターの活動と成果の中で 2-1-3 アドミッション部会の項に記載した．

3 高大連携

3-1 概要

本学と岡山県高等学校長協会との懇談会及び本学と県内の高等学校等進路指導担当教員との意見交換会のほか，本年度は平成 32 年度大学入学者選抜改革を目前に控え，県内高等学校の教育実施状況と本学の第 3 期中期計画を念頭に置いた準備状況について，情報交換ならびに意見交換を実施することにより，入試制度の設計や入試内容・方法の策定について参考にすることを目的に，高校校長協会と本学のメンバーからなる OPU 高大接続合同作業部会を設置し 3 回の会議を実施した．

また，平成 28 年度に続き，高校生向けにアレンジした本学の授業を提供することによって，高校生に大学で学ぶ意義と楽しさを理解させ，大学で学ぶために必要な基礎学力の修得に取り組むきっかけとさせることを目的とした「高校生のための大学授業開放」を実施した．

3-2 高等学校校長協会との連携

3-2-1 本学と岡山県高等学校長協会との懇談会

日　時：平成 29 年 8 月 3 日（月）14:00～15:30
場　所：本部棟 2 階大会議室
出席者：高等学校側　13 人，本学　13 人
内　容：本学の概要（ビデオ上映），本学の改革，平成 29 年度入学者選抜，議題協議，意見交換等

3-2-2 本学と県内の高等学校等進路指導担当教員との意見交換会

日　時：平成 29 年 6 月 22 日（木）13:00～15:00
場　所：学部共通棟（東）8903 講義室
出席者：高等学校側　36 人，本学　21 人
内　容：本学の概要（ビデオ上映），本学の改革，平成 29 年度入学者選抜，高等学

校等からの事前質問・要望に対する本学の解答と質疑応答，学科ごとの個別相談

3-2-3 OPU 高大接続合同作業部会

【第 1 回】
日　時：平成 29 年 5 月 29 日（月）　9:55～12:00
場　所：本部棟 2 階小会議室 1
出　席：校長協会側 4 人，本学 4 人
内　容：部会の目的及び予定について確認の後，事前に実施した相互質問票に基づき校長協会からの質問への大学側の回答の説明を行い，その後意見交換を実施した.

【第 2 回】
日　時：平成 29 年 10 月 30 日（月）　9:55～12:10
場　所：本部棟 2 階小会議室 1
出　席：校長協会側 4 人，本学 5 人
内　容：部会の目的及び予定について吉原理事より説明の後，岡山県立大学の入試改革ロードマップについて，高大接続アンケート結果及び課題について，ならびに平成 29 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会について本学より情報提供を行い，その後意見交換を実施した.

【第 3 回】
日　時：平成 29 年 12 月 25 日（月）　10:00～12:00
場　所：本部棟 2 階小会議室 1
出　席：校長協会側 3 人，本学 6 人
内　容：吉原理事より岡山県立大学の第 3 期中期計画策定までのスケジュールが説明された後，平成 33 年度からの本学に全学 3 ポリシー学内案について，ならびに公立大学協会入学者選抜分科会に参加しての報告を行い，その後意見交換を実施した.

3-3 高大接続事業

3-3-1 高校生のための大学授業開放

日　時：平成 29 年 8 月 19 日（土）10:00～16:00（保健福祉学部・情報工学部・デザイン学部）
場　所：各学部棟他
出席者：477 人
内　容：各学部，学科毎に講義，演習，実験及び実技を交え高校生向けにアレンジした授業を実施した．各学部・学科の授業内容は次のとおり.

１．保健福祉学部看護学科
　10：10～11：40　高校生のためのがん看護学入門（講義）
　13：00～14：30　高校生のための母性看護学演習（演習）
　13：00～14：30　高校生のための基礎看護学演習（演習）
２．保健福祉学部栄養学科
　10：10～11：40　高校生のための臨床栄養学入門（講義）
　10：10～11：40　高校生のための栄養教育論入門（講義）
　13：00～16：00　高校生のための生化学実験（実験）
　13：00～16：00　高校生のための給食管理実習（実験）
３．保健福祉学部保健福祉学科

10：30～11：40　高校生のための国際福祉論・高校生のためのユニバーサルデザインの理論と実践（講義）
10：30～11：40　高校生のための保育原理・高校生のための教育心理学（講義）
12：30～14：20　高校生のためのソーシャルワーク演習（演習）
12：30～14：20　高校生のためのケア演習（演習）
13：00～14：40　高校生のための保育内容（演習）
13：00～14：40　高校生のための乳児保育演習（演習）

４．情報工学部
10：20～11：50　高校生のためのワイヤレス技術入門（講義）
10：20～11：50　高校生のためのプログラミング言語入門（講義）
10：20～11：50　生活を支える人間情報工学（講義）
12：40～14：10　高校生のためのマイコンプログラミング入門（実験）
12：40～14：10　高校生のための 3 次元 CAD 入門（演習）
12：40～14：10　生活を支える人間情報工学（実験）

５．デザイン学部
14：00～15：30　建物（建築物）ができるまで（講義）
14：00～15：30　つかいやすいをデザインする（講義）
14：00～15：30　ハリウッド映画のタイムテーブルから見る”おもしろさ”の法則（講義）
14：00～15：30　家紋の造形技法- 驚異のデザイン発想を知る-（講義）
14：00～16：00　建築プレゼンテーションデザイン（実技）
14：00～16：00　レーザーカッター入門（実技）
14：00～16：00　印刷で表現の幅を広げる（実技）
14：00～16：00　レリーフで作る陶磁器コースター（実技）

3-3-2 その他の高大連携事業

日　時：平成 30 年 1 月 29 日（月），1 月 31 日（水），2 月 20 日（火）
内　容：食品の機能性を測定する実験方法の指導
受講者：清心女子高等学校　総合的な学習・物質科学課題研究選択者　２年生７名，引率教員１名
担当教員：保健福祉学部　栄養学科　伊東秀之教授

高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入に関するデータは付録 1-E を，高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）に関するデータは付録 1-F を参照されたい.

3-4 まとめと課題

高等学校教育から大学教育へのスムーズな移行を促すための取組の一つとして，大学教育開発センター・アドミッション部会の企画による高校生のための大学授業開放の継続実施が行われたが，事業後のアンケートの結果からも，大学の授業を理解するために高校での学習がいかに重要であるかを理解してもらうという高大接続事業としての役割，ならびに本学で学ぶ意義や楽しさを伝えることで，本学に適性のある受験生の確保につなげるという事業の目標のいずれも達成されていることが窺われた．また，平成 32 年度の大学入学者選抜改革を控えて実施した OPU 高大接続合同作業部会では，本学から事前に県下の高等学校に回答を依頼した高大接続アンケートの結果に基づき，高等学校の教育の現状や文科省の進める高大接続改革に関する情報交換，ならびに本学第 3 期中期計画を念頭においた入学者選抜方法の改革や，主体性評価の方法，英語 4 技能試験の扱いを等含めた建設的な意見交換がなされた．これらの成果は，平成 30 年 6 月に公表が予定される平成 32 年度入

試制度ならびにアドミッション・ポリシーの修正に反映される予定である．高大接続改革は大学の教育改革を含むものであり，今後はグローバル化社会に対応できるコミュニケーション能力を養成するため学生のレベルに合わせたクラス別英語教育の実施を含め，社会から求められる専門家育成に向けたカリキュラム改革を進めていくことが課題である．

高校生のための大学授業開放ならびに OPU 高大接続合同作業部会の内容等詳細については，第 2 部第 1 章大学教育開発センターの活動と成果の中で 2-3 アドミッション部会の項に記載した．

4 共通教育における学生の学習支援

4-1 概要

本学の共通教育は，建学理念「人間尊重と福祉の増進」および教育目的「人間・社会・自然の関係性の理解」における教養教育全般を担う科目群として，知的実践的自律性を培うため，大学に入学した初年次生対象の導入科目群，大学教育の根幹を担う理論的な知識を学ぶ全学対象の理論科目群，大学教育の理論的な知識を応用する実践的な力を体得する全学対象の実践科目群を総括的な科目群プログラム目標としている．共通教育では具体的に，次の 3 点を目標としている．

- 現代社会の多様性を理解し，時代の変化に対応することができる豊かな教養を身に付けた「人間力」を育成する．
- 地域社会あるいは国際社会との連携等を通して，実社会における課題を自ら発見し解決する能力を持った「社会力」を涵養する．
- 異文化理解あるいはチームワーク活動に不可欠な実践的な「コミュニケーション力」及び科学技術の進展に支えられた「情報処理・活用力」を修得させる．

この目標を達成するために，本学では教養教育全般を導入科目群，理論科目群，実践科目群の 3 つで構成し，さらに授業科目を下表に示すように 6 つのカテゴリーで編成している．

表　教養教育全般の構成と授業科目のカテゴリーの関係

		教養教育全般の構成		
		導入科目群	理論科目群	実践科目群
カテゴリー	修学基礎	○		
	人文・社会科学		○	○
	自然科学		○	○
	健康科学		○	○
	語学国際		○	○
	社会連携			○

なお，各カテゴリーの内容は以下のとおりである．

(1) 修学基礎：高校の学びから大学での学びへの転換と準備，そして大学生としての自律を促す科目

(2) 人文・社会科学：人間性を考える普遍的な理論や知識を習得し言葉の力を身につけるとともに，社会の仕組みや歴史を習得し共同体のあり方を問う力を養う科目

(3) 自然科学：自然現象やそれに関わる発見から普遍的な真理を探究することを通じ，論理

的思考力や問題発見力,批判力などを身につけるとともに,そのために必要な情報処理などの技能を習得する科目

(4) 健康科学：身体とその健康に関する理論や知識を習得し生活する思考の力を養うとともに,生涯にわたり健やかに社会生活を送るための技能を身につける科目

(5) 語学国際：グローバル化する国内外の地域で活躍するために必要な語学力を育成し,異文化理解を深める科目

(6) 社会連携：地域で活躍するために必要な地域の理解と,他者との協働性を養成する科目

ここで,全学科で必修となる授業科目の多くを 1 年次に配当し,高等学校での学習内容から大学教育へスムーズに移行できるようにしている.

なお,平成 30 年度から人文・社会科学,自然科学,健康科学のカテゴリーには,要論,基幹科目,複合 PBL（Problem Based Learning）科目を設定し,より具体的,実践的に学修内容の定着を図るための科目へと発展できるように改定する.

この 6 つのカテゴリーについて,共通教育部内に教養教育推進室,語学教育推進室,情報教育推進室,健康・スポーツ教育推進室,社会連携教育推進室の 5 つの推進室を設置して教育を実施している.さらに,「共通教育の充実及び共通教育と専門教育との連携に関する」業務を実施するために,大学教育開発センター内に共通教育部会が設置されている.共通教育科目に対するカリキュラム等の企画・立案などをこの部会が担当し,共通教育部ならびに各推進室で実施するように役割分担ができている.共通教育科目の実施にあたり,共通教育部を兼務する教員のみだけではなく,学部専任教員にも協力を仰いでいる.

共通教育における平成 29 年度における重要な成果は,以下に集約される.

- 各学部の 3 つのポリシーにおいて共有すべき教養教育のあり方に基づき,共通教育カリキュラム・ポリシーを検討し,これに基づいて平成 30 年度入学生からの共通教育改定カリキュラムを策定した.
- 平成 29 年度から導入したクオーター制について,英語を中心に課題を抽出した.今後,クオーター制の利点を活かす取組みを推進するとともに,セメスター制と比較しながらこれを評価し,最良の開講期運用のあり方を判断することとした.
- 平成 28 年度入学生について,TOEIC スコアの経年変化を測定した.その結果に基づき,2 年 2Q に英語科目を配置するなど,時間割の改定を行った.
- 2 年次生まで進行した副専攻「岡山創生学」において,地域協働演習（2 年次）等の実践科目を充実するとともに,1 年次生科目を中心に履修者増をみた.

4-2 共通教育部

共通教育部では,部内に教養教育推進室,語学教育推進室,情報教育推進室,健康・スポーツ教育推進室,社会連携教育推進室の 5 つの推進室を設置して教育を実施している.とくに,本学の建学理念「人間尊重と福祉の増進」及び教育目的「人間・社会・自然の関係性」の理解を体現するために,

(1) 基礎的な知識を体系的に理解する姿勢の形成,

(2) 生涯にわたる知的活動あるいは社会生活において必要とされる論理的思考力・問題発見力・批判力・汎用的な技能の習得と形成,

(3) 地域連携等を通じた社会人基礎力や課題解決力の習得,

(4) 自己の人間的成長あるいは将来に継続する学習意欲の喚起を,専門分野にとらわれることのない涵養,

の４項目を柱として,知的自律性を培うための教養と技能を涵養する教育を,所属学部に係わることなく全学生に実施している.また,これらを通して,

- 現代社会の多様性を理解し,時代の変化に対応することができる豊かな教養を身に付けた「人間力」の育成
- 地域社会あるいは国際社会との連携等を通して,実社会における課題を自ら発見し解決する能力を持った「社会力」の涵養
- 異文化理解あるいはチームワーク活動に不可欠な実践的な「コミュニケーション力」及び科学技術の進展に支えられた「情報処理・活用力」の修得

を軸とした上で,文部科学省が提唱する「学士力」あるいは経済産業省が提唱する「社会人基礎力」を見据えた教育を目指している.具体的には,教養教育全般を導入科目群,理論科目群,実践科目群の 3 つで構成し,授業科目を建学の理念に合致する次の 6 つのカテゴリーで編成している.

- 高校教育から大学教育への円滑な移行を促す「修学基礎」
- 教養教育としての「人文・社会科学」及び「自然科学」
- 建学の理念に基づく「健康科学」
- 国際交流に対する意識付けを涵養する「語学国際」
- 地域社会との結びつきを育成し,社会の一員である自覚を喚起する「社会連携」

なお,平成 30 年度から「人文・社会科学」,「自然科学」,「健康科学」のカテゴリーには,要論,基幹科目,複合 PBL（Problem Based Learning）科目を設定し,より具体的,実践的に学修内容の定着を図るための科目へと発展できるように改定する.これにより,所属学部に捕らわれることのない汎用的な知識や技能の涵養を目指している.平成 30 年度入学生の共通教育科目の概要をまとめると,下の表のようになる.

平成 30 年度入学生（共通教育科目）

カテゴリー	授　業 科目数	全学的な必修科目
修学基礎	5	大学で学ぶ,フレッシュマンセミナー
人文・社会科学	22	人文・社会科学要論
自然科学	18	自然科学要論
健康科学	10	健康科学要論
語学国際	24	ELP 1・2・3・4・5・6
社会連携	9	おかやまボランティア論,おかやまを学ぶ
合　　計	88	

4-3 教養教育推進室

教養教育推進室は,前節で述べた 6 カテゴリーのうち「修学基礎」,「人文・社会科学」及び「自然科学」の教育を推進する組織である.10 名のメンバーで構成され,その全員が共通教育部兼務教員である.「修学基礎」カテゴリーにおいては,専門教育を修得する上で重要な共通教育科目の履修指導を行うとともに,新入生対象のフレッシュマンセミナーにおいて,各学部・学科に求められる資質や基礎知識を身に付ける教育を行っている.また,「人文・社会科学」と「自然科学」カテゴリーにおいては,平成 30 年度からいずれも要論,基幹科目,複合 PBL（Problem Based Learning）科目を設定し,より具体的,実践的に学修内容の

定着を図るための科目へと発展できるように改定する. これにより, 大学生に求められる教養を身に付けた人材の育成を目指している.

コア科目である「人文・社会科学要論」及び「自然科学要論」は全学必修であり, 1 年次生 1Q および 2Q に開講する. いずれの講義も 3 名の専任教員で構成するオムニバス形式を取っている. なお, 本科目は平成 28 年度まで開講した「人文・社会科学入門」と「自然科学入門」の後継科目の位置づけとなるが, 「人文・社会科学要論」では人文科学と社会科学の全体像を述べた後, 「哲学」, 「社会科学」, 「外国文学」の 3 分野を, 「自然科学要論」では自然科学の全体像を述べた後, 「物理学」, 「生物学」, 「化学」の 3 分野を 5 コマずつ講義し, 学生の所属学部に依存することなく, 各科学分野の概要を学べるようにしている点に特長がある.

教養教育推進室の課題については, 共通教育部会において議題として取り上げ, その解決を図っている. 平成 29 年度は各学部の 3 ポリシーにおいて共有すべき教養教育のあり方に基づき, 共通教育カリキュラム・ポリシーを検討し, これに基づいて平成 30 年度入学生からの共通教育改定カリキュラムを策定した. 「人文・社会科学」, 「自然科学」, 「健康科学」の 3 つのカテゴリーについて, 平成 29 年度までの科目名称と対比させながら, 平成 30 年度の開講計画を示す.

表　平成 30 年度　共通教育科目（人文・社会科学, 自然科学, 健康科学）開講計画

カテゴリー		平成30年度　開講科目	授業の方法	平成 29 年度　開講科目
人文・社会科学（1＋14＋7）		人文･社会科学要論	講義	人文・社会科学入門
	人文科学（7）	哲学	講義	
		倫理学	講義	倫理学の基礎
		歴史学	講義	歴史学
		宗教学	講義	
		心理学	講義	心理学入門
		文学	講義	日本文学
		芸術学	講義	
	社会科学（7）	経済学	講義	現代社会と経済
		経営学	講義	経営管理
		人類学	講義	社会人類学
		法学	講義	現代社会と法律
		社会学	講義	
		政治学	講義	
		日本国憲法	講義	日本国憲法
	複合ＰＢＬ（7）	感性文化論Ａ	講義	音楽の鑑賞
		感性文化論Ｂ	講義	美術の歴史
		感性文化論Ｃ	講義	メディア論
		感性文化論Ｄ	講義	世界の地理と遺産
		感性文化論Ｅ	講義	食糧を考える
		共生社会論Ａ	講義	子どもと家族
		共生社会論Ｂ	講義	ジェンダー
自然科学（1＋11＋6）		自然科学要論	講義	自然科学入門
	自然科学（11）	数学Ａ	講義	数理と社会

		数学B	講義	基礎線形代数学
		数学C	講義	基礎解析学
		物理学A	講義	基礎力学
		物理学B	講義	基礎電磁気学
		化学	講義	基礎有機化学
		生物学	講義	基礎生物学
		統計学A/B	講義	統計学の基礎A・B
		コンピュータ演習I･II	講義	コンピュータ演習Ⅰ・II
	複合PBL（6）	現代科学論A	講義	情報技術の進展
		現代科学論B	講義	みぢかなバイオテクノロジー
		環境科学論A	講義	生物と環境
		環境科学論B	講義	環境の科学
		環境科学論C	講義	エネルギーと環境
		環境科学論D	講義	地球の科学
健康科学（1＋6＋3）		健康科学要論	講義	健康科学入門
	健康科学（6）	生命倫理学	講義	生命倫理
		健康心理学	講義	健康と心理
		脳と身体の科学	講義	脳と身体の科学
		スポーツ科学	講義	スポーツの科学
		健康スポーツⅠ・II	講義・実技	スポーツⅠ・II
	複合PBL（3）	応用健康科学論A	講義	運動と健康
		応用健康科学論B	講義	食と健康
		応用健康科学論C	講義	住環境と健康

4-4 語学教育推進室

本学における英語科目は,「適切で分かりやすい英語運用能力の獲得を最優先とした教育」を行っている.すなわち,英語母語話者のみではなく,非英語母語話者とのコミュニケーションを目的とした「国際共通語としての英語」を学ぶことに主眼を置いている.また,平成28 年度より英語以外の言語にも注目し,韓国語学習の充実に着手した.英語以外の言語に関しては,平成 29 年度以降さらなる充実を計画している.平成 29 年度以降も,語学教育推進室では,語学学習に関する授業内外でのサポート体制を取っていく.

以下では,ELP 科目と上級英語（平成 30 年度から実施される ESP 科目）,語学教育推進室の利用状況,e-ラーニング教材の利用状況,TOEIC L&R IP の実施状況,スピーカーズコーナー,映画鑑賞会,定期刊行物について述べる.

(1) ELP 科目

英語においては,クオーター制移行より前の平成 28 年度から新しい英語カリキュラム English Language Program (ELP) を開始していたが, 平成 29 年度をもって ELP 科目の本格稼動となった.ELP1～6 は必修科目であり,「使える英語」を意識したカリキュラムとなっている.すなわち,コミュニケーション能力の涵養を目指したものである. ELP1～4 では, 1 年次生を対象として, それぞれのクオーターで, スパイラルに英語のコミュニケーション

能力を伸ばすように目標を定めている.ELP5,6 では,必修科目を置かない第 2 クオーターを挟んだ配置となるため, 受容的な能力の強化と異文化理解などの発展科目とした.

ELP1,3,5,6 は理解力の涵養に焦点を当て,国際的な基準 CEFR(Common European Framework of Reference for Languages) が求める 5 つの技能のうち,reading と listening をあわせた技能複合型,ELP2,4 は発信力の涵養に焦点を当て,writing と speaking (interaction & presentation) をあわせた技能複合型にすることで,履修者にも科目の性格が明確となるようにした.

以下の図は,ELP 科目と上級英語 (平成 30 年度から ESP 科目) を学年の推移と共に,カリキュラムを示したものである.

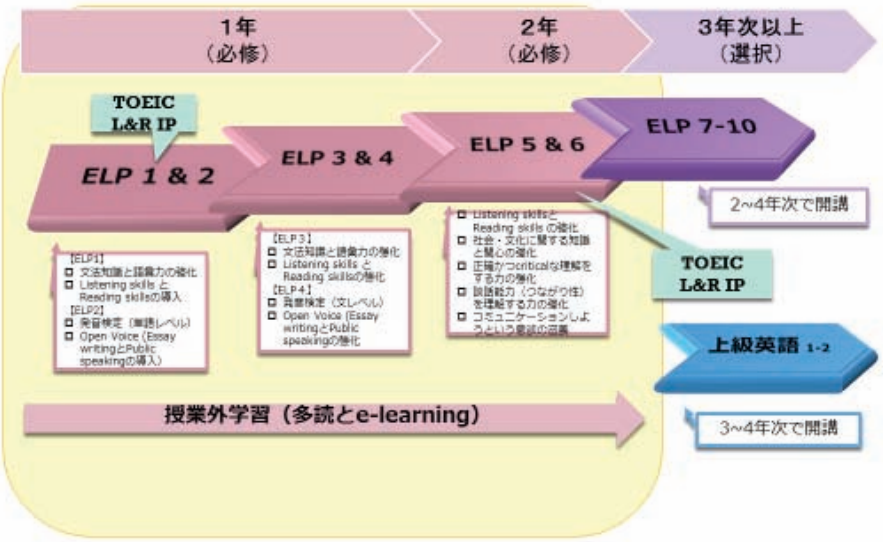


図. 英語科目 ELP1～10, 上級英語

(2) CALL 教室(8120, 8122 教室)の利用

CALL 教室は,授業での利用,授業で使用しない平常時,ならびに夏季・春季の長期休暇中に開放し,学生に自主学習の機会を提供している.学生は,コンピュータにインストールされている「発音検定」の自主練習,インターネットを利用した学習サイト「Open Voice」にアクセスする発話練習,e-learning 教材 ALC NetAcademy2,e-learning 教材 English Central の授業外学習が可能である.平成 28 年度は,語学教育推進室の常勤スタッフが希望者からの要望に応じて,TOEIC L&R IP の模試を 3 回行った.TOEIC L&R IP の模試の利用者は,延べ 45 名となった (4/21～2/17).

(3) 多読用書籍利用

語学教育推進室を利用する学生の目的の一つは,多読用書籍を利用することである.多読用書籍は,使用する主要な単語が制限され,全体の量や文法事項も調整され,英語学習者が辞書なしで楽しめるように工夫された多読用の英語教材のことを指している.これらの多読用書籍は,学生の関心を惹きつけるものを常備するように,計画的に数を増やし,常に学生の需要に応えるものとなっている.

語学教育推進室が所有する多読用書籍は,現時点では 2,000 冊を超えている.必修の英語科目を履修しているすべての学生が持つ学習ログ (ポートフォリオ) には,学生が読んだ多読本の記録を残していく工夫がなされているが,語学教育推進室の常勤スタッフは,学生からの多読本の選書の相談にも応じ,学生の英語における総合的な学びを支えている.以下に

月ごとの多読用書籍の貸出状況表を示す.数字は,貸し出し冊数を表す.

表.多読書籍の貸し出し状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
保健福祉	601	1121	555	454	126	73	450	366	165	294	19	5
情報	460	562	352	243	98	36	209	358	94	109	21	2
デザイン	227	360	279	257	48	51	150	175	51	150	29	0

(4) 語学教育推進室の TA 指導数

語学教育推進室では,ティーチング・アシスタント（以下,TA）を月曜日から木曜日まで週に 4 日間配置している.これらの学習支援事業に関する利用者総数（数値は対応人数）は,下表に示すとおりである.内訳は,英語サポート,個人指導,授業補助となる.その中でも,授業補助が圧倒的な対応人数を占めた.特に,新年度開始の 4 月とコンピュータを使用する第 2 クオーターの 6, 7 月には,円滑な授業の運営のため,TA の補助を必要とした.

表.語学教育推進室の TA 指導数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
保健福祉	494	131	866	382	0	2	10	147	150	148	38	0
情報	499	46	965	535	84	2	10	183	8	179	18	0
デザイン	333	0	482	358	95	0	0	71	52	91	63	0
計	1,326	177	2,313	1275	179	4	20	385	210	418	119	0

(5) e-ラーニング教材の利用状況

オンライン自主学習システム ALC NetAcademy2 の利用者数は以下のとおりである.平成 29 年度の利用者数の増加は,学修ログの記載方法の変更により,授業外での学生の e-learning 教材の使い方を工夫したためと考えられる.

表. 平成 29 年度 ALC NetAcademy2 スタンダードの利用

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
保健福祉	741	377	192	238	359	672	11	15	6	14	0	1
情報	578	412	288	315	426	671	17	32	6	38	7	12
デザイン	316	124	102	179	228	279	4	13	1	3	1	2
計	1,635	913	582	732	1,013	1,622	32	60	13	55	8	15

表. 平成 29 年度 ALC NetAcademy2 TOEIC 2000 の利用

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
保健福祉	96	224	177	0	42	266	74	211	63	398	80	230
情報	83	176	73	21	57	238	132	269	72	269	124	239
デザイン	4	4	34	0	9	124	63	147	36	78	105	133
計	183	404	284	21	108	628	269	627	171	745	209	602

ELP 2 & 4 において,スピーキングおよびライティング練習に焦点を置いた e-learning メソッド Open Voice の効果を検証するため,学習者のクオーターの始めと終わりにおける発話量の差を調べた.

表. Open Voice：各クオーターの始めと最後の学習者のワード数（平均値と標準偏差）

学部	ELP2	ELP4
保健福祉	**117.76 (28.65)** 85.54 (25.84)	133.31 (28.38) 130.51(28.55)
情報	**106.75 (25.21)**	108.93 (25.22)

	89.73 (23.25)	106.62 (26.35)
デザイン	**106.18 (41.15)** 99.45 (43.35)	114.23 (22.87) 113.74 (26.17)
全学科	**109.95 (31.05)** 90.75 (30.29)	119.10(28.35) 116.94 (29.23)

註：上段の数値はクオーターの終わり，下段の数値はクオーターの始めの数値を表す.

ELP 5（2 年生必修科目）の履修者に対して,e-ラーニング教材 English Central を準備した.試用期間は,前期（4 月 10 日から 8 月 10 日）であった.この e-ラーニング教材は,スマートフォンにも対応しており,短いフィルム（ムービー）を観て,その短いフィルムを基にした問題に答えていくものである.学習者に発話をさせる産出能力育成型教材である.以下の表は,全学 2 年生の学習履歴を表す.

表.平成 29 年度 English Central の利用（期間の平均）

学部	発話動画数	動画視聴数	学習単語数	学習活動数	発話数	学習時間
保健福祉	23.18	26.19	77.85	108.71	76.72	120.47
情報	17.19	20.49	61.12	73.14	57.58	78.29
デザイン	7.12	9.18	27.53	33.49	23.35	31.23

(6) TOEIC L&R IP 任意テスト受験

就職活動や進学上の必要性から受験を希望する学生がいるため,TOEIC L&R IP を学内で 3 回実施した.本年度は,受験者の希望にあわせて,7 月に第 2 回目を実施した.その実施状況は以下のとおりである.1 回目と 2 回目の平均点,最高点,最低点は前年度より高くなった.

表.TOEIC L&R IP 任意受験者の概要

通算回数	実施年月日	受験者数	平均点(標準偏差)	最高点	500 点以上
38	平成 29 年 5 月 26 日	12	520.83 (131.51)	795	6
39	平成 29 年 7 月 19 日	11	421.82 (86.03)	575	3
40	平成 30 年 2 月 15 日	21	496.43 (142.80)	805	10
	計	44	484.43 (130.66)	805	19

(7) TOEIC L&R IP の全員受験の実施

1 年次履修の「ELP1」履修者 407 名を対象として,平成 29 年 5 月 20 日（5 月 24 日追試実施）に TOEIC L&R IP を実施した.受験者 407 名,受験者平均点は 368.05 点,最高得点は 850 点であり,500 点以上取得者は全学部合わせて 37 名であった（990 点満点）.「ELP1」の履修クラスごとの平均点等は次の表のとおりである.

2 年次履修の「ELP6」履修者 399 名を対象として,平成 29 年 10 月 28 日（11 月 1 日追試実施）に TOEIC L&R IP を実施した.受験者 399 名,受験者平均点は 366.85 点,最高得点は 905 点であり,500 点以上取得者は全学部合わせて 39 名であった（990 点満点）. なお, 平成 28 年度入学生に関しては, 初めての経年変化が観察できたので, 表中下記に平成 28 年度入学時の数値を入れている.

表.平成 29 年度入学生「ELP1」履修学科別の結果

学部	学科	受験者数	平均点（標準偏差）	最高点	500 点以上
保健福祉	看護	41	415.98 (74.82)	595	6
	栄養	43	397.56 (94.98)	570	8
	保健福祉 A	30	369.50 (89.08)	610	2
	保健福祉 B	32	375.16 (81.52)	575	1

情報	通信 A	32	362.81 (84.41)	505	1
	通信 B	32	355.78 (91.90)	570	4
	システム A	30	350.83 (87.30)	570	1
	システム B	31	402.42 (81.58)	590	5
	人間情報	41	337.93 (91.96)	550	4
デザイン	デ工	39	376.15 (106.60)	635	3
	造形 A	26	316.15 (94.14)	525	1
	造形 B	26	324.42 (128.19)	850	1
全学		407	368.05 (95.86)	850	37

註：保健福祉学科,情報通信工学科,情報システム工学科,造形デザイン学科は 2 クラスに分けて実施.

表. 平成 28 年度入学生の入学当初と翌年 2 年次での（平成 29 年度）履修クラス別の結果
上段は平成 29 年度秋実施分, 下段は平成 28 年度入学直後実施分

学部	学科	受験者数	平均点（標準偏差）	最高点	500 点以上
保健福祉	看護	**43** 43	**353.95 (83.08)** 405.23 (80.90)	**560** 570	**3** 7
	栄養	**39** 39	**392.05 (114.82)** 413.85 (84.61)	**905** 675	**4** 7
	保健福祉	**32** 33	A **383.59 (98.09)** 373.64 (97.79)	**565** 550	**4** 4
		30 32	B **355.17 (89.21)** 369.06 (97.95)	**645** 615	**1** 3
情報工	情報通信	**28** 29	A **397.68 (103.06)** 374.83 (90.25)	**640** 620	**4** 3
		28 29	B **389.64 (106.55)** 415.34 (86.95)	**600** 690	**6** 4
	情報システム	**29** 30	A **400.52 (118.35)** 375.83 (100.07)	**610** 530	**5** 3
		28 29	B **348.21 (117.15)** 349.66 (102.47)	**665** 640	**3** 3
	人間情報	**25** 29	A **345.20 (91.41)** 323.28 (83.49)	**505** 505	**1** 1
		28 29	B **372.50 (79.50)** 334.66 (78.52)	**505** 495	**1** 0
デザイン	デザイン工学	**41** 42	**365.49 (118.75)** 344.17 (96.02)	**850** 745	**5** 2
	造形デザイン	**25** 25	A **308.40 (85.35)** 296.40 (72.96)	**540** 455	**1** 0
		23 25	B **337.83 (86.46)** 348.80 (78.47)	**540** 515	**1** 1
全学科		**399** 414	**366.85 (102.69)** 366.43 (94.23)	**905** 745	**39** 38

註：保健福祉学科,情報通信工学科,情報システム工学科,造形デザイン学科は 2 クラスに分けて実施.

(8) スピーカーズコーナー

毎年大学祭第 1 日目（本年度は 11 月 4 日に開催）,本学の学生が外国語（日本人学生は英語・韓国語・ドイツ語,留学生は日本語）を用い,自身の経験に基づくスピーチを披露している.このコーナーは,本学の学生が一人 5 分の持ち時間で外国語によるスピーチを行う場であり,本年度は本学の学生 12 名が参加した.「Experiences in Australia」「Deutsches

Universitätsleben」など,多岐にわたったテーマでスピーチが行われた.

(9) 定期発行物 Newsletter WeLL+
4 月と 10 月に,第 12 号と第 13 号を発行した.語学教育推進室のスタッフと学生とのコラボレーションで作る新聞で,全学部 1･2 年生と教職員に配布された.語学学習の方法や語学研修の体験記事,語学教育推進室主催の行事や資格検定試験実施の案内などを掲載した.この Newsletter は,各学部の学部生と大学院生及び語学教育推進室のスタッフが教員や学生からの投稿記事を基に編集作業を行っている.

(10) 映画鑑賞会（国際交流センターとの共催）
国際交流センターとの共催で,語学教育を目的とする映画鑑賞会を行った（5/25, 6/29, 10/19, 11/30）.4 本の映画の内,3 本は英語,1 本は韓国語のものだった.

4-5 情報教育推進室

情報社会の進展に伴い,情報通信機器およびデータの活用があらゆる分野で求められている.そのような中,情報技術に関する知識を学ぶことによって情報社会に適応できる能力を養うことが情報教育推進室の目的である.構成メンバーは室長,副室長の他,室員であり,情報工学部の教員が 5 名である.平成 29 年度の担当科目は次のとおりである.
・「情報リテラシー基礎」
・「統計学の基礎 A」
・「統計学の基礎 B」
・「コンピュータ演習 I」
・「コンピュータ演習 II」
・「情報技術の進展」
・「ヒューマンコミュニケーション」
これらの科目の担当教員は本推進室の構成メンバー（ただし,室長を除く）の他,非常勤講師で構成されている.中期計画において,昨年度「情報リテラシー基礎」を発展的に廃止し,新たに「コンピュータ演習 II」を開設した.「情報・統計」の開講科目は卒業判定に関係する科目が少ないなどの理由により科目数自体は少ないが,多くの学生が情報技術の習得を望んでおり,情報技術教育のさらなる向上を目指す必要があると考えられる.
なお,平成 30 年度入学生からの共通教育改定カリキュラムにおいて「情報・統計」のカテゴリーを廃止し,担当科目を自然科学基幹科目または複合 PBL 科目のカテゴリーに移動する.また,科目名称も「統計学の基礎 A」を「統計学 A」に,「統計学の基礎 B」を「統計学 B」に,「情報技術の進展」を「現代科学論 A」にそれぞれ変更することとした.

（演習室の開放）
学生の情報活用能力の向上を図り,情報教育演習や自主学習利用の目的のため,情報基盤活用推進センターにより,インターネットに接続された PC を備えた情報処理演習室を年間 167 日開放した.各月の延べ利用者数及び開放日数は下表のとおりである. 平成 29 年度の延べ人数は 7,779 名であり,前年度比約 32%の利用者減であったが,学内無線ＬＡＮの学生向け開放や一昨年から運用している岡山モバイルスポットなどの利用が相当数あり,全体としての情報ネットワーク利用者数は減っていないと思われる.但し, これら無線ＬＡＮアクセスについてはスマートフォンやタブレットが中心と思われ, ＰＣリテラシーの向上という観点から課題があると思われる. 情報処理演習室の利用者数を学部別でみると,保健福祉学部（保健福祉学研究科を含む）が全体の約 76%,情報工学部（情報系工学研究科を含む）が約 6%,デザイン学部（デザイン学研究科を含む）が約 18%であった.保健福祉学部が突出している原因は,情報工学部及びデザイン学部はそれぞれ学部教育用の計算機演習室を整備

しているが,保健福祉学部にはそれらに相当する演習室がないためと考えられる.

（ア）延べ利用者数

月	4月	5月	6月	7･8月	9･10月	11月	12月	1月	2月	合計
H27	1,835	1,368	1,713	2,550	2,264	1,126	1,145	1,144	468	13,613
H28	1,675	1,137	1,183	1,708	2,045	1,185	1,170	894	380	11,377
H29	762	1,025	676	768	1,159	1,066	1,028	966	329	7,779

（イ）開放日数

月	4月	5月	6月	7･8月	9･10月	11月	12月	1月	2月	合計
H27	14	14	22	27	26	17	15	15	8	158
H28	15	19	22	26	25	19	15	15	8	164
H29	14	19	22	28	26	19	16	16	7	167

4-6 健康・スポーツ教育推進室

健康・スポーツ教育推進室は,建学の理念の基礎となる健全な社会生活を送る上で必要な健康に関する教育を推進する目的で開設された.その他にも,学生の課外活動に使用する施設,機器等の維持管理,全学における学生及び教職員の健康の維持・推進のための施設利用に関する事項,全学のスポーツ施設の地域社会への提供に関する事項,地域における健康・スポーツ教育活動に関する事項など所掌事項は多岐にわたる.

構成メンバーは5名で,そのうち3名は共通教育部兼務教員,2名は健康科学カテゴリー科目を担当する学部教員である.健康科学カテゴリー科目は,こころと身体,環境に関する講義,スポーツ実技などで構成されている．今年度からクォーター制が導入され，コア科目の「健康科学入門」の他に「心理学入門」「生命倫理」「食と健康」「スポーツの科学」「運動と健康」はクォーターで開講されたが,「健康と心理」「脳と身体の科学」「住環境と健康」「スポーツ I」「スポーツ II」はそれぞれ，1-2 クォーターもしくは 3-4 クォーターに跨がり開講した．講義科目はいずれも准教授以上の専任教員が主担当となっている.実技科目については，荒天時でも屋内施設を活用した代替種目を実施できるようにするなど，施設を有効に活用するため学科別に開講する時間割編成とした．これにより，スポーツ授業の目的の 1 つである多様なスポーツを実践する環境がより多くの学生に対して整備された．実技科目では,前期に全履修生を対象にスポーツ施設の使用に関するオリエンテーションを行い，その後 4 種のスポーツ種目を実施し,7 月期にはプールを活用したアクアスポーツを実施した.後期にも同様にオリエンテーションを実施した後，前期の受講種目とも関連させ,発展的な内容を取り入れたり,新規の種目を選択したりするなどして 4 種目実施した.

今年度の新規重点事業により,体育館トレーニング場の一部を有効活用できるように床上げ工事を実施し，全面使用可能にした．これによって，トレーニング場を利用した運動処方やフィットネスなどの種目も実施できるようになった．また,スポーツ I 及び II の TA に協力してもらい,その他の体育・スポーツ施設についても点検,整備を行った．更に課外活動におけるスポーツ施設の有効利用を推進するため，学友会と協働してスポーツ施設に関する要望を調査し，適切な施設使用，管理に関する指導，助言を行った.

なお，平成 30 年度入学生からの共通教育改定カリキュラムにおいて，健康科学カテゴリーにおいても要論，基幹科目，複合 PBL（Problem Based Learning）科目を設定し，より具体的，実践的に学修内容の定着を図るための科目へと発展できるように改定する．コア科目以外の科目名称を「生命倫理」から「生命倫理学」に,「健康と心理」を「健康心理学」に.「スポーツの科学」を「スポーツ科学」に,「運動と健康」を「応用健康科学論 A」に,

「食と健康」を「応用健康科学論 B」に,「住環境と健康」を「応用健康科学論 C」にそれぞれ変更することとした.

4-7 社会連携教育推進室

2 年次生まで進行した副専攻「岡山創生学」において,共通教育カテゴリー「社会連携」科目群には,「おかやまボランティア論」「おかやまを学ぶ」「地方自治論」「おかやまボランティア演習」「地域再生実践論」「地域協働演習」「地域インターンシップ」「企業と組織の活動」「起業の条件」がある.平成 29 年度は地域協働演習(2 年次)等の実践科目を充実するとともに,1 年次生科目を中心に履修者増をみた.また,「地域インターンシップ」については平成 30 年度から開講が予定されており,COC+推進室と協働で受け入れ体制の整備に努めた.

なお,これらの科目の企画,研究,評価等については,COC+教育改革ワーキンググループを中心に行われている.従って,教育の仕組み,授業の構築,学修評価については第 2 章「地域連携教育(COC+)に譲る.

4-8 留学生・転学生

本学では,日本の生活に不慣れな留学生(韓国又松(ウソン)大学校からの転学生,短期留学生を含む)が,いち早く日本の生活・文化に慣れ,学習・研究活動に励むことができるようにするため,本学学生の中から学業や生活の相談相手を選定し,留学生のサポートを行うチューター制度を設けるなど学業・生活面の両面において支援を行っている.平成 29 年度は,留学生に対して,各学科における学習支援のほか,授業料減免制度や奨学金募集等の情報提供及び活用の支援などを行った.

なお,平成 29 年度の留学生数は,学部生 2 人,大学院生 7 人の計 9 人で,3 人の留学生に対しチューターを配置した.最近 5 年間における留学生数及びチューターを利用した留学生数は次のとおりである.

年　　度	H25	H26	H27	H28	H29	合計
留学生数(学部生)	6	5	6	4	2	23
留学生数(大学院生)	6	5	4	5	7	27
合　　計 (うちチューター利用)	12 (2)	10 (2)	10 (3)	9 (1)	9 (3)	50 (11)

4-9 大学コンソーシアム岡山

県内の 17 大学が参加する大学コンソーシアム岡山では,平成 21 年度に文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」事業の選定を受けた「岡山オルガノンの構築」(代表校:岡山理科大学)の 3 年間にわたる事業に対し,平成 23 年度に補助金交付が終了したことを受けて,その事業を平成 24 年度から継承してきた.平成 27 年度に設置された将来構想委員会において事業運営を検討し,平成 29 年度はその方針に従って運営されている.

はじめに,平成 29 年度に実施された事業(単位互換,インターンシップ,吉備創生カレッジ,日ようび子ども大学,エコナイト,SD 研修会)に対する本学の参加状況を説明し,その後,平成 30 年度以降に対する対応を述べる.

〔本学の参加状況〕

(1)単位互換

(他大学→本学)

年　　度		H24	H25	H26	H27	H28	H29	合計
対面	履修学生数	1	0	1	1	1	0	4
	履修科目数	1	0	1	2	2	0	6
	本学提供科目数	6	10	10	8	4	4	42
双方向ライブ	履修学生数	2	2	3	1	0	0	8
	履修科目数	1	1	1	1	0	0	4
	本学提供科目数	1	1	1	1	0	0	4
VOD	履修学生数	3	4	0	7			14
	履修科目数	1	1	0	1			3
	本学提供科目数	1	1	1	1			4
合計	履修学生数	6	6	4	9	1	0	26
	履修科目数	3	2	2	4	2	0	13
	本学提供科目数	8	12	12	10	4	4	50

(本学→他大学)

年　　度		H24	H25	H26	H27	H28	H29	合計
対面	履修学生数	3	3	2	3	2	2	15
	履修科目数	8	3	2	2	3	1	19
双方向ライブ	履修学生数	1	0	1	0	0	1	3
	履修科目数	1	0	1	0	0	1	3
VOD	履修学生数	3	1	1	1			6
	履修科目数	1	1	1	2			5
合計	履修学生数	6(※)	4	4	4	2	3	23
	履修科目数	10	4	4	4	3	2	27

（※）双方向ライブと VOD を履修した同一学生の数を除く

（2）インターンシップ参加（NPO 法人 WIL）

年　　度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	合計
参加学生数	18	51	38	16	14	9	146

（3）吉備創生カレッジ

No.	年度	開講期	科　目　名	講　　師
1	H22	前期	俳句を楽しむ	柴田奈美（デザイン学部教授）
2			くらしと微生物	中島伸佳（保健福祉学部准教授）
3		後期	懐かしの洋食器世界	久保田厚子（デザイン学部教授）
4			赤毛のアンの姉妹たち	桂宥子（情報工学部教授） 星野裕子（保健福祉学部教授） 杉村寛子（保健福祉学部准教授）
5	H23	前期	景観デザインを考える	熊澤貴之（デザイン学部講師）
6		後期	英米文学カフェ	杉村寛子（保健福祉学部准教授）
7	H24	前期	地産地消と食文化	岸本妙子（保健福祉学部教授）
8		後期	再生エネルギー発電	徳永義孝（情報工学部准教授）
9	H25	前期	近代期の禁酒運動	二宮一枝（保健福祉学部教授）
10			日本のデザイン文化	吉原直彦（デザイン学部教授）
11			高齢者の健康維持と運動	犬飼義秀（情報工学部教授）
12		後期	人とロボットの眼の不思議	滝本裕則（情報工学部助教）
13			いま,子どもの育ちを考える	池田隆英（保健福祉学部准教授）
14			続・日本のデザイン文化	吉原直彦（デザイン学部教授）

15	H26	前期	広がるワイヤレスの世界	大久保賢祐（情報工学部教授）
16			日本人の糖尿病	福島光夫（保健福祉学部教授）
17		後期	韓国の身近な文化を知ろう	朴貞淑（デザイン学部講師）
18			「嵐が丘」入門	杉村寛子（保健福祉学部教授）
19			情報とデザイン	尾崎洋（デザイン学部講師）
20			考えるコンピュータの考え方	但馬康宏（情報工学部准教授）
21	H27	前期	脳から解る認知症	澤田陽一（保健福祉学部助教）
22			人間のダイナミクス	迫明仁（情報工学部教授） 齋藤誠二（情報工学部准教授） 大山剛史（情報工学部助教）
23			メソアメリカデザイン	真世土マウ(デザイン学部准教授)
24		後期	生活習慣病予防のための食事	平松智子（保健福祉学部准教授）
25			インターネットの仕組み	國島丈生（情報工学部准教授）
26			映画の表現技法	山下万吉（デザイン学部講師）
27	H28	前期	小石川療養所の建築	福濱嘉宏（デザイン学部教授）
28			思春期の性に関する子育て	岡﨑愉加（保健福祉学部准教授）
29			再生可能エネルギー発電	徳永義孝（情報工学部准教授）
30		後期	高齢社会と地域―日韓比較―	井上祐介（保健福祉学部助教）
31			日本の工業デザイン史	益岡了（デザイン学部准教授）
32			人とロボットの類似点相違点	井上貴浩（情報工学部准教授）
33	H29	前期	美学入門	樋笠勝士（デザイン学部教授）
34			１９世紀イギリス小説を読む	杉村藍（情報工学部教授）
35			子どもの食と健康	川上貴代（保健福祉学部教授）
36		後期	歴史から見る人工知能	但馬康宏（デザイン学部准教授）
37			医療と自己決定	沖本克子（保健福祉学部教授）
38			世界のコミック入門講座	中西俊介（デザイン学部准教授）

（4） 日ようび子ども大学

岡山県生涯学習センターと協力し,「日ようび子ども大学in京山祭」を平成23年より開催している. 県内の17大学, 5短期大学, 1高専の大学生が集まって子どもが体験できるブースを設置するなど, 親子で楽しんでいただく催しを開催している. 平成29年度の実施状況及び本学の展示内容は次の通りである.

・開催日時： 平成 29 年 6 月 4 日（日） 10:00～15:00
・会　　場： 岡山県生涯学習センター
・参 加 者： 1,587 名（対象：一般, 学生, 大学教職員）
［内訳：大人 581 名, 子ども 751 名, 学生 205 名, 大学教職員 50 名］
・展示内容： 「まっくらわーるどを探検しよう」
非日常的な空間で, 興味を持たせながら視覚の大切さや視覚以外の感覚の持つ能力に気づかせることを目的としている. 光を遮断した空間を作り, 視覚がほとんど使えない状況で手足の触覚や聴覚を活用した日常生活動作の疑似体験を行った. 参加者は受付で提示された数種類の「コップ」「キャラクター人形」「多角形や数字がレリーフ表示されたカード」「布製積み木」「果物野菜おもちゃ」の写真から好きなものを一つ選び, 暗い部屋から該当するものを持ち帰るという課題に, ひとりもしくは家族と一緒に取り組んだ. 参加者は入り口から, ブラックライトで浮かび上がる壁の蛍光飾りを横に見ながら, 点字ブロックをたどり目的の場所へ移動し, 暗闇の中, 手探りで目当てのものを見つけて外にでる. 実物と写真を照合した

後,受付で写真とターゲットを返却し,参加賞として用意した触図カードを受け取った.参加者は一連の課題を通して,視覚から得られた情報と視覚を代行する手足の触覚から得られる質的に異なる情報を相互に確認するという普段あまり行わない作業に取り組み,視覚が十分に使えない状況下における対処法を体験した.

・担 当 者： 中村光教授（保健福祉学部）ほか教員 4 名及び学生 22 名

年度	開催日	会　　場	参加大学数	参加者数
H23	6 月 26 日	岡山商科大学	8 大学	508 名
H24	6 月 24 日	岡山県生涯学習センター	11 大学	1,188 名
H25	6 月 2 日	岡山県生涯学習センター	13 大学・短大	1,500 名
H26	6 月 1 日	岡山県生涯学習センター	14 大学・短大	1,854 名
H27	6 月 7 日	岡山県生涯学習センター	16 大学・短大	2,428 名
H28	6 月 5 日	岡山県生涯学習センター	16 大学・短大	2,579 名
H29	6 月 4 日	岡山県生涯学習センター	16 大学・短大	1,587 名

（5）エコナイト

県内の 17 大学,5 短期大学,1 高専が連携し,地域貢献活動の一環として,環境問題への啓発を目的として平成 23 年度より実施している.具体的には,岡山県,岡山市等行政機関や企業と連携して,学生間の交流活動推進と地域との連携強化を図りつつ,学内消灯や自動車通勤の自粛,エコキャンドルの点灯,一斉ライトダウンの呼びかけ,その他,参加大学毎に独自のエコに関する環境教育の実践的活動を実施している.平成 29 年度は,統一活動として「岡山の大学からエコの輪を広げよう！」を合言葉に,エコロジーを考える活動を,加盟校の 8 大学,1 短期大学が岡山奉還町商店街で実施し,本学からも学生が参加した.また,本学独自の平成 29 年度の実施状況は次の通りである.

・テ ー マ： 七夕フェスティバル 2017
・開 催 日： 平成 29 年 7 月 7 日（金）
・会　　場： 学生会館周辺
・参 加 者： 約 300 名
・開催内容： 希望する学生による浴衣や甚平での授業出席.昼の部では浴衣,甚平で来た学生に無料でかき氷を提供し,くじ付きうちわの配布を行った.夜の部では学友会が食べ物や飲み物の模擬店を出し,部・サークルがライブを行った.エコを意識する企画としてエコアンケートに答えてもらい,お礼としてエコキャンドルやエコグッズを進呈した.
・成果と課題： 多くの人がエコアンケート回答してくれてエコについて少しでも考えてもらえたと思う.今後もエコイベントとしての面での多彩な企画を考えていきたい.

年度	開催日	会　　場	参加大学数	参加者数
H23	7 月 7 日	各大学及び NHK ひかりの広場	16 大学	約 1,500 名
H24	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学	約 3,000 名
H25	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学	約 4,600 名
H26	7 月 6 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学/4 短大/1 高専	約 3,300 名
H27	7 月 5 日他	各大学及び岡山市奉還町商店街	16 大学/3 短大	約 2,900 名
H28	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	17 大学/5 短大/1 高専	約 2,900 名
H29	7 月 8 日他	各大学及び岡山市奉還町商店街	17 大学/5 短大/1 高専	約 2,900 名

（6）SD 研修会

平成 28 年 4 月の障害者差別解消法施行を念頭に,障がい学生の就労及び就労に向けた修

学上の支援について理解を深めることを目的とする研修会が開催されている.平成 29 年度の実施状況は次の通りである.

・開催日時： 平成 29 年 8 月 24 日（木） 13:30～16:30
・会　　場： 岡山大学津島キャンパス
・研修内容： 基調講演 「事例から学ぶ発達障がい学生への学外実習支援」
講師 池谷 航介氏
（岡山大学 全学教育・学生支援機構 講師）

年度	開催日	内　　容	会　　場
H22	8 月 24 日	大学職員のための実践メンタルヘルス講座	山陽新聞社（本社ビル）
H23	8 月 29 日	クレイマー対策	岡山大学(津島キャンパス)
H24	8 月 31 日	大学における運動部活動	山陽新聞社（本社ビル）
H25	8 月 26 日	障がい学生支援研修会	岡山大学(津島キャンパス)
H26	8 月 28 日	障がい学生支援研修会	岡山大学(津島キャンパス)
H27	9 月 28 日	障がい学生支援研修会	岡山大学(津島キャンパス)
H28	8 月 23 日	障がい学生支援研修会	岡山大学(津島キャンパス)
H29	8 月 24 日	障がい学生支援研修会	岡山大学(津島キャンパス)

〔平成 30 年度以降〕

本学としては,大学コンソーシアム岡山の事業を平成 27 年度に採択された「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業（COC プラス)」のために活用することを視野に入れ,これまで以上の貢献をすべきと考える.

4-10 まとめと課題

本学の共通教育の特長は,(1) 建学理念「人間尊重と福祉の増進」および教育目的「人間・社会・自然の関係性の理解」における教養教育全般を担う科目群として,知的実践的自律性を培うため,大学に入学した初年次生対象の導入科目群,大学教育の根幹を担う理論的な知識を学ぶ全学対象の理論科目群,大学教育の理論的な知識を応用する実践的な力を体得する全学対象の実践科目群を総括的な科目群プログラム目標としていること,(2) この総括的な目標を達成するために,授業科目を「修学基礎」,「人文・社会科学」,「自然科学」,「健康科学」,「語学国際」,「社会連携」の 6 つのカテゴリーで構成していることに集約される.さらに各学部の 3 つのポリシーにおいて共有すべき教養教育のあり方に基づき,共通教育カリキュラム・ポリシーを検討し,これに基づいて平成 30 年度入学生からの共通教育新カリキュラムを策定した.平成 30 年度の最重要課題として,この新カリキュラムの実施,点検,評価が挙げられる.また,2 年目となるクオーター制について,セメスター制と比較しつつ共通教育科目における成績分布の検証を継続し,必要に応じて教育内容の改善を図る.さらに,学修効果の向上のため,アクティブ・ラーニングを積極的に導入する必要がある.

英語教育においては,平成 28 年度導入した English Language Program が 3 年目を迎え,TOEIC の有効活用と合わせた点検と評価が課題となる.また,語学文化研修については,海外研修と合わせ,効果的な実施先と実施数を検討するとともに,全学版の海外研修についても授業科目化を検討する.

社会連携科目においては,COC+推進室との連携のもとで,副専攻「岡山創生学」科目について授業アンケート等を元に,点検と評価,改善を進める.また,平成 30 年度から開講する「地域インターンシップ」については,内容を早期に確定させる必要がある.大学コンソー

シアム岡山の事業をCOC+のために活用することも視野に入れる.

5　専門教育における学生の学習支援

5-1　概要

本学の学士課程教育では,各学部・学科の何れも,実学を標榜する本学の教育理念及び学部・学科の教育目的に沿って策定されたカリキュラム・ポリシー（付録 2 参照）に基づいた学部教育が展開されている.保健福祉学部では各学科にて，試験合格率において高い水準を維持している国家資格取得のためのカリキュラム実施と併せてグローバル教育や地域連携教育を加味した多彩な教育プログラムや授業方法を工夫している.情報工学部では,難度の高い理系教育への適応に向けアドバイザー取組を活かした導入教育に注力するとともに,多数の学生が博士前期課程進学をめざすことから,情報工学の基礎を十分に修得させるほか,学士として社会進出する学生における実学教育も工夫している.なお,平成 27 年度入学生よりスポーツシステム工学科から名称変更された人間情報工学科においては,30 年度に完成年次を控えて，さらなる授業内容の工夫改善に取組んでいる.デザイン学部では学生のキャリア形成支援を第一義におき，従来の産学連携教育に加えて地域連携教育やグローバル教育を加味し，演習や卒業研究等の場面を通じて企画提案力とマネジメント力を併せ持つ学生を育成するため，外部及び学内資金を活かして多様な学習機会を提供するなど教育方法を工夫している.

以上の実学教育により，従来の少人数教育によるきめ細かな学習支援をベースに，各専門分野の知識とスキルを授けるべく工夫改善を継続しているが,多くの専門分野で多様な学習機会を活用したアクティブ・ラーニングの取組が増えつつあり，専門教育でも社会人基礎力の育成機運が芽吹いてきている.

5-2 保健福祉学部

5-2-1　概要

保健福祉学部の学士課程教育では，実学を標榜する本学の教育理念及び学部・学科の教育目的に沿って策定されたカリキュラム・ポリシーに基づいた学部教育が展開されている.保健福祉学部の各学科では，国家資格取得のためのカリキュラムと併せてグローバル化や地域連携教育を通して教育プログラムや授業方法を工夫している．実学教育により，少人数教育によるきめ細かな学習支援を実践し，各専門分野の知識とスキルを授けるべく工夫改善を継続している.

5-2-2　看護学科

5-2-2-1　カリキュラム

文部科学省は，平成 29 年 10 月 31 日に，看護系大学が学士課程における看護師養成教育において共通して取り組むべき内容を抽出し，カリキュラム作成の参考として示した「看護教育モデル・コア・カリキュラム」を策定し公表した．平成 30 年 1 月 16 日の文部科学省主催の説明会に参加し，カリキュラムの検討に入った.

5-2-2-2　グローバル教育

香港理工大学との交流事業では，香港理工大学の学生を 8 月に受け入れ 2 週間の交換看護研修（講義形式が 3 割，施設訪問を中心とした体験型研修が 7 割）を実施し，本学の学生と香港の学生が小グループで活動する機会や，看護学科 1 年生の授業に参加し，グループディスカッションをする機会を提供し，交流を深めた．実施後の評価アンケートによれば,「とても満足」「満足」という高い評価を得た．関連して，今年度開講された「保健福

祉学スタディツァー（1単位)」では，香港理工大学での短期研修（9月）に5名（3年生4名，4年生1名）と大学院生3名が参加し，香港での医療及び文化について学んだ．研修内容は，1日目は，オリエンテーションと歓迎昼食会，老人看護の概要に関する講義，老人施設でのシミュレーション・プログラム，2日目は，スタンダードプリコーションに関するワークショップ，アロマセラピーのレクチャー，3日目は老人福祉施設の見学，4日目に病院の見学をした．最終日に学生が日本における老人看護と大学の紹介を行い，修了証が授与された．研修後の研修効果に関するアンケ―トでは，「専門領域の学習への意欲が高まった」「異文化理解ができた」「英語の学習意欲が高まった」等の全ての項目で「とてもあてはまる」「まあまあてはまる」との肯定的な評価であった．本学における香港理工大学学生の研修（8月)，大学における本学学生の研修を通して，学生相互の交流を深めることができた．同じ看護の道を志す異国の学生たちとの交流は本学の学生にとって自己や日本を洞察し，専門職としての自分の将来を考えるかけがえのない経験となった．

同様に，「保健福祉学スタディツアー」において，オーストラリアアデレイドの研修（3月）に 3 名の学生が参加し，ホームステイをしながら施設見学や小学生との交流などを通して，保健福祉や文化について学んだ．その他，アメリカ合衆国ポートランド州立大学における研修に3名の学生が参加した．

「国際保健看護論」において，インドネシア・ハサヌディン大学看護教員による遠隔講義が実施され，英語で講義を聴講し途上国の保健医療問題について理解を深めた．

5-2-2-3　地域連携教育

「統合実習」では，3年次の看護政策・マネジメント論演習の成果を発展させて，岡山県備中保健所・笠岡市・ＮＰＯかさおか島づくり海社と協働して 1 泊 2 日の現地実習を行った．4年生が主体的に運営する全体報告会では，3年生も演習成果をふまえて質問し，備中保健所・笠岡市・ＮＰＯ関係者の講評により，北木島での宿泊体験を通して考えた看護の役割を深めて共有することができた．また，平成30年２月１日に学部生，大学院生を対象に看護師，薬剤師，管理栄養士を講師として迎えて「在宅医療における多職種連携について」のシンポジウムを開催し，現場における専門職としての役割や多職種連携の重要性など学生の地域思考の醸成に努めた．

5-2-2-4　国家試験対策

国家試験対策として，業者による e-ラーニングシステムを導入し，学生の自己学習を支援した．また学生の自主的な運営による国家試験模試に対して，運営の支援を行うとともに，学生からの要望の多い病態学に関する講義を行った．模試結果は教員も共有し個別指導等に活用した．

5-2-3　栄養学科

5-2-3-1　グローバル教育

平成30年1月26日にニュージーランドのMassey大学からJasmine Thomson博士を招聘し，「Introduction to Nutrition Research at Massey University: Body Composition」というタイトルで，英語による特別講演を行った．教員11名，博士後期課程学生3名，博士前期課程学生7名，学部学生24名が聴講し，講演後は意見交換の場を設け，外国語の習得，講演内容についての議論や研究交流を深めた．

5-2-3-2　地域連携教育

NPO法人，社会福祉団体，農業後継者等他団体との協働事業において地域の健康課題の解決を見据えた食育講座を企画運営することを通じて，行政栄養士及び栄養教諭の地域における食育コーディネーターとしての資質向上を目指し，栄養教諭課程履修者を中心として

総社市における食農体験型料理教室やサイエンス講座を実施した．本年度は行政栄養士希望の 4 年生と栄養教諭課程履修者が協働で実施したり，保健福祉学科と協働で福祉支援の料理教室を企画したり，専門職として多職種連携や職域連携の視点の形成にも努めた．

平成 26 年度から栄養学科では備前市の食育活動に継続的にかかわっており，平成 29 年度は備前市健康づくり推進会議及び食育推進会議に参加し，住民とグループワークにより地域の健康課題の明確化に取り組むとともに，解決に向けての生活習慣病予防の講話と地産地消の料理教室を企画運営し，事業企画案を食育推進会議で提案した．

プロジェクト型の地域連携教育以外にも，行政職員との意見交換会を実施したり，平成 30 年２月 1 日に学部生，大学院生を対象に看護師，薬剤師，管理栄養士を講師として迎えて「在宅医療における多職種連携について」のシンポジウムを開催し，現場における専門職としての役割や多職種連携の重要性など学生の地域思考の醸成に努めた．

5-2-3-3　学習支援

栄養学科では，全１～3 年次生を対象として，4 月及び 10 月に年 2 回以上のアドバイザー教員との面談を行い，1～2 年次生は 6 月の研修旅行時にもアドバイザーミーティングを行う等，オフィスアワー以外でも教員と学生とのコミュニケーションの機会を持った．また，欠席が目立つ学生や，授業の習熟度の低い学生など個別的に支援を要する学生に対しては，学科長・教務担当教員・アドバイザー教員の 3 人態勢で面談を行い，学生支援に努めた．

5-2-3-4　国家試験対策

管理栄養士国家試験対策として，4 年次生全員参加の校内・業者模試を 4 月初めから開始し，計 6 回実施した．また，その都度，受験生の自主学習の成果を分かりやすくするために模試成績の推移を本人に示すとともに，クラス内の成績順位を貼り出す等，学生の学習意欲を高揚させ，早期から試験対策に取り組ませることができた．本年度は，9 月，12 月，及び 2 月の校内・業者模試の成績が一定基準に達しない学生を対象に，勉強会方式による学習支援を行い，11 月には 10 月の校内・業者模試の成績が一定基準以下で伸び悩んでいる学生 8 名を対象に，試験対策勉強方法に関する個人面談を行って学習を支援した．

5-2-4　保健福祉学科

5-2-4-1　グローバル教育

平成 29 年 7 月 8 日に，カリフォルニア州立大学ソノマ校の長瀬鮎美講師を招聘し，アメリカの貧困状態にある子どもに対するヘッドスタートプログラムの現状と課題に関する講義を開講した．65 名の学生が聴講し，先進的なアメリカのプログラムについて学ぶことができた．

平成 29 年 9 月 19 日に，スウェーデン農業科学大学のパトリック・グラン教授を招聘し，うつ病の失業者を対象にした，自然を利用したセラピーとその効果に関する講義を開講した．9 名の学生が聴講し，先進的なスウェーデンのプログラムについて学ぶことができた．

平成 30 年 2 月 19 日から 2 月 23 日まで，9 名の学生が，保健福祉学スタディーツアーの授業の一環として，韓国のソウル市及び又松大学校にて，韓国の伝統文化の体験，韓国の医療ソーシャルワークと韓国文化に関する講義の受講，子ども園と高齢者施設の訪問を行った．これにより，グローバルな感覚を身に付けることができた．

5-2-4-2　地域連携教育

保健福祉学科では，複数の地域連携教育を通じて，地域の課題を理解し，地域の人々と協働することの大切さについて学ぶことができた．具体的には，①地域の専門職との交流や地域の総合病院に対するインタビューを通じて，地域の医療・福祉課題や医療チームの

ニーズを理解する「チームガバナビリティ演習」の受講，②総社市の困窮世帯の小学生，中学生，高校生を対象にした学習支援，体験活動プログラムの実施，③人権擁護に関する発表や人権に関するグループワークを行う，岡山県主催の人権シンポジウムへの参加，④大安寺中等教育学校の生徒を対象にした，大学生活と労働に関するワークショップへの参加，⑤高梁川のうたをつくる会の方々との交流，⑥地域の親子を対象にした，手作りおもちゃづくりや音楽を通じた交流，⑦総社市の多文化共生政策と外国人高齢者への支援に関するワークショップへの参加等により，地域連携教育を推進した．

5-2-4-3　国家試験対策

社会福祉士国家試験対策としては，業者による模擬試験を計 3 回(8 月，10 月，12 月)実施し，延べ 144 人が受験した．また，教員が学生主導の国家試験学習チームを支援するとともに，既卒者による合格体験を聴講する機会を提供した．

介護福祉士国家試験対策としては，業者による模擬試験を計 3 回（7 月，10 月，12 月）実施し，延べ 138 人が受験した．また，教員がグループ学習を支援するとともに，自己学習のための「介護福祉士国家試験対策 e-learning」の機会を提供した．

以上より，両国家試験に対する勉学意欲が高まった．

5-3 情報工学部

5-3-1 概要

情報工学部においては，情報技術を活用して，人間を中心に据えた社会の形成に貢献できる技術者の育成を目指した教育を展開している．以下，情報工学部の 3 学科が平成 29 年度に取り組んだ専門教育における学生の学習支援の具体的な取り組みについて，導入教育，カリキュラム及び授業方法の改善，学生支援の 3 つの観点から報告する．

5-3-2 情報通信工学科

5-3-2-1 導入教育

情報通信工学科の導入教育は，推薦入試合格者に対しては，12 月と 2 月に情報システム工学科および人間情報工学科と合同で開催する懇談会から始まる．一般入試合格者を含む新入生に対しては，4 月に 1 泊 2 日で実施する学外オリエンテーションおよび 1 年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を利用して導入教育を行っている．

第 1 回の推薦入試合格者懇談会では，学部で統一された数学の試験を実施し，同懇談会終了時に採点結果を学生に周知し，第 2 回までの学習方針を示すとともに，数学と英語に関する課題を与え，入学までの学力維持を促進した．第 2 回の同懇談会では，3 学科合同で前回配布した英語の課題を確認する小テストを実施した後に，学科別に分かれ 7 名の教員が参加し，教員あたり 1〜2 名の生徒を担当し，全ての課題が理解できるまで指導し，同時に数学および物理で苦手な分野などを聴取することで入学後のリメディアル教育へのデータとした．

学外オリエンテーションでは，新入生 7〜8 名のアドバイザーグループに別れ，それぞれのグループに与えられたテーマについて議論を行い，グループとしての一定の結論を出すことを学んだ．

「フレッシュマンセミナー」前半は，コミュニケーション能力の開発，自らの主張を相手に受け入れて貰うディスカッション能力の開発，プレゼンテーション技法の指導，さらにグループディスカッションを通して時間管理を身に付ける事などを目的として，平成 29 年度は，ディベートを行った．これは二つのグループで，あるテーマについて肯定側と否定側という立場で意見をまとめ，次の週の試合においてお互いの意見を戦わせる．一方，残りのグループは試合を観戦し，どちらのグループが理路整然と自らの主張を述べ相手を

説得できたかを，クリッカーを利用して投票し勝敗を決める．これを数回繰り返すことにより，上記の能力の開発を試みた．成績評価ではルーブリックを活用し，アドバイザー教員間での公平性を担保するとともに，学生への可視化に努めた．また，学生とアドバイザー教員が毎週顔を合わせることで，入学直後の不安感，孤独感を和らげることとした．「フレッシュマンセミナー」後半は，物理（電気および波動）および数学（行列および微積分）のリメディアル教育を実施した．毎回講義もしくはテストを行い，数学および物理の基礎的な事項を復習し，最後には理解度テストを行った．さらに 60%以下の成績の学生には再試験を実施した．全学で実施されている授業評価アンケートとは別に，独自にアンケートを実施し，同級生との親睦に役立った 80%以上，積極的な取り組み 80%以上の結果を得た．次年度以降も継続して実施する予定である．

今年から開始された全学共通の入学時アンケートにおいては，本学科を第一志望としている学生が 47.6%であったが，本学科を第一志望もしくは第二志望としている学生は 76.2%であった．これらを踏まえて今後の広報活動の充実が必要と考えられ，本年度はホームページの更新等を行った．

5-3-2-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムあるいは学科全教員が担当する科目の実施・評価方法などは，学科教務委員会を組織し，定期的に検討している．また，半期ごとに実験演習検討委員会を開催し，実験演習に関する問題点，反省点，主な改善点とその効果を実験演習担当者で議論している．特に，講義科目が大半を占める学部教育科目の中で，1 年次から 4 年次まで演習科目，実験科目を必修として配置している．実験演習検討委員会では，実験・演習科目の PDCA サイクルを担当教員が科目横断的に議論している．

理工系の学科にとって実験演習は極めて重要な科目であるが，近年は実験に対するモチベーションが低い学生も散見されるため，実験演習科目に対する学生のモチベーション向上を目的として，1 年次の最初の実験演習において実験演習の目的，実験演習の内容，履修上の注意を伝える説明会を新たに導入した．また，1 年次の実験演習科目では，レポート提出を通して，将来的には論文につながる科学的な報告文章の書き方を教育するとともに，ノートの取り方なども教育の範疇とした．一方，学生からの意見を吸い上げるために，学生が実験演習科目に対する意見・要望を述べる事ができる相談窓口も設けた．今年度は学生からの相談は 2 件であった．

5-3-2-3 学生支援

入学時のアドバイザーグループは，4 年次において「卒業研究」のための研究室配属が決定されるまで継続され，学生は「フレッシュマンセミナー」活動でのアドバイザー教員に対して，学生生活上の相談を受けることができる．また，オフィスアワーあるいは授業の空き時間を利用して，全ての学科教員に自由に相談できるようにしている．

各学生の成績は，学科教務専門委員が管理している．成績不振者に対しては，教務専門委員あるいはアドバイザー教員との面談等を通して，注意・指導を行っている．しかしながら，毎年，一定数の成績不振者がおり，今後，どのように改善していくかを検討しなければならない．なお，「卒業研究」を行う研究室配属は，卒業研究有資格者に対し，希望をもとに成績を考慮して行う．なお，平成 27 年入学生については，在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は 81.5%であった．

また，10 年程前より，特異な行動が見られた学生の情報を，一定のフォーマットで学生相談室に報告している．学科長，教務専門委員，教育開発推進委員（学生支援）は，学生相談室のアドバイスの下，学生の行動に注意できる体制を引き続きとっている．

5-3-3 情報システム工学科

5-3-3-1 導入教育

情報システム工学科の導入教育は，推薦入試合格者に対しては，12 月と 2 月に情報通信工学科および人間情報工学科と合同で開催する懇談会から始まる．一般入試合格者を含む新入生に対しては，4 月に 1 泊 2 日で実施する学外オリエンテーションおよび 1 年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を利用して導入教育を行っている．

第 1 回の推薦入試合格者懇談会では，学部で統一された数学の試験を実施し，同懇談会終了時に採点結果を学生に周知し，第 2 回までの学習方針を示すとともに，数学と英語に関する課題を与え，入学までの学力維持を促進した．第 2 回の同懇談会では，3 学科合同で前回配布した英語の課題を確認する小テストを実施した後に，学科別に分かれ 5 名の教員が参加し，教員あたり 2〜3 名の生徒を担当し，全ての課題が理解できるまで丁寧に指導した．

学外オリエンテーションでは，学科全体ミーティングで学生生活の過ごし方を学ぶと共に，アドバイザーグループ毎の班別ミーティングにおいてアドバイザー教員との顔合わせを通じて相談しやすい環境を整え，さらに学生同士の親睦を深めた．

「フレッシュマンセミナー」では，高校での数学および物理についてリメディアル教育を実施した．各回の授業で学生に課題を与え，2〜3 名の教員（学科全教員が分担）とティーチングアシスタント 3 名が採点と個別指導にあたった．リメディアル教育前の 4 月と教育後の 7 月にほぼ同難度のテストを行った結果，受講者 62 人中 50 人の得点が向上しており，リメディアル教育の効果が確認された．

5-3-3-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムは教育プログラム検討委員会を組織し，実験・演習科目は実験・演習検討委員会を組織し，点検と改善を行っている．

本年度より開始されたクオーター制およびカリキュラム変更が学習効果に及ぼす影響について協議した．クオーター制導入により，以前よりも緻密なカリキュラム体系が構築できており，今後，継続的な調査が必要である．近来，注目を集めている人工知能に関する教育を強化するために，既存の人工知能科目群に加えて，新規に「人工知能Ⅱ」を開講することを決定した．

本年度も従来通り，大部分の実験演習科目において，授業の円滑な実施と学生の理解向上のため大学院生を TA として雇用した．TA を雇用した授業科目は，フレッシュマンセミナー，機械物理学実験 A・B，ソフトウェア演習Ⅰ・Ⅱ，CAD 演習，機械デザイン演習，回路デザイン演習，システム創造プロジェクトⅠ・Ⅱ，技術英語演習の合計 11 科目である．TA の人選に際しては，授業内容に関連のある分野の研究に携わっていることを重視した．

また，「機械物理学実験 B」では，老朽化した NC 工作機械を刷新し，本年度より利用を開始した．さらに，クオーター制を活用して，時間割と学習内容とに柔軟性を持たせるため，「CAD 演習」を「CAD 演習Ⅰ」と「CAD 演習 II」に分割することを決定した．

5-3-3-3 学生支援

入学時のアドバイザーグループは，4 年次において「卒業研究」のための研究室配属が決定されるまで継続され，学生はアドバイザー教員に対して，学生生活上の相談や履修指導を受けることができる．また，オフィスアワーや授業の空き時間を利用して，全ての学科教員に自由に相談できるようにしている．

各学生の成績は，学科教務専門委員が管理している．成績不振者に対しては，各学期のはじめに教務専門委員あるいはアドバイザー教員が面談し，成績不振の理由を聞き取ると共に履修指導を行っている．そして面談でメンタルな問題が懸念された学生には，学生相談室への相談を勧めている．なお，平成 27 年度入学生については，在籍者に対する卒業研

究有資格者の割合は89.8%であった．毎年，一定数の留年者がおり，成績不振者への効果的な対応法についてさらなる検討が必要である．

5-3-4 スポーツシステム工学科・人間情報工学科

5-3-4-1 導入教育

スポーツシステム工学科・人間情報工学科では，推薦入試合格者を対象とした懇談会（12月と2月に情報通信工学科および情報システム工学科と合同で開催），全新入生を対象とした学外オリエンテーション（4月に1泊2日で実施）および1年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を導入教育として位置付けている．

第 1 回の推薦入試合格者懇談会では，学部で統一された数学の試験を実施し，同懇談会終了時に採点結果を学生に周知し，第 2 回までの学習方針を示すとともに，数学と英語に関する課題を与え，入学までの学力維持を促進した．第2回の同懇談会では，3学科合同で前回配布した英語の課題を確認する小テストを実施した後に，学科別に分かれ 4 名の教員が参加し，教員あたり3〜4名の生徒を担当し，全ての課題ができるまで指導し，最後までやり遂げることで達成感を感じることの重要性を伝えることができたと思われる．

学外オリエンテーションでは，アドバイザー教員のグループ単位に分かれ，前年度の反省を踏まえて「自分たちで作るディプロマポリシー」をまとめ，その実現のためにどのような学生生活を送るべきかについて討論した．学生たちは自己紹介を通して各々が描いている将来像を再確認するとともに，教員も含め相互に理解を深めることにつながったと思われる．また，同じ学科内でも多様な目標を持つ者がおり，その目標を達成するための過程もみな同じでなくてもよい事を認識しながらも，人間情報工学科のディプロマポリシーとそれに基づくカリキュラムポリシーについて理解を深められた．翌日には，笠岡コモンズにおいて各グループがまとめたディプロマポリシーとそれを達成するために求められる学生生活についてプレゼンテーションを行った．更に，本学が推進している COC+事業の岡山創生学について説明し，実際のコモンズを利用することで地域創生推進士への学修意欲も喚起できた．

「フレッシュマンセミナー」は 2 部構成とし，前半では，力学に関するリメディアル教育を実施し，後半では，人間情報工学に関する課題を課した．力学に関するリメディアル教育では，講義の後に 60%を合格とした達成度評価を実施した．60%に達しなかった学生については，時間外学習としてレポートを課した．その結果，全員が合格のレベルに到達した．人間情報工学に関する課題については，学科教員から課題の例を挙げてもらい，工学的な課題とはどのようなものかを学ぶところから始め，図書館での文献検索及び WEB を利用した情報収集の仕方も学んだ．そして，学生毎に独自の課題を設定し，その解決策を考え，レポートとして提出させた．レポートの評価については，3名の教員でチェックを実施し，個別に，評価できる点，改善を要する点を指摘し，各学生個々のレベルに合わせた指導を行った．また，現代の工学技術者，工学研究者にとって，工学的見地に基づく新しい意味での倫理が必要不可欠になってきているため，本年度より研究者・技術者の倫理に観点を絞った工学倫理に関する内容を取り入れた．

5-3-4-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムを検討するために教育プログラム検討委員会を設けるとともに，実験演習科目に特化した検討を行う実験演習検討 WG を設けている．

教育プログラム検討委員会では，本学科の授業科目を分野別に分類し，その最初に位置する授業科目を重点科目に設定し，科目によっては補助教員を配置することで，教育効果の向上を図った．この効果については，平成 26 年度以前の入学生との比較を行うなど，継続的に評価する必要がある．

実験演習検討 WG においては，半期終了後，実験演習科目に関する問題点を洗い出し，改

善策を検討し，継続的な改善に努めている．本年度は，昨年度の検討結果に基づいて，実験演習科目で設定しているテーマと講義科目との関連性に関連性の低いテーマを変更した．

授業アンケートの結果から，概ね好評であるが，その効果についての検討を継続して実施する必要がある．

工学系学科の集大成の授業科目として位置付けられる卒業研究について，本年度も継続して，専門分野の異なる 2～3 の研究室をグループとし，月に 1～4 回の合同ゼミを実施した．これにより，指導教員とは異なる視点からの指導を受けることで，より学際的な卒業研究の実施を推進できたものと思われる．さらに，卒業研究の計画的な遂行を促進するために，2 月の発表会とは別に，9 月に中間発表会を継続して実施した．教員からの聴取した意見によれば，本年度も，テーマの決定の早期化，計画的な実施の促進，中だるみになりがちな夏季休暇の有効利用等の改善効果が見られた．

また，平成 30 年度からクオーター制が導入され，今後，学習効果に及ぼす影響を継続的に調査し，悪い影響がある場合は時間割編成やカリキュラム構成等の見直しを検討する．

5-3-4-3 学生支援

本学科には，学生相談の担当教員が在籍しており，大学生活や私生活での相談について，積極的に利用することを勧めているとともに，該当教員以外の教員にも気軽に相談できる体制をとるように教員にも周知している．また，効果的な学生支援，負担の平滑化の観点から，アドバイザーグループの編成や役割を見直し，本年度から実施した．それぞれのアドバイザーグループでは，前期の履修状況が周知される 9 月下旬のオリエンテーション後に，全学年を対象とした面談を実施した．面談の内容は主に単位習得状況の確認と私生活面での問題の有無に関するものであった．これにより，就学状況が不調な学生や進学，就職等で悩みを抱えている学生の早期発見に繋がり，ほっとルームの利用勧奨やキャリアカウンセラーへの相談につなげられたケースもあった．今後も履修状況が学生に周知される 4 月初旬と 9 月下旬の履修登録あるいは履修変更に活かせるような時期を逃さないタイミングでの面談を継続する必要がある．

5-3-4-2 に記した重点科目について，毎月の定例学科会議で出席状況を報告することとしており，出席状況が不良の学生の情報を共有し，担当授業科目で見守る体制を整えている．

また，欠席が目立つ学生については，教務専門委員が面談し，注意・指導を行っている．

学生の成績は，学科長と教務専門委員が連携して管理を行っている．成績不振者に対しては，指導を行っている．また，所属教員の担当科目の学習状況についても，組織的に管理・支援を行っている．

卒業研究における研究室配属は，卒業研究有資格者を対象に研究室紹介や研究室訪問の機会を設けて研究テーマの紹介を行い，本人の適性や興味・関心などを勘案して配属を行っている．なお平成 27 年入学生については，在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は 84.6%であった．

5-4 デザイン学部

5-4-1 カリキュラム検証

デザイン学部では，平成24年度以降領域制カリキュラムを導入し，平成28年3月以降卒業生を2年間にわたり送り出してきた．これまでの就職状況を踏まえて，第2期中期計画で目標とした「企画提案型人材育成」に，学科再編とカリキュラム編制が有効であったかどうかを検証し，第3期中期計画策定に向けて抜本的な改善に取り組んだ．具体的には，学科組織，3 ポリシーの見直しを行い,高大接続改革に対応した入試方法及びカリキュラムを中心に検討を行った．具体的な検討内容と実施実績については，以下の通りである．

1）クォーター制の導入にあわせ，講義科目と実技科目の特長を活かすような時間割を作成

し学修効果の向上を図った．CAD 設備を拡充し，実技系教育における質と量の向上を図った．
2)「デザインプロジェクト演習」では，既存の授業枠に収まりにくい比較的長期かつ実践を伴う外部連携テーマに対し，初回の希望調査により決定した学生グループと担当教員をプロジェクト毎に配し，通年授業として開講することで対応した．
3) 演習・実習系科目への TA の配置を拡大し，学部生の基礎力アップを支援した．
4) 卒業研究にルーブリック評価による試行を行い，成績評価の公平性と透明化を向上させることを目指した．また，複数教員担当授業では，一部で評価適正化に向けてルーブリック評価を参考に進め，教員からの意見聴取を行った．
5) 領域毎に履修モデルを設定し，オリエンテーション時に目標とする人材教育に必要な科目選択を効果的に行えるように学生に説明を行った．

特に，造形デザイン学科の卒業研究では，IT 技術，手作業や実材料による表現，「ものづくり」から「ことづくり」への展開や人の価値観を重視した研究など，これまでになかった新たな分野・領域へ展開させた研究テーマも多く見られ，領域制カリキュラムならではの成果と考えられる一方で，デザイン専門分野における技術等の基礎力の修得においては幾分の不十分さもみられ，領域制カリキュラムの実践による新分野創造とデザインの専門性深化の両立が今後の課題である．

5-4-2 人材育成（平成 29 年度教育力向上支援事業）

平成 29 年度「教育力向上支援事業」の学部としての取組みは 6 件であった．そのうち，学部教育に関するものが 2 件（内 1 件は学部横断），キャリア形成支援に関するものが 4 件（内 1 件は大学間連携）であった．すべて継続事業であるが，事業最終年度になるものが 3 件あり学修成果の評価が実施されている．詳細報告は「第 2 部第 1 章 3. 教育力向上支援事業」にて記載している．

1) 情報工学部・デザイン学部合同による協働教育プログラムの実践（代表：齋藤美絵子）
2) 学外文化施設との連携によるキャリア形成への取り組み（代表：作元朋子）
3) ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム（代表：島田清徳）
4) 大学間連携によるキャリア教育プログラムの実践（代表：野宮謙吾）
5) キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー及び企画提案力向上を目的とした教育プログラムの実施（代表：山下万吉）
6) デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発（代表：森下眞行）

その他，人材育成（キャリア形成支援）に関する学部・学科の取組みとしては「5-4-5 キャリア支援等」にて報告を行っている．

5-4-3 地域連携教育（COC+推進事業）

デザイン学部では，これまでに蓄積してきた教育研究活動を地域社会に役立てるため，県内外の組織や企業と連携したに地域連携教育に取り組んだ．平成 29 年度からは，多くのプロジェクトを COC+推進事業として位置づけ，地域社会とのパートナーシップ構築だけでなく，地域に開かれた大学を目指した．

主な地域連携教育としては，以下の通りである．
1) 総社市：3 年次生向けの学部部基礎教育科目として開講している「デザインプロジェクト演習」を，平成 29 年度よりおかやま創生学副専攻科目として再配置し，行政機関や地域団体での地域連携教育として実施した．平成 29 年度は 29 名が履修し，総社市を中心

に 4 つの中長期的な地域連携プロジェクトに取り組んだ.

2）備前市：平成 28 年度より就実大学経営学部との共同で実施している「地域中小企業経営者支援セミナー」を平成 29 年度は備前市で実施し，中小企業の後継者を中心 16 人が受講した.

3）津山市：つやま産業支援センターと連携事業として,「津山まちなかカレッジ（アルネ・津山)」にて，プロダクトデザイン講座（計 6 回）を実施し，社会人を中心に 11 人が受講した.

4）笠岡市：「地域創生コモンズかさおか」を中心として，デザイン学部学生の作品展のイベント支援等を行った.

学科独自の地域連携教育としては，以下の通りである.

デザイン工学科では,

1）総社市における行政インターンシップを，平成 30 年度開講科目「地域インターンシップ」を試行的に位置づけて取り組んだ．具体的には，領域専門教育科目「製品・情報デザインインターンシップ」を履修した学生 1 名が参加し，インターンシップを通じた体験に基づき，市の施策や行政に関する提言発表を行った.

2）3 年次の演習科目「製品・情報デザイン領域演習」「製品・情報デザインゼミナール」「建築設計演習」「建築材料演習」，また「卒業研究」を中心として，地域と連携した課題や研究テーマに取り組んだ事例が多くあった.

製品・情報デザイン領域演習Ⅳ

・パンチングメタル技術を応用した用途開発支援の提案 III（松陽産業株式会社）

・都市部における使いやすい駐車増精算機とインターフェースの提案（株式会社英田エンジニアリング）

製品・情報デザインゼミナール

・真庭市第 2 次環境基本計画策定のための環境市民会議への参加

卒業研究

・乾留釜を活用した竹製品デザインの研究（長谷川美咲）

・真庭市における持続可能なまちづくりに関する研究（三浦菜月）

・真庭市における資源循環プロジェクトに関する研究（光重有梨）

・奥津温泉街における空間形成プランに関する研究（有村　望）

建築材料演習

・総社市昭和地区にて，地域コミュニティ施設の新築計画を地域住民と協働で実施

建築設計Ⅳ「団地再生」

・老朽化した倉敷市営団地の再生計画を実施

造形デザイン学科では,

1）「おかやまボランティア演習」（副専攻）では，履修学生が真庭市勝山町で実施されている「勝山町並み体験クラフト市 2017」（平成 29 年 10 月 7～8 日）に出展している工芸作家のワークショップにてボランティア支援活動を行い，地域活性化に貢献すると同時に自らが自律的に活動する機会が得られた.

2）県内の大型ショッピングモール（倉敷市）からの依頼を受け，マスキングテープを用いた大型絵画を制作し，デザイン学部ならではの地域連携教育の成果を残すことができたが，学期中の依頼のため，学生サークル（6～7 名）が中心となって，課外授業として取組んだ.（平成 29 月 10 月に展示）

イオンモール倉敷

5-4-4 アクティブ・ラーニングの推進（ITC 化による）

平成27年度から，「新規事業枠」予算への申請を行い，「アクティブ・ラーニングシステム」の機器整備を進め，学修環境の利便性向上を図りつつ，また，デザイン学部棟内のWi-Fi環境の整備と利用の促進を図った．さらに，平成28年度にアクティブ・ラーニング室（3305）の追加整備に伴い，移動型の大型タッチパネル・ディスプレイを導入し，講義授業や演習授業だけでなく，会社説明会など多様な教育体系に柔軟に活用されたため，平成29年度共通予算にて追加整備を行った．

「製品・情報デザイン演習Ⅳ」の学外発表展示会（平成30年2月14日～3月4日，林原美術館）にアクティブ・ラーニング室（3305）機材を活用し，学修成果の発表（動画）を行った．

5-4-5 キャリア支援等（文部科学省補助事業終了後のプログラム）

5-4-5-1 はじめに

平成 24～26 年度実施の文部科学省補助事業テーマ A「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」及び，平成 26～27 年度実施の同テーマ B「大学教育再生加速プログラム（インターンシップ等を通じた教育強化）」について，事業終了後となる平成 28 年度以降は，教育力向上を目的に学部事業として取組を継続している．

5-4-5-2 テーマ A「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」（平成 26 年度終了）

平成 27 年度より，サブグループ 3 校（岡山理科大学，山口東京理科大学，岡山県立大学）は，3 大学連携の協定書を結び，連携会議による大学相互の授業見学等による教育力向上を目的にした取組を行っている．平成 29 年度は 28 年度に引き続き，本学教育力向上支援事業として取り組んだ．

(1)3 大学連携会議（平成 29 年 8 月 21 日）

岡山理科大学にて開催された「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」第 3 回 3 大学連携会議において，本年度の主な取組として授業見学，施設設備の共同利用，学生による取組の合同発表会を実施した．

(2)施設の共同利用（平成 30 年 2 月 20 日）

岡山理科大学の施設設備の共同利用に関する利用設備の確認を行った．

利用設備：NC データ変換ソフト，5 軸加工機

連携大学による相互授業見学，学生による取組の合同発表会の詳細については，第２部平成 29 年度教育力向上支援事業に後述．

5-4-5-3 テーマ B「中国・四国圏域での産官学協働によるインターンシップ等の推進」平成 27 年度終了）

本学部における主な継続的な取組は，1)フレシュマンセミナー（学科毎），2)両学科毎のインターンシップ・プログラム，3)中国・四国圏域グループ会議及び組織運営委員会主催のシンポジウム（フォーラム等）への参加の 3 つである．

(1)フレッシュマンセミナー（平成 29 年度よりクォーター制導入のため，学科毎の実施に変更）

それぞれの学科では，外部講師として，OB・OG デザイナーだけでなく，企業から講師を招き，初年次生向けのキャリア教育として実施した．全体として，基本的な就業力とともにデザイナーとしての将来設計に向けたキャリア構築ステップについての理解力を高め，志を立てることを支援することを目的とした．また，質問票の活用により，学生が講師へ質問を行い，講師の回答を次週に返却する方式を登用し，学生の意識を高めることができた．

デザイン工学（履修生：40 名）

日程	授業内容	担当講師
4/11	1．オリエンテーション；受講に関する指示	村木学科長
4/18	2．デザイン工学分野学生の将来設計１：進学編（大学院生：デザイン工学専攻）	院 2 年生　生瀬尾晃二
4/25	3．デザイン工学分野学生の将来設計２：就職編	製品・情報デザイン領域 卒業生　光森雅明
5/9	4．デザイン工学分野学生の将来設計３：就職編	製品・情報デザイン領域 卒業生　濱田貴行
5/16	5．　デザイン工学分野学生の将来設計４：就職編	建築・都市デザイン領域 卒業生　香西森太朗
5/23	6．キャリアプランニングのヒント：地域企業編（両学科共通）8201 教室	エクスライフ 三井勇樹氏
6/1	7．　キャリアプランニングのヒント：総合編 知財管理（両学科共通）8201 教室	株式会社 NexTone 三野明洋 氏
6/6	8．まとめ：ノート提出	村木学科長

造形デザイン学科（履修生 52 名）

	日程	内容	講師	対象
1	4/12	1．オリエンテーション： これからデザインを学ぶ 進学ノススメ（院生）	難波久美子 藤井夏美	造形デ学科長 院 1 年生
2	4/19	2．造形デザイン学科学生の将来設計： 造形 D 系（(H15 年度大学院修了生)	木村知子	磁器作家 陶芸工房講師
3	4/26	3．造形デザイン学科学生の将来設計： ビジュアル D 系（(H20 年度卒業生)	山下彰太	株式会社アド近鉄 広告プランナー
4	5/10	4．造形デザイン学科学生の将来設計： ビジュアル D 系（H27 年度卒業生）	大比賀千春	株式会社 IDA デザイナー
5	5/17	5．造形デザイン学科学生の将来設計： 造形 D 系（H27 年度卒業生）	長谷川雅美	凸版印刷株式会社 デザイナー
6	5/24	6．キャリアプランへの扉： デザインスペシャリストの視点	手代木聡	株式会社電通西日本 コピーライター
7	5/31	7．キャリアプランへの扉：地域企業編	三井勇樹	エクスライフ

		（両学科共通）		代表取締役
8	6/1* 木　3 限	8．キャリアプランへの扉：総合編 知財管理（両学科共通）8201 教室 　サブノート提出	三野明洋	株式会社 NexTone 取締役会長

(2)インターンシップ・プログラム

デザイン学部では，県大吉備塾として，就業中の OB・OG を講師に招いて講演を行った．また他大学との合同巡回ポートフォリオ展を実施した．

デザイン工学科では，地元企業との共同授業の中で，企業訪問を実施するなど地元での就職機会の拡大に努めた．（平成 29 年度 5 社）

製品・情報デザイン領域インターンシップ

デザイン工学科では，総社市インターンシップへの参加学生が，体験に基づき市の施策や行政に関する提言を行い，その発表内容により 1 名が市から表彰を受けた．

製品・情報デザイン領域では，授業枠の一部を利用して，企業からのデザイナーを招いたインターンシップ説明会を実施した．（平成 28 年度 12 社，平成 29 年度 17 社）

また，前年度冬季インターンシップの報告会を 5 月末に，夏季インターンシップの報告会を 1 月末に実施し，低年次生には履修選択の参考となるように聴講の機会を設け，キャリア形成への意識醸成の場とした．

さらに，新しい試みとして，スズキ株式会社の協力により，現役クレイモデラーによる出張インターンシップを開催し，2 年生 14 名，3 年生 3 名，院生 2 名の計 19 名が参加した．

建築・都市デザインインターンシップ

履修生は，建築・都市デザイン領域 3 年生 15 名である．地域別インターンシップ先は岡山県 5 名，広島県 2 名，大阪府 2 名，東京都 4 名，兵庫県 2 名である．受入先は，仁科建築設計事務所，畑友洋建築設計事務所，株式会社浦辺設計，長尾建築事務所，NAP 建築設計事務所，総社市役所などである．

建築・都市デザインインターンシップは，学内講義と実習先での研修を織り交ぜた授業カリキュラムとして，建築と社会とのつながりなどを理解した後，建築設計事務所や建設会社設計部，行政機関において，建築物の設計，工事監理，建築確認等の実務を学び，インターンシップ実習を終了した後，報告会を行った．

造形デザイン学科デザインインターンシップ

履修生：造形デザイン学科 3 年生 34 名である．

受け入先：12 企業 13 ヵ所

・株式会社三浦印刷所［パックロード製本］
・広和印刷株式会社
・株式会社中野コロタイプ
・ワシュウ印刷株式会社
・サンコー印刷株式会
・株式会社マック／株式会社ウィルコミュニケーションデザイン事務所
・岡山県立美術館
・滋賀県立陶芸の森
・株式会社 OHK エンタープライズ
・エクスライフ
・株式会社シファカ
・株式会社リペアル

造形デザイン学科では，インターンシップでは，13 の受け入れ先に学生を送り出し，事前準備と事後報告会も含め，学生を支援した．

平成 29 年度インターンシップ参加者数（地域別インターンシップ先）

	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	その他	合計
製品・情報デザイン			7	2						15	24
建築・都市デザイン			5	2			1	1		8	17
造形デザイン			31							3	34

(3)中国・四国圏域グループ会議及び組織運営委員会主催のシンポジウム（フォーラム等）への参加

・平成 29 年度中国・四国圏域人材育成フォーラム（2 名）
平成 29 年 10 月 20 日（金）サテライトキャンパスひろしま
・中四国産学連携合宿授業（学生 3 名，教員 1 名）
平成 29 年 8 月 25 日（金）～27 日（日）マツダ本社，サテライトキャンパス広島
・平成 29 年度 中国・四国地域人材育成連携協議会（1 名）
平成 30 年 3 月 15 日（木）岡山国際交流センター

(4) 県大吉備塾など

デザイン学部では，学生支援班主催の就職ガイダンス事業以外に，大学教育開発センターキャリア支援部会の教育力向上支援事業「県大吉備塾」に，卒業年度の近い OB・OG を招いて講演を行ったり，また授業科目「キャリアゼミナール」などを活用した相談指導など，多様な形でキャリア形成を支援した．

(5) 合同ポートフォリオ展

キャリア形成支援へのモチベーションアップにつながるように，他大学（京都市立芸術大学，京都精華大学，大阪工業大学）との合同展示を実施した．他大学の学生のポートフォリオを見る機会を通じて，本学部生との活動の比較も行えるように，学部棟展示ホールにて公開展示（平成 29 年 7 月 18 日～20 日／平成 29 年 12 月 18 日～22 日）を行い，学生のみならず教員の参加も多く見られた．

5-4-6 国際交流推進（平成29年度国際交流推進助成事業）

平成29年度の学部独自の国際交流推進助成事業は3件，教育力向上支援事業での合同事業（情報工学部）は1件であった．

1）モンテレイ工科大学との合同授業（平成29年7月3日～7月28日，西川・真世土）

デザイン学部では，モンテレイ工科大学デザイン学部から教員 1 名，学生 13 名を 3 週間にわたり受け入れた．

デザイン工学科では，都市・建築デザイン領域専門科目にて，共同授業と建築視察を実施した．都市環境調査の授業では，課題として，陣屋町足守・湯浅邸をアールブリュットを題材にしたアートギャラリー施設（社会福祉法人ももぞの学園）に改装する提案とし，実測調査から CAD 化作業，改修案のプレゼンテーションまでを行った．また学外視察として，倉敷の町屋見学，京都・大阪の近現代建築の見学，東京・横浜の近代化産業遺産建築の見学を実施した．

本学の学生の参加は 12 名であった．

合同授業の様子

合同実測の様子

また，造形デザイン学科では，色彩学・平面構成演習Ⅰにて合同授業「バイオデザイン」を実施した．

2）３大学交流ミュージアムツアー実施（平成29年7月7日～8日，森下・真世土・風早）

モンテレイ工科大学デザイン学部（14 名），ポートランド州立大学芸術学部（9 名）との３大学国際交流ツアーを瀬戸内海の犬島，豊島，直島のミュージアムツアーを中心にて実施した．また，ポートランド州立大学芸術学部の教員・学生のカモ井加工紙株式会社訪問を実施した．本学デザイン学部は教員 4 名，学生 13 名であった．

3）フィンランド・スタディツアー実施（平成29年9月1日～10日，森下・難波・岡本），

フィンランドでのスタディツアー（参加学生 10 名）を実施し，交流協定締結準備中のラハティ応用科学大学及びアアルト大学芸術学部との学生・教員間交流を実施した．また訪問期間中，ラハティ応用科学大学学長や国際交流担当者と国際交流協定締結に向けての協議を行うとともに，デザイン学部長とも今後の交流活動について意見を交換した．

研修後の平成 29 年 12 月 22 日，アアルト大学芸術デザイン学部卒業生の島塚絵里さんをフィンランドより招き，海外留学に向けての経験をもとに特別講演を実施した．

ラハティ郊外の小学校での交流授業

ラハティ郊外のホームセンター見学

4）ポートランド州立大学でのアメリカ文化語学研修（8 月 24 日～9 月 17 日,西川・風早）
情報工学・デザイン工学分野の企業研修を組み込んだ文化語学研修を情報工学部と共同で企画・実施した．デザイン学部からは 7 名が参加．詳細は，教育力向上支援事業にて．

語学授業風景

山崎氏のまちづくりレクチャー

以上 4 件の国際交流推進活動を広く市民に紹介するために，平成 29 年度卒業制作展示会（平成 30 年 2 月 27 日～3 月 4 日，天神山文化プラザ）にて，特別コーナーを設けた．

その他の国際交流推進活動は以下の 3 点である．

1）香港城市大学学生 15 名が来学し，デザイン学部の施設見学と授業見学，教員，学生との意見交換を行った．（平成 28 年 7 月 6 日）
2）又松大学校をはじめ，国民大学校，梨花女子大学校，大林大学校を訪問し，国際交流の躯体的な調査を行い，平成30年度日韓大学間国際交流の活性化の計画基盤となった．（平成29年9月11日～15日）また,交換留学生及び転入学生の受入に関する具体的協議のため，又松大学校を訪問した．（平成29年12月12日～14日）
3）香港大学客員准教授 Baniel Cheung 先生による特別セミナーを国際交流センターと共同で,研究科および学部生向けのマーケティング,ブランド戦略のセミナーを実施した.（平成 30 年 1 月 25 日）

5-5 まとめと課題

5-5-1　保健福祉学部

グローバル教育の充実に向け，学部間学術交流協定を締結した香港理工大学看護学院は保健福祉学スタディーツアーの派遣先となり，本年度は双方の学生交流が実施され，交流協定が着実に進行している．海外において看護・栄養・福祉等の保健福祉学分野の教育を経験することにより，これらの分野におけるグローバルな視点を養い，異文化理解を深めるとともに，外国語で異文化圏の人達と専門分野を含め広くコミュニケーションをはかる力を高めることを目的とする保健福祉学スタディーツアーの授業科目化を行い，科目名も海外研修（保健福祉学）に変更した．学生の派遣先としては韓国又松大学校，香港理工大学ならびにオーストラリア TAFE SA を設定している．

また，副専攻の岡山創生学に，学部独自科目として保健･医療・福祉等の各専門職として地域創生を体験学修する地域保健福祉演習を新設し，平成 30 年度から開講予定で，実際の履修状況を見ながら副専攻の履修促進に向けての工夫が必要となるだろう．

5-5-2 情報工学部

情報工学部においては，基礎学力の補強を軸に学生支援をきめ細かく実施している点では一致しているといえる．教育方法については，学部として岡山県工学教育協議会主催の

「岡山県工学教育協議会シンポジウム」に教員を派遣し，近隣大学・高専等の最新の教育方法に関する情報を収集すると共に，本学部の教育プログラムに関する発表を行い，他大学教員からの意見を聴取した．

平成 27 年度に採択された COC+事業に関連して，H28 年度入学生からはカリキュラムの一部に地域との協働による授業科目が設置しているが，これらの授業科目と学内で実施する授業科目とを上手く連動させ，高い教育効果を上げることが今後の課題である．これに関連して，平成 29 年度中国・四国工学教育協会大学教育部会研究会「地域創生に向けた工学教育のあり方について」(2017 年 12 月 5 日開催）に参加し，先進事例の調査を行った．

5-5-3 デザイン学部

デザイン学部では，文部科学省補助事業終了後の平成 28 年度以降，大学の教育力向上支援事業として，「中国・四国地域人材育成連携協議会」及び「３大学連携会議」に継続的に参加していることが，大学機関別認証評価機関によって高く評価されたこともあり，これまでの実績のあるキャリア形成支援を COC+推進事業として重点的に取り組み，学部教育の質向上と改善に活かすことができた．ただ，COC+推進事業が目的とする地元での就職率アップにつながるかどうかは継続的な取組と観察が必要になる．

国際交流推進については，平成 28 年度より国際交流協定締結校を中心にした派遣と受入の事業に継続的に取り組んだ成果もあり，両学科での海外への留学を行った．また希望する学生が増加した．しかしながら，学生の希望とは別に，国際交流協定締結校との交換留学生制度や単位互換など具体的な成果には結びついていない．また，本学への留学を希望する学生がほとんど増えていない現実への対応も，国際交流センターの強化を含めて大学としての重点的な取り組みに期待したい．

第２章　地域連携教育（ＣＯＣ＋）

1-1 概要

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に本学が代表校となって応募した「地域で学び地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」(以下，本COC+事業）が，平成27年度に選定されたことを受け，平成28年度入学生より，副専攻「岡山創生学」が開設された．すなわち，今年度は副専攻「岡山創生学」の第2年度であり，1年次生を対象とする3科目「おかやまボランティア論」,「おかやまボランティア演習」,「おかやまを学ぶ」に加え，2年次生を対象とする2科目「地域再生実践論」,「地域協働演習」が開講された．いずれの科目も，平成27年度より設定されている共通教育科目の社会連携カテゴリーに属している．副専攻「岡山創生学」授業科目は，1-3項で述べるように，共通教育科目に加え，各学部の学部教育科目で構成されており，年次進行で副専攻「岡山創生学」科目として開講していく．なお，共通教育科目の社会連携カテゴリーに，現在，配置されている授業科目は，副専攻「岡山創生学」完成時には，全て副専攻を構成する科目となる．このため，今年度の社会連携カテゴリー授業科目は，上記 5 科目は副専攻「岡山創生学」科目として開講され，他は従前の取り扱いで開講された．

ここで，本COC＋事業は，岡山県の「晴れの国おかやま生き活きプラン」(平成26年度から3年間）及び「おかやま創生総合戦略」(平成27年10月）とも方向を一にしており，また，県内の事業協働自治体の政策課題も取り込みながら，学長の強力なリーダーシップの下，これまで本学が取り組んできた教育改革，域学連携，産学連携活動を，表 1 に示す県内自治体，大学，企業，団体等と協働して発展させ，地域志向事業として推進することによって，事業協働地域内への若者の定着率を向上させることを目的としている．そのために，岡山県をはじめ，各事業協働自治体の地域戦略を反映した下記 3 つの目標を設定し，本事業期間内（平成27年度～平成31年度の5年間）を通して,「教育改革」,「域学連携」及び「産学連携」活動を相互に連携・実施しながら，若者の地域定着を進める産・学・官・民協働の体制を整備し，地域で学び，地域を志向し，“生き活きおかやま”を創生する人材を育成する（図1を参照).

表 1.「地域で学び地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」協働機関

参加大学	岡山大学，岡山理科大学，ノートルダム清心女子大学，就実大学，山陽学園大学，倉敷芸術科学大学（COC 既採択校)，くらしき作陽大学（COC 既採択校)，吉備国際大学（COC 既採択校)
参加自治体	岡山県，岡山市，倉敷市，笠岡市，総社市，備前市，真庭市，高梁市
参加企業等	岡山県経済団体連絡協議会,岡山県商工会議所連合会,岡山県経営者協会,一般社団法人岡山経済同友会，岡山県中小企業団体中央会，岡山県商工会連合会，岡山県産業振興財団，中国銀行，トマト銀行，岡山経済研究所，山陽新聞社，岡山 NPO センター

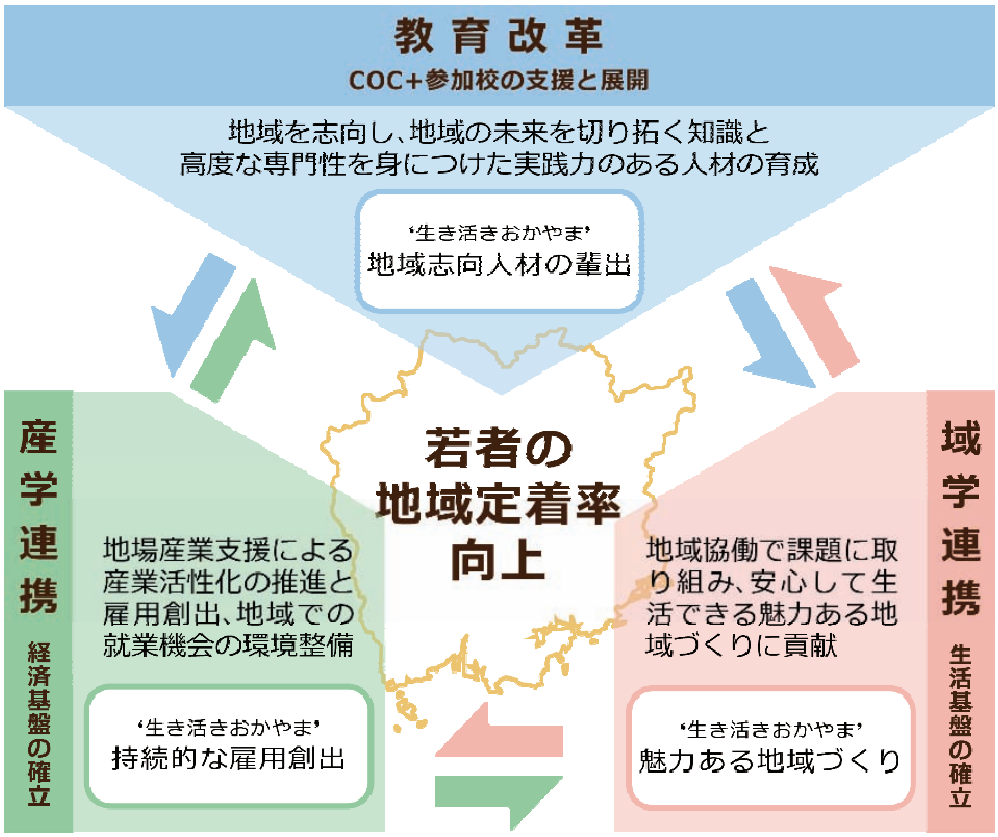


図 1. COC+事業の概要

なお，文部科学省より本 COC+事業に対して助成されるのは平成 31 年度までとされているが，本学の地域連携教育は，「人間・社会・自然の関係性を重視する実学を創造し，地域に貢献する」という教育研究の理念に基づき，平成 32 年度以降も継続・発展される予定としている．

［目標Ⅰ（教育改革)］
地域を志向し，地域の未来を切り拓く知識と高度な専門性を身につけた実践力のある人材の育成

［目標Ⅱ（域学連携)］
子育て・教育支援，高齢者・障害者支援，防災・減災支援等により，安心して生活することのできる魅力ある地域づくり

［目標Ⅲ（産学連携)］
岡山県内の市町村の共通課題である健康寿命の延伸，中小企業・小規模事業者の技術支援，観光振興などの分野の研究開発を通した雇用創出

1-2 組織体制

副専攻「岡山創生学」は，学長の掲げる 3 つの運営方針の一つ「地域貢献について戦略的に取り組む」を，教育面で具現化したものである．副専攻「岡山創生学」では，共通教育科目内カテゴリー「社会連携」をさらに強化するとともに，各学部の学部教育科目とも連携しつつ地域連携教育を構築していく．

本 COC+事業「地域で学び地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」は，若者の地元定着率の 10%向上を目的として，教育改革，域学連携及び産学連携により地域を志向する人材の輩出とその受け皿づくりを行う．教育改革では，「岡山創生学」を副専攻と

して新設し，実践的な専門性と高い地域志向を有する人材の育成を図る．そのため，今年度から導入されたクォーター制を活用し，長期インターンシップ，ボランティア等を実施する．域学連携では，自治体，NPO 等と協働で子育て，高齢者・障害者支援等を実践し，住み易く，安心安全で魅力ある地域づくりに貢献する．そして，協働機関との連携の場として「地域創生コモンズ」を設置・運営し，教育改革における地域演習科目実施を支援する．産学連携では，地場産業の支援による産業活性化を推進し，魅力的な雇用創出に努めるとともに，雇用マッチングシステムを開発することで雇用開拓と若者の地域への就業機会を拡大し，学生の県内定着を促進する．

本 COC+事業は，表 1 に示す事業協働機関との連携の下，図 2 に示す実施体制により組織される．

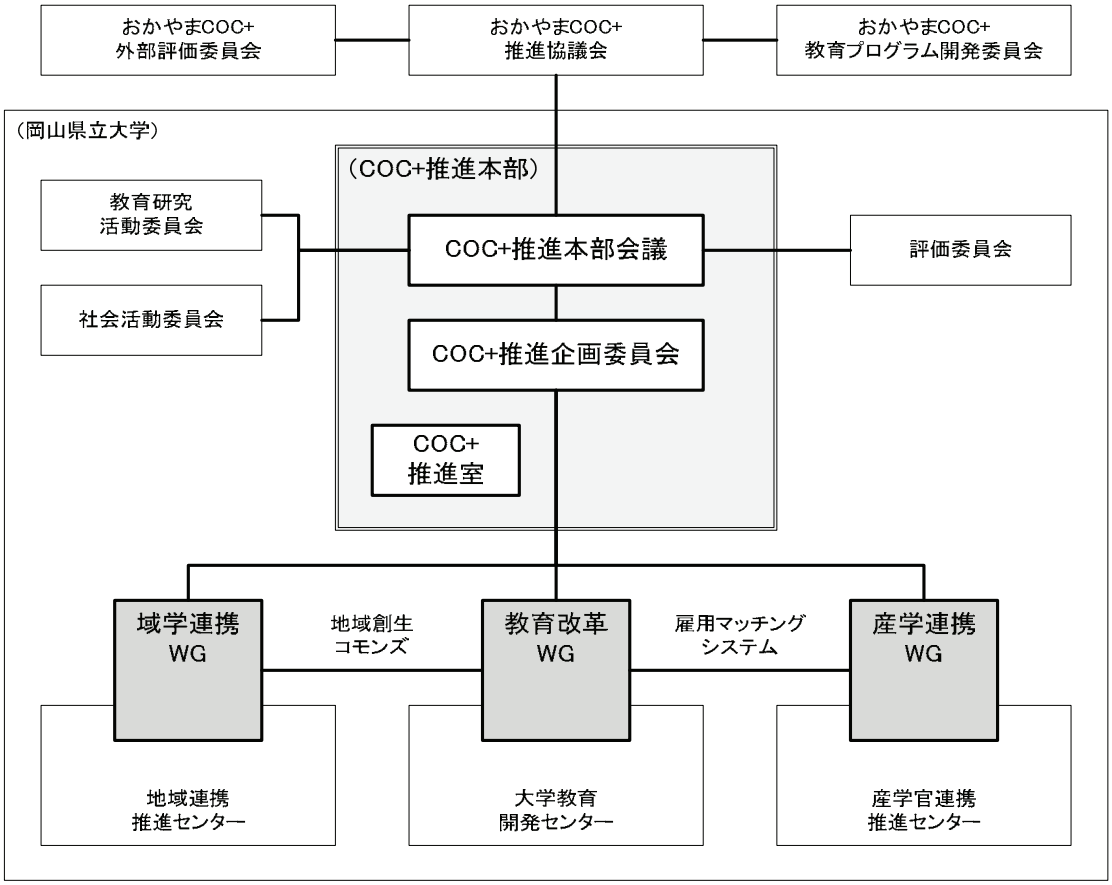


図 2．COC+実施体制

本 COC+事業における教育改革の概要は，次のとおりである．

a.「岡山創生学」科目群の開設

本学では，地域を志向する教育プログラムとして，「岡山創生学」科目群を新設する．本科目群は基礎と実践に大別され，基礎科目では，地域を知るために，社会連携に繋がる基礎知識や岡山県の地域政策等を学ぶ．実践科目では，地域学習の場である「地域創生コモンズ」を拠点とし，アクション・ラーニングを通して学ぶ．

b．クォーター制を活用した長期インターンシップシステムの開発

本学が平成 29 年度に導入したクォーター制を活用し，自治体，企業等に向けた，実施方法や評価方法，事前・最中・事後の学生指導をシステム化した「長期インターンシップ」（1ヶ月以上）を高年次に開設する．

c.「岡山創生学」科目群を実効性あるものにするための方策

「岡山創生学」科目群の学びを副専攻と位置付ける．また，学生一人一人の学修過程を教員が指導できるように「学生ポートフォリオ」を導入する．

これらの教育改革は，COC+推進本部（COC+推進企画委員会）の下に設置された教育改革 WG を主体として企画立案され，共通教育部及び各学部において実施される．教育改革 WG の所掌業務は，

- 本学が進める副専攻「岡山創生学」の開発に関すること
- 本学が進める学生ポートフォリオの開発等のキャリア形成支援に関することと

と定められている．教育改革 WG は，大学教育開発センターと直結し，

- 大学教育開発センター・副センター長（WG 長）
- 大学教育開発センター・共通教育部会長（副 WG 長）
- 大学教育開発センター・キャリア形成支援部会長
- 共通教育部・社会連携教育推進室長
- 本学教員
- COC+推進室副室長
- COC+推進室員

を構成員としている．なお，今年度からは，本 COC+事業で設置された 3 つの WG の機能と連携を強化するため，各センターのセンター長が WG 長の任に当たるよう規約の改正が行われた（教育改革 WG に関しては大学教育開発センター長，域学連携 WG に関しては地域連携推進センター長，産学連携 WG に関しては産学連携推進センター長）．

1-3 授業の構築

1-3-1 育成する人材像と修得すべき能力

副専攻「岡山創生学」では，学びの中で地域の魅力に触れ，コミュニケーションや協働の中で地域課題を認識し，ともにその解決までのプロセスを体験することで地域への愛着の形成や共感力を高め，それを基盤として専門性を存分に発揮して地域の持続的発展のために貢献することができ，社会の変化に対して高い適応能力をもつ人材を育てるものである．このような人材になるために修得すべき能力を次のように設定する．

(1) 地域「おかやま」の実態を体験的に学び，「おかやま」の魅力を発信する力
(2) 実践的学習の中からアクション・ラーニングのプロセスを通じて課題を認識する力
(3) 地域で人とコミュニケーションを取りながら協働して課題解決に取り組む力
(4) 学部・学科の専門性を活かし，自律的に課題解決法を考える応用力
(5) 持続可能な地域「おかやま」の未来を展望し，一市民としてまた専門家として社会に参画する力

1-3-2 教育プログラムの内容

副専攻「岡山創生学」では，低年次に「おかやま」の魅力と課題を学ぶ地域志向基礎科目，高年次に地元就職を意識させる地域志向実践科目を配置して，事業協働地域への定着を図っている．本副専攻の教育プログラムを岡山県の代表農産物である“もも”の育成に模して，1 年次に地域志向の動機を「知る（植え付け）」，2 年次に各学部・学科の専門性を加味して「学ぶ（受粉）」，高年次により専門的な視点から「実践（摘果）」の 3 段階に分け，卒業時に「収穫・出荷」できるようなイメージで設計している．

1. 1 年次では，地域「おかやま」を知り，地域と協働するための準備をする授業科目を配置している．岡山を中心とした地域の現状とグローバル化の中にある岡山の位置付けを知識として学び，地域に住む様々な人と接するために，現代社会で求められるボランティアなどを通して，また，大学生と社会の接点の現状やあり方についての学びを通して，地域志向を植え付ける．

2. 2年次では，地域「おかやま」の課題を，学外における協働を通して発見し，解決に向けた取組を実践する授業科目を配置している．学部・学科の専門性にとらわれることなく地域社会を見つめる冷静な観察眼を習得するだけでなく，入学後に学んだ専門性を受粉させ，専門の学びが，どのように地域課題の解決に役立てられるかを自律的に考える．
3. 3年次では，より専門的な視点から地域「おかやま」の課題を見つめ直し，自己のキャリア形成を支援する授業科目を配置している．地方自治や企業活動の仕組み，地域社会における自己の役割認識を涵養する学びの後，長期インターンシップを通して，より実践的な地域協働を体験することで，専門性による摘果を行う．
4. 教育課程は共通教育科目と学部教育科目から厳選された授業科目から構成され，また，講義科目での学びの後に演習科目を配置することで，実学としての地域協働を涵養する．

前述した「修得すべき能力」を学修させるために，「岡山創生学」科目群は，平成 27 年度入学生から全学科必修科目として開設している共通教育科目「地域ボランティア論」,「少子高齢社会論」の内容を強化し，新設する5科目を加えた計12科目で教育プログラムを構築している．各科目の開講計画を表 2 に，各授業科目の相互関係を示すカリキュラムマップを図2に示す．このうち,「おかやまボランティア論」は，平成27年度より開設した「地域ボランティア論」を名称変更及び内容見直しをしたものであり，同様に,「おかやまを学ぶ」は,「少子高齢社会論」の後継科目である．副専攻「岡山創生学」としては，共通教育科目として「おかやまボランティア演習」,「地域再生実践論」,「地域協働演習」を，情報工学部の学部教育科目として「エンジニアリング演習」を新設する．さらに，1年次対象の「おかやまボランティア論」と「おかやまボランティア演習」，2 年次対象の「地域再生実践論」と「地域協働演習」は，それぞれ，前者は後者の演習科目を意識した講義科目として設計され，後者は前者の講義科目における学びをフィールドに出ることでさらに深化させる設計となっている．このため，学生には，それぞれをペアとしての履修を推奨している．

なお，当初より，学部教育科目あるいは COC+参加大学製作の授業コンテンツを今後，順次追加していく予定としているところである．平成29年度入学生より，保健福祉学部の学部教育科目として「地域保健福祉演習」（演習 1 単位）が追加された．その後,「地域保健福祉演習」（演習 1 単位）が平成 28 年度入学生に対して「臨時に設ける科目」として卒業要件として認められたことより，副専攻「岡山創生学」科目として認定することとされた．また，平成28年度以降入学生に対し，保健福祉学部で既に開講されている「統合実習」,「公衆栄養学実習Ⅰ」,「公衆栄養学実習Ⅱ」,「ソーシャルワーク実習」及び「保育実習ⅠB」の中から 2 単位以上を取得すれば，副専攻「岡山創生学」の学部教育科目として 2 単位を修得したものとすることになった(表2欄外※印部分が平成28年度以降入学生に追記される)．

表 2.「岡山創生学」授業科目表（平成29年度入学生）

区分	授業科目名	授業の方法	開講時間数	開講単位数	開講年次				必要単位数
					1	2	3	4	
共通教育	おかやまボランティア論	講義	15	1	◎				6単位
	おかやまボランティア演習	演習	30	1	◎				
	おかやまを学ぶ	講義	15	1	◎				
	地域再生実践論	講義	15	1		◎			
	地域協働演習	演習	60	2		◎			
	地方自治論	講義	30	2			○		4単位
	地域インターンシップ	演習	120	4			○◆		
	企業の組織と活動	講義	15	1			○		

	起業の条件	講義	15	1			○		
学部教育	チームガバナビリティ演習	演習	30	1			○◆		
	地域保健福祉演習	演習	30	1			○◆		
	エンジニアリング演習	演習	120	4			○◆		
	デザインプロジェクト演習	演習	120	4			○◆		

【注】　◆印で示される授業科目を 1 科目以上修得すること.

【注】　◎印で示される授業科目は，副専攻「岡山創生学」の必修科目である．このうち，「おかやまボランティア論」及び「おかやまを学ぶ」は，全学生の必修科目である.

※ 保健福祉学部で既に開講されている「統合実習」,「公衆栄養学実習Ⅰ」,「公衆栄養学実習Ⅱ」,「ソーシャルワーク実習」及び「保育実習ⅠB」の中から 2 単位以上を取得すれば，必要単位数の中から 2 単位を修得したものとする.

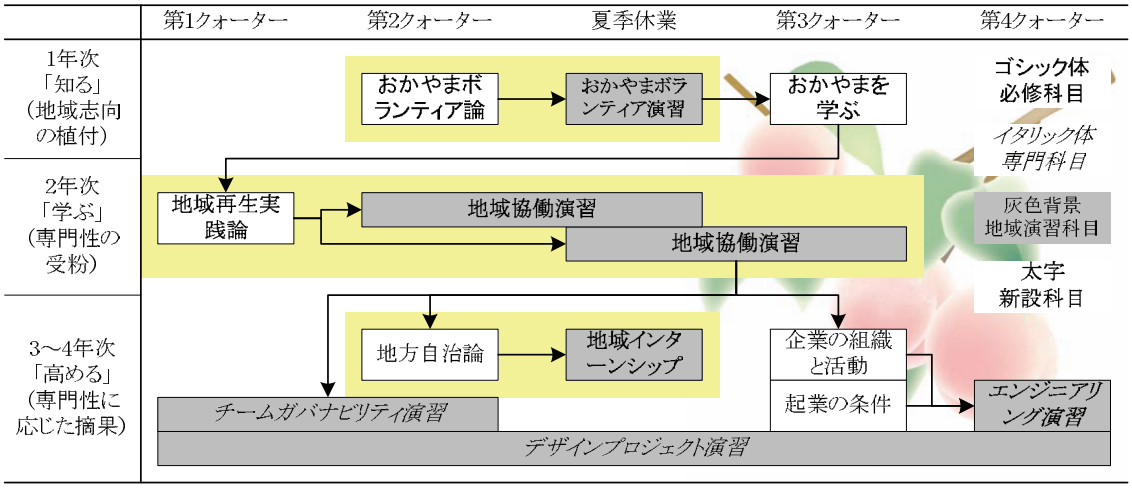


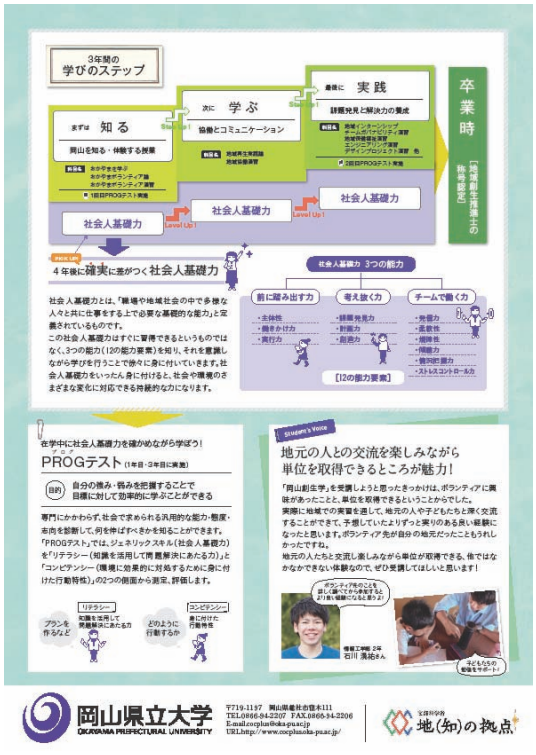
図 3. 副専攻「岡山創生学」カリキュラムマップ

1-3-3 学生への周知

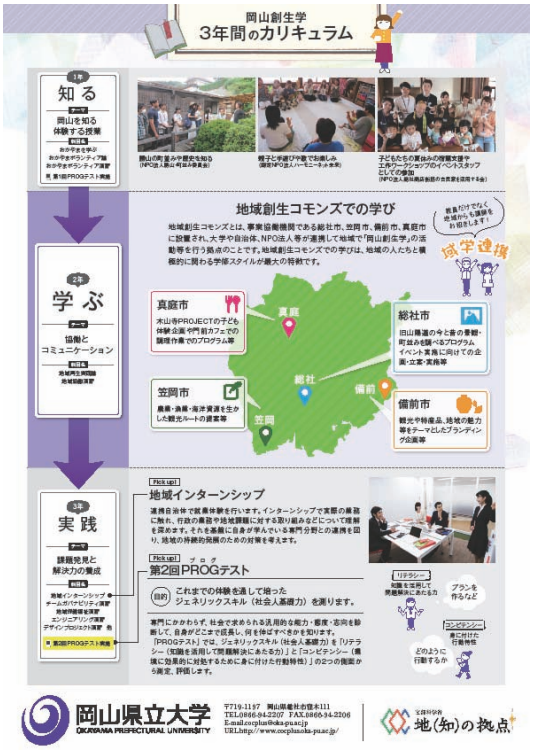
学生は，学科（専攻）毎に実施される入学試験に合格して本学に入学している．このため，副専攻「岡山創生学」に関する情報を，大学案内および高校生向け岡山創生学パンフレットなどにより受験生に提供しているところではあるが，十分な浸透，理解を得られたうえで入学しているとは言い難い面がある．このため，年度当初に開催されるオリエンテーションにおいて，副専攻「岡山創生学」の位置付け，特徴を学生に周知するようにしている.

新入生に対しては，入学式翌日に学部別で実施される共通教育および履修登録の説明の中で，副専攻「岡山創生学」をアピールするチラシを配布し，特に，選択科目である「おかやまボランティア演習」の履修を勧めた.

新 2 年次生に対しては，学科ごとに実施される在学生オリエンテーションの中で，選択科目である「地域再生実践論」「地域協働演習」を強調した新入生とは異なるチラシを配布するとともに，両科目のペア履修を推奨した.



(a) 新入生向け



(b) 新2年次生向け

年度当初オリエンテーションに配布したチラシ

1-3-4 実施状況

今年度は，副専攻「岡山創生学」の 2 年目に当たり，副専攻「岡山創生学」科目として共通教育科目の計 5 科目を開講した．1 年次対象の 3 科目（「おかやまボランティア論」,「おかやまボランティア演習」,「おかやまを学ぶ」）および 2 年次対象の 2 科目（「地域再生実践論」,「地域協働演習」）である．また，従来の社会連携カテゴリー科目として 3 科目（「企業の組織と活動」,「起業の条件」,「地方自治論」）を開講した．なお，後者 3 科目は，平成 30 年度からは副専攻「岡山創生学」科目としての開講となる．

①「おかやまボランティア論」第 2 クォーター・全学 1 年次生・1 単位（必修）

平成 27 年度に開講された「地域ボランティア論」（1 年次生・1 単位必修科目）の名称変更と内容強化を行うようデザインし，平成 28 年度から開講している授業科目である．今年度は副専攻「岡山創生学」の 2 度目の授業科目として開講したことから，昨年度に浮き彫りとなった大規模授業としての課題を克服すべく，後述のようにアクティブ・ラーニングの手法をより取り込んだ形態で実施した．また，次の 2 項目を授業科目の到達目標としている．

(1) ボランティア・NPO 活動，社会貢献の意義について理解を深める．
(2) 主体性，創造性，社会性について理解を深める．

授業科目と COC+事業との関連性，ボランティア活動の意義を，初回講義において丁寧に説明した．2 回目以降の講義では，本学 3 学部の特性も踏まえ，主に県内の様々なボランティア活動者及び NPO 法人で活躍している活動者を外部講師として招聘し，各々の活動内容の説明を聞いた後，COC+推進室コーディネーターの協力の下，学生自身の考えをまとめ，周囲の学生と意見交換し，グループの意見をまとめるというものであった．今年度も昨年度と同様，②で述べる「おかやまボランティア演習」における活動先に関連する内容を中心とするテーマとした．学生個々にとっては，興味が湧く内容と，必ずしもそうでない内容があったように見受けられるが，全体的には，それぞれの外部講師から多くのことを学びとることができたことを，講義ごとのミニッツペーパーから伺い知ることができた．

今年度の外部講師と各講義でのテーマは表 3 の通りである．

表 3. 平成 29 年度「おかやまボランティア論」スケジュール

No.	月日	担当	テーマ
1	6/14	本学教員	オリエンテーション
2	6/21	認定 NPO 法人 ハーモニーネット未来	ふれあい・たすけ愛社会の創出～子どもから高齢者まで 安心して自分らしく～
		認定 NPO 法人 おかやまエネルギーを考える会	エネルギーの自給で地球温暖化防止・地域の自立・活性化へ
3	6/28	NPO 法人 KUKKA	“居場所活動”倉敷市における取組
4	7/ 5	総社市社会福祉協議会	総社市における市民活動
		早島町社会福祉協議会(*)	早島町における市民活動
5	7/12	NPO 法人 音楽の砦	音楽と NPO 活動・岡山県内での取り組み
6	7/19	NPO 法人 総社商店街筋の古民家を活用する会	NPO としての働きと地域活動
		NPO 法人 岡山 NPO センター(*)	
7	7/26	NPO 法人 ハートアートリンク	アートとデザイン
		NPO 法人 勝山・町並み委員会(*)	
8	8/ 9	本学教員	まとめ，振り返り

(*) 平成 29 年度から担当

昨年度は，副専攻「岡山創生学」としての開講初年度であった．約 400 名の履修者に対する大規模授業を，昼食後の 3 時限に講堂で実施する際の問題点として，どのようにして受講学生の興味を 90 分持続させるかが第一である．今年度は，授業の到達目標達成に向けた，8 回の授業を通しての「学習への動機付け」「学習への参加・醸成」「学習成果の定着」のみならず，各回の授業内においても，「学びの発見（課題意識の発芽）」「学びへの深化（意識の醸成）」「学びの定着（意見の共有，振り返り）」を明確にした上で授業の進行を試みた．これを具現化するため，

(1) 講堂内における座席を学籍番号により指定した（学科毎の座席範囲を指定した）．
(2) 図 4 に示すように，授業時間内における進行を分刻みで設定した（ゲストスピーカーの講演と，学生との質疑応答の時間帯のみを設けた）．
(3) Think-Pair-Share の講義形態に基づき，学生個人個人での意見を形成する時間，4 名グループ内で各自の意見を交換する時間，グループとしての意見をまとめる時間を設けた（明確なグループワークの指示はしなかった）．
(4) 学生個人の意見，他者の意見，グループとしての学びなどを A4 サイズのミニッツペーパーに記述させた（A5 サイズのミニッツペーパーを記述させた）．

を実践した（各項目末尾の括弧内は昨年度の実践内容）．大学入学後の他の授業科目とは，大いに異なる授業進行であったため，当初は，学生に戸惑いも見られたが，ミニッツペーパーの記述内容からも，高い学習効果を得ることができたと考えている．

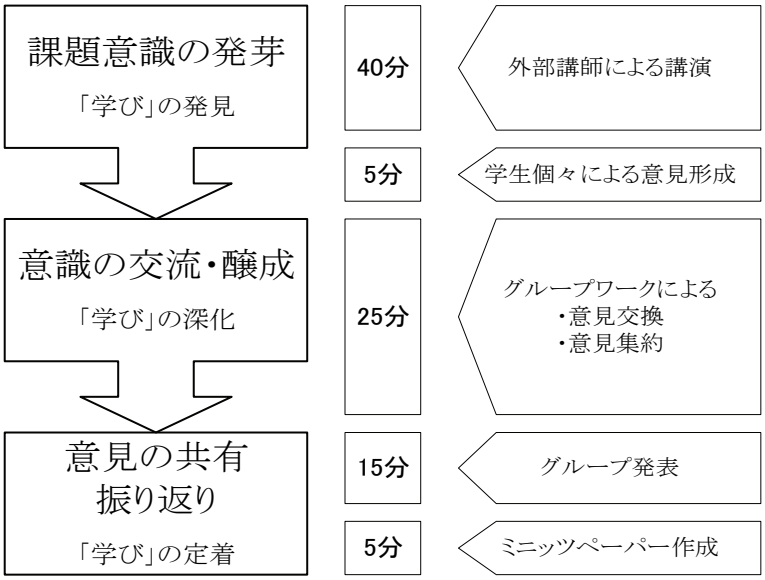


図 4．毎回の授業進行

外部講師による講演

グループワーク

②「おかやまボランティア演習」通年（主に夏季休業中）・全学 1 年次生・1 単位（選択）

副専攻「岡山創生学」科目として昨年度から新設された演習科目である．第 2 クォーターに必修科目として開講された「おかやまボランティア論」における学びを，フィールドワークにより学生自身が確認し，体験することを目的としている．授業科目の到達目標は，

(1) ボランティア原理である主体性、自主性、創造性の涵養
(2) 地域「おかやま」の理解
(3) 社会人基礎力および学士力の涵養

である．

学生は数名～10 数名のグループに分かれ，7 月 15 日（土）の事前学習（グループの顔合わせ，活動目標の設定，注意事項など）の後，協定を締結している 4 市（総社市，笠岡市，備前市，真庭市）及び岡山市，倉敷市，早島町において，8 月～10 月初旬の期間内で各活動先，グループごとに 3 日間のフィールドワークを実施した．各活動先における活動概要と受入実績数を表 4 に示す．今年度は，昨年度の約 1.3 倍となる 152 名の学生が，フィールドワークに取り組んだ．そして，活動報告を含む事後学習が 10 月 15 日（日）に開催された．履修者が増えた要因として，今年度から導入されたクォーター制を活用し，

(1) 第 2 クォーター当初の履修登録修正期間（6/13～19）において，「おかやまボランティア演習」の履修登録を可能としたこと，
(2) 第 2 クォーター開講の「おかやまボランティア論」初回（6/14）において，「おかやまボランティア演習」と合わせて履修することで学修効果が高まることをアナウンスしたこと，

が挙げられる．

表 4.「おかやまボランティア演習」活動受入先と実績

No.	主な活動場所	活動先	テーマ	参加者数	
				H29	H28
1	倉敷市	NPO 法人 KUKKA	不登校児童の居場所支援	7	6
2	岡山市	NPO 法人 岡山子どもセンター	子どもの遊び支援	11	17
3	笠岡市	認定 NPO 法人 ハーモニーネット未来	子ども，お年寄り支援	15	15
4	岡山市	NPO 法人 岡山 NPO センター	NPO 支援	7	4
5	真庭市	NPO 法人 勝山・町並み委員会	クラフト市の支援	10	9
6	総社市	NPO 法人 総社商店街筋の古民家を活用する会	小中学生の学習支援	22	21
7	岡山市	認定 NPO 法人 おかやまエネルギーを考える会	地球元気イベントプログラム支援	5	4
8	岡山市	NPO 法人 だっぴ	活動支援	4	－
9	岡山市	NPO 法人 岡山ロボット技術子供育成協会	ロボットプログラミング支援	4	－
10	総社市	服部地区社会福祉協議会	地区活動への参加	11	11
11	真庭市	真庭市社会福祉協議会	地域をつなぐ納涼祭支援	6	－
12	備前市	片上地区支えあい実行委員会	地区住民との交流	20	12
13	笠岡市	笠岡市社会福祉協議会	地区での福祉活動	9	12
14	早島町	早島町社会福祉協議会	地区活動	7	8
15	倉敷市	玉島商業高校	パソコン学習支援	2	－
16	岡山市	キッズビジネスパーク in 岡山	小学生の職業体験支援	12	－
			合計	**152**	**119**

昨年度は開講初年度ということで，手探り状態での実施であった．履修学生 119 名を 3～5 名という少人数グループに分けての活動であったため，教員およびコーディネーターによる巡回作業が煩雑になったり，グループによっては活動終了後から事後学習までに長い期間が空いてしまい，学修成果の十分な定着を図ることができなかったりしたことが大きな課題であった．今年度は，受入先との調整の後，グループ人数を 10 名以上とするなどの対策を取ったり，活動日誌の作成を義務付けたりするなどによる学修成果の定着を試みた．

また，事後学習においては，グループが順にポスター発表をする形式ではなく，ポスターを講義室内に掲示し，学生が他グループを巡回しながら質疑応答を行う形式（ワールドカフェ形式）とした．この形式による発表は，学生に対して自主的に他グループの活動に興味を持たせることができるとともに，ポスター発表担当者と間近で質疑応答をすることができるという利点があり，次年度以降も，継続して実施する予定である．

事前学習では，活動グループの顔合わせと活動目標の設定を行った．

活動の様子

事後学習では，ポスター発表形式とし，他グループの活動を知る機会を設けた．

③「おかやまを学ぶ」第 3 クォーター・全学 1 年次生・1 単位（必修）

本科目は，第 2 クォーター「おかやまボランティア論」と同様に，平成 27 年度に開講された「少子高齢社会論」（1 年次生・1 単位必修科目）の名称変更と，副専攻「岡山創生学」に即した内容強化を行った授業科目である．授業科目の到達目標は，

(1) 岡山県を始め各地域の魅力を伝え，地域に関心を持つことができる．

としている．

少子高齢化に代表される県内課題が地域経済，社会福祉に与える影響を行政担当者及び本学教員から学び，地域の魅力を知り，地域志向への意識を持てるための学習を行った．特に，今年度は，

(1) 連携自治体（総社市・備前市・笠岡市・真庭市）の地理，産業，政策等の取組について理解する．
(2) 経済活動の視点から見た岡山の位置づけを理解する．
(3) 自分達の住んでいる地域や課題に関心を持ち，地域社会の活性化について，多角的な視点で考察できる．

ことを目的とし，表 5 に示すテーマで開講した．

表 5. 平成 29 年度「おかやまを学ぶ」スケジュール

No.	月日	担当	テーマ
1	9/27	本学教員	オリエンテーション 岡山の福祉医療の歴史
2	10/ 4	岡山経済研究所(*)	経済指標で見る岡山県
3	10/11	備前焼ミュージアム	備前焼（その歴史から学ぶもの）
4	10/18	笠岡市政策部企画政策課	笠岡諸島について
5	10/25	真庭市総合政策部	経済の地域内循環を目指す真庭市の取組と情報発信
6	11/ 8	特別史跡閑谷学校顕彰保存会	学びの原郷　閑谷学校
7	11/15	総社市人口増推進室 総社市教育委員会 総社市健康医療課	働くってどんなこと
8	11/22	本学教員	認知症サポーターになろう

(*) 平成 29 年度から担当

COC+協働機関である 4 市（総社市，笠岡市，備前市，真庭市）に加え，今年度は，経済的な視点から見た岡山の現状を知ってもらう目的で，新たな学外講師を招聘した．「おかやまボランティア論」に引き続き，講師との質疑応答などアクティブ・ラーニングの要素を取り入れたり，Web 会議システムを活用して学内の別教室および地域創生コモンズかさおかへの遠隔双方向配信を試みたりした．さらに，各回の授業を録画し，オンデマンドに配信できるように環境およびコンテンツを整備した．

外部講師による講演

別教室への遠隔配信

講師との質疑応答

④「地域再生実践論」第 1 クォーター・2 年次生・1 単位（選択）

副専攻「岡山創生学」の創設に伴い，2 年次生対象に開講する選択科目として新設された講義科目であり，今年度，初めて開講することとなった．後続する副専攻「岡山創生学」2 年次対象演習科目「地域協働演習」に向けた事前講義科目としての側面が強くなるように設計されている．授業科目の到達目標は，

(1) 地域づくりの現状と課題を理解する．
(2) 地域の活性化に向けた取り組みを創生する力を身につける．
(3) 地域活性化への関心を高め，課題に取り組む意欲を身につける．

と設定されている．

今年度は 113 名の履修を得ることができた．表 6 のスケジュールに示すように，COC+協働機関である 4 市（総社市，笠岡市，備前市，真庭市）から，「地域協働演習」における活動先を中心に外部講師を招聘し，各地域における課題解決に向けた実践活動例の紹介，課題解決の困難さ，学生・若者への地域の期待などを講演していただいた．

表 6. 平成 29 年度「地域再生実践論」スケジュール

No.	月日	担当	テーマ
1	4/12	本学教員	オリエンテーション

2	4/19	本学教員，木山寺郷土保存会	真庭市の地域活動について
3	4/26	総社市まちかど郷土館	総社市の地域活動や課題について
4	5/10	NPO 法人 ふれあいサポートちゃてぃず	備前市の地域活動や課題について
5	5/17	真庭市勝山振興局地域振興課	真庭市の地域活動や課題について
6	5/24	笠岡市まちづくりアドバイザー	笠岡市の地域活動や課題について
7	5/31	総社市社会福祉協議会 英 PLAY	総社市の地域活動や課題について
8	6/ 7	本学教員	まとめ

1 年次対象の「おかやまボランティア論」あるいは「おかやまを学ぶ」のように 400 名前後の規模ではないが，100 名を超える履修者があったため，隣席学生との意見交換，BGM をかけるなど，アクティブ・ラーニングの要素を取り入れながら実施をした．

学生も積極的に活動しました．

⑤「地域協働演習」通年（主に夏季休業中）・2 年次生・2 単位（選択）

前述の「地域再生実践論」同様，副専攻「岡山創生学」の創設に伴い，2 年次生対象に開講する選択科目として新設された演習科目であり，今年度，初めて開講することとなった．後続する副専攻「岡山創生学」2 年次対象演習科目「地域協働演習」に向けた事前講義科目としての側面が強くなるように設計されている．授業科目の到達目標は，

(1) 地域課題を認識，発見し，解決への方策を考える力を身につける．
(2) 課題解決に向け，他者との協働の有効性，重要性，必要性を理解する．
(3) 学部・学科の専門性が，どのように地域社会に貢献できるかを自ら考える力を身につける．
(4) 学修成果を地域社会に向けて発信する．

と設定している．

今年度は，63 名の学生が 10 名前後のグループに分かれ，6 月 17 日（土）の事前学習（グループの顔合わせ，活動目標の設定，注意事項など）の後， 協定を締結している 4 市（総社市，笠岡市，備前市，真庭市）において，概ね 6 月下旬～9 月初旬の期間内で活動先ごとに 8 日間のフィールドワークを実施した．そして，活動報告を含む事後学習が 9 月 23 日（土）に開催された．事後学習では，グループ毎に，来年度に開催さ入れる「OPU フォーラム 2018」における発表用ポスター素材を，「地域の課題とその解決策の提案」を中心に作製した．

[A] 総社市「街道を歩く」（11 名）
受入団体　　本学
活動内容　　旧山陽道を歩き，専門家によるアドバイスを受けつつ，各地をスケッチして

地域を知る．スケッチしたものをプレゼンテーションし，最後にまとめて冊子を作成する．

日　　程　6/17　　ガイダンス（@県立図書館）
7/1・7/2　　フィールドワーク（@JR 吉備津駅周辺など）
7/15・7/16　フィールドワーク（@造山古墳，備中国分寺周辺など）
7/29・7/30　フィールドワーク（@山手郷土館，作山古墳周辺など）
8/5　　講評会

活動の様子

[B] 総社市「夏のイベント開催」(22 名)

受入団体　英 PLAY

活動内容　自分たちの住む地域の子どもたちが，英語や異文化に触れる機会を増やすため，英語であそぶ感覚で参加できるイベントを企画・運営する．8 月 26 日（土）に本学を会場に「英 PLAY 夏祭り」を開催する．

日　　程　6/24　　第１回合同企画会議（自己紹介・事前概要説明）
7/1　　第２回合同企画会議（夏イベント内容）
7/8，29　　グループ別活動（広告デザイン・看板装飾、総括・進行・模擬店）
8/17　　グループ別会議
8/21，24　　事前準備
8/25　　第 3 回合同会議（前日確認事項・荷物搬入等）
8/26　　イベント実施

活動の様子

[C] 笠岡市「農業・漁業・海洋資源を生かした観光ルートの提案」(10 名)

受入団体　NPO 法人 大島まちづくり協議会、六島まちづくり協議会

活動内容　大島地区と六島地区で課題探索を行い，農業・漁業・海洋資源を生かした観

光ルートの提案を行う.(大島)自転車スタンドおよびハンドバッグの製作(大島地区),防災通路の整備(六島地区)の行い,観光ルートの提案を1月に町づくり協議会の総会で報告する.

日　　程　7/29　　現地での事前学習(コモンズかさおか)
8/23～25　大島地区グループ活動(2泊3日)
8/28～30　六島地区グループ活動(2泊3日)
9/1　　プレゼンテーション準備(本学)
1/20　　現地プレゼンテーション

活動の様子

[D]備前市「YO～MA～ブランドで地域おこし」(10名)

受入団体　NPO法人ふれあいサポートちゃてぃず

活動内容　備前地域を知り,「ひと手間加えた思いやりのあるおせつかい(よ～ま～)」をデザインする.YO～MA～ブランドのロゴマークが完成し,岡山県立備前緑陽高校生徒の交流を行った.

日　　程　8/16～17　現地での事前学習(1泊2日)
8/21,24　ブランディングデザインワークショップ(コモンズびぜん)
8/23,25　グループ活動
8/28　　デザイン案提案,プレゼンテーション準備(コモンズびぜん)
9/2　　現地プレゼンテーション(コモンズびぜん)

活動の様子

[E]真庭市「木山寺PROJECT」(10名)

受入団体　木山郷土保存会

活動内容　木山の魅力を市内外の人により広く伝える手法を検討するとともに,地域の子どもたちに遊んでもらう秘密基地の見本づくりと,子ども達の受け入れ準備をする.秘密基地(ジャングルジム,シーソー)の製作,及び竹によるそ

うめん流しを製作した.

日　　程　7/15～17　課題説明，実習地域の案内，ガイダンス，秘密基地づくり
8/18～20　秘密基地づくり、子ども体験受け入れ準備、まとめ，
9/ 5　テーマ課題に向けたワークショップ，プレゼンテーション準備
9/19　プレゼンテーション（落合振興局）

活動の様子

なお，事後学習における発表は，昨年度に「おかやまボランティア演習」で実施したものと同様，グループ毎の発表形式とした（ただし，ビデオカメラで撮影したポスターをスクリーンに投影し，後部座席からも見やすくなるようにした）．しかし，発表者以外は，ただ聞き入るだけとなってしまい，思うような学習効果を得ることができなかった．このため，本科目の事後学習以後に実施された今年度の「おかやまボランティア演習」事後学習では，ワールドカフェ形式とすることとした．

今年度は初めての開講ということもあり，また，1 年次生対象「おかやまボランティア演習」と活動時期が重複していることもあり，授業科目の設計，評価，担当教員体制，サポート教員の役割など，多くの点で課題が残るものとなった．次年度に向け改善を図る．

事後学習でのポスター発表

⑥「企業の組織と活動」前期・1 単位（選択）

企業とはどういうものか，その組織と活動から働くことの意味等，役員クラスの 3 名のオムニバス方式で講義を進めた．講義の感想レポートと出席で評価している．学生からは，琴線にふれる内容で感動した旨の感想も多い．

⑦「起業の条件」前期・1 単位（選択）

講義内容については，起業のために必要な知識（ベンチャー立上げとその持続及び知的財産）の修得を目的としており，その目的に沿った内容になっている．授業アンケートを通した評価は高く，有意義な講義を実施していると判断される．授業担当者として，実務

経験者 2 名を非常勤講師としている．これは本授業の目的から，実務経験者が最適であり，今後も非常勤雇用の継続が望ましいと考える．履修学生は，デザイン学部と情報工学部の学生である．将来，起業の可能性がある学生は，極めて熱心に受講している．

⑧「地方自治論」後期・2 単位（選択）

平成 30 年度から副専攻「岡山創生学」科目となることを見据え，今年度は，地方自治体における喫緊の課題である地方創生について，岡山県の状況を中心に考察する機会としてとらえ，行政サービスを提供する側，受ける側の観点から，それぞれの責任と役割を考える契機となるようにした．講義では，住民に最も身近な行政主体であり，住民の社会・経済生活に対し，重要な役割を担っている地方自治の仕組みや制度，地方自治体の活動，住民の役割等について理解を深め，地方自治の現状と課題，あるべき姿などについて考察することを目標とした．

1-4 学修評価

1-4-1 アンケート調査

昨年度に引き続き，1-3-4 項で説明した副専攻「岡山創生学」5 科目（「おかやまボランティア論」，「おかやまボランティア演習」，「おかやまを学ぶ」，「地域再生実践論」，「地域協働演習」）では，副専攻「岡山創生学」が育成目標としている「修得すべき能力」5 項目（1-3-1 項を参照）に関連した設問に対し，記名式アンケートを通じて，学生自身がどの程度の認識，理解をすることができたかを自己評価させた．1-3-4 項に示す 5 項目(1)～(5)に対応して，次の[A]～[E]の問いを設けた．

[A]（5 科目共通）
地域社会には，様々な問題が潜んでいることについて視野を広げることができましたか？

[B]（「おかやまボランティア論」，「おかやまボランティア演習」）
ボランティア活動，NPO 活動に対する知識を得たり，その意義について理解を深めることができましたか？

[B]（「おかやまを学ぶ」，「地域再生実践論」）
県内自治体の地理，歴史，産業，政策などの取組について知識を得たり，その意義について理解を深めることができましたか？

[C]（「おかやまボランティア論」，「おかやまを学ぶ」，「地域再生実践論」）
課題解決に向けて，様々な人とコミュニケーションを取りながら協働することの重要性を確認することができましたか？

[C]（「おかやまボランティア演習」，「地域協働演習」）
課題解決に向けて，様々な人とコミュニケーションを取りながら共に活動することができましたか？

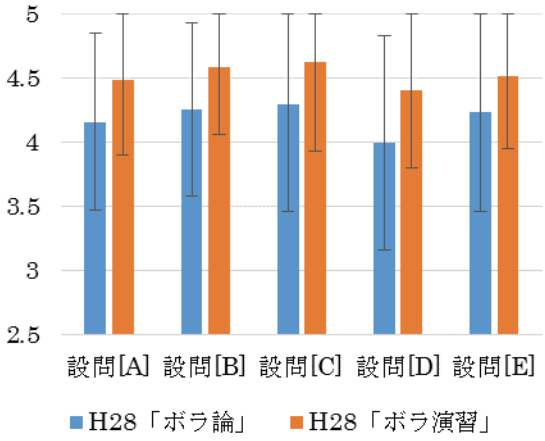
[D]（5 科目共通）
地域社会の身近な問題に対し，課題解決法を自ら考えたり，支援しようという意識は生まれましたか？

[E]（5 科目共通）
社会の一員として社会活動に参画する必要性を認識できましたか？

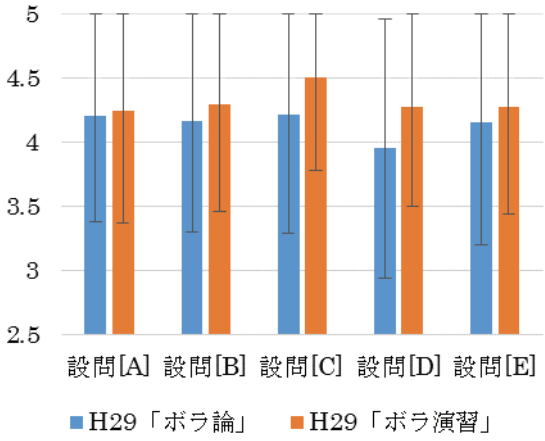
各設問 5 段階（1 を否定的，5 を肯定的として回答）による自己評価の結果を以下に示す．

1-4-2 設問ごとの結果

はじめに，1 年次対象の「おかやまボランティア論」（必修科目）から「おかやまボランティア演習」（選択科目）までの変化を，昨年度と今年度の 2 年分について図 5 に示す．



(a) 平成 28 年度
(「ボラ論」: N=403, 「ボラ演習」: N=107)

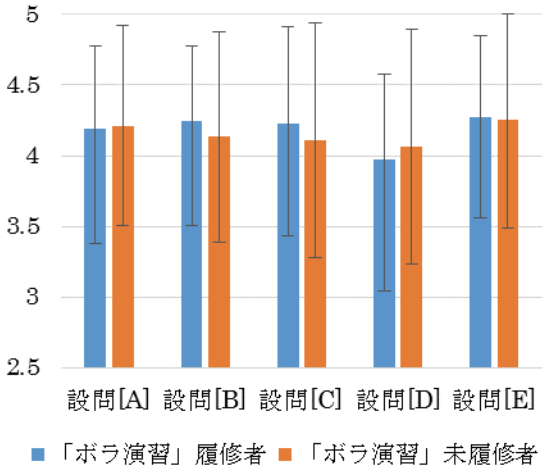


(b) 平成 29 年度
(「ボラ論」: N=382, 「ボラ演習」: N=129)

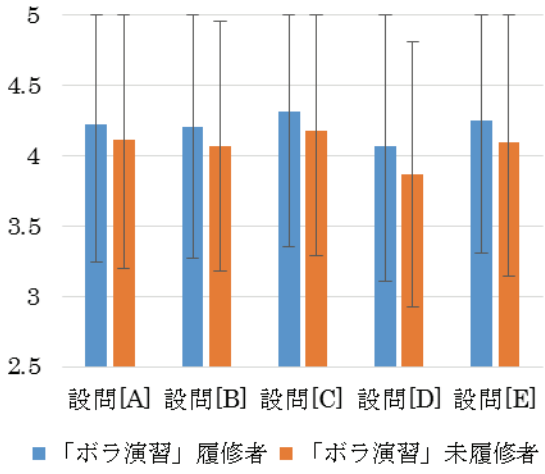
図 5.「おかやまボランティア論」～「おかやまボランティア演習」変化の比較

講義科目としての「おかやまボランティア論」における学びを，フィールドワークによる演習科目「おかやまボランティア演習」によって実践するとの位置付けで両科目を開講している．全ての設問において，回答がポジティブな方向に変化していることは，両科目の連携が意図通りに作用していることの表れであると考える．なお，昨年度と比べ，今年度の結果は，変化量が減少している．原因に関しては，今後に検証が必要である．

次に，「おかやまを学ぶ」における結果を，「おかやまボランティア演習」履修者と未履修者に分けて図 6 に示す．



(a) 平成 28 年度入学生
(履修：N=98, 未履修：N=294)

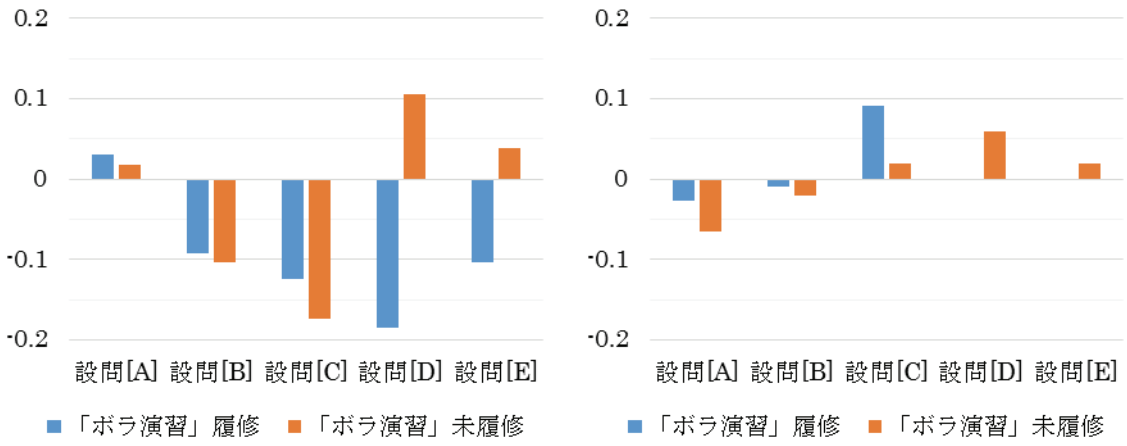


(b) 平成 29 年度入学生
(履修：N=111, 未履修：N=213)

図 6.「おかやまを学ぶ」における「おかやまボランティア演習」履修の有無による比較

昨年度では，設問[A]および[D]において，「おかやまボランティア演習」履修者のほうが未履修者より低くなっていたが，今年度では，全ての設問に対し，「おかやまボランティア演習」履修者は高い結果となった．また，第 2 クォーター（昨年度は前後期）「おかやまボランティア論」と第 3 クォーター（昨年度は後前期）「おかやまを学ぶ」は，1 年次生の必

修科目となっていることから，それぞれ約 400 名個々の学生に対し，両科目の各設問に対する回答の変化量を平均値として表現したものを図 7 に示す．例えば，「おかやまボランティア論」では「2」と回答していた学生が，「おかやまを学ぶ」では「4」と回答した場合は「+2」，「5」から「1」に変化した場合は「-4」として平均値を算出している．



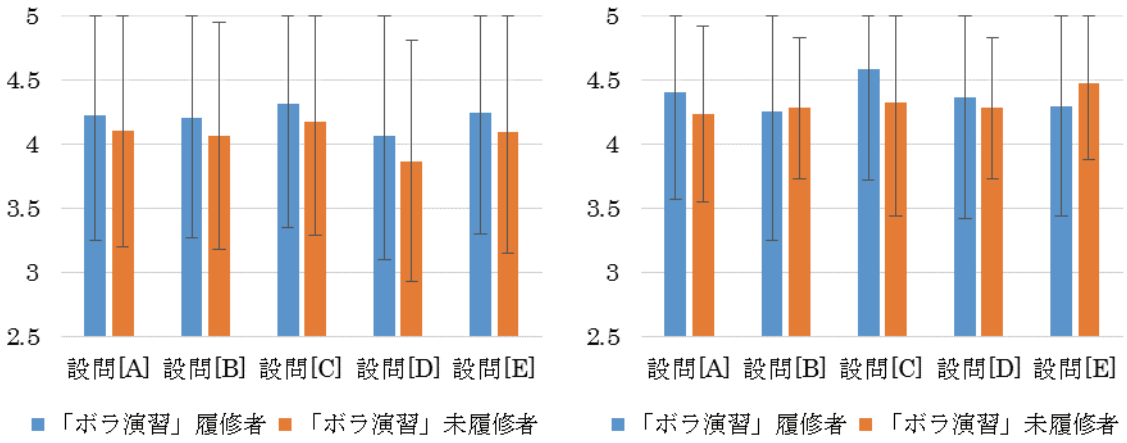
(a) 平成 28 年度入学生
(履修：N=98，未履修：N=294)

(b) 平成 29 年度入学生
(履修：N=111，未履修：N=213)

図 7.「おかやまボランティア論」から「おかやまを学ぶ」への変化量における「おかやまボランティア演習」履修の有無による比較

昨年度では，「おかやまボランティア演習」履修者では，マイナス方向への変化が顕著であった．これは，フィールドワークによる実践を通じて，地域課題の認識，解決への困難さを実体験により痛感した現れであるものと考えていた．しかしながら，今年度の結果では，大きな変化が現れず，「おかやまボランティア演習」履修者の設問[C]において，プラス方向への変化が見られた．人々との協働の必要性を，フィールドワークによって獲得できたものと考えられる．

最後に，今年度から開講した 2 年次対象科目「地域再生実践論」「地域協働演習」の結果を，昨年度における「おかやまボランティア演習」履修の有無により分割して図 8 に示す．



(a) 「地域再生実践論」
(履修：N=36，未履修：N=51)

(b) 「地域協働演習」
(履修：N=27，未履修：N=21)

図 8. 2 年次開講科目における「おかやまボランティア演習」履修の有無による比較

「地域協働演習」設問[B]を除き，設問により差はあるものの，「おかやまボランティア演習」履修者の結果が，未履修者の結果を上回ることとなった．フィールドワークを通した実践の有効性を伺うことができる．

1-4-3 「おかやまボランティア演習」の効果

1 年次開講の「おかやまボランティア論」（第 1 クォーター）および「おかやまを学ぶ」（第 3 クォーター）は 1 年次生の必修科目であることから，全 1 年次生のアンケート結果を収集することができる（平成 29 年度においては，時間割の関係で保健福祉学科（子ども学専攻）の学生のみ「おかやまを学ぶ」を平成 30 年度に履修する）．このデータを活用し，その間に選択科目として開講されるフィールドワークを実践する「おかやまボランティア演習」（主に夏季休業期間）を検証する．

はじめに，「おかやまボランティア演習」の履修の有無に応じて 2 群に分け，平成 28 年度入学生及び平成 29 年度入学生の両必修科目の各群におけるデータを示すと表 7 および表 8 のようになる．

表 7．1 年次必修科目データの分類（平成 28 年度入学生）

(a)　「おかやまボランティア論」アンケート結果

分　類	「ボランティア演習」履修者					「ボランティア演習」未履修者				
設　問	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
データ数	100	100	100	100	100	303	303	303	303	303
平　均	4.16	4.33	4.35	4.15	4.39	4.17	4.24	4.28	3.95	4.20
分　散	0.61	0.64	0.75	0.57	0.62	0.44	0.39	0.68	0.73	0.59

(b)　「おかやまを学ぶ」アンケート結果

分　類	「ボランティア演習」履修者					「ボランティア演習」未履修者				
設　問	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
データ数	98	98	98	98	98	294	294	294	294	294
平　均	4.19	4.24	4.22	3.97	4.28	4.21	4.13	4.11	4.07	4.25
分　散	0.67	0.55	0.62	0.87	0.51	0.50	0.55	0.70	0.69	0.59

表 8．1 年次必修科目データの分類（平成 29 年度入学生）

(a)　「おかやまボランティア論」アンケート結果

分　類	「ボランティア演習」履修者					「ボランティア演習」未履修者				
設　問	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
データ数	134	134	134	134	134	248	248	248	248	248
平　均	4.31	4.29	4.30	4.16	4.31	4.15	4.11	4.17	3.84	4.08
分　散	0.80	0.81	0.91	0.98	0.92	0.83	0.89	0.93	1.01	0.96

(b)　「おかやまを学ぶ」アンケート結果

分　類	「ボランティア演習」履修者					「ボランティア演習」未履修者				
設　問	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]	[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
データ数	111	111	111	111	111	213	213	213	213	213
平　均	4.23	4.21	4.32	4.07	4.25	4.11	4.07	4.18	3.87	4.10
分　散	0.97	0.93	0.96	0.97	0.94	0.91	0.89	0.89	0.94	0.95

これらのデータに基づき，分散及び平均に関して，2 群間の有意差に関して検定を行った（有意水準 5%）．検定結果を表 9（平成 28 年度入学生）および表 10（平成 29 年度入学生）に示す．

表 9．平成 28 年度入学生に対する検定結果

(a)　「おかやまボランティア論」アンケート結果

設問		[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
F 検定	分散比	1.4139	1.6618	1.0933	1.2861	1.0430
	P(F≦f) (両側)	0.0252	0.0010	0.5368	0.1516	0.7441
	分散の検定結果	不等分散	不等分散	等分散	等分散	等分散
t 検定	t 値	-0.0628	1.1957	0.7203	2.1173	2.1883
	P(T≦t) (両側)	0.9543	0.3991	0.5051	0.0322	0.0373
	平均の検定結果	有意差無	有意差無	有意差無	有意差有	有意差有

(b)　「おかやまを学ぶ」アンケート結果

設問		[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
F 検定	分散比	1.3337	1.0033	1.1165	1.2570	1.1696
	P(F≦f) (両側)	0.0612	0.9766	0.4819	0.1161	0.4316
	分散の検定結果	等分散	等分散	等分散	等分散	等分散
t 検定	t 値	-0.1982	1.2965	1.2045	-0.9875	0.2605
	P(T≦t) (両側)	0.8653	0.1770	0.1798	0.5484	0.6633
	平均の検定結果	有意差無	有意差無	有意差無	有意差無	有意差無

表 10．平成 29 年度入学生に対する検定結果

(a)　「おかやまボランティア論」アンケート結果

設問		[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
F 検定	分散比	1.0966	1.2086	1.0484	1.0642	1.1032
	P(F≦f) (両側)	0.5721	0.2324	0.7859	0.7118	0.5458
	分散の検定結果	等分散	等分散	等分散	等分散	等分散
t 検定	t 値	1.8217	1.9715	1.2679	3.0009	2.2905
	P(T≦t) (両側)	0.0700	0.0500	0.2068	0.0029	0.0229
	平均の検定結果	有意差無	有意差有	有意差無	有意差有	有意差有

(b)　「おかやまを学ぶ」アンケート結果

設問		[A]	[B]	[C]	[D]	[E]
F 検定	分散比	1.1535	1.0996	1.1701	1.0469	1.0104
	P(F≦f) (両側)	0.3639	0.5373	0.3197	0.7493	0.9852
	分散の検定結果	等分散	等分散	等分散	等分散	等分散
t 検定	t 値	1.0331	1.2941	1.2832	1.7861	1.3803
	P(T≦t) (両側)	0.3039	0.1980	0.2018	0.0759	0.1698
	平均の検定結果	有意差無	有意差無	有意差無	有意差無	有意差無

これら 2 年間の結果より，「おかやまボランティア演習」履修前の「おかやまボランティア論」時点においては，設問[D]（課題解決への意欲），[E]（社会活動への参画意欲）において，「おかやまボランティア演習」履修予定者に有意性がみられた．しかしながら，「お

かやまボランティア演習」履修後の「おかやまを学ぶ」の結果では，有意性が見られなくなっている．図 7 に示す結果（設問ごとの変移）と合わせて考えると，「おかやまボランティア演習」履修者の群では，フィールドワークに出る前は，意欲を持っていたが，フィールドワークの実践により，認識の甘さを実感し，フィールドワーク後のアンケートではプラスの回答をすることができなかった（平成 28 年度入学生では，むしろ低下した）と考えられる．

1-5 正課外での活動

副専攻「岡山創生学」の授業科目以外（正課外）においても，表 11 に示す課外活動を学生が実践している．

表 11. 正課外における地域活動

No.	期間	活動地区	概要	学生数（学科）
1	4 月 15 日	笠岡市白石島	砂浜の清掃	40 名（人間情報工学科）
2	5 月 28 日	笠岡市北木島	島の大運動会でのボランティア	18 名（看護学科，人間情報工学科）
3	6 月 23 日	地域創生コモンズそうじゃ	県大生×総社市若手職員クロストーク	5 名（栄養学科）
4	6 月 27 日	岡山県立大安寺中学校	交流授業	3 名（保健福祉学科，人間情報工学科）
5	7 月 1 日	高梁川河口・県立大学	高梁川ワークショップ	4 名（保健福祉学科）
6	8 月 26 日	地域創生コモンズそうじゃ	コモンズ公開講座（親子プログラミング教室）	6 名（情報系工学研究科）
7	10 月 9 日	真庭市社	大祭神輿担ぎボランティア	7 名（保健福祉学科・情報通信工学科・情報システム工学科）
8	10 月 7 日～9 日	イオンモール倉敷	マスキングテープ de あそぼ	15 名（造形デザイン学科）
9	10 月 31 日	地域創生コモンズそうじゃ	県大生×総社市若手職員クロストーク	7 名（保健福祉学科・人間情報工学科）
10	11 月 5 日	笠岡市保健センター	笠岡市健康まつりでの健康・身体計測	2 名（情報系工学研究科）
11	11 月 9 日	地域創生コモンズそうじゃ	コモンズ公開講座（おかやま健康応援プロジェクト）	4 名（スポーツシステム工学科）
12	11 月 18 日	地域創生コモンズびぜん	コモンズ公開講座（認知症講座）	3 名（保健福祉学科）
13	11 月 18 日	地域創生コモンズそうじゃ	コモンズ子育て支援プロジェクト	6 名（保健福祉学科）
14	11 月 25 日	笠岡市大島	地域協働演習と連動した域学連携事業	6 名（情報通信工学科・人間情報工学科）
15	12 月 14 日	備前市日生	コモンズ子育て支援プロジェクト	7 名（保健福祉学科）
16	12 月 17 日	真庭市勝山	コモンズ子育て支援プロジェクト	6 名（保健福祉学科）

17	10 月～12 月	真庭市社	やしろ竹あかり竹灯籠プロジェクト	5 名（造形デザイン学科）
18	12 月 18 日	総社市総社	コモンズ公開講座（認知症講座）	6 名（保健福祉学科）
19	1 月 20 日	地域創生コモンズびぜん	コモンズ公開講座（子育て講座）	3 名（保健福祉学科）
20	2 月 12 日	総社市総社	コモンズ公開講座（講演：歩行と健康、運動計測）	4 名（情報系工学研究科・人間情報工学科）
21	2 月 17 日	備前市備前	コモンズ公開講座（親子プログラミング教室）	4 名（情報系工学研究科）
22	12 月～2 月	真庭市勝山	シネマニワワークショップ	1 名（造形デザイン学科）

活動の様子

1-6 教員の教育力向上に向けて

地域連携教育に対する本学教員の教育力向上を目指して，次の講演会（大学教育開発センター平成 29 年度第 3 回教育開発講座）を開催した．

題目：地域とともに作る授業科目の企画，運営，評価
講師：岡山大学地域総合研究センター
　　山田一隆 准教授
日時：平成 30 年 1 月 26 日（金）
　　14:30～16:30
会場：学部共通棟（北）8105 講義室
対象：本学教職員及び学部大学院学生
概要：岡山大学では，2016 年度より，「実践型社会連携教育プログラム」の全学的展開に取り組んでいる．サービス・ラーニングやコミュニティ・ベースド・ラーニングの概念や方法を取り入れ，地域や社会の現場で学ぶ科目の開発と実施を進めてきた経験から，科目の準備から評価までの現状と具体的な工夫を紹介し，組織，制度化への課題とあり方を展望する．

講演会の様子

第 4 クォーターの授業期間内ではあったが，41 名（教員 36 名，職員 5 名）の参加があった．講演後に，参加者に実施したアンケートでは 26 名から回答があり（回答率 63%），以下の結果であった．

・テーマ・内容について
　　満足：50%　　どちらかというと満足：35%　　（肯定的 85%）
・自分に必要な情報，知識を得ることができたか
　　そう思う：27%　そちらかというとそう思う：54%　（肯定的 81%）
・全体を通して有用であった
　　そう思う：27%　そちらかというとそう思う：50%　（肯定的 77%）
・今回得た知識や方法を自分の活動で活用したい
　　そう思う：15%　そちらかというとそう思う：54%　（肯定的 69%）

1-7 まとめと課題

今年度は，平成 27 年度に選定された COC+事業「地域で学び地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」に基づいて設置された副専攻「岡山創生学」の第 2 年度であった．1 年次対象の 3 科目（「おかやまボランティア論」，「おかやまボランティア演習」，「おかやまを学ぶ」），2 年次対象の 2 科目（「地域再生実践論」，「地域協働演習」）を開講した．昨年度から 2 度目の開講となった 1 年次対象科目では，

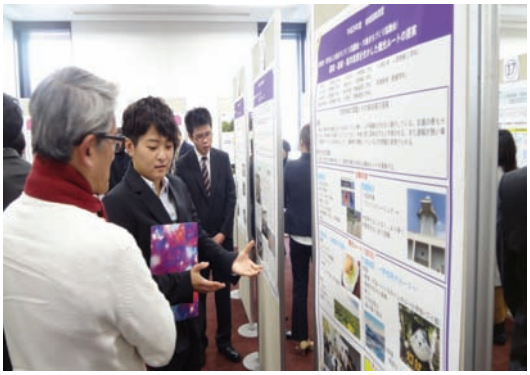
- アクティブ・ラーニングの強化（「おかやまボランティア論」，「おかやまを学ぶ」），
- 活動日誌などの文書整備（「おかやまボランティア演習」），
- 事後学習におけるワールドカフェ形式の導入（「おかやまボランティア演習」），

などの改善を行い，必ずしも十分ではないものの，昨年度より高い学修効果を得ることができた．初めての開講となった 2 年次対象科目では，

- 「地域協働演習」での活動先を意識した外部講師の選定（「地域再生実践論」），
- アクティブ・ラーニングの積極的な導入（「地域再生実践論」），
- 活動日誌などの文書整備（「地域協働演習」），

などを意識した授業設計を行った．

今年度における副専攻「岡山創生学」の学修成果として，2 月 21 日（水）に開催された「おかやま COC+シンポジウム 2018」において，「地域協働演習」履修学生がパネリストとして登壇，ポスター発表をするまでに成長することできた．また，来年度 5 月 29 日（予定）に本学で開催される「OPU フォーラム 2018」においても，「地域協働演習」履修学生は，副専攻「岡山創生学」の 2 年間の学をポスター発表することとしている．



「おかやま COC＋シンポジウム 2018」にて登壇，ポスター発表

加えて，平成 30 年度から新規に開講される副専攻「岡山創生学」授業科目 2 科目に関する準備状況は次のようになっている．

(1) 自治体において 4 週間の長期インターンシップを行う「地域インターンシップ」に関しては，受入先となる連携自治体と具体的な協議を行うとともに，総社市では，現在，開講されている「インターンシップ」(2 単位) 履修者 2 名が，試験的に先行実施を行った．
(2) 民間企業において 4 週間の長期インターンシップを行う「エンジニアリング演習」に関しては，今年度内に設立予定の「岡山県立大学協力会（仮称)」参画予定の県内企業を中心に約 50 社からの協力が得られている．

また，6 月には，ジェネリックスキル（リテラシー及びコンピテンシー）を定量的に評価する PROG テストを全 1 年次生（平成 29 年度入学生）が受験した．2 年後の平成 30 年度に再び PROG テストを平成 29 年度入学生全員が受験できる機会を設け，副専攻「岡山創生学」による学修効果を測定することとしている．来年度は，昨年度の副専攻「岡山創生学」1 期生（平成 28 年度入学生）が 3 年次生となるため，PROG テストを 3 年次生全員に受験させ，副専攻「岡山創生学」の学修効果を測定することとしている．なお，昨年度に一部の学科で 3 年次生を対象とする PROG テストの結果は，COC+事業において開発を進めている「雇用マッチングシステム」のための学生ポートレート用データとして供与され，企業ポートフォリオとのマッチングの試験運用に利用された．

昨年度からの副専攻「岡山創生学」2 年間の実施，成果を踏まえ，平成 30 年度に向けた課題として，例えば，以下のものが挙げられる．

(1) 1 年次対象科目「おかやまボランティア論」,「おかやまボランティア演習」,「おかやまを学ぶ」の連携を強め，副専攻「岡山創生学」の教育方針により即した授業内容を検討する．
(2) 2 年次生対象の「地域再生実践論」,「地域協働演習」の学修成果を分析し，共通教育科目としての副専攻「岡山創生学」にける位置付けを，より明確にする．
(3) 3 年次生対象として平成 30 年度に開講される「地域インターンシップ」など，自治体，県内企業における長期インターンシップを含む授業科目を適切に設計するためには，域学連携 WG,産学連携 WG との協働が必須であり,今まで以上に密な連携が求められる．
(4) 各授業科目及び副専攻「岡山創生学」を通した評価方法を確立させる必要がある．
(5) 副専攻「岡山創生学」授業科目及び正課外活動を通じた学生のキャリア形成，社会人基礎力・学士力を涵養する学内教育システムを構築しなければならない．

一方において，学生が主体となって結成されたボランティア団体には，「おかやまボランティア演習」を受講した 1 年次生，「地域協働演習」を受講した 2 年次生，ボランティアに興味を示す学生が参加しており，地域連携教育に対する教育改革の効果が出ている．今後

は，これまでの実績に基づき，地域社会と学生ボランティア団体との繋がりを強化し，これらをコーディネートする組織の設置，システム化を進めていくことが必要となる．

第３章　教育活動と成果（研究科）

1 大学院における教育活動

1-1 概要

本学大学院では,各研究科・専攻で設定するディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき,より高度な専門性を備え,社会進出にあたって指導的な立場に立つことのできる人材や研究者の育成を目指している.以上を基本として,少子高齢化やグローバル化さらには地方創生の観点から地域連携の視点に基づいて,専門分野の知識・スキルを活かして課題解決を図ることのできる人材育成のため,各研究科において,従来の高度な専門教育に加えて教育プログラムの多様化や授業内容及び研究指導法の工夫改善に取組んでいる.

以上の取組を実社会において活かせるようマネジメントの視点から総合学習し，かつアクティブ・ラーニングにより主体的な学習態度を形成するため，試行を経て今年度から授業科目「プロジェクトマネジメント実践論」(英語使用) を研究科共通科目として開講した.

1-2　保健福祉学研究科

1-2-1　概要

保健福祉学研究科では，少子高齢化やグローバル化に対応して，専門分野の視点から課題解決を図ることのできる人材育成のため，研究科において,教育プログラムや授業内容及び研究指導法の工夫改善に取組み，平成 29 年度計画において，研究科のポリシーについても改訂作業を行った.

1-2-2　博士前期課程

1-2-2-1 看護学専攻

⑴グローバル教育

今年度は,「国際保健看護論演習」の履修がなかったので，ネパールに出向いて行われる演習は実施されなかった．ネパールにおける演習は，発展途上国での保健活動について学ぶ良い機会であるため，来年度は履修を勧めていく.

国際学会に 5 名（12th Asia Pacific Hospice Conference に 3 名，21th East Asian Forum of Nursing Scholars に 2 名）参加した．1 名が口頭発表，4 名がポスター発表し，国外の研究者と交流をもった．また，海外（オーストラリア，香港）での研究調査に 4 名が参加し，国外の研究者と交流をもつとともに海外調査について学ぶことができた.

また，香港理工大学での短期研修（9 月）に大学院生 3 名が参加し，香港での医療及び文化について学んだ.

⑵地域連携教育

保健師教育課程では，1 年生を対象とした「公衆衛生看護診断論」「公衆衛生看護診断論演習」において，総社市東部北地域包括支援センターとの共催で，認知症カフェ（カフェ🔥より～れ）の企画・運営（隔月開催，年 6 回）を行った.

基本的な講義とガイダンスの後，毎回，包括 3 職種・教員・院生と，1 週間前に打ち合わせし，当日の運営にあたる．この間に，院生は既存資料分析と並行して地区踏査を行い，その成果は第 2 回岡山県地域包括ケアシステム学会学術集会でポスター発表(笹尾他,2017)

した．開催回によっては，ゼミとして大学院 2 年生や学部 4 年生，実習生 1 名の参加や報道関係者の取材もあった．

2017 年 4 月～10 月の 4 回までの成果は岡山県保健福祉学会で報告（親他，2017）した．

さらに，12 月までの 5 回分の既存資料と院生の記録から，保健師教育における卒業時到達度及びミニマム・リクワイアメンツから，アセスメント力と当事者グループ支援能力の修得を確認し，状況的学習論における正統的周辺参加の視角から，院生はその都度生起する役割を通じて知識の再構成やアイデンティティ等を含む「成員性」を身につけていくプロセスを明らかにした（投稿中）．6 回目の分析が残されてはいるものの，認知症カフェプログラムは，カリキュラムとして妥当であり，次年度以降の屋根瓦方式教育の可能性が示唆された．

また，平成 30 年２月 1 日に学部生，大学院生を対象に看護師，薬剤師，管理栄養士を講師として迎えて「在宅医療における多職種連携について」のシンポジウムを開催し，現場における専門職としての役割や多職種連携の重要性など学生の地域思考の醸成に努めた．

事前打ち合わせ会議

４月体操

カフェ案内チラシ

1-2-2-2　栄養学専攻

(1)グローバル教育

栄養学科では，中韓の学術交流協定校である南昌大学（中国）、四川大学（中国）、又松大学（韓国）と共に，食品科学に関する情報を交換する「東アジア栄養学会議」を持ち回りで開催している．今年度は，第 11 回に当たる会議が中国南昌大学で実施され，本学からは教員３名，大学院博士後期課程学生１名，大学院博士前期課程学生２名の計６名が参加した。会議では，講演（教員２名）またはポスター（教員１名、博士前期課程学生２名）による研究成果発表を英語でおこない，活発な議論を通じて他国の研究者との交流を深めた．

また平成 30 年 1 月 26 日に、ニュージーランドの Massey 大学から Jasmine Thomson 博士を招聘し，「Introduction to Nutrition Research at Massey University: Body Composition」というタイトルで，英語による特別講演を行った．教員 11 名，博士後期課程学生 3 名，博士前期課程学生 7 名，学部学生 24 名が聴講し，講演後は意見交換の場を設け，外国語の習得，講演内容についての議論や研究交流を深めた．

(2)地域連携教育

行政職員との意見交換会を実施したり，平成 30 年２月 1 日に学部生，大学院生を対象に看護師，薬剤師，管理栄養士を講師として迎えて「在宅医療における多職種連携について」のシンポジウムを開催し，現場における専門職としての役割や多職種連携の重要性など学生の地域思考の醸成に努めた．

1-2-2-3　保健福祉学専攻

(1)グローバル教育

平成 29 年 9 月 19 日に，スウェーデン農業科学大学のパトリック・グラン教授を招聘し，

うつ病の失業者を対象にした，自然を利用したセラピーとその効果に関する講義を開講した.2名の院生が聴講し，先進的なスウェーデンのプログラムについて学ぶことができた.

(2)地域連携教育

2名の院生が，総社市の困窮世帯の小学生，中学生，高校生を対象にした学習支援，体験活動プログラムを実施し，地域の子どもたちが抱える課題と地域における課題解決方法について学ぶことができた.

1-2-3　博士後期課程

1-2-3-1　看護学大講座

海外特別入学試験に合格したネパール・トリブバン大学からの留学生 1 名（指導教員：井上幸子准教授）を，平成30年度より看護学大講座に受け入れる予定である.

国際学会（International Nursing Research Conference）に1名が参加し，研究について知見を深めるとともに、国外の研究者と交流した.

1-2-3-2　栄養学大講座

平成30年1月26日にニュージーランドのMassey大学からJasmine Thomson博士を招聘し，「Introduction to Nutrition Research at Massey University: Body Composition」というタイトルで，英語による特別講演を行った．教員11名，博士後期課程学生3名，博士前期課程学生7名，学部学生24名が聴講し，講演後は意見交換の場を設け，外国語の習得，講演内容についての議論や研究交流を深めた.

1-2-3-3　保健福祉学大講座

平成29年9月19日に，スウェーデン農業科学大学のパトリック・グラン教授を招聘し，うつ病の失業者を対象にした，自然を利用したセラピーとその効果に関する講義を開講した.1名の院生が聴講し，先進的なスウェーデンのプログラムについて学ぶことができた.

1-2-4　まとめと課題

栄養学大講座では学術交流協定校であるインドネシアのハサヌディン大学から1名の留学生，さらに学術交流協定校である中国の南昌大学から栄養学大講座と栄養学専攻にそれぞれ 1 名ずつ留学生を受け入れ，交流を深めている．さらに看護学大講座では学術交流協定校であるネパールのトリブバン大学から留学生 1 名（指導教員：井上幸子准教授）を，平成30年度より看護学大講座に受け入れる予定である．今後は交流のさらなる質的充実を目指し，国際的な共同研究ならびにグローバル教育への活用を進めていく必要がある．一方，平成30年度は保健福祉学専攻で入学者が定員を下回っており，今後は本学学生や社会人に本学教員の研究内容をわかりやすく伝えるなど，地道な広報活動を続けることも必要である.

1-3　情報系工学研究科

1-3-1　概要

情報系工学研究科では，急速に発展する環境の変化に対応するために，既存の教育研究分野にとらわれず幅広い視野を持ち，それぞれの研究内容のみならず融合型研究を深化させるための取組を行っている.

1-3-2　博士前期課程

1-3-2-1　学生指導体制

平成 25 年度に，情報工学部 3 学科に積み上げた 3 専攻（電子情報通信工学専攻，機械情報システム工学専攻，人間情報システム工学専攻）から 1 専攻に改組し，専攻内に 5 領域（情報工学領域，電子通信工学領域，ヒューマン・ロボティクス領域，機械プロセス・エネルギー工学領域，人間情報工学領域）を設けた．平成 24 年度以前の 3 専攻体制では，学生が所属する専攻を超えた授業科目を履修することは，専攻共通に開講される授業科目以外では，ほとんど見られなかった．しかしながら，1 専攻化により，従前の専攻の枠を超えた授業科目の履修が，特に情報工学系の授業科目で活発になり，また，領域が細分化された関係で，多くの学生が領域を超えた授業科目を履修している．表 1 に，3 専攻最後となった平成 24 年度入学生に対する授業科目（選択科目）を平成 25 年度以降の 5 領域に対応するよう分類し，平成 24 年度入学生がどの領域の授業科目に対して単位を取得しているかに関する分布を示す．表 1 において，太字斜体で示される数値は，学生の所属領域外の授業科目で単位を取得していることを表している．同様に，平成 27 年度入学生に対する選択科目の単位取得分布を表 2 に示す．表 1 と表 2 を比較することにより，1 専攻化によって，学生は所属領域以外の授業科目を履修する行動をとっていることが顕著となっている．

表１．平成 24 年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
（3 専攻の授業科目を平成 27 年度の 5 領域に分類）
（太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す）

学生の所属領域		取得単位数の分布（%）								合計
		情報			電子	ヒュ	機械	人間	共通	
		電子	機械	人間						
情報	電子	34.1			53.7				12.2	100.0
	機械		42.3		***1.6***	23.6	19.5		13.0	100.0
	人間									100.0
電子通信		22.5	***2.0***		66.5				9.0	100.0
ヒューマン･ロボ			30.1		***2.7***	31.5	19.2	***4.1***	12.3	100.0
機械・エネ			30.0		***0.9***	15.0	38.8	***5.3***	10.1	100.0
人間情報（注）			3.6		***30.6***	***9.0***	***7.2***	39.6	9.9	100.0

（注）人間情報システム工学専攻学生 5 名中 2 名は情報通信工学科卒業生のため，電子情報通信工学専攻科目を数多く履修している．

表２．平成 27 年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
（太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す）

学生の所属領域		取得単位数の分布（%）								合計
		情報			電子	ヒュ	機械	人間	共通	
		電子	機械	人間						
情報	電子	20.4	***27.2***		42.7	***3.9***			5.8	100.0
	機械	***5.8***	46.7	***9.5***	***4.4***	14.6	10.9	***0.7***	7.3	100.0
	人間		***20.0***	10.0	***20.0***	***20.0***		20.0	10.0	100.0
電子通信		11.0	***15.0***		67.8	***0.5***	***2.8***		3.0	100.0

ヒューマン･ロボ	*2.9*	24.6	*4.3*	*1.4*	33.3	13.0	*17.4*	2.9	100.0
機械・エネ		27.8	*2.6*	*5.3*	17.2	37.1		9.9	100.0
人間情報				*9.2*	*8.1*	*8.1*	70.5	4.0	100.0

しかしながら，情報工学部卒業生の約半数が，システム工学（博士前期課程）に進学しており，また，学外から本専攻に入学する学生が少ない現状において，学士課程教育との連続性を十分に考慮した教育プログラムとする必要がある．この観点において，情報工学系の授業科目が単一領域に集約された点は，学生の履修行動に柔軟性を与えたことになり評価することができる．一方で，情報システム工学科教員の所属領域が情報工学領域，ヒューマン・ロボティクス領域，機械プロセス・エネルギー工学領域に 3 分割されている点，人間情報工学科所属教員の授業科目が人間情報工学領域以外の領域に配置されている点などにおいて，学士課程教育との連続性が，必ずしも明快ではなかった．このため，学生の履修行動などに基づいて，カリキュラム改善の PDCA サイクルを運用する際に，適切な評価をすることが困難となっていることは否めない．また，学生の研究指導，修士論文作成指導に際しても，領域内での議論を十分に尽くすことができない状況となっていることが散見されている．

これを改善するため,平成 27 年度において,博士前期課程における領域の再編を検討し，平成 28 年度入学生からは 1 専攻 3 領域（電子情報通信工学領域，機械情報システム工学領域，人間情報システム工学専攻）とすることとした．この再編により，各領域における教育体制が，情報工学部 3 学科の学士課程教育との連続性を担保すると同時に，1 専攻の利点を生かしつつ，他領域の学問分野との交流（授業科目の履修，異なる視点からの研究指導）が従来以上に活発になるような学生指導体制を整備した．3 領域に再編した直後の入学生となる平成 28 年度入学生の履修状況を表 3 に示す．表 3 では，各領域の所属学生および授業科目を，「情報系」と「その他」に区別し，学生の単位履修状況分布が表されている．

表３．平成 28 年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
（太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す）

学生の所属領域		取得単位数の分布（%）							合計
		電子情報		機械情報		人間情報		共通	
		情報系	その他	情報系	その他	情報系	その他		
電子情報	情報系	30.0	70.0						100.0
	その他	13.3	74.7	*6.0*	*6.0*				100.0
機械情報	情報系	*11.5*	*11.5*	38.5	17.3	*11.5*		9.6	100.0
	その他	*1.7*	*5.9*	27.6	53.6	*5.0*	*1.3*	5.0	100.0
人間情報	情報系				*40.0*	20.0	30.0	10.0	100.0
	その他				*11.8*	25.8	61.3	1.1	100.0
開講単位数		9.8	26.1	10.9	26.1	8.7	15.1	3.3	100.0

表４．平成 29 年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
（太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す）

学生の所属領域	取得単位数の分布（%）				合計
	電子情報	機械情報	人間情報	共通	

		情報系	その他	情報系	その他	情報系	その他		
電子情報	情報系	24.4	24.4	***29.3***	***7.3***	***7.3***	***2.4***	4.9	100.0
	その他	14.4	53.6	***11.1***	***1.3***	***1.3***	***0.7***	17.6	100.0
機械情報	情報系	***20.0***	***45.0***	15.0	20.0				100.0
	その他	***0.9***	***8.7***	20.9	52.2	3.5		13.9	100.0
人間情報	情報系	***3.2***		***9.7***	***19.4***	19.4	38.7	9.7	100.0
	その他			***5.3***	***11.5***	15.0	60.2	8.0	100.0
開講単位数		8.2	24.8	10.3	24.8	8.2	16.5	7.2	100.0

表１に示す 3 専攻最後となる平成 24 年度入学生では，専攻を越えた単位取得が非常に低調であった．しかし，表３に示す１専攻３領域となった平成 28 年度入学生からは，機械情報システム工学領域の学生を筆頭に，領域を越えた単位取得が活発に行われるようになった．表４に示す平成 29 年度入学生では電子情報工学領域および人間情報工学領域の学生にもその傾向は広がりを見せている．すなわち，表３および表４より，学生は，所属領域の授業科目を中心として他領域への履修を行うようになり，表２に示す１専攻５領域での漫然とした履修行動が解消されていることも明らかである．

さらに，大学教育開発センターが，9 月 19 日(火)～22 日(金)に 3 研究科共通講義として学内で開催された「プロジェクトマネジメント実践論」に 17 名の 1 年次生が参加し，他研究科の大学院生とのグループワーク等を通じて自己のキャリアアップにつなげることができた．

1-3-2-2　連携大学院

情報系工学研究科では，岡山県内の公共機関及び企業と連携大学院協定を締結し，学外の研究者による研究指導を受けることができる体制を整えている．平成 29 年度はオーエム産業（株）表面処理研究所と連携大学院協定を締結し，1 名の大学院生が研究の一部を遂行した．また，1 名の大学院学生が岡山県工業技術センターで研究の一部を遂行した．

1-3-2-3　学外活動

従来より，学生に対しては，研究成果の学外口頭発表，論文投稿を奨励するのみでなく，他大学大学院生との交流，各種コンテストへの参加を推奨している．平成 29 年度では，以下のように集約することができる．

(1) 情報工学部は，文部科学省「情報技術人材育成のための実践教育ネットワーク形成事業」に大阪大学を中心として選定された「分野・地域を越えた実践的情報教育協働ネットワーク（enPiT)」に引き続き，昨年度からスタートした「成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成事業」(第二期 enPiT) において，組込みシステム分野 (enPiT Emb：名古屋大学事業・組込みシステム産業の成長を支える人材育成の拠点形成 (QuadPro)) では連携校として，また，ビジネスシステムデザイン分野 (enPiT BizSysD：愛媛大学 PBL) では参加大学として参画している．組込みシステム分野では，学部 3 年次生 4 名が QuadPro 教材を用いた PBL 演習を受講しており，修了認定を受けている．また，名古屋大学で開催されたスプリングスクールには学部 3 年次生 4 名と教員 2 名が参加して，Arduino を題材としたマイコン実装演習に携わるとともに，PBL 演習の成果発表を行った．さらに，参加大学である徳島文理大学の教員 1 名と学生 3 名を本学に迎えてのサマースクールにおいて，FPGA ボードを用いた回路設計の演習を行った．一方，ビジネスシステムデザイン分野では，平成 27 年度および平成 28 年度に引き続

き，博士前期課程学生計 5 名が学部 4 年次生 5 名，教員 5 名と共に，愛媛大学で開催された「enPiT BizSysD PBL@EHIME」に参加し，GPS を利用した Android アプリケーション製作に携わった．

(2) 各種の学外コンテストに博士前期課程学生が参加した．学生マイクロ波回路設計コンテスト（主催：電子情報通信学会）では 1 チーム（3 名）が 3 位を受賞した．また，第 20 回舗装技術に関する懸賞論文（主催：日本道路建設協会）では 1 名が佳作を受賞した．

1-3-3 博士後期課程

1-3-3-1 学生指導体制

博士後期課程は，従来より 1 専攻として，電子情報通信工学大講座，機械情報システム大講座，人間情報システム工学大講座の 3 大講座での指導体制をとってきた．しかしながら，博士前期課程の 1 専攻化により，講座制から領域制への転換を図り，前述のとおり，領域制の利点を生かした柔軟な指導体制を整備したことを受け，博士後期課程においても大講座制から領域制への転換を平成 27 年度に検討し，平成 28 年度入学生より，3 領域制による学生指導体制とした．併せて，情報技術を多様な分野に展開できる人材育成を推進するため，従来の主指導・副指導教員に加えて，主指導教員とは専門分野の異なる教員を指導体制に加えることができる研究アドバイザー制度を導入した．平成 29 年度は，8 名の大学院学生に対して研究アドバイザーを割り当てた．また，社会人が学びやすい環境を整えることを目指し，平成 27 年度には早期修了要件を明確に定め、平成 28 年度入学生より修了要件を 12 単位に引き下げた．さらに，留学生及び社会人を対象とした秋入学制度を導入した．

1-3-4 まとめと課題

平成 25 年度の博士前期課程 1 専攻化により達成された幅広い視野を持ち融合型研究を深化させる特徴を維持しつつ，学部教育で実現された 3 学科の特色を大学院教育に引き継ぐため，平成 28 年度から博士前期課程を 3 領域（電子情報通信工学領域，機械情報システム工学領域，人間情報システム工学領域）に再編した．その結果，所属領域の授業科目を中心として他領域への履修を行うようになり，院生の履修行動の改善が確認された．

博士後期課程については，情報技術を多様な分野に展開できる人材育成を推し進めるため，平成 28 年度より，3 大講座を 3 領域に改め専門分野間の垣根を低くすると共に，専門分野以外の教員を指導体制に加える研究アドバイザー制度を導入している．平成 29 年度は，8 名の大学院学生に対して研究アドバイザーを配置し，異なる分野の観点から助言を行った．

1-4 デザイン学研究科

1-4-1 概要

志願者数の減少に伴い，研究科全体での教育活動の成果は十分とは言えないが，大学院在籍中にフィンランド・ラハティ応用科学大学や米国ポートランド州立大学など海外の大学でのスタディツアーに積極的に参加するなど，グローバルな視点での教育成果が見られた．また，地域連携活動の一貫として，笠岡市や真庭市などでの官学協働事業に参加し，地域連携での教育成果に結びつけた．

1-4-2 修士課程

デザイン工学専攻では，研究の社会的ニーズの確保というという視点から，都市整備に

関する学外の専門家（岡山大学研究員・元岡山市職員）を学位論文の審査委員として招き，教育の質向上に取り組んだ．また教育面での外部評価を得るため，2 名の学生が 2 件の国際デザインコンテストに応募し，1 名の学生が 5 件の建築デザインコンペティションに案を応募したが，具体的な成果には結びついていない．

造形デザイン学専攻では，研究の社会的ニーズの確保というという視点から，総社市や岡山市など地域の行政や団体などと協働したプロジェクトを修士研究に導入するなど，教育成果向上に取り組んだ．

・岡山市；ポスターの誘目性に関する研究- 空間を構成するポスター-の活用法/
　岡山観光ポスター　大木みゆき
・総社市；若者の充実した旅行支援のための地域発作品の活用/周遊型謎解きゲーム
　『解決！くるっとそうじゃ』松元真菜

デザイン学研究科では，院生を学部専門科目を中心に TA として雇用するなどして，学部生の教育力向上に取り組んだ．

・フレッシュマンセミナー
・エルゴノミクス
・エルゴノミクス演習
・タイポグラフィ II
・メディアコミュニケーション
・平面構成演習 II
・造形デザイン領域演習 IIIc
・基礎造形 III
・ビジュアルデザイン領域演習 I
・造形デザイン領域演習 I
・造形デザイン領域演習 IIb

さらに修士研究予備審査の本格施行にあたり，質の評価につながるルーブリック評価を指導計画に事前に組み込み，研究の状況を正確に把握するなど，研究の質向上に繋げた．また，最終試験終了後に教員からの意見聴取（アンケート）を行い，次年度実施へ繋げる取り組みを行った．

1-4-3 まとめと課題

デザイン学研究科では，オープンキャンパス及び OPU フォーラム 2017，学内解放等のイベントにおいて，研究科紹介ブースを設置し，学生作品の展示や相談コーナーを設けて学生募集活動を．またフレッシュマンセミナーでは，院生を講師として講義を実施し，大学院進学の動機付けとなる

2 大学院における研究活動と国際交流

2-1 概要

本学大学院では,研究科学生において社会進出する際に必要とされる高度な専門性を備えた職業人あるいは研究者として活躍できるよう,教員による研究指導の過程において,関係する学会での研究発表や論文投稿を奨励している.その範囲は国内,国際を問わず多岐にわたっており,学会における受賞等の実績を積み上げている．全国的に厳しさを増しつつある学生募集の観点からは，これらの取組が学生のモチベーション高揚及びキャリア形成の

ためのものであることについて,一層の周知，件数増が図られるべき活動であるといえる.

また本学大学院では,各研究科のディプロマ・ポリシーにおいてグローバル人材の育成を掲げている.国際会議での研究発表等のほか,学術交流協定を締結した大学との交流について従来の締結校との交流に加えて,締結校の増加に伴う交流準備活動に教員・学生共々参加している．以上の活動の実質化を推進することにより，ディプロマ・ポリシーの十全な達成に向けて,今後さらに取組の拡充が期待されるところである.そのためにも，一部研究科で少数ではあるが実績のある留学生の受入のより一層の推進や，交流を足がかりとした本学研究科学生の海外留学等によるグローバル化が今後求められる.

2-2　保健福祉学研究科

2-2-1　看護学専攻

2-2-1-1　学会発表

(1)国内学会

1．A 県の看護師の労働環境に関する意識調査（指導教員：名越恵美）吉田 雄太，加藤 慎太郎，山口 三重子，名越 恵美，高橋 幸子：第 37 回日本看護科学学会学術集会、仙台，2017 年 12 月 16 日-17 日，ポスター発表

2．倫理的ジレンマに直面した際の倫理的意思決定過程に関する研究-がん領域の認定看護師に焦点を当てて-（指導教員：名越恵美）小山直夏，名越恵美：第 37 回日本看護科学学会学術集会，仙台，2017 年 12 月 16 日-17 日，ポスター発表

3．市町村保健師と訪問看護師間における連携に抱く困難感と望む連携内容（指導教員：佐々木純子）大内山清香，佐々木純子：第 76 回日本公衆衛生学会総会、鹿児島，2017 年 10 月 31 日-11 月 2 日，ポスター発表

4．発達障害児支援における養護教諭と保健師の協働に関する研究（指導教員：二宮一枝）河田恵子，二宮一枝：日本地域看護学会第 20 回学術集会，大分，2017 年 08 月 5-6 日，ポスター発表

5．保健師の平常時からの災害時要援護者支援と現任教育との関連（指導教員：二宮一枝）石井美帆，二宮一枝：第 76 回日本公衆衛生学会総会，鹿児島，2017 年 10 月 31 日-11 月 2 日，ポスター発表

6．療育機関を利用する幼児の母親の専門家に対する被援助不安と援助要請行動との関連（指導教員：二宮一枝）藤田彩見，矢島祐樹，二宮一枝：第 76 回日本公衆衛生学会総会，鹿児島，2017 年 10 月 31 日-11 月 2 日，ポスター発表

7．保健師の関係形成能力と地域ＤＯＴＳ脱落中断との関連（指導教員：二宮一枝）玉木利矢子，二宮一枝：第 6 回 日本公衆衛生看護学会学術集会，大阪，2018 年 1 月 6-7 日，ポスター発表

8．早島町の自主的な介護予防活動～住民の自主的な体操継続に向けて～（指導教員：二宮一枝）萬木早苗・石井美帆，二宮一枝，福原弘子，野畑久美子：第 2 回岡山県地域包括ケアシステム学会学術大会，岡山，2017 年 10 月 1 日，ポスター発表

9．専門職と住民から見た日常生活圏域～認知症の方も地域で安心して暮らすために（指導教員：二宮一枝）笹尾友香，中田弥沙，中村友樹，二宮一枝：第 2 回岡山県地域包括ケアシステム学会学術大会，岡山，2017 年 10 月 1 日，ポスター発表

10．糖尿病患者の健康回復に関するコミットメントとライフスタイルの関係（指導教員：住吉和子）佐田佳子：第 22 回日本糖尿病教育・看護学学術集会，福岡，2017 年 9 月 16-17 日，ポスター発表

11．介護老人保健施設における看護職者の認知症ケアの質への関連要因の検討（指導教員：實金栄）中田弥沙，井上かおり，實金栄他：日本看護研究学会第 43 回学術集会，愛知，2017 年 8 月 29-30 日，ポスター発表

12. サーモグラフィを活用した表在静脈の描出に関する基礎的検討（指導教員：佐々木新介）中村友樹，佐々木新介：日本サーモロジー学会第 34 回大会，東京，2017 年 7 月 14-16 日，ポスター発表
13. 効果的な職場内健康教育方法：面接教育と Web 教育の比較（指導教員：井上幸子）岩佐浩子，松原智，井上幸子：第 76 回日本公衆衛生学会総会，鹿児島，2017 年 10 月 31 日-11 月 2 日，ポスター発表

(2) 国際学会

１．Exploring magnet hospitals: A review of the literature on nursing work environments in Japan（指導教員：名越恵美）Yuta Yoshida, Shintaro Kato, Sachiko Takahashi, Megumi Nagoshi ：21st East Asian Forum Of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences, Seoul, January, 11-12 2018, 口頭発表
２．Definition of ″One’s individuality″ based on the previous studies（指導教員：名越恵美）Yuka Terashita, Mika Okuda, Megumi Nagoshi：Asia Pacific Hospice Conference 2017, Singapore, July 26-29 2017, ポスター発表
３．Trends and future challenges of Japanese nursing studies on families of patients with liver carcinoma（指導教員：名越恵美）Mika Okuda, Megumi Nagoshi, Yuka Terashita：Asia Pacific Hospice Conference 2017, Singapore, July 26-29, 2017, ポスター発表
４．Measuring the ethical sensitivity of clinical nurses in Japan: using four clinical vignettes（指導教員：山口三重子）Misako Taguri, Natsuyo Nishimura, Chieko Yamamoto, Sachiko Takahashi and Mieko Yamaguchi：The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Hong Kong, China, March 9-10 2017, ポスター発表
５．Assessing Japanese Nursing Students’ Ethical Sensitivity for Palliative Care Cases（指導教員：山口三重子）Misako Taguri, Mieko Yamaguchi and Sachiko Takahashi：Asia Pacific Hospice Conference 2017, Singapore, July 26-29 2017, ポスター発表

2-2-1-2 論文発表

(1)国内誌

１．Effects of Postprandial Body Position on Gastrointestinal Motility, the Autonomic Nervous System and Subjective Comfort （指導教員：荻野哲也）Okano A, Masuhara S, Ota S, Motegi C, Takabayashi N, Ogino T：Acta Med Okayama. 71(6):485-491 (2017).
２．がん患者のレジリエンスに関する研究の概観　国内文献からの検討（指導教員：名越恵美）遠藤 康恵，名越 恵美：インターナショナル Nursing Care Research, 16 巻 2 号 :91-98(2017.05).
３．地域在住の精神障害者が感じる居場所感が社会参加への関心に及ぼす影響（指導教員：井上幸子）糸島弘和，井上幸子：日本精神保健看護学会誌，26(2):11-20 (2017).
４． A 県における看護労働環境に関する研究：Nursing Work Index-Revised を用いた看護師の意識調査（指導教員：名越恵美）吉田 雄太，加藤 慎太郎，山口 三重子，名越 恵美，高橋 幸子：岡山県立大学保健福祉学部紀要，第 24 巻，(印刷中)
５．病院から退院する訪問看護ステーション新規利用者への初回訪問までの訪問看護師の関わりの実態（指導教員：二宮一枝）江田純子，二宮一枝：岡山県立大学保健福祉学部紀要，第 24 巻，(印刷中)
６．介護老人保健施設における看護職者の認知症ケアの質への関連要因の検討（指導教員：實金栄）中田弥沙，井上かおり，實金栄　他：岡山県立大学保健福祉学部紀要，第 24 巻，(印刷中)

2-2-2 栄養学専攻

2-2-2-1 学会発表

(1)国内学会

1. ベジブロスにおけるタマネギとニンジンの食品間相互作用による機能性への影響,(指導教員:伊東秀之)山田直史,守田栞捺,山本紗佑里,梅田華,小橋一咲凪,加藤奈々,中村宜督,伊東秀之,日本調理科学会平成29年度大会,東京,2017年8月31-9月1日,ポスター発表
2. タカキビ(*Sorghum bicolor*)のポリフェノール成分,(指導教員:伊東秀之)渡辺紗希,我如古菜月,三尾建斗,松岡翼,伊東秀之,第71回日本栄養・食糧学会大会,那覇2017年5月19-21日,ポスター発表
3. 加熱加工処理したタカキビ(*Sorghum bicolor*)の *in vitro* 試験による抗肥満・抗糖尿病作用,(指導教員:伊東秀之)三尾建斗,松岡翼,渡辺紗希,我如古菜月,伊東秀之,第71回日本栄養・食糧学会大会,那覇,2017年5月19-21日,ポスター発表
4. 瀬戸内海沿岸海域で養殖されたマガキの脂肪酸および遊離アミノ酸含有量の季節変動,(指導教員:山下広美) 礒野千晶,近藤千尋,柾岡沙梨,丸田ひとみ,吉村征浩,伊東佳邦,花田恭孝,平澤久紀,三宅剛史,山下広美,第71回日本栄養・食糧学会大会,那覇市,2017年5月21日(日),ポスター発表
5. マガキ含有成分の機能性に関する研究,(指導教員:山下広美)礒野千晶,寺尾美貴,丸田ひとみ,三宅剛史,山下広美,第50回日本栄養・食糧学会中国四国支部大会,2017年11月11日‐12日,鳥取大学農学部(鳥取市),口頭発表
6. イチゴ品種'桃薫'のヒスチジンデカルボキシラーゼ活性阻害成分の同定,(指導教員:新田陽子)森美幸、菊崎泰枝、宇野雄一、野口裕司、小森博文、植野洋志、新田陽子日本生物高分子学会 2017年9月8,9日 立命館大学(滋賀県)口頭発表
7. 赤米ポリフェノールによる乾癬症状の軽減,(指導教員:山本登志子)戸田圭祐,津嘉山泉,北條奈々,伊東秀之,我如古菜月,川上祐生,高橋吉孝,山本登志子,第71回日本栄養・食糧学会大会,2017年5月21日,那覇市,ポスター発表
8. ジオスゲニンによるプロスタグランジンE_2合成系酵素の発現抑制とLPS刺激マウス肝臓における免疫組織化学的解析,(指導教員:山本登志子)北條奈々,目賀拓斗,戸田圭祐,川上祐生,高橋吉孝,山本登志子,第50回日本栄養・食糧学会 中国・四国支部大会,2017年11月12日,鳥取市,口頭発表
9. ウシ生乳中リポカリン型プロスタグランジンD合成酵素の精製と酵素学的性質ならびに乳房炎のバイオマーカーとしての検討,(指導教員:山本登志子)長崎祐樹,川井恵梨佳,田中充樹,戸田圭祐,川上祐生,高橋吉孝,木本眞順美,三木寿美,山本圭,村上誠,山本登志子,2017年度生命化学系学会合同年次大会,ConBio2017,平成29年12月6-9日,神戸市,口頭発表・ポスター発表
10. 赤米プロアントシアニジンによるプロスタグランジンE_2産生抑制効果,(指導教員:山本登志子)戸田圭祐,長崎祐樹,津嘉山泉,田中将夢,川井恵梨佳,我如古菜月,伊東秀之,川上祐生,高橋吉孝,三木寿美,山本圭,村上誠,山本登志子,2017年度生命化学系学会合同年次大会,ConBio2017,平成29年12月6-9日,神戸市,ポスター発表
11. マウスLPS刺激肝炎におけるジオスゲニンの炎症抑制効果,(指導教員:山本登志子)北條奈々,目賀拓斗,戸田圭祐,川上祐生,高橋吉孝,山本登志子,第52回おかやまバイオアクティブ研究会シンポジウム,平成30年1月20日,岡山市,口頭発表・ポスター発表

(2)国際学会

1. Application to foods utilizing characteristics of rice flour,(指導教員:伊東秀之)Yuri Niimi, Saki Watanabe, Natsuki Ganeko, Yoko Nitta, Mayumi Tabuchi, Shunsuke Nakanishi, Megumi Kubota, Hiromi Yamashita, Taeko Kishimoto-Shigenobu, Toshiko Yamamoto-Suzuki, Nobuyoshi Nakajima, Rikako Inoue, Yukihiro Yoshimura, Masaaki Kitagawa, Nobuyuki Okushima, Masanori Ohmori, Takashi Ishihara, Keiko Kitagawa, and Hideyuki Ito, The 11th Joint Conference on Nutrition and Food Science, Nanchang, China, 2017.12.7, ポスター発表
2. Characterization of bioactive polyphenols from hulls of *Sorghum bicolor*,(指導教員:伊東秀之)Saki Watanabe, Natsuki Ganeko, Kento Mio, Tsubasa Matsuoka, and Hideyuki Ito, The 11th Joint Conference on Nutrition and Food Science, Nanchang, 2017.12.7 ポスター発表
3. Polyphenols in hulls of *Sorghum bicolor* and their inhibitory effects on α-amylase and lipase activities,(指導教員:伊東秀之)Saki Watanabe, Natsuki Ganeko, Kento Mio, Tsubasa Matsuoka, and Hideyuki Ito, The 8th International Conference on Polyphenols and Health (ICPH2017),

Québec, Canada, 2017.10.3-6 ポスター発表

4. Mutations of anti-leukotriene C4 single-chain antibody that change the antigen binding specificity（指導教員：高橋吉孝）Yuki Kawakami, Mai Kinoshita, Yoshiko Mori, Shuji Okochi, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Mitsuaki Sugahara, Tetsuya Hori, Hiromichi Saino, Masashi Miyano, Yoshitaka Takahashi, 58th International Conference on the Bioscience of Lipids, Zurich Switzerland, 2017.9.10-14, ポスター発表
5. Inhibitory activity of strawberry cultivar 'Tokun' on recombinant human histidine decarboxylase,（指導教員：新田陽子）Miyuki Mori, Hiroe Kikuzaki, Yuichi Uno, Yusuke Noguchi, Yoko Nitta, The 8th International conference on polyphenols and health,（ICPH2017), Québec, Canada, 2017.10.3-6 ポスター発表
6. Red rice polyphenol suppresses prostaglandin E_2 synthesis and has preventive effects on psoriasis,（指導教員：山本登志子）Keisuke Toda, Yuki Nagasaki, Izumi Tsukayama, Shomu Tanaka, Erika Kawai, Natsuki Ganeko, Hideyuki Ito, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Toshiko Suzuki-Yamamoto, The 8th International Conference on Polyphenols and Health,（ICPH2017), Québec, Canada, 2017.10.3-6 ポスター発表

2-2-2-2 論文発表

(1)国際誌

1. Polyphenols from flowers of *Magnolia coco* and their anti-glycation effects,（指導教員：伊東秀之）Nana Kato, Satoko Kawabe, Natsuki Ganeko, Morio Yoshimura, Yoshiaki Amakura, and Hideyuki Ito, Biosci. Biotech. Biochem., **81**・7, 1285-1288 (2017)
2. Preventive effect of *Dioscorea japonica* on squamous cell carcinoma of mouse skin involving down-regulation of prostaglandin E_2 synthetic pathway,（指導教員：山本登志子）Izumi Tsukayama, Keisuke Toda, Yasunori Takeda, Takuto Mega, Mitsuki Tanaka, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Masumi Kimoto, Kei Yamamoto, Yoshimi Miki, Makoto Murakami, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition, in press.

2-2-3 保健福祉学専攻

2-2-3-1 学会発表

(1)国内学会

1. 失語症者における呼称課題条件と保続の発生（指導教員：中村光）山田円・中村光，第 18 回日本言語聴覚学会，島根，平成 29 年 6 月 24 日，口演発表
2. 中堅以上の介護福祉士のやりがいと人材育成―講師役割を通して―（指導教員：谷口敏代）山本まき恵・森脇あき・谷口敏代，第 15 回日本介護学会 in とやま，富山，平成 29 年 7 月 16 日，口頭発表
3. 介護福祉士養成施設におけるリフト教育の現状と課題（仮）（指導教員：谷口敏代）若林美佐子・谷口敏代，第 24 回日本介護福祉教育学会，埼玉，平成 30 年 2 月 8 日，口頭発表
4. 後期高齢期における要支援高齢者のフレイルとうつ傾向の関係（指導教員：桐野匡史），谷中則之，桐野匡史，第 4 回日本サルコペニア・フレイル学会，京都，平成 29 年 10 月 14-15 日，ポスター発表
5. 保育者のワーク・ライフ・バランスとバーンアウトの関連性に関する研究（指導教員：佐藤和順），岩切裕美，佐藤和順，柏まり，中四国教育学会，広島，平成 29 年 11 月 26 日，口頭発表
6. 介護支援専門員を対象とした社会保障制度の理解度とその関連要因―認知症者の経済支援に有用な 6 つの社会保障制度に焦点を当てて―（指導教員：竹本与志人），竹本与志人・杉山京・倉本亜優未・仲井達哉，日本社会福祉学会第 65 回秋季大会，東京，平成 29 年 10 月 22 日，ポスター発表
7. 経済的な理由により介護サービスの利用を制限する認知症高齢者の実態（指導教員：竹本与志人），倉本亜優未・竹本与志人・杉山京・仲井達哉，日本社会福祉学会第 65 回秋季大会，東京，平成 29 年 10 月 22 日，ポスター発表
8. 認知症者が必要な介護サービスの利用を制限する経済的理由-居宅介護支援事業所の介護支援専門員を対象としたインタビュー調査①（指導教員：竹本与志人），倉本亜優未・竹本与志人・杉山京・仲井達哉，第 18 回日本認知症ケア学会大会，沖縄，平成 29 年 5 月 27 日，ポスター発表
9. 認知症者が必要な介護サービスの利用を制限する経済的理由-居宅介護支援事業所の介護支援専門員を対象としたインタビュー調査②（指導教員：竹本与志人），竹本与志人・倉本亜優未・杉山京・仲井達哉，第 18 回日本認知症ケア学会大会，沖縄，平成 29 年 5 月 26 日，ポスター発表
10. パーキンソン病患者の主介護者における抑うつと介護継続困難感の関係（指導教員：竹本与志人），

仲井達哉・倉本亜優未・杉山京・竹本与志人，第 15 回日本臨床医療福祉学会，岡山，平成 29 年 9 月 2 日，口演発表

11. 嚥下調整食機能評価への嚥下音及び筋電図の応用（指導教員：中村孝文），中村孝文・田中充樹・落合優水・山本登志子，第 32 回リハ工学カンファレンス in 神戸，神戸，平成 29 年 8 月 24 日，口頭発表
12. 自然薯粉末の嚥下調整食への応用を目指した物性解析とその特性をいかしたレシピの検討（指導教員：中村孝文），津嘉山泉・山田万里花・田中充樹・戸田圭祐・木本眞須美・中村孝文・山本登志子，第 71 回日本栄養・食糧学会大会，沖縄，平成 29 年 5 月 20 日，ポスター発表
13. 嚥下音及び筋電図を用いた嚥下評価系の構築とそれを用いた自然薯粉末の嚥下調整食としての評価（指導教員：中村孝文），山本登志子・田中充樹・戸田圭祐・長崎祐樹・田中将夢・木本眞須美・中村孝文，第 71 回日本栄養・食糧学会大会，沖縄，平成 29 年 5 月 20 日，ポスター発表
14. ウシ生乳中リポカリン型プロスタグランジン D 合成酵素の精製と酵素学的性質ならびに乳房炎のバイオマーカーとしての検討（指導教員：中村孝文），長崎祐樹・川井恵梨佳・田中充樹・戸田圭祐・川上祐生・高橋吉孝・木本眞須美・三木寿美・山本圭・村上誠・山本登志子，第 90 回日本生化学会大会，兵庫，平成 29 年 12 月 8 日，口頭及びポスター

2-2-3-2 論文発表

(1)国内誌

1. 介護福祉職のワーク・エンゲイジメントに関する研究-年齢層別および経験年数層別の比較-（指導教員：谷口敏代），時實亮・米原あき・谷口敏代，介護福祉士，No,22，24-33，2017
2. 認知症対応型共同生活介護（グループホーム）における管理者のサービス評価の認識と関連要因について（指導教員：谷口敏代），米原あき・谷口敏代，日本認知症ケア学会誌，第 15 巻第 4 号，785-795，2017
3. 障害者支援施設における「不適切なケア」の因子構造（指導教員：谷口敏代），岡本健介・山本まき恵・谷口敏代，岡山県立大学保健福祉学部紀要，第 24 巻，2017（印刷中）
4. 中堅以上の介護福祉士の講師体験におけるやりがいの構造（指導教員：谷口敏代），山本まき恵・森脇あき・谷口敏代，岡山県立大学保健福祉学部紀要，第 24 巻，2017（印刷中）
5. パーキンソン病患者を対象とした家族機能と抑うつ症状の関係（指導教員：竹本与志人），倉本亜優未・仲井達哉・杉山京・竹本与志人，社会医学研究，34（2），日本社会医学会，45-5，2017

2-2-4 保健福祉科学専攻

2-2-4-1 看護学大講座

(1)学会発表

1．Development of a work motivation scale for nurses in Japan（指導教員：山口三重子）Natsuyo Nishimura, Chieko Yamamoto, Misako Taguri and Mieko Yamaguchi：International Nursing Research Conference, Bangkok, Thailand, October 20-22 2017, ポスター発表

2．子宮頸がん予防啓発冊子が子宮頸がん予防の認知および検診受診行動の変容ステージに及ぼす効果の年代比較（指導教員：岡崎愉加）中越利佳，岡﨑愉加：第 58 回日本母性衛生学会総会・学術集会，神戸，2017 年 10 月 6-7 日，ポスター発表

3．児童相談所保健師に必要な専門的能力―児童相談所所管部門と保健師統括部門の比較（指導教員：二宮一枝）石井陽子，富田早苗，二宮一枝：第 6 回 日本公衆衛生看護学会学術集会，大阪，2018 年 1 月 6-7 日，ポスター発表

(2)論文発表

1．看護師のワーク・モチベーション測定尺度の開発（指導教員：山口三重子）西村夏代、出井涼介，山本智恵子，山口三重子，中嶋和夫：社会医学研究、34(2)：27-34 (2017)

2．看護職者の共感ストレッサーと共感ストレス認知が精神的健康に与える影響（指導教員：山口三重子）山本智恵子，西村夏代， 出井涼介，山口三重子，中嶋和夫：社会

医学研究，35(1)：109-118 （2018）
3．人工呼吸管理を受けた ICU 入室患者のせん妄の活動型発症状況と記憶についての検討（指導教員：高橋徹）藤田知幸，高橋徹：ICU と CCU、41(9)： 573-579，(2017)
4．看護職者の共感に関連したストレス測定尺度に関する批判的論評（指導教員：山口三重子）山本智恵子，西村夏代，山口三重子，出井涼介，中嶋和夫：新見公立大学紀要，第 38 巻第 1 号 59 - 66 頁（2017）
5．配偶者との死別後の生活への適応～性別からみた生活への自信と役割の関係～（指導教員：荻野哲也）福武まゆみ，島村美砂子，難波峰子，荻野哲也：岡山県立大学保健福祉学部紀要，第 24 巻，(印刷中)

2-2-4-2 栄養学大講座

(1)学会発表

1. Anti-aging effects of ellagitannin metabolites, urolithins, on the skins,（指導教員：伊東秀之）Februadi Bastian, Takanori Nakajima, Masatake Kudo, Hiroaki Yamamoto, and Hideyuki Ito, The 8th International Conference on Polyphenols and Health, (ICPH2017), Québec, Canada, 2017,10.3-6 口頭発表
2. A new ellagitannin monomer from arils of *Punica granatum*,(指導教員:伊東秀之)Februadi Bastian, Natsuki Ganeko, Morio Yoshimura, Yoshiaki Amakura, and Hideyuki Ito, 日本薬学会第 138 年会，金沢，2018 年 3 月 25-28 日，ポスター発表
3. Mutations of anti-leukotriene C4 single-chain antibody that change the antigen binding specificity,（指導教員：高橋吉孝）Yuki Kawakami, Mai Kinoshita, Yoshiko Mori, Shuji Okochi, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Mitsuaki Sugahara, Tetsuya Hori, Hiromichi Saino, Masashi Miyano, Yoshitaka Takahashi, 58th International Conference on the Bioscience of Lipids, Zurich Switzerland, 2017.9.10-14, ポスター発表
4. Catalytic activity of 12-lipoxygenase immunoprecipitated by an antibody against platelet-type 12-lipoxygenase in liver cytosol prepared from NASH model mice,（指導教員：高橋吉孝）Yoshiko Mori, Yuki Kawakami, Keita Kanzaki, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Yoshitaka Takahashi, 58th International Conference on the Bioscience of Lipids, Zurich Switzerland, 2017.9.10-14, ポスター発表
5. 加齢に伴うラット骨格筋における生化学的変化に関する研究,（指導教員：山下広美）丸田ひとみ，吉村征浩，荒木彩，高橋吉孝，山下広美，第 71 回日本栄養・食糧学会大会，那覇市，2017 年 5 月 20 日，ポスター発表
6. 酢酸摂取がラットの腸内細菌叢構成に与える影響,（指導教員：山下広美）吉村征浩，岩田三有紀，丸田ひとみ，山下広美，第 71 回日本栄養・食糧学会大会，2017 年 5 月 21 日，那覇市，ポスター発表
7. ２型糖尿病モデル動物を用いたビフィズス菌発酵乳の肥満抑制効果,（指導教員：山下広美）丸田ひとみ，王承铎，天満晴菜，馬芸，中村昇二，藤井祐介，豊川直樹，山下広美，日本農芸化学会 2018 年度大会，2018 年 3 月 17 日，名古屋市，口頭発表

(2)論文発表

1. Ellagitannin dimers from pericarps of *Trapa japonica*（指導教員：伊東秀之）Satoko Kawabe, Natsuki Ganeko, and Hideyuki Ito, The Japanese Journal of Pharmacognosy, 71・1, 53-54 (2017).

2-2-4-3 保健福祉学大講座

(1)学会発表

1. 保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度を用いた子育て支援の可能性（指導教員：佐藤和順），柏まり・佐藤和順，日本保育学会，岡山，平成 29 年 5 月 9 日，口頭発表
2. 保育内容の指導法に関する実践的研究―情報機器を活用した取り組み―，柏まり・佐藤和順，中国四国教育学会，広島，平成 29 年 11 月 26 日，口頭発表
3. 保育者のワーク・ライフ・バランスとバーンアウトの関連性に関する研究（指導教員：佐藤和順），岩切裕美・佐藤和順・柏まり，中四国教育学会，広島，平成 29 年 11 月 26 日，口頭発表
4. 家族介護者データを基礎とした介護負担感測定尺度の再検査法による信頼性の検討（指導教員：村社

卓)，出井涼介・曽根悠太郎・桐野匡史・東野定律・筒井孝子・佐藤寛明・山梨敦也・中嶋和夫，第58回日本社会医学会総会，北海道，平成29年8月19日

5. 障害福祉サービス事業所における元被疑者・被告人の利用開始後の支援特性（指導教員：村社卓)，京俊輔・村社卓，第18回日本司法福祉学会，東京，平成29年9月1日
6. 高齢者の end-of-life care における意思決定要因－生活相談員の支援内容と支援姿勢に着目して－（指導教員：村社卓)，濱﨑絵梨・村社卓，第34回日本ソーシャルワーク学会，北海道，平成29年7月22日
7. 地域住民における認知症が疑われる高齢者を発見した際の援助要請意向の関連要因の検討（指導教員：竹本与志人)，中尾竜二・三上舞・杉山京・堀川涼子・竹本与志人，
8. 第18回日本認知症ケア学会大会，沖縄，平成29年5月27日，口頭発表
9. 地域包括支援センターにおける認知症高齢者の発見に向けたネットワークの実態（指導教員：竹本与志人)，杉山京・中尾竜二・竹本与志人，第18回日本認知症ケア学会大会，沖縄，平成29年5月27日，口頭発表
10. 認知症者が必要な介護サービスの利用を制限する経済的理由-居宅介護支援事業所の介護支援専門員を対象としたインタビュー調査①（指導教員：竹本与志人)，倉本亜優未・竹本与志人・杉山京・仲井達哉，第18回日本認知症ケア学会大会，沖縄，平成29年5月27日，ポスター発表
11. 認知症者が必要な介護サービスの利用を制限する経済的理由-居宅介護支援事業所の介護支援専門員を対象としたインタビュー調査②（指導教員：竹本与志人)，竹本与志人・倉本亜優未・杉山京・仲井達哉，第18回日本認知症ケア学会大会，沖縄，平成29年5月26日，ポスター発表
12. 民生委員を対象とした認知症が疑われる高齢者を発見した際の援助要請意向の特徴（指導教員：竹本与志人）竹本与志人・神部智司・杉山京，日本老年社会科学会第59回大会，愛知，平成29年6月15日，ポスター発表
13. 地域包括支援センター専門職を対象としたかかりつけ医との連携実践とその関連要因（指導教員：竹本与志人)，杉山京・竹本与志人，第32回日本老年精神医学会，愛知，2017年6月15日，ポスター発表
14. 地域包括支援センター専門職を対象とした認知症が疑われる高齢者への受診援助におけるかかりつけ医との連携実践状況の類型化（指導教員：竹本与志人)，杉山京・竹本与志人，第22回日本在宅ケア学会学術集会，北海道，平成29年7月16日，演題発表
15. 地域住民を対象とした認知症が疑われる高齢者を発見した場合の相談先の選択の意向（指導教員：竹本与志人)，中尾竜二・三上舞・杉山京・堀川涼子・竹本与志人，第15回日本臨床医療福祉学会，岡山，平成29年9月2日，口頭発表
16. 介護支援専門員を対象とした社会保障制度の理解度とその関連要因―認知症者の経済支援に有用な6つの社会保障制度に焦点を当てて―（指導教員：竹本与志人)，竹本与志人・杉山京・倉本亜優未・仲井達哉，日本社会福祉学会第65回秋季大会，東京，平成29年10月22日，ポスター発表
17. 経済的な理由により介護サービスの利用を制限する認知症高齢者の実態（指導教員：竹本与志人)，倉本亜優未・竹本与志人・杉山京・仲井達哉，日本社会福祉学会第65回秋季大会，東京，平成29年10月22日，ポスター発表
18. 都市部における民生委員の職務継続意向とその関連要因―地域コミットメントと職務自尊感情に着目して―（指導教員：竹本与志人)，神部智司・杉山京・竹本与志人，日本社会福祉学会第65回秋季大会，東京，平成29年10月22日，ポスター発表
19. 地域包括支援センター専門職による認知症が疑われる高齢者の受診に対する援助実践とその関連要因の探索―職種に着目した多母集団同時分析―（指導教員：竹本与志人)，杉山京・竹本与志人，日本社会福祉学会第65回秋季大会，東京，平成29年10月22日，ポスター発表

(2)論文発表

1. 保護者の夫婦関係が子どもの食育に与える影響（指導教員：佐藤和順)，佐藤和順・柏まり・新山順子，日本幼少児健康教育学会誌，第3巻第1号，23-31，2017
2. 育児ソーシャル・サポートにおける保育施設の可能性―幼稚園児を持つ親の意識を手がかりとして（指導教員：佐藤和順)，柏まり・佐藤和順，保育学研究，Vol.56（2018）No.2.2018（採択決定）
3. 具体的な行動例示による教師の行動変容に関する研究―「積極的なかかわり」を視点として―（指導教員：佐藤和順)，柏まり・佐藤和順，乳幼児教育学研究，第26号，2017（採択決定）
4. 介護福祉士が受けるハラスメントと職務・職場継続意向の関連（指導教員：村社卓)，原野かおり・出井涼介・中嶋和夫，厚生の指標，64（6)，29-35，2017
5. 看護師のワーク・モチベーション測定尺度の開発（指導教員：村社卓)，西村夏代・出井涼介・山本智恵子・山口三重子・中嶋和夫，社会医学研究，34（2)，27-34，2017

6. 市町村地域福祉計画に基づく政策・施策・事業に対する地域住民の認知的評価間の関係（指導教員：村社卓），出井涼介・桐野匡史・村社卓，岡山県立大学保健福祉学部紀要，23，　　2017（印刷中）
7. 障害福祉サービス事業所における被疑者･被告人の受入準備の定性的データ分析(指導教員:村社卓)，京俊輔・村社卓，島根大学社会福祉論集，6，17-32，2017
8. パーキンソン病患者を対象とした家族機能と抑うつ症状の関係(指導教員:竹本与志人)，倉本亜優未・仲井達哉・杉山京・竹本与志人，社会医学研究，34（2），日本社会医学会，45-5，2017
9. 地域包括支援センター専門職による認知症が疑われる高齢者への受診援助の実践（指導教員：竹本与志人），杉山京・広瀬美千代・竹本与志人，社会医学研究，34（2），日本社会医学会，69-83，2017
10. 地域包括支援センター専門職による認知症が疑われる高齢者への受診援助の実践（指導教員：竹本与志人），杉山京・広瀬美千代・竹本与志人，社会医学研究，34（2），日本社会医学会，69-83，2017
11. 地域住民を対象とした認知症に関する知識尺度の検討（指導教員：竹本与志人），三上舞・中尾竜二・堀川涼子・杉山京・澤田陽一・桐野匡史・竹本与志人，社会医学研究，34(2)，日本社会医学会，35-44，2017
12. 民生委員を対象とした認知症が疑われる高齢者を発見した場合の地域包括支援センターへの援助要請意向とその関連要因-認知症進行遅延薬に関する知識と認知症の人に対する肯定的態度に着目して（指導教員：竹本与志人），中尾竜二・杉山京・竹本与志人，社会福祉学，58（1），99-111，2017
13. 血液透析患者を対象とした心理状態の類型化とその特徴（指導教員：竹本与志人），竹本与志人・杉山京・仲井達哉，厚生の指標，64（6）（平成30年3月号），29-35，2018（掲載決定）
14. 通所介護事業所における生活相談員のソーシャルワーク実践に関する文献的検討（指導教員：竹本与志人），合田衣里・竹本与志人，岡山県立大学保健福祉学部紀要，2018（印刷中）
15. Relationships between Cognitive Appraisals of Elderly Welfare Policy, Program, and Project for the Elderly at Home（指導教員：村社卓），Ryosuke DEI, Masafumi KIRINO, Kazuo NAKAJIMA & Takashi MURAKOSO, Bulletin of Social Medicine, 34（2），1-10，2017
15. Construct Validity of a Rating Scale for Workplace Harassment among Nurses（指導教員：村社卓），MIKANE Sakae, DEI Ryosuke, YAMAGUCHI Mieko & NAKAJIMA Kazuo, Bulletin of Social Medicine, 34（2），11-18，2017

2-3 情報系工学研究科

2-3-1　研究活動

博士前期課程では，システム工学専攻として3領域（平成27年度以前入学生は5領域）のいずれかに，博士後期課程では，システム工学専攻として3領域（平成27年度以前入学生は3大講座）のいずれかに属しながら研究活動を展開している．平成28年度の大学院博士前期課程学生による研究発表実績を表１に示す．

表１　博士前期課程の研究発表件数

発表内容	件数 (H29年度)	件数 (H28年度)	件数 (H27年度)
査読付き学術論文	6	21	14
国際会議録	17	31	20
全国大会発表	74	97	77
支部大会発表	30	52	64
学術表彰・受賞	18	11	11

昨年度と比較すると，査読付き学術論文が15件，国際会議録が14件，全国大会発表が23件，支部大会発表は18件減少している．好景気により大学院進学者数が減少しており，

在学者数は昨年度に比べ約18%減少していることも一因と考えられるが，学外発表のさらなる奨励が必要であろう．一方，受賞件数は昨年度より7件多い18件であり，研究レベルは向上していると言えよう．受賞の主な内容は，4th International Symposium on Asphalt Pavements & Environment 2017 Excellent paper Award，日本機械学会スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス部門学生優秀講演表彰，第14回子ども学会議（学術集会）優秀発表賞，電気学会優秀論文発表賞A賞（C部門研究会），日本電磁波エネルギー応用学会 JEMEAベストポスター賞，日本機械学会若手優秀講演フェロー賞，情報処理学会第79回全国大会学生奨励賞，日本エネルギー学会奨励賞，日本フットボール学会奨励賞，平成29年度電気・情報関連学会中国支部連合大会電子情報通信学会中国支部奨励賞，同電気学会中国支部奨励賞，同電子情報通信学会奨励賞，同電気学会優秀論文発表賞B，第19回IEEE広島支部学生シンポジウム（HISS 18th）功労賞3件，学生マイクロ波回路設計コンテスト3位，第20回舗装技術に関する懸賞論文佳作である．

表２　博士後期課程の研究発表件数

発表内容	件数 (H29年度)	件数 (H28年度)	件数 (H27年度)
査読付き学術論文	4	2	1
国際会議録	5	4	0
全国大会発表	3	4	1
支部大会発表	0	0	0
学術表彰・受賞	0	1	0

博士後期課程では，ほとんどが社会人学生であり，本年度は業務多忙等による休学者が多く，必ずしもその活動は活発ではないが，査読付き学術論文4件，国際会議録5件，全国大会発表3件がある．また，本年度は，博士の学位を取得し，研究者として3名の大学院生がそのスタートを切った．

今後は，入学者数の増加及び休学者の減少も含め，研究の活性化が必要である．

2-3-2 国際交流

情報系工学研究科では国際会議での研究発表を推奨しており，平成29年度は前節で述べたように22件の実績を上げている．

交流協定大学であるインドネシアのハサヌディン大学（UNHAS）との国際交流については，今年度，博士後期課程に学生1名が入学すると共に，平成29年7月に同大学を訪問し，今後の共同研究および教員・学生交流の促進に向けた協議を行った．そして，国際共同研究の実施に向けて具体的な検討を行っている．また，平成29年7月のインドネシア訪問時には，ハンダヤニ大学（STMIK Handayani）およびムスリム・インドネシア大学（UMI）を訪問し，今後の共同研究，教員・学生交流促進に向けた協議を行った．平成29年9月には，韓国群山大学校工学部と学術交流協定を締結した．平成29年12月には，韓国の又松大学を訪問し，今後の交流拡大を目指した協議を行った．その後，協議結果に基づき，平成30年2月には，又松大学IT融合学科の教員及び学生が情報工学部において教育成果の展示を行い，情報工学部学生，院生との交流を行った．さらに，平成30年度には，情報工学部において，又松大学学生を対象とするサマープログラムを実施予定としている．平成30年1月には,本学においてニュージーランドMassey大学との国際交流ワークショップを開催し，本学教員に加え本学院生1名が研究発表を行った．平成30年1月には，タイ・バンコクにおいてスタディツアーを実施し，現地企業の訪問を行うとともにカセサート大学にて学生

交流のためのワークショップを開催した．ワークショップには本学教員 3 名と大学院生 2 名が参加しており，各自の研究成果の発表ならびに共通の討論テーマについての議論を行った．

2-4 デザイン学研究科

大学院における研究活動については，入学者数の激減もあって，量的には活発とは言えないが，質の面では充実した内容に取り組んだ．具体的には以下の通りである．

デザイン工学専攻では，院生 1 名が(株)本田技術研究所四輪 R&D との共同研究に研究分担者として参加し，平成 29 年 10 月 15 日次世代モビリティショー（高松市丸亀町商店街）にて研究発表を行い，「テレビせとうち」及び「Amanek チャンネル」で放送された（以上，旅行経費に係る助成制度利用者）．また同院生は，平成 29 年度地域貢献特別研究（廃材を利用した「倉敷市玉島地区の産業や技術,歴史の魅力を伝えるカードゲーム」の開発 その３）にも研究分担者として加わり，学外でのボランティア活動の場を利用した検証を行った．さらに，真庭市環境市民会議（計 6 回）に委員として参加し，「真庭市第 2 次環境基本計画」策定に関わるなど，地域連携活動に取り組んだ．

造形デザイン学専攻では，院生 2 名が，日本デザイン学会第 64 回春季研究発表大会（拓殖大学文京キャンパス）において，学会発表を行なった．また院生 1 名が「JAPANTEX」（東京ビックサイト）において研究作品を出品した．（以上，旅行経費に係る助成制度利用者）その他として，院生 2 名が日本繊維機械学会中国支部研究発表会にて発表し，他大学の研究者や専門家と意見を交わし研究の深化を図った．

大学院における国際交流に関しては，平成 29 年 7 月 7 日～8 日，大学間の学術交流協定を締結しているメキシコ・モンテレイ工科大学及び米国・ポートランド州立大学との 3 大学合同スタディツアー(犬島・豊島・直島のミュージアム視察)に，デザイン工学専攻の院生がスタッフとして参加し，国際交流活推進に貢献した．また，平成 30 年度以降に学術交流協定を予定しているフィンランド・ラハティ応用科学大学へのスタディツアー（平成 29 年 9 月 1 日～9 月 10 日）には，造形デザイン学専攻の院生がチームリーダーとして，ツアー企画から運営まで関わり，国際交流活動推進に貢献した．平成 28 年 8 月 31 日に大学間の学術交流協定を締結した米国・ポートランド州立大学での第 1 回文化・語学研修（平成 29 年 8 月 24 日～9 月 10 日）には，デザイン工学専攻から 1 名の院生が参加し，異文化体験に関する報告会を行った．

2-5 まとめと課題

2-5-1　保健福祉学研究科

大学院のグローバル教育の推進に関連して，海外特別奨学生としてインドネシアのハサヌディン大学から栄養学大講座への 1 名の受け入れ（指導教員：伊東秀之教授）に引き続き，中国の南昌大学から留学生 1 名を栄養学大講座へ受け入れ(指導教員:山下広美教授)，その研究成果も国際学会で発表され，着実に共同研究が進んでいる．さらに看護学大講座でも学術交流協定校であるネパールのトリブバン大学から留学生 1 名（指導教員：井上幸子准教授）を受け入れる予定で，新制度を活用した留学生の増加は順調に進んでおり，さらなる共同研究の成果が期待される．

2-5-2 情報系工学研究科

博士前期課程の研究活動は概ね順調である．一方，博士後期課程については，休学者の多いことが大きな理由ではあるが，研究活動の活性化が望まれる．平成 27 年度には博士後期課程の早期修了要件を明確に定め，研究活動の活性化を図ると共に，既に研究業績を有する社会人の修学環境を整備した．また，休学者数の減少と入学者数の増加には社会人が学びやすい環境への改善が必要であり，平成 28 年度より，博士後期課程の修了要件を 20 単位から 12 単位に引き下げ，さらに，留学生及び社会人を対象とした秋期入学制度を整えた．これらの対策の結果，博士後期課程への入学者は，平成 29 年度は留学生 1 名，社会人 1 名を含む 3 名となった．しかし，平成 30 年度 4 月の入学予定者は社会人 1 名であり，さらなる広報活動が必要である．

情報系工学研究科では，大学間協定校のみならず，独自に協定を締結した大学との学術交流も推進している．大学院の国際交流実績には相当しないが，学部間協定を締結しているタイ国カセサート大学工学部の学生 1 名を約 2 ヶ月間受け入れ研究指導を行い，その成果を国際学会で発表した．これらを足掛かりに大学院生による国際交流のさらなる活性化を期待したい．

2-5-3 デザイン学研究科

造形デザイン学専攻科では，産学連携や学外展示を中心にした活動を行い，従来並みの成果に結びつけてはいるものの，デザイン学研究科全体では，志願者数減少による定員割れ状況が引き続き発生し，従来のような研究成果は挙げられなかった．そのため，第 3 期中期計画も直前に控えているため，研究科の専攻科構成や定員数の見直しなど抜本的な改革が課題となっている．

デザイン学研究科では，3 大学（台湾・国立雲林科技大学，メキシコ・モンテレイ工科大学，米国・ポートランド州立大学）との学術交流協定を基盤に，大学院での留学生確保を目的に，平成 29 年度は，モンテレイ工科大学からの学部生（13 名）の合同授業での受入，モンテレイ工科大学及び雲林科技大学への教員・学生の派遣を積極的に行った．また，平成 30 年度の協定締結を目的にフィンランド・ラハティ応用科学大学への教員・学生の派遣を実施し，京都工芸繊維大学及び富山大学芸術文化学部からの留学生からの意見聴取を行い，ラハティ応用科学大学での受入体制について調査を行い，大学院留学生受入や派遣に向けての情報収集の目標は達成した．さらに，ポートランド州立大学については，平成 29 年度でのスタディツアーにむけての具体的な検討を情報工学部と共同で実施した．今後は，英語による授業科目の新設，異なる学事期での入学制度（秋入学）見直し，単位付与制度を含めた交換留学制度など受入態勢の整備・検討が課題である．

第２部　教育研究開発機構

平成 26 年度 10 月に大学教育開発センター,国際交流センターの 2 センターが発足し,平成 27 年 10 月からはさらに学術研究推進センターがスタートして 2 年が経過した.この間,平成 27 年度における「教育研究開発機構」への 3 センターの合流・再編があったため，教育年報においても本学の全学的な教育研究活動に関するまとめについても,この新組織の下で第 2 部として再構成し,その内容を 3 章構成で記述することとなった.

平成 29 年度は，昨年度に引き続き各センターが大学活動委員会で承認された年度事業計画のもとで所定の課題に取組むとともに,その成果とさらなる課題を明確にして,関係委員会と連携した改善活動のサイクルを軌道に乗せていく年でもある.とりわけ大学教育開発センターにおいては,大学改革支援・学位授与機構による大学機関別認証評価受審を経て,次の評価サイクルに向けて教学 IR（Institution Research）を本格的に実施するための本学教育の自己点検・評価に資するデータベースの構築に着手したことが特筆される．また COC+教育改革 WG における「岡山創生学」の一期生が共通教育部分を終えるため，学部教育における「岡山創生学」の開講に向けた準備及び「地域創生推進士」の授与要件等の課題に取り組んだ.

第 2 部の構成であるが,第 1 章は大学教育開発センターの 6 部会の活動と成果，教育力向上支援事業及び地域連携教育（COC+教育改革 WG）の順で記述した.

第 2 章は国際交流センターにおける,本学方針の一つであるグローバル化戦略に基づいた,国際交流締結（MOU）校を主対象とする教育研究交流活動の支援を中心に,また第 3 章は学術研究推進センターにおける研究倫理に関する啓蒙活動や研究支援に関する実績を柱にまとめて記述した.

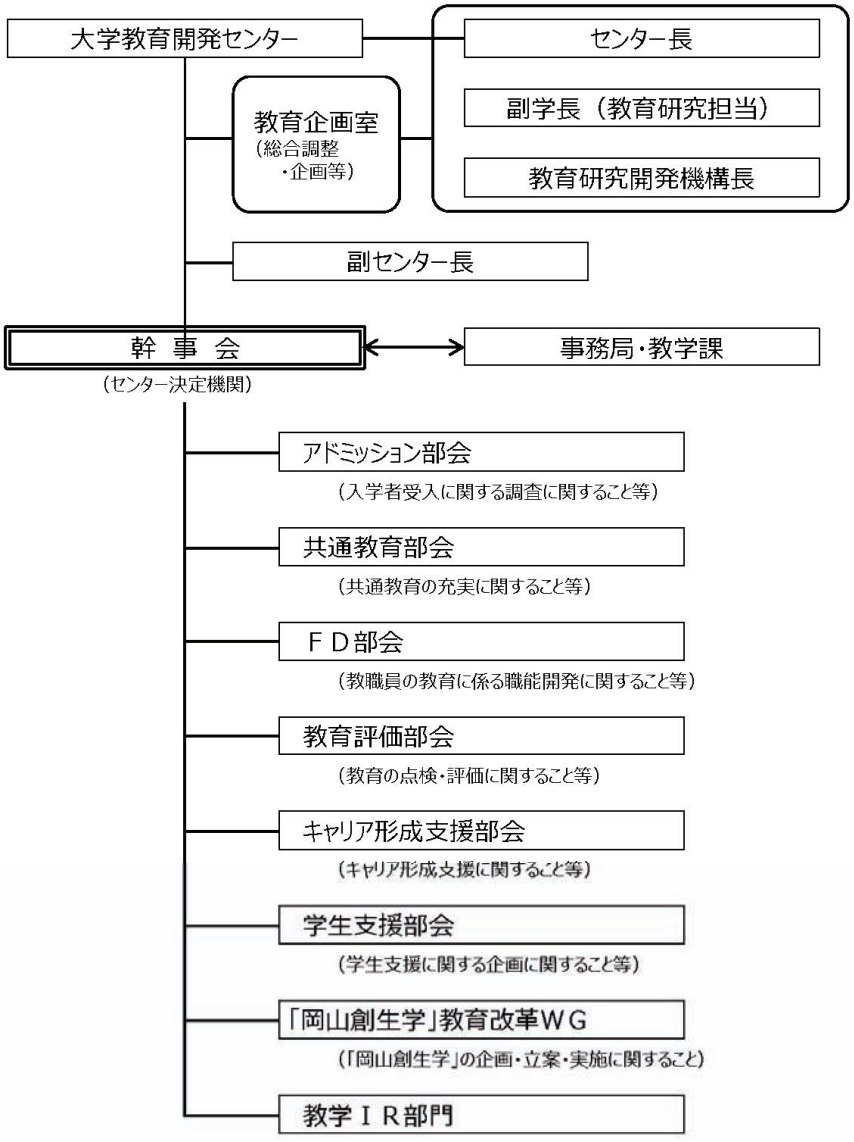
第１章　大学教育開発センターの活動と成果

1 概要

大学教育開発センター（以下,センター）は 2014 年 4 月から半年の準備室の期間を経て,同年 10 月に発足し活動を開始した.2015 年 4 月にはメンバー（センター員,幹事）を充実して大略現在の構成となって 2 年間の任期で活動を開始した.平成 30 年 3 月で発足以来 3 年半を迎えるが,当初,「アドミッション部会」,「共通教育部会」,「FD 部会」,「教育評価部会」,「キャリア形成支援部会」,「学生支援部会」の機能的 6 部会制でスタートし,各部会とセンター全体の取りまとめを行うための「教育企画室」も同時に発足させた.また,平成 27 年度に本学は文部科学省補助金事業である「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業（COC+)」に選定された.地域人材育成のために副専攻「岡山創生学」を立て,大学教育開発センターの所掌として「教育改革ＷＧ」として大学教育開発センターにおける地域連携教育

部門として一昨年度から 6 部会+1WG 体制となっている. 現在の大学教育開発センターの組織図を下に掲げる（平成 29 年度末）. なお次年度は，キャリア形成支援部会，学生支援部会支援が，新たに設置される予定の「学生生活・キャリア支援センター（仮称)」に移行することが決定している.

大学教育開発センター組織図



（センターと学部・学科との連絡調整について）
・幹事は、部会の長を兼ね部会の業務を統括するとともに、
学部等との連絡調整を行う。
・推進員は、幹事が行う学部等との連絡調整を補佐する。

2 各部会活動

2-1 概要

現在,大学教育開発センターは,教育企画室,6 部会（アドミッション部会,共通教育部会,FD 部会,教育評価部会,キャリア形成支援部会,学生支援部会）と平成 27 年度文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC＋)」に採択されたのを機に設置された「教育改革ワーキンググループ(教育改革WG)」から成り立っている.教育企画室は，幹事（部会長等）会を主宰し，各部会の事業計画を取りまとめ，部会単独で行う事業と部会間連携事業とすることが適当な業務，また他機関等との協働の調整を行い，円滑な部会業務の実施を目指している.

大学教育開発センターのメンバーは，委員会等における学部・学科の割当制ではなく,自薦,他薦で選ばれた積極的な部会活動が見込まれるメンバーによって構成されている.そのため,センター員は必ずしも全ての学科を網羅しているわけではない.しかし,情報の全学的疎通や,学科からの情報を得るに当たっては不便もあること等から,センター員を出していない学科においては，平成 29 年度から推進員を置くこととした.推進員は学科からの推薦によって選ばれている．大学教育開発センターは大学における事業実施機関ではなく,教育改革に係る自発的な企画や提案,また学長,理事会等の諮問を受けて検討を行い，提案等を行う機関である.しかし,将来定着する可能性のある新規教育関連事業については，予算を得て，部会等が責任者となって試行する期間を設けて評価を行った後，大学に引き渡す形を取っている．なお，事業等の企画や提案及び試行を円滑に行うために,学部長は原則幹事として大学教育開発センターの部会に参加を求められる．また学科長の参加も期待されている.

教育関係事業の実施においては，教・職のコラボレーションが絶対的に必要となる状況であることから,事務局職員も教員と対等の立場で大学教育開発センターの全部会に参加が求められる.教職協働を実践することによって，大学の本分である教育と研究を促進する体制の改革がより容易になると共に，従来の委員会体制では実現が難しかった課題についても継続的に取り組むことができると考えられる.教職協働は非常に重要であるが，学生の大学運営参加という視点も非常に重要である．これについては，主に学生支援班が取り組んでいるところであり，来年度からは「学生生活・キャリア支援センター（仮称)」において,その取り組みを更に発展させる方向性が出されている.

2-2 教育企画室

2-2-1 概要

教育企画室では，大学教育開発センター（以下「センター」という.）の幹事会の主催及びセンター全体とセンターの各部会であるアドミッション部会，共通教育部会，FD 部会,教育評価部会,キャリア形成支援部会,学生支援部会,教育改革WG（ＣＯＣ+「岡山創生学」）

の各部会の運営に必要な企画調整機能と事務局機能を担っている.

幹事会を主催するにあたっては，年度初めに各部会が年度計画を立て，それを幹事会で調整し承認した後，全学委員会である大学活動委員会において審議にかける．年度計画には当該年度の部会が実施する各種事業の内容，日程，担当メンバー，予算及び研修会等を含むものとしている．事業計画は年度の途中で見直しの機会を設けると共に，事業の進捗状況確認の機会を設けている．また，年度の事業報告は当該年度の教育年報に記載することとしている.

大学教育開発センターでは，昨今の流動的な大学を取り巻く情勢の中，センター各種事業の実施に当たり，内外の教育や研究をはじめとする大学運営に係る情報を収集し，それを吟味して本学にとって最適な教育体制及び教育支援体制を構築し，教職協働で実施に移すことを目的にしている．教育企画室は，各部会業務を俯瞰し，各部会における業務実施を縦断的及び横断的に連携させ，効率的及び効果的な事業を実施できるように大学の各種委員会及び各種組織との調整を図ることを目的として置かれ，メンバーは教育研究担当理事（副学長），大学教育開発センター長，教育研究開発機構長によって構成される.

2-2-2　大学教育開発センター各部会事業のマネジメント

大学教育開発センターは，現在 6 部会 1WG（ワーキンググループ）を擁する多機能の比較的大きな組織である．本学のような学生数や学部数，教職員数及び大学院の充実度等の観点から“中-小規模クラス”の大学では，大規模大学とは異なり多数の機能別センターを設けることは，運営に関わるスタッフが重複してしまうこと，また，その様な複数センターの運営に必要な職員を得ることの困難が想定される．代わりに，一つのセンターの下に大学の教育関連の各種機能を部会として糾合して効率的運営を図ると共に，部会間の横の連携を密にすることを利点とするような組織構成にすることに意義を見出すことが出来ると考えられた．本学が長年継続してきた委員会による運営体制から，機能的集団として初めての教育センターを設ける際には合理的な選択と考えられた．委員会による運営体制では事業を継続的に実施するのが難しく，その結果，教・職のどちらの面からも専門性の向上が望めないという問題点が指摘されるところであった.

そのような経過もあって，大学教育開発センターでは，予てからの課題であった教員と職員が一致して教育改革に当たるための「教職協働」を実現してゆくこと，また教員，職員の教育に係る専門性の開発を行うことに加えて，学生（在学生，卒業生，修了生等）を大学運営の柱の一つと見なして学生 FD を推進すること，学士課程教育全般における学生のキャリア形成を支援すること等が掲げられた．また，従来の本学の教学データの取り扱いが各部署で分散的に行われてきたという問題があり，本学の教育改革実施に必要となるデータの蓄積や処理，提示が迅速に行える体制ではなかった．これを改革することも当初目標の一つとされた.

本学の規模を考慮して考案された複数部会方式のセンターを改革促進組織として運営するためには，部会等を統べる組織の必要性があることから，規定には記述されていないが，各部会の長等で構成する幹事会とは別に，センター長，学生部長（現在は教育担当副学長），

全学教育研究機構長（現在は，教育研究開発機構長）で構成する「教育企画室」を，センターの調整・企画機能を有するセンター内機関としてセンター設立時から置いた．教育企画室は，センターの各部会等の単独事業や部会連携事業を推進する“横と縦の連携”を取る役割を担うと共に，大学の委員会、事務局とセンターとの間に必要な縦の連携のリエゾンとして機能させるものである．

現在，教育企画室では，①センター幹事会の招集，②事業計画の取りまとめと進行管理補助，③関係委員会（大学活動委員会，評価委員会，教務専門委員会）への提案や諮問対応，④認証評価対応，⑤教育年報の企画・編集等を主要な業務としている．

2-2-3　教学システム構築と教学 IR の実施

センターでは，本学の教学関係データの収集，登録，保存が，それぞれの担当部署において行われ，データの記録も不完全なものとなっていることが，データに基づく教育改革を進めて行く上で阻害要因として問題視されるところであった．データが一元化されていないことによって，大学がその運営において必要とするデータが素早く取り出せない，または取り出すことに非常に困難を伴うなど等，迅速性の面から致命的な欠陥を有していたといえる．

この様な問題を解消するため，センターではセンター設置当初から一貫して本学の教育を改革する基盤形成を考慮し，教学システムの構築と大学の教学 IR の実現を意図し，その導入と実施を進め，平成 29 年度（2017）から各所の協力も得て本学に適した教学システム（Campus Square，通称「はっとりん」）が導入され，また平成 28 年度の準備で生じた 29 年度における実施上の問題を解消するための取り組みを行った．なお，平成 30 年度に向けた「はっとりん」改修における新日鉄住金ソリューションズ社との交渉は総合情報機構を介して行われた．

Campus Square の導入による教学関係のデータ一元化作業は未だ緒に就いたに過ぎない状況である．センターでは予てから要望してきた IR 実施要員の採用が 2016 年に行われ，2017 年 5 月に赴任が実現した．当面の IR 要員の任務は，「はっとりん」上に集約される予定であるデータの構築とデータの処理に係るものであり，そのため，大学執行部等及びセンター各部会からの個別の要望に関しては，マンパワーも考慮しながら徐々に拡大してゆく予定である．センターでは平成 29 年度の Fact Book 作成を行う中で，IR 部門と共に Campus Square にどの様に教学関係データを集約してゆくかを考え，本学の今後の全ての教学データの一元化を目指してシステムを構築してゆく予定である．

2-2-4　FD・SD 研修会の実施

従来，教員の職能開発，すなわち教授力（教授技術）の向上がＦＤ(Faculty Development)として行われてきた．しかし，近年ではその定義もアクティブ・ラーニング（主体的な学び（学習）を促す教授（教育）の方法や手技）の考え方の導入促進等によって変化しつつある．すなわち，教育は単に一部の学力要素，すなわち知識・技能の習得を目指すものではなく，

学習者が積極的に必要と思われるものを吸収し，学習者が生きた知識としてそれらを活用する過程を支援するまでを含むものである．これは，教育においては「暗黙の了解」とも言えるものであるが，専門知識や技能の習得に時間を割く余り，教育課程の一部のみしか実施されないという問題が深刻化しているのも事実と考えられる．現在，文部科学省では，学力の3要素として，① 知識・技能の確実な習得，②（①を基にした）思考力，判断力，表現力，③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を掲げて，その完全な実践を，PDCAサイクルを活用しながら行うことを改めて求めている状況である．限定された時間や要員による“学力”を付ける教育の実践は極めて厳しいのも現実であり，創意工夫が求められる．センターが企画するFD・SD研修会では，国内外の大学における実践例を取り上げ，本学における学力養成の手がかりを得るために行うことを一つの目標としている．

一方，教育や教育支援における大学職員の役割も非常に重要になってきている．職員の職能開発は従来SD（Staff Development）と称されることが多く，職員側からの教育への関りと見なされ，学生支援や教学データの収集，分析等が含まれていた．現在，SDは職員のみならず大学スタッフとしての教員と職員の双方を含んだ用語としても使われるが，ここでは従来通り，FDは教員を主に考え，SDは職員を主に考え，双方を含む場合はFD・SDと称することとする．言うまでもなく，大学職員は大学が行う教育という事業をよく理解し，特に経営的観点（全学的視点）から教育事業の円滑な進行を促進し，その成果を内外に向けて発信する責任を有している．特に大学執行部と教員と職員の代表者は須らく教育理念，教育目標，教育の促進要因，阻害要因，内外への発信（情報開示），広報に関する意識を共有して大学経営に当たるべきであると考えられるところから，教員と職員が意識を共有して教育任務に当たる必要がある．

公立大学は地方自治体が設置し，管理する大学であり，一定の教育環境も保たれてきたため，国立大学や私立大学に比べて内発的な教育改革への動きは活発とは言えず，また外部からの改革要請も届きにくいのが現状である．しかし，人口の少子化による受験者減や志願者減，また果敢な大学改革による志願者集めの競争は年々厳しさを増しており，所謂公立大学の優位性のみでは，従来の志願者水準を確保することが難しくなっている現状がある．

公立大学を取りまく環境を考慮すると，志願者，設置者，社会に向けた魅力を創造することが極めて現実的な課題として浮上してきている．その改革を順調に進めるためには，教員，職員，学生が三位一体になって当たる必要がある．大学教育開発センターではその設置当初から，教員，職員，学生のそれぞれが大学の教育に対して積極的な役割を担うこと，またそれらの3要素が協力して当たることが必要という観点から，学内，学外の情報を共有して改革の手がかりを得て，構築してゆくための研修会を実施してきている．教育のシステム改革には，教員と職員がその目的・目標を共有し，一致して当たることが先ずもって必要であるため，大学教育開発センターにおいては，設置当初から「教職協働」を掲げて，センター部会への職員の参加，教職員に向けた研修会を実施してきている．成果は徐々に表れてきているところであるが，問題点も鮮明になってきていることから，FD・SD研修会の実施に際してもターゲットを絞った取り組みも望まれるところである．

現在，大学教育開発センターの研修会は3種類に分けられている（下記参照）.その一つ「全学研修会」であり,年2〜3回の開催を目標とし,全教職員の出席を原則とする研修会である.外部から講師を招聘し,最新の教育関連情報を得て全学的な教育改革に役立つ情報を得ることを目的にしている.また全学研修会では,その内容を教員，職員の両者にとって有用な研修の機会になるように配慮している.二つ目は「教育開発講座」であり,この研修会はセンターの6部会+1WGの主要業務と関連するテーマについて行うものであり,各部会が主催し,外部講師を招聘する,あるいは内部の講師を立てるなど部会の采配でテーマ,人選を自主的に行うものである.「教育開発講座」はセンター関係者の出席を原則としているが,それ以外の教職員の参加は任意としている.三つ目の研修会である「センターワークショップ」は主にセンター内での教育に関する研修の機会として設定したものであり,研修会への参加報告,部会等による調査・研究成果の発表を主眼として行う.「センターワークショップ」については「教育開発講座」と同様に,センター関係者の出席を原則としているが,それ以外の教職員の参加は任意としている.

平成29年度は,「全学研修会」を1回,「教育開発講座」を2回,「センターワークショップ」を3回実施した.また,その他として「授業改善意見交換会」を1回,「プロジェクト・マネジメント実践論」を1回開催した.

表1　大学教育開発センターFD・SD研修事業：平成29年度実施状況

【全学研修会】		
1	『高大接続改革の概要と動向について 』	大学教育開発センター
【教育開発講座】		
1	『ICTを活用する予習主体の授業でアクティブ・ラーニングへ誘う〜反転授業〜』	FD部会
2	『高大接続改革にどのように向き合うか』	アドミッション部会
【センターワークショップ】		
1	『障がいのある方へのちょっとした手助けのために―あいサポート運動の取り組み―』	学生支援部会
2	『地域とともに作る授業科目の企画，運営，評価』	教育改革WG
3	『授業改善意見交換会』	FD部会
その他	3研究科共通講義『プロジェクト・マネジメント実践論』	大学教育開発センター

表2　各研修会の参加者数

	講 演 タ イ ト ル	参加教員	参加職員	学生	学外
	【全学研修会】				
1	『高大接続改革の概要と動向について 』	47	6	0	0

	【教育開発講座】				
1	『ICT を活用する予習主体の授業でアクティブ・ラーニングへ誘う～反転授業～』	73	14	0	0
2	『高大接続改革にどのように向き合うか』	61	5	2	0
	【センターワークショップ】				
1	『障がいのある方へのちょっとした手助けのために―あいサポート運動の取り組みー』	30	8	0	0
2	『地域とともに作る授業科目の企画，運営，評価』	36	5	0	0
3	『授業改善意見交換会』	53	3	0	0
その他	3 研究科共通講義 『プロジェクト・マネジメント実践論』	0	0	28	0

2-2-5 まとめと課題

平成 29 年度は認証評価への対応，教学システム（Campus Square）の導入で大変慌ただしい時期であり，その次年度である本年度は前年度で起きた問題の改修を実施した．特に，教育改革の基礎となる新シラバスには幾つかの大きな不都合が，入力，承認，閲覧，出力等の全ての面に見られることが情報収集の結果明らかになった．それらを解消するため大学教育開発センターの教育企画室，教育評価部会，教学課教務班が当たり，総合情報機構を介して取り組み，平成 30 年度の始動時には問題点のほとんどを解消することが出来た．その結果，問題点の解消というステージから，より良い形を目指した取り組みに切り替えることが出来たと言える．

研修会については，余りに外部からのフレッシュな情報を入れても，それを咀嚼し，消化するには一定の期間を必要とするとの考えから，教育企画室からの提案よりも各部会の自主性に期待する態勢を取った．その結果，表 1，2 に示すように，質・量とも満足すべき結果が得られた．今後については，全学研修会は教育企画室主導，その他については各部会主導で実施する形態を暫く維持して行く方向が考えられる．

本学は教育 IR（Institutional Research of Education）に関する問題を有するため，教育改革に必要なデータを利用することが極めて難しい状況にあった．その観点から教学システム（Campus Square）の導入は必然であったが，そこへのデータの集約が，教育改革における教学データの解析において是非必要であり，今後しばらく継続してそれを行わなければならない．そのためのワーキンググループが必要であろう．

大学教育開発センター自体の大きな組織変更が目前に迫っている．それは学生生活・キャリア支援センター（仮称）が平成 31 年から設置され，当センターからはキャリア形成支援部会，学生支援部会が移行して参画する．本学における学生 FD，キャリア形成支援やキャリア（就職）支援の内，前二者は大学教育開発センターの 2 部会で担当してきたが，今後どのように新センターと大学教育開発センターが連携を取って行けるかは対象者である学生のキャリア形成に重要な課題である．また，COC+事業についても終了を迎える 2 年後に向けて「社会連携教育」の在り方を検討してことが喫緊の課題として浮上している．

2-3　アドミッション部会

平成 32 年度入試から実施される大学入学者選抜改革が公表され，来年度初頭のアドミッションポリシーの公表に向けて，各学部学科において入学日程，入学試験の実施方法を含めてポリシーの策定を行った．入試環境調査として入学時アンケート調査ならびに入試日程別成績追跡調査を全学的に実施し，入試広報活動としてはオープンキャンパスならびに高校訪問，高大接続事業として高校生のための大学授業開放を，いずれも全学的に実施した．学内研修会としては，教育開発講座を主催した．

2-3-1　入試改革

⑴ 入試改革に向けたアドミッションポリシーの策定

高大接続システム改革会議最終報告を受け，本年度は本学の 3 つのポリシーを一貫性のある形に見直す中で，全学および各学部学科アドミッションポリシーの見直しを行い入試日程別に入学者選抜の基本方針を示した．

⑵ 高大接続作業部会

県内高等学校における高大接続改革並びに教育の実施状況と，岡山県立大学における第 3 期中期計画を念頭に置いた入試及び教育改革の検討並びに準備状況について，作業部会を 3 回開催し，情報交換ならびに意見交換を行った．

国の高大接続システム改革会議最終報告（H28.3）に基づく取組として，高校側及び本学の高大接続方針や対策，平成 32 年度（H33.1）に実施予定の大学入学共通テストにおける新たな取組，特に記述式問題や英語外部試験導入問題について，また調査書の扱い等，本学の第３期中期目標期間（H31 年度より 6 年間）における教育組織構想とこれに対応した入試方法・内容のあり方，その他，高校教育と本学教育の円滑な接続に向けた課題について，種々意見交換を行い，県内高校の実情を含めて今後の高大接続改革に向けた英語４技能の評価方法，入学試験の実施方針や調査書の評価方法などに関して有意義な意見交換ができた．

日時：第１回　平成 29 年 5 月 29 日（月）　9:55～12:00
　　第２回　平成 29 年 10 月 30 日（月）　9:55～12:10
　　第３回　平成 29 年 12 月 25 日（月）　10:00～12:00
場所：岡山県立大学　本部棟 2 階小会議室１　（総社市窪木 111 番地）
出席：校長協会　部会メンバー（県立高等学校長５名）
　　岡山県立大学　部会メンバー
　　吉原 直彦　理事・副学長（教育担当・デザイン学部教授）

高橋 吉孝　学生部長（保健福祉学部教授）
田内 雅規　大学教育開発センター長（教育研究開発機構 特任教授）
榊原 勝己　教育研究開発機構長（情報工学部教授）
伊東 秀之　大学教育開発センター　アドミッション部会長（保健福祉学部長）
岡山県立大学　事務局
駒井 敏彦　教学課長

2-3-2　入試環境調査

(1) 入学時アンケート結果

大学入学者選抜改革および大学広報のために基礎情報を得ることを目的として，全学的に入学者を対象にアンケートを行った．全体の回答率は 96.1%で，すべての学科で回答率 90%を超えていた．

Ⅰ.基本情報

１．出身高校所在県

岡山県出身者が 60%以上を占める学科はいずれも保健福祉学部であった（看護 61.5%，社福 62.5%，子ども 95.2%）．一方，県内出身者が 40%以下の学科（栄養 38.6%，通信 33.3%，シス 39.0%，デ工 26.8%）あり，栄養学科と情報システム工学科が県外 17 都道府県からの学生を受け入れていたほか，デザイン工学科は 16 都道府県，情報通信工学科は 13 都道府県から受け入れていた．栄養学科は南が宮崎から北は北海道までほぼ全国から学生を集めていたのに対し，情報工学部２学科では南は宮崎から東は三重県（通信），富山県（シス），デザイン工学科では南は鹿児島から東は東京までとなっていた．

２．本学志望順位

保健福祉学部３学科とデザイン学部２学科はいずれも本学を第１志望とする学生が 70%を超えていた（社福 95.0%，子ども 85.7%，造形 81.8%，栄養 77.3%，デ工 73.2%，看護 71.8%）のに対し，情報工学部のうち２学科は 50%を下回った（シス 40.7%，通信 47.6%）が，いずれの学科も第二志望まで加えると 70%を上回っていた（シス 78%，通信 76.2%）．

３．学修モチベーション

昨年度はすべての学科で推薦入試入学者のモチベーションが一般入試入学者を下回っていたが，本年度はデザイン学部２学科ならびに情報システム工学科で推薦入試入学者の学修モチベーションが他日程入学者に比較し高い傾向が見られた．一方情報通信工学科では中期日程入学者の学修モチベーションが最も高かった．学修モチベーションが高い学生が 50%を下回った入試日程は，人間情報工学科の推薦（43%）と中期（46%），情報通信工学科の前期（47%），子ども学専攻の後期（40%）のみであった．

Ⅱ.広報等に関する質問

１．広報媒体

本学受験に１番参考にしたものとして，デザイン学部２学科，情報工学部３学科では，「高校の先生からのアドバイス」を上げた学生が最も多く，「学科 HP」や「大学案内」などが続いたのに対し，保健福祉学部では，「大学 HP」（看護，社福）や「大学案内」（看護，子ども），「高校生のための大学授業開放」（子ども）など，大学から発信する情報を上げた学生が最も多かった．栄養学科では，「予備校が提供する情報」と「家族・知人からのアドバイス」を上げた学生が最も多かった．AP の理解度について，保健福祉学部では看護（75.7%），栄養（60.5%），社福（64.1%），子ども（81%）と，いずれも過半数の学生が「よく理解できた」と答えていたが，情報工学部３学科とデザイン学部２学科においては 40%前後にとどまった．

２．情報提供

入学前にもっと知りたかった情報として，保健福祉学部とデザイン工学部のすべての学科ならびに情報通信工学科において 50%以上の学生が「カリキュラムや授業内容」を上げていた．これ以外で 50%以上の学生が求めていた情報としては，「学生生活」（看護，子ども，デ工，造形），「就職先と就職率」（栄養，シス），「各学部・学科の特色」（社福，造形）などが上がった．

３．志望動機

「教育内容が希望に近い」を志望動機の１位にあげた学生が最も多かったのが看護学科（25.6%），子ども学専攻（28.6%），情報システム工学科（23.7%），人間情報工学科（31.7%），デザイン工学科（31.7%），造形デザイン学科（45.5%）であり，情報通信工学科（20.6%），社会福祉学専攻（15.0%）でも２番目に多かった．また，「希望する資格が得られる」を志望動機１位にあげた学生が最も多かったのが栄養学科（38.6%）と社会福祉学専攻（40.0%）であった．情報通信工学科では「センター試験等学力的にみて適当だった」を志望動機１位にあげた学生が最も多かった（22.2%）が，これは情報システム工学科（22.2%），人間情報工学科（12.2%），デザイン工学科（17.1%），看護学科（17.9%），栄養学科（22.7%）でも２番目に多かった．

４．本学への期待

すべての学科において「充実した専門教育」を，本学で学ぶにあたって期待の高いものの 1 位としてあげた学生が圧倒的に多く（看護 53.8%，栄養 40.9%，社福 60.0%，子ども 76.2%，通信 69.8%，シス 50.8%，人間 51.2%，デ工 68.3%，造形 61.4%），保健福祉学部の各学科では「充実した国家試験対策」をあげた学生（25.0～36.4%）が続いたが，一般教養教育（0～14.6%），語学教育（0～10.3%），国際的活動の機会（0～4.9%），地域活動・ボランティアの機会（0～5.1%）などの充実に期待する学生は少数であった．

Ⅲ.受験科目に関する質問

１．現行入試の受験科目

センター試験においてはすべての学科の受験生の 80%以上が「受験しやすかった」と回答していたほか，個別試験の数学，デッサン，面接についてもこれらを受験した学生の 80%

以上が「受験しやすかった」と回答した．一方，栄養学科の理科については受験した学生の22.8%が「どちらかというと受験しにくかった」と回答し，その理由として「難しかった」以外にも,「問題用紙や解答用紙が机の大きさに比べて大きすぎた」,「時間が足りなかった」,「教科書や参考書に載っていない問題だった」などの意見があった．保健福祉学部の小論文は，本科目を受験した看護学科受験生の 23.1%，子ども学専攻受験生の 30.0%が「どちらかというと受験しにくかった」と回答し，理由として「難しかった」以外に「小論文が苦手だった」をあげた者が多かったほか,「対策のしようがない」,「現代国語に近い内容だった」などがあがった．

２．入試改革における受験科目

個別入試にあったら本学を受験しなかったと思う科目として，TOEIC や英検などの外部試験をあげた学生が栄養学科，社会福祉学専攻，子ども学専攻，造形デザイン学科では 50%を越えたほか，看護学科の 46.2%，デザイン工学科の 46.3%が受験しなかったと回答し，前年度同様，外部英語試験には強い抵抗感が示された．一方，個別学力試験として英語を課された場合に受験しなかったと回答した学生は，子ども学専攻，情報工学部３学科，デザイン学部２学科ではいずれも 30%を下回った．小論文を課された場合に受験しなかったと回答した学生は情報工学部３学科，デザイン学部２学科ともに 40%以上であった．このほか，栄養学科，社会福祉学専攻，子ども学専攻で 50%以上の学生が個別入試にあったら本学を受験しなかったと思う科目としてプレゼンテーションが，栄養学科と子ども学専攻の学生の 50%以上が個別入試にあったら本学を受験しなかったと思う科目として集団討論とディベートがあがった．

Ⅳ. 大学授業開放に関する質問

受講者が入学者の 30%を超えていたのが子ども学専攻（52.4%），社会福祉学専攻（35.0%），看護学科（30.8%）であり，造形デザイン学科（27.3%），栄養学科（25.0%）でも入学者に占める受講者の割合は高かった．推薦入試入学者に限れば，保健福祉学部全体の 75%，デザイン学部全体の 52%の学生が受講者であり，情報工学部でも人間情報工学科の 50%の学生が受講者であった．

授業開放を活用した入試があれば受験したかどうかの質問には，看護学科（41.0%），社会福祉学専攻（50.0%），子ども学専攻（42.9%），人間情報工学科（46.3%），造形デザイン学科（45.5%）において 40%以上の学生が「受験する」と回答した．

Ⅴ. 卒業後進路希望

県内就職希望者は,保健福祉学部の各学科で高かったのに対し(看護 35.9%,栄養 25.0%,社福 40.0%，子ども 81.0%)，デザイン学部２学科はいずれも 5%を下回った．一方，大学院進学希望者は情報システム工学科で 42.4%，情報通信工学科で 35.0%に上ったが，他大学の大学院への進学希望者が本学大学院進学希望者を上回っていた．本学大学院への進学希望者が 5%を超えたのは，情報システム工学科（8.5%），栄養学科（6.8%），社会福祉学

科（5.0%）であった．デザイン工学科の 9.8%，造形デザイン学科の 4.6%の学生が他大学を含めてではあるが大学院進学を希望しているのは特筆に値する．まだ進路を決めていない学生も多かった．

VII.本学で身につけたい能力

身につけたいスキルとしては，日本語のコミュニケーションスキルが総じて高く，保健福祉学部のすべての学科の学生で 70%以上の学生が回答したほか，造形デザイン学科（84.1%），人間情報工学科（63.4%），情報システム工学科（55.9%）でも最も多かった．身につけたい力としては，保健福祉学部のすべての学科，情報システム工学科，人間情報工学科で主体性をあげた学生が最も多かった一方で，デザイン学部２学科では発信力や創造力をあげた学生が多かった．

⑵ 入試日程別成績追跡調査

１．保健福祉学部

①看護学科

平成 26 年度から平成 29 年度の看護学科入学生を対象に，入試日程（推薦，前期，後期）の違いによって，入学後の成績（最終累積 grade point average，以下 GPA）に差が見られるか，一元配置分散分析で検討した．その結果，学年毎に解析した場合も全在学生で解析した場合も，入試日程の違いによる GPA の有意な差は見られなかった．

入試区分	最終累積 grade point average（平均 ± 標準偏差）			
	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度
推薦入試	2.25 ± 0.28	3.03 ± 0.31	3.01 ± 0.36	2.89 ± 0.22
一般入試（前期日程）	2.30 ± 0.19	2.86 ± 0.31	3.06 ± 0.33	2.97 ± 0.38
一般入試（後期日程）	2.45 ± 0.09	2.88 ± 0.34	3.01 ± 0.22	2.90 ± 0.28

全在学生を対象に，入試の成績（国語，社会，数学，理科，英語，センター試験の合計，小論文，面接，最終合計得点）と 1 年生前期の時点での GPA との相関を Pearson の相関係数（r）で検討した．入試の成績は入試日程や科目によって配点が異なるため，解析には各人の得点を配点で除して得られた得点率を用いた．その結果，GPA と有意な正の相関が見られたものは，国語（r=0.386），小論文（r=0.351），面接（r=0.227），最終合計得点（r=0.236）で，有意な負の相関が見られたものは社会（r=-0.239）であった．数学，理科，英語，センター試験の合計はいずれも GPA と有意な相関は示さなかった．2 年次生以上を対象に，1 年生後期の時点での GPA および 2 年生前期の時点での GPA と入試の成績との相関を検討した場合は，面接との相関が有意でなかったが，その他は同様の結果であった．

入試日程が異なっていても入学後の成績に差が見られないことは昨年，一昨年の調査と同様であり，いずれの入試日程で入学した場合でも学修能力に大差はないと考えられる．入

学後少なくとも2年生くらいまでの成績が，入試の国語，小論文の成績と正の相関が見られることから，文章を読解し，論理的に記述する能力が本学科での課題解決に有利に働いている可能性が考えられる．入試の成績から，学生各自が自らの特性を理解し，大学での学修に役立てるような取り組みが必要と考えられる．

②栄養学科

平成26年度入学生から平成29年度入学生までを対象として，入試日程別（推薦入試，前期日程，後期日程）と入学後の累積GPAについて相関分析を行った．平成28年度と29年度の入学生において，入学後の成績のGPAに有意な差がみられた．

入試区分	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
推薦入試	2.462±0.216	2.859±0.442	2.523±0.422	2.606±0.414
一般入試（前期日程）	2.615±0.246	3.028±0.376	2.876±0.415	3.105±0.346
一般入試（後期日程）	2.680±0.272	2.770±0.735	3.09±0.00	3.60±0.00
統計学的有意差	なし	なし	推薦入試と一般入試（前期日程）の間で有意差あり	推薦入試と一般入試（前期日程）の間で有意差あり

入試科目別の入試得点と入学後成績との相関について，推薦入試では小論文得点と面接得点を，前期日程および後期日程ではセンター試験の各科目の得点，さらに前期日程では個別入試科目の化学と生物の得点およびセンター試験の得点を含む合計得点について，それぞれ入学後の成績と相関分析を行った．２６年度と２９年度では相関は見られず，２７年度では，英語と2年後期GPA，２年の年間GPAとの間に有意（５％）な正の相関がみられ，推薦入試の面接得点と累積GPAとの間に有意（５％）な正の相関がみられた．２８年度では，英語と累積GPAとの間に有意（５％）な正の相関がみられた．また，２８年度では個別入試科目とセンター試験の得点を含む合計点と累積GPAとの間に有意（５％）な正の相関がみられた．

以上の結果から推薦入試では面接を重視するなど，配点や内容も含めて今後の検討が望まれる．またp値が0.1～0.2ではあるが平成２６年度と２８年度では個別入試科目の化学と生物についても正の相関がみられることから，出題内容あるいはセンター試験との配点割合などの検討が望まれる．

③保健福祉学科

平成26年度から平成29年度の保健福祉学科入学生を対象に，専攻ごと（社会福祉学専攻および子ども学専攻）に，入試日程（推薦，前期，後期）の違いによる入学後の成績（最終累積GPA：平成29年度前期時点）の平均値の差の検定について，一元配置分散分析を用いて検討した．この

とき，退学者や留学生は分析から除外し，転専攻者は入学時の専攻に所属するものとして扱った．その結果，社会福祉学専攻，子ども学専攻ともに，入試日程の違いによって，最終累積GPAの平均値に統計学的な有意差は認められなかった．

入試区分（社会福祉学専攻）	最終累積GPA（平均値±標準偏差）			
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
推薦入試	2.64±0.17	2.92±0.40	2.86±0.35	2.83±0.37
一般入試（前期日程）	2.75±0.26	2.96±0.38	2.70±0.36	2.83±0.32
一般入試（後期日程）	2.66±0.24	3.00±0.29	2.91±0.37	2.81±0.56
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

入試区分（子ども学専攻）	最終累積GPA（平均値±標準偏差）			
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
推薦入試	2.65±0.15	3.12±0.22	2.82±0.28	3.14±0.38
一般入試（前期日程）	2.71±0.23	3.07±0.35	2.65±0.29	2.92±0.45
一般入試（後期日程）	2.80±0.14	2.74±0.20	2.73±0.54	2.94±0.23
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

いずれの入試日程で入学した場合でも有意差が認められなかったことから，現在の入試形態や方法に大きな問題はなく，基礎学力，意欲ともに均一した学生が入学していると推察される．今後，継続的に動向を注視するとともに，学生の全体的な底上げを図るような教育の充実を目指したい．

２．情報工学部

①情報通信工学科

入試区分	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
推薦入試	2.41±0.12	1.78±0.23	2.07±0.27	2.31±0.27
一般入試（前期日程）	2.35±0.16	1.86±0.34	2.23±0.33	2.67±0.29
一般入試（中期日程）	2.47±0.12	2.32±0.23	2.37±0.24	2.60±0.18
統計学的有意差	なし	推薦と中期，前期と中期	推薦と中期	推薦と前期，推薦と中期

上表は，入学年度および入試区分ごとにそれぞれ分散未知の正規母集団を仮定して，累積GPAの平均の95%信頼区間，および，累積GPAの平均値に関するウェルチ片側検定の結果である．ここ３年間は推薦が低い傾向が続いているため，偶然とは考えがたい．

入試科目の得点と累積GPAとの間には，相関係数の絶対値が0.7以上の強い相関は見ら

れなかった．相関係数の値で目立ったものは，次のとおりである．平成 26 年度入学生の推薦の合計点が 0.64，同入学生の前期のセンター数 II・B が－0.60，平成 27 年度入学生の中期のセンター理科が 0.58，平成 28 年度入学生の中期のセンター理科が 0.54．全体的には，入学年度により相関係数が高い科目の傾向は異なっており，入試の成績と累積 GPA との間に相関は認められない．

②情報システム工学科

入試区分	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
推薦入試	2.02±0.37	2.16±0.54	2.00±0.50	2.21±0.56
一般入試（前期日程）	2.19±0.41	2.32±0.71	2.42±0.52	2.73±0.43
一般入試（中期日程）	2.38±0.59	2.46±0.53	2.22±0.49	2.51±0.63
統計学的有意差	推薦と中期の間にあり	なし	推薦と前期の間にあり	推薦と前期の間にあり

累積 GPA の平均値に関する t 検定では，平成 26 年度の推薦と中期の間に有意差があり，平成 28 年度と平成 29 年度では推薦と前期の間に有意差がある．いずれも推薦が低い．

入試科目で累積 GPA との相関係数が目立ったものは，平成 26 年度前期のセンター試験の総合点が 0.65，外国語が 0.50，平成 26 年度中期のセンター試験の総合点が 0.56，外国語が 0.54，平成 28 年度推薦の総合点が 0.57，平成 29 年度前期のセンター試験の総合点が 0.50，英語が 0.70，数学が −0.71，そのうち数学 I・A が −0.55，数学 II・B が −0.64 であった．全体的には，入学年度により相関係数が高い科目の傾向は異なっており，入試の成績と累積 GPA との間に相関は認められない．また，累積 GPA と入学年度の GPA との相関係数は入試区分に関わらず概ね 0.9 前後であり，例外的なものは平成 26 年度推薦の 0.75，および平成 27 年度推薦の 0.79 であった．

③人間情報工学科

平成 26 年度入学生までは，前身のスポーツシステム工学科である．

入試区分	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
推薦入試	1.76 ± 0.24	1.91 ± 0.39	1.81 ± 0.61	2.35 ± 0.27
一般入試（前期日程）	1.94 ± 0.37	2.08 ± 0.51	2.30 ± 0.67	2.60 ± 0.66
一般入試（中期日程）	1.94 ± 0.51	2.38 ± 0.50	2.13 ± 0.68	2.74 ± 0.52
統計学的有意差	なし	あり	なし	あり

累積 GPA の平均値に関しては，いずれの年度においても推薦の値が前期と中期の値よりも低くなっている．また，平成 27 年度の推薦と中期の累積 GPA の平均値については，t 検定の確率が 0.029 であるから中期の累積 GPA の平均値が前期よりも高い傾向にあると考えられる．さらに，平成 29 年度の推薦と中期の累積 GPA の平均値については，t 検定の確率

が 0.021 であるから中期の累積 GPA の平均値が前期よりも高い傾向であった．なお平成 26 年度と平成 28 年度の累積 GPA の平均値には有意差は確認されなかった．

入試科目で累積 GPA との相関係数が目立ったものは，平成 26 年度中期のセンター試験国語が 0.61，平成 27 年度中期の総合点，センター試験数学およびセンター試験数Ⅰ･A が，それぞれ 0.74，0.66，0.55 であった．平成 28 年度では，推薦の合計点が 0.66，前期のセンター試験数Ⅱ・B およびセンター試験物理・物理Ⅰがそれぞれ 0.54，-0.52 であった．さらに平成 29 年度中期のセンター試験合計点が 0．66 であった．全体的には，入学年度により相関係数が高い科目の傾向は異なっており，入試の成績と累積 GPA との間に相関は認められない．また，累積 GPA と入学年度の GPA との相関係数は入試区分に関わらず概ね 0.9 前後であり，例外的なものは平成 26 年度推薦の 0.44，平成 26 年度中期の 0.81，および平成 27 年度推薦の 0.79 であった．

④情報工学部まとめ

一部を除いて，入試区分ごとの平均点に有意な差は認められないものの，推薦入試の平均点が総じて低い．推薦入試では意欲や基礎学力がある学生が取れていない可能性がある．また，総体的にみて，入試の成績と入学後の成績に相関は認められない．入学年度の GPA とその後の GPA との相関が極めて強いので，初年度教育が重要であると考えられる．

３．デザイン学部

①デザイン工学科

デザイン工学科では，平成 25 年度入学生から平成 28 年度入学生について，入試日程別に平成 28 年度前期分までの GPA を用いて比較した．同一入試内の比較において一部 GPA 値に離散が認められたが，すべての年度において入試の違いによる成績の傾向は近似しており有意な差は確認できなかった．

入試形式	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
推薦入試	2.0±1.0	2.2±0.6	2.3±0.5	2.5±0.5
一般入試（前期日程）	2.0±0.9	2.1±0.8	2.2±1.1	2.4±0.7
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

入試科目別にみた入試得点と入学後の成績との関係については，一部の年度の推薦入試の実技には中程度の負の相関が確認できたが，説明変数の係数や定数項の確からしさが小さく（$t<1$・$p>0.05$），統計的に無意味と判断できた．一般入試においてデザイン工学科では平成 27 年度入試から大幅な変更があり，その前後の比較は完全ではないが，概ね実技試験と成績には相関が見られなかった．センター入試については平成 27 年度入学生において，中程度の相関が見られた．特にセンター入試外国語（英語・リスニングを含む）とその他の二教科の合計点ともに中程度の相関が確認できた．

一方，平成 28 年度入学生にはセンター入試の得点と成績には弱い相関しか見られない．これは平成 27 年度入学生と平成 28 年度入学生の間に入試科目の選択に大きな違いがあること（平成 27 年度入学生は数学Ⅰ・A の選択者が比較的多い）の影響も考えられる．これはセンター入試の科目別難易度の傾向との兼ね合いもあることから，今後も入試得点と入学後成績との関係に注視しながら追跡調査を継続する必要が認められた．センター試験利用科目や実技試験のありかた，面接の内容も含めて，検討と必要な改善が望まれる．

②造形デザイン学科

造形デザイン学科では，平成 26 年度入学生から平成 29 年度入学生について，入試日程別に平成 29 年度前期までの累積 GPA を用いて比較したが，すべての年度において有意な差は確認できなかった．

入試形式	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
推薦入試	2.4±0.3	2.7±0.2	2.5±0.2	2.9±0.4
一般入試（前期日程）	2.3±0.3	2.6±0.3	2.6±0.3	2.7±0.4
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

入試科目別の得点と入学後の成績との相関については，実技・面接ともに，すべての年度に有意な相関は確認できなかった．一般入試のセンター試験における科目別得点と入学後の成績との関係については，平成 28 年度の国語のみ，得点と入学後の成績に有意な中程度の正の相関（r=0.40，p=0.02）が確認できたが，国語の他の年度および外国語，数学，地歴公民，理科のすべての年度の得点と入学後の成績に有意な相関はみられなかった．

センター試験科目ごとの得点には一部を除き有意な相関は認められなかったが，センター試験の合計得点をみると，平成 26 年度は有意な中程度の正の相関（r=0.58，p=0.001），平成 28 年度は有意な弱い正の相関（r=0.37，p=0.03），平成 29 年度は有意な弱い正の相関（r=0.37，p=0.02）が確認できた．以上の結果から，今後も追跡調査を継続するとともに，センター試験と実技試験の配点，実技試験や面接試験の内容などの検討が望まれる．

2-3-3　研修会等の実施

(1) 教育開発講座

今年７月に，「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」が示され，多面的・総合的評価に向けた入試改革が各大学において本格化している．教育開発講座では，入試改革を進めるうえで重要な枠組みとなるアドミッションポリシーの策定について佐賀大学アドミッションセンター長の西郡大先生より最新の政策動向の整理およびそれに向けた佐賀大学の改革事例について紹介していただき，本学教職員が 66 名参加し，本学のアドミッションポリシー策定方針など大いに参考となった．

（演　　題）「高大接続改革にどのように向き合うか」
（講　　師）西郡 大先生　佐賀大学教授 ・アドミッションセンター長
（日　　時）平成 29 年 12 月 25 日（月）
（講演時間）15：00～16：30 講演　16：30～17：00 ディスカッション
（会　　場）学部共通棟北 8105 講義室

2-3-4　入試広報活動

(1) オープンキャンパス 2017

１　開催日

平成２９年７月２２日（土）情報工学部，デザイン学部
平成２９年７月２３日（日）保健福祉学部

２　学部・学科参加者数（比率の小数点以下は四捨五入）

学　　部	参加者総数	（参考）直近３年の参加者数			前年度比較	
		平成 28 年度	平成 27 年度	平成 26 年度	H29－H28	H29/28
保健福祉学部	1，850	1，680	1，890	1，750	＋170	＋10%
（看 護 学 科）	(710)	(550)	(670)	(620)	(＋160)	(＋29%)
（栄 養 学 科）	(560)	(500)	(580)	(560)	(＋60)	(＋12%)
（保健福祉学科）	(580)	(630)	(640)	(570)	(－50)	(－7%)
情報工学部	490	220	320	270	＋270	＋133%
デザイン学部	580	580	530	450	0	0%
大学計	2，920	2，480	2，740	2，470	＋440	＋18%

３　アンケートの実施

当日、参加者を対象にアンケート調査を行い１１８８人から回答を得た.

【内訳】保健福祉学部延べ９２４人，情報工学部延べ２１９人，デザイン学部延べ２２２人

（１）男女比と学年構成比

〈男女比〉　単位：%

学　部	男子	女子
保健福祉	5	９５
情報工	７５	２５
デザイン	１７	８３
全体	１７	８３

※未回答者は除外している.

〈学年構成比〉　単位：%

区分	平成２９年度	平成２８年度
3年生	３７	４５
2年生	４１	３５
1年生	１８	１７
その他	4	3

※未回答者は除外している.

（２）県内外の状況

〈県内外比率〉　　単位：％

学　部	県　内	県　外	平成 28 年度の県外比率
保健福祉	８０	２０	２５
情報工	８１	１９	２２
デザイン	５６	４４	４９
全体	７６	２４	２３

※未回答者は除外している.

〈出身県上位１０県〉

順位	県名	回答者数	順位	県名	回答者数
1	岡山	８９５	6	徳島	１８
2	兵庫	６４	7	鳥取	１２
3	広島	５５	8	島根	１１
4	香川	３７	9	山口	7
5	愛媛	３４	１０	京都・大阪 高知・宮崎	6

「もっと説明が必要な情報は何ですか？」に対して，通っている先輩の１日，窺１週間のスケジュール，受験勉強について，実習先の具体的な情報，近隣の下宿の有無（寮の有無），平均的な生活費，通学生の割合，卒業生の具体的な職種，卒業生の大学の満足度，設備，工作機器，ゼミ内容などがあった．また，「本学に興味を持った理由は何ですか？」に対して，助産師の資格が取れること，文系でも受験ができるから，親からの勧め，知り合いが通っている，自分の行きたい学部があったから，学びやすい施設が整っている，情報メインの工学部であること，一番近い公立でデザインを学べる大学だったから，国公立の芸術学部を探していたからなどがあり，本学の特色のある学部への興味が高いことが窺えた．「志望校選びで主に参考とするものは何ですか？」に対して，大学の雰囲気，学生の雰囲気や先輩の話，国家試験の合格率，学費，卒業後の就職先，自分の行きたい学科がある，勉強環境や先生と生徒の交流の深さ，大学の難易度などがあり，大学の雰囲気やイメージなどの印象が大きいことが窺えた．ただし，自由意見の中にはキャンパス内の案内が不親切という意見もあり，看板や案内係の増員など運営に関しては今後の課題である．

(2)　大学院オープンキャンパス

１．保健福祉学研究科のオープンキャンパス２０１７の開催状況

・開催日時

平成２９年５月２７日（土）

９：３０～　　受付開始（８２０１）

１０：００～　　全体説明（同上）

・ 研究科長がパワポで全体説明，試験日程，長期履修制度，授業料減免，奨学金等についても説明をした.

１０：３５～　　各専攻に分かれて説明

１０：３５～１５：００

経済的支援の相談窓口及び過去問閲覧コーナー（８２０１）を設置し，過去問閲

覧は１０人程度．そのうち４人は全文を書き写していた．

・参加人数

８９人	看護学専攻・大講座	２９人
	栄養学専攻・大講座	１１人
	保健福祉学専攻・大講座	５０人

⑶ 高校訪問

本年度は各学部学科別に高校訪問を行い，高校側に本学の情報を提供した．

1．保健福祉学部

①看護学科

平成 29 年度に看護学科は 21 校の高校訪問を実施した．本年度は卒業生からの訪問校への手紙を渡すことも試みた．また，訪問前に前年度の報告内容を共有した．その結果，進路指導等の教諭からの質問に苦慮することも少なかった．全体的に看護学科への進学を希望する生徒は多く，教諭からも具体的な質問（受験や実習病院や期間など）があった．入試の受験方法は，高校側の方針（特徴など）もあり一般入試での入学を中心に指導する高校，推薦での入学を強く希望する学校など様々であった．

少子化が進み，大学進学者，受験者数が減少することは明らかである．そのため，私立大学では高校訪問が必須となっている．公立大学においても早期からこのような取り組みを行っておくことは高校教諭との信頼関係の構築等につながると考えられる．また，本年度入学した学生の状況を知らせることは高校教諭にとっても良いと思われた（但し，手紙等が必ずしも必要かどうかは検討しても良いかもしれない）．よって，訪問する教員が事前に訪問先の卒業生（本学在校生）の状況を把握し，伝えることは有用であると思われる．なお，事業の改善に資するため，受験者，合格者，入学後の成績などにどのような効果があるか評価が望まれる．

②栄養学科

平成 29 年度は，県内 17 校および県外 6 校の計 23 校の高校を訪問した．訪問マニュアルにしたがい管理栄養士資格，国家試験の合格状況，就職率及び進学も含めて就職先，カリキュラム，入試について順次説明し，最後に授業開放やオープンキャンパスの案内を行った．また，今回は訪問教員があらかじめ高校出身者（在学生）からの手紙を用意し進路指導教員に手渡しすることを試みた．手紙の中で，本学での大学生活や学業でがんばっている様子，高校生に伝えておきたい県立大学の魅力などが伝えられた．このような手紙や大学案内の卒業生掲載ページを紹介するなど，優秀な学生を送っていただいていることの感謝を述べてから，学科の案内を進めることは好印象であるとうかがえた．

高校側からは，文系では受験できないか，推薦入試の県外枠の希望などの意見が目立った．

また，大学を代表していることを意識して他学科の情報などもある程度は知ってから訪問する必要があった．また推薦入試での試問試験については受験生や高校へ機会があるご

とに繰り返し説明する必要はあると考えられた.

今年度は県内高校への訪問に重点を置いて県外は香川と兵庫のみ行った. 県内, 県外とも多く受験生, 卒業生をだしている高校は好意的にきいてくれるが, 訪問興味や関心を示さなかった高校も中にはあったため, 開拓は必要ではあるが, 本学の受験者層を考慮して訪問先を決定してもよいと思われた.

③保健福祉学科

4 月～7 月の期間に 21 校（内訳，看護，栄養学科と共に 15 校，看護学科と共に 1 校，保健福祉学科単独での訪問 5 校）を，10 名の教員で訪問した. 各校 1 時間程度で説明と先方からの要望などを聴取した. 持参資料は，以下のとおりである. 大学案内，大学院リーフレット，岡山創生学チラシ及び岡山創生学パンフ，高校生のための大学授業開放チラシ，2 専攻のリーフレット，子育てカレッジリーフレット

説明にあたっては，2 専攻それぞれに教育の理念や特徴，教育課程の概要，アドミッションポリシー等についての説明資料を共有するとともに，卒業後の進路，副専攻（岡山創生学), スタディーツアー, 社会福祉学専攻の国試の合格状況・対策状況と入試定員の変更（前期：20 名→24 名，後期：8 名→4 名））を伝えた.

高校側からは以下の意見等があった.

・前期入試の定員が 20 名から 24 名へと変更されたことは，高校の立場から嬉しい. 生徒への入試支援に役立てたい.

・県大の推薦を受験していても，県内の私学に受かると（川福など）そこでよいと考える生徒もいる.

・社会福祉専攻は，生徒がイメージとして分かりにくい.

・全体的に地元志向が多く，本学の保健福祉学部への進学を希望する生徒は多い

・ハードルが高いので，他大学のように県内（地域）枠を設けてくれると嬉しい

・30 年度入試生徒は 350 名，内福祉関連希望は 2～3 名，幼児教育等希望は 2～3 名程度で例年どおりの傾向である

・女子学生が多い（女子生徒 180 名，男子生徒 140 名）こともあり，4 年生の進学希望は，福祉 2 名（理系 1 名，文系 1 名），子ども（小学校・幼稚園教諭，保育士）20～30 名程度である

・近年本学の取り組みの「岡山創生学」について関心が高い

・紙媒体の広報資料は，進学資料室に置いており生徒も見ることがあり，Web と併用している

・推薦入学した生徒が入学後についていけるか心配（問題ないと回答）

なお，訪問校出身在学生からのメッセージ色紙も持参したが，高校側から「教員間で回覧したい」等の声があり好評であった.

2. 情報工学部

情報工学部を広く正しく知ってもらうために入試広報活動の一環として，情報工学部教員による高校訪問を実施し，平成 29 年度は，県内 34 校，県外 3 校（兵庫県 2 校，広島県 1 校），計 37 校の高校を訪問した．

訪問担当教員が，学部学科の教育や研究の概要，主な就職先，入学試験，オープンキャンパス，大学授業開放，COC+事業を持参した資料を用いて説明するとともに，平成 28 年度高校訪問の反省から，事前に訪問先高校出身者の修学状況や進路状況を把握し，高校側へ伝えることとした．情報工学部をより詳しく知ってもらうために，訪問の開始時期をオープンキャンパス実施日よりも早い時期に実施する必要がある．また，18 歳人口の減少を見据え，県内に留まらず，近隣各県の高校訪問の実施も今後検討すべき課題である．

高校側からの質問として，入試や卒業後の進路に関することが多く，一部の高校からは COC+事業の取り組みに関するものもあった．

2-3-5　高大接続事業

(1)　高校生のための大学授業開放

Ⅰ　実施日

平成 29 年 8 月 19 日（土）

10：00～（保健福祉学部）

10：20～（情報工学部）

13：30～（デザイン学部）

Ⅱ　授業内容

１．保健福祉学部看護学科

10：10～11：40　高校生のためのがん看護学入門（講義）　名越恵美　准教授（6316）

13：00～14：30　高校生のための母性看護学演習（演習）　池田理恵　准教授　他（6313）

13：00～14：30　高校生のための基礎看護学演習（演習）　浅井美穂　助教　他（6412）

２．保健福祉学部栄養学科

10：10～11：40　高校生のための臨床栄養学入門（講義）　入江康至　教授（6413）

10：10～11：40　高校生のための栄養教育論入門（講義）　川上貴代　教授（8201）

13：00～16：00　高校生のための生化学実験（実験）　川上祐生　准教授　他（8109）

13:00～16:00　高校生のための給食管理実習（実験）　田淵真愉美　准教授　他（8111）

３．保健福祉学部保健福祉学科

10：30～11：40　高校生のための国際福祉論・高校生のためのユニバーサルデザインの理論と実践（講義）　近藤理恵　教授・中村孝文　教授（8901）

10：30～11：40　高校生のための保育原理・高校生のための教育心理学（講義）
池田隆英　准教授・樟本千里　講師（8904）
12：30～13：20，13：30～14：20　高校生のためのソーシャルワーク演習（演習）
竹本与志人　准教授（8902）
12：30～13：20，13：30～14：20　高校生のためのケア演習（演習）
佐藤ゆかり　准教授　他（8903）
13：00～14：40　高校生のための保育内容（演習）　吉永早苗　教授　他（5201）
13：00～14：40　高校生のための乳児保育演習（演習）　柏まり　准教授（8904）

４．情報工学部
10:20～11:50　高校生のためのワイヤレス技術入門(講義)　大久保賢祐　教授(8102)
10：20～11：50　高校生のためのプログラミング言語入門（講義）
横川智教　准教授（8103）
10：20～11：50　生活を支える人間情報工学（講義）　穂苅真樹　教授（8104）
12：40～14：10　高校生のためのマイコンプログラミング入門（実験）
岸原充佳　准教授（2114）
12：40～14：10　高校生のための 3 次元 CAD 入門（演習）
福田忠生　准教授　他（2207）
12：40～14：10　生活を支える人間情報工学（実験）
井上貴浩　准教授　他（2906）

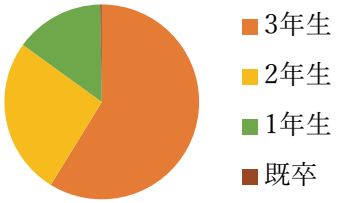
５．デザイン学部
14：00～15：30　建物（建築物）ができるまで（講義）　畠和宏　助教
14：00～15：30　つかいやすいをデザインする（講義）　益岡了　准教授
14：00～15：30　ハリウッド映画のタイムテーブルから見る”おもしろさ”の法則
（講義）　山下万吉　講師
14：00～15：30　家紋の造形技法- 驚異のデザイン発想を知る-（講義）
吉原直彦　教授
14：00～16：00　建築プレゼンテーションデザイン（実技）　津田勢太　准教授
14：00～16：00　レーザーカッター入門（実技）　金丸敏彦　教授　他
14：00～16：00　印刷で表現の幅を広げる（実技）　関﨑哲　准教授
14：00～16：00　レリーフで作る陶磁器コースター（実技）　中西俊介　准教授　他

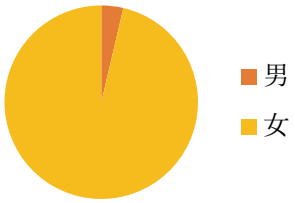
Ⅲ　実施状況
１．参加者数（アンケート回収数）
全体：477 名
保健福祉学部 300 名（看護 92，栄養 98，保福 110）

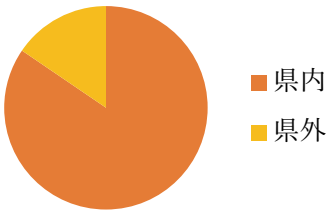
情報工学部 83 名

デザイン学部 94 名

参加者数内訳：







看護

学年		性別		県外学生	
3年生	53人	男	0人	兵庫県	1人
2年生	24人	女	92人		
1年生	14人				
既卒	1人				

栄養

学年		性別		県外学生	
3年生	48人	男	2人	兵庫県	6人
2年生	35人	女	96人	広島県	4人
1年生	14人			愛媛県	3人
無回答	1人			鳥取	3人
				香川県	1人
				高知県	1人
				山口県	1人

保福

学年		性別		県外学生	
3年生	31人	男	5人	香川県	4人
2年生	10人	女	44人	徳島県	2人
1年生	8人			愛媛県	1人

子ども

学年		性別		県外学生	
3年生	44人	男	4人	広島県	2人
2年生	12人	女	57人	愛知県	1人
1年生	5人			香川県	1人
				島根県	1人

デザイン

学年		県外学生	
3年生	55人	広島	10人
2年生	22人	兵庫	7人
1年生	17人	香川	3人
		大阪	2人
		京都	2人
		愛媛	1人
		高知	1人
		静岡	1人
		福岡県	1人
		山口県	1人

※情報工学部を除く

全学部の参加者数は昨年度（387 名）と比較して 90 名増加した．内訳は 1 年生が 14.8 %（昨年度 9%），2 年生が 26.2%（昨年度 25%）といずれも昨年度より増加しており，低学年の参加者の増加は，高校での学習のモチベーションの向上や進路決定への影響の観点からも意義があると考えられる．

また，東は静岡県，西は福岡県からの参加者もあり，県外からの参加者数は 15.5%と昨年（13%）より若干増加した．学部別ではデザイン学部の県外参加者の割合が 30.9%（昨年度 28%）と最も多く，続いて栄養学科が 19.4%（昨年度 10%），保福が 14.3%（昨年度 10%）であった．今後県外を含めて広く参加者を募るためには広報の工夫などが課題として挙げられる．

２．各学科におけるアンケート結果

２－１　看護学科

2017 年度はアンケート回収数 92 人で，昨年の 62 人と比べ 30 人増加した．高校別では，倉敷南，西大寺，総社南，岡山一宮からの参加者が，昨年と比べ大きく増加した．学年別では 3 年生の参加者は昨年 51 人，今年 53 人で大差ないが，1，2 年の参加者が昨年 11 人，今年 38 人と大きく増加した．

講義，演習に対する関心，理解では，昨年と内容，担当者ともに異なっているので，単純な比較はできないが，ほぼすべての回答が，内容への関心では「大変関心が持てた」「まあまあ関心が持てた」であり，内容の理解では「完全に理解できた」「まあまあ理解できた」であった．満足度は無回答 5 名を除き，全員が「大変満足」「まあまあ満足」であった．AP の理解は，無回答が 13 名とやや多く，「まあまあ理解できた」が 43 人で最多であった．「授業解放」を何で知ったか，では，「高校の先生」43 人，と「大学ホームページ」41 人が多かった（複数回答）．授業解放に参加した理由では，昨年と比べ「受験をするかの判断材料」を挙げた人が増加していた（複数回答）．学年別に解析すると，2 年生は他の学年に比べ受験するかどうかの判断材料を挙げた人が多かった．受験の予定では，昨年と比べ「分からない」との回答が増加していた．学年別に解析すると，1，2 年生は 3 年生に比べ，本学の受験は未定と答えた人が多かった．開催時期は「今回で良い」が 75 人で最多であった．

昨年と比べ，1，2 年生の参加者が増加しており，「本学の受験は未定」の人が「受験をするかの判断材料」にするため授業開放に参加する傾向が強まっている．

２－２　栄養学科

講義，実験，実習いずれもほぼ全ての回答が「大変関心が持てた」，「まあまあ関心が持てた」であったことと，「完全に理解できた」，「まあまあ理解できた」であったことから，内容はいずれも適当であったと考えられる．また，「大変満足できた」が 82%，「まあまあ満足できた」が 18%（無回答を除く）であった．

過去の授業開放と比べると，県外からの参加者の割合が増えていた．しかし，受験の予定の回答の中で，「一般入試のみ」の割合は増えておらず，「推薦入試のみ」の割合が減って，「分からない」の割合が増えていた．また，２年生や１年生の参加者数の割合も増えていた．これらのことから，大学の授業がどのようなものかを体験しに来た，という人が増えたと考えられる．実際，今回の「高校生のための授業開放」に参加した理由の最も多かった回答は「授業の雰囲気を知りたい」で 47%であった．今後は，複数年授業開放に参加すると本学科を受験する意欲が増すような，県外からの１，２年生も視野に入れて内容を充実させていく必要があると考える．

２－３　保健福祉学科

今年度から社会福祉学専攻・子ども学専攻の 2 専攻別建ての企画で実施した．

質問項目「内容への関心について」への回答について，昨年度は講義科目について「大変

関心が持てた」への回答率が平均 71%であったが，今年度の講義科目については社会福祉専攻が 78%，子ども学専攻が 84%であり，それぞれ上昇している．専攻別の企画は受講する高校生の関心に見合っていたことがうかがえる．今年度のアンケートでは講義・演習ともに両専攻ともほぼすべての回答が「大変関心が持てた」「まあまあ関心が持てた」，「完全に理解できた」「まあまあ理解できた」となっており，内容は適切であったと考えられる．参加理由は両専攻ともに「授業の雰囲気を知りたい」が最も多い（社福：97%，子ども 90%）．次いで「教員の雰囲気」が，社会福祉専攻：30%（15 人），子ども学専攻：52%（32 人）と多く示された．少人数制による専門職養成教育という両専攻の教育の実際がより伝わるような工夫が一層求められよう．また，「受験するかどうかの判断」については社会福祉専攻：30%（15 人），子ども学専攻：31%（19 人）であった．参加生徒のうち１・2 年生は，社会福祉専攻：36%（18 人），子ども学専攻：27%（17 人）であった．早い段階から本学への関心が存在することがうかがえる．この企画を「何で知ったか」については，両専攻ともに「高校の先生」が最も多く，５～6 月に実施した高校訪問の影響がうかがえた．

２－４　情報通信学科

午前中に講義「高校生のためのワイヤレス技術入門」，午後から演習「高校生のためのマイコンプログラミング入門」を実施した．参加者は，それぞれ，25 名，17 名であった．年度ごとに授業内容を変えているため，単純に例年との比較はできない．今年度で 3 回目となるが，学部全体では，参加者が年々増加している．

授業への関心については，「関心が持てた」，「まあまあ関心が持てた」，「どちらとも言えない」，「あまり関心が持てなかった」，「関心が持てなかった」の 5 段階で尋ねた．「関心が持てた」または「まあまあ関心が持てた」の割合は，講義が 84%，演習が 94%であった．また，授業内容の理解については，「理解できた」，「まあまあ理解できた」，「どちらとも言えない」，「あまり理解できなかった」，「理解できなかった」の 5 段階で尋ねた．「理解できた」または「まあまあ理解できた」の割合は，講義が 76%，演習が 88%であった．そもそも関心を持って申し込んでいるはずなので，いずれも妥当な割合と考えられる．授業の冒頭で説明したアドミッションポリシーの理解度は，76%であった．文章が固く，やや抽象的ではあるが，概ね理解できているようである．授業開放を知った手段は，例年と同様，「本学ホームページ」，「高校の先生から」，「オープンキャンパスで」が非常に多く，「友人から」が約 1 割である．参加理由は，「授業の雰囲気を知りたかった」が最も多く，次いで「受験するかどうかの判断材料にしたかった」であり，これも例年と変わらない．また，講義受講者の 24%，演習参加者の 41%が，本学科を受験する予定と回答している．受講後に受験の意志が固くなったかどうかは定かではないが，来年度以降は，申し込みの段階で受験の意思を尋ねてもよいかもしれない．

２－５　情報システム工学科

情報工学部はアンケートの選択肢について昨年度版から若干の変更を行った．それは，

「大変関心が持てた」を「関心が持てた」に，「全く関心が持てなかった」を「関心が持てなかった」に，「完全に理解できた」を「理解できた」に，「全く理解できなかった」を「理解できなかった」に変更したものである．したがって，昨年度のアンケート結果と単純に比較することはできない．

情報システム工学科の授業は講義，演習ともに昨年度と同じ科目名であったが，昨年度よりも参加者が若干増加した．講義，演習ともに関心度は昨年度と同様，ほとんどが「関心が持てた」または「まあまあ関心が持てた」であった．講義の内容の理解度が昨年度よりも若干落ちた（「理解できた」または「まあまあ理解できた」が 72%，昨年度は 85%）ので，内容が高度になった可能性がある．逆に，演習の内容の理解度は昨年度よりも上がった（「理解できた」または「まあまあ理解できた」が 88%，昨年度は 62%）ので，内容が改善されたものと考えられる．満足度は昨年度と同じくほとんどが「満足できた」または「まあまあ満足できた」であった．

アドミッションポリシーの理解度が昨年度よりも若干落ちた．入試内容の説明を充実する必要がある．授業開放を知った媒体は昨年度と変わらず，ホームページ，高校の先生，オープンキャンパスが多かった．高校に配布したチラシがどういう扱いになっているのか疑問である．参加理由も昨年度と変わらず，「授業の雰囲気を知りたい」が多く，ついで「受験をするかの判断材料」であった．また，情報工学部全参加者の内 20%が本学科を受験予定と回答している．本事業の満足度の高さは受験を後押しすることであろう．

２－６　人間情報工学科

体験講義への関心は，参加者のほぼ全員が高かった．また講義内容の理解もおおむね高かったが，一部の参加者にはやや難しかったようである．また実験への関心も参加者全員が高く，よく理解できていた．総合的評価からは，「満足した」が 60%，「まあまあ満足」が 36%であり，自由記述で好意的な感想が述べられていた点を踏まえると，参加したほぼ全員が授業開放に満足できたようである．

開催情報の収得は，「大学ホームページ」が最も高く，次いで「高校の先生」，「オープンキャンパス」であった．比較的「高校の先生」の値が高かったのは，7 月に行った人間情報工学科教員の高校訪問での PR が有効であったためと考えられる．

授業開放に参加した理由は，「授業の雰囲気を知りたい」が，全参加者の 8 割を占めており，次には「受験の判断基準」が高かった．講義と実験の参加者の多くが人間情報工学科受験（その多くが推薦）を希望している点を考慮すると，人間情報工学科受験を想定した下見を兼ねての参加者が多かったものと考えられる．ただし，人間情報工学科への参加人数としては情報工学部の他学科よりも若干低かったため，次年度以降，高校訪問などを通じた PR を積極的に行う必要がある．

２－７　デザイン学部

2017 年度はアンケート回収数 94 人で，昨年の 84 人と比べ 10 人増加した．高校別では，

県外からの参加者が，昨年と比べ大きく増加した（24 名→29 名）．学年別では 3 年生の参加者は昨年 40 人，今年 55 人で少し増加した．2 年の参加者が昨年 37 人から今年 22 人と減少し，1 年の参加者が昨年 9 人から今年 17 人に増加した．

講義，演習に対する関心，理解では，昨年と内容，担当者ともに異なっているので，単純な比較はできないが，ほぼすべての回答が，内容への関心では「大変関心が持てた」「まあまあ関心が持てた」であり，内容の理解では「完全に理解できた」「まあまあ理解できた」であった．満足度は無回答 9 名を除き，ほぼ全員が「大変満足」「まあまあ満足」であった．AP の理解は，無回答が 2 名で，「まあまあ理解できた」が 41 人で最多であった．「授業解放」を何で知ったか，では「大学ホームページ」50 人，「オープンキャンパス」29 人，「高校の先生」19 人が多かった（複数回答）．授業解放に参加した理由では，昨年と同様の傾向が見られ「授業の雰囲気を知りたい」「教員の雰囲気を知りたい」を挙げた人が多かった（複数回答）．「設備を知りたい」と「受験をするかの判断材料」が同数でそれらに続いて多かった．受験の予定では，昨年と比べ「分からない」との回答が減少していた．これは 3 年生の参加者が多くなった事とも関係し，また一般・推薦両方の受験希望者が増加していた．開催時期は「今回で良い」が 79 人で最多であった．

昨年と比べ，3 年生の参加者が増加しており，入試を希望する参加者の増加が推定される．また県外から授業解放に参加する傾向が強まっている．

２－８　まとめ

すべての学科も昨年と同様に講義形式と演習・実験形式の授業を企画したが，「大変関心がもてた」「まあまあ関心がもてた」と回答した参加者がほとんどを占め，理解度に関しても「完全に理解できた」「まあまあ理解できた」が大部分を占めた．

自由記述欄における「物理をもっと勉強しなければいけないなと思った」「情報通信工学科では本当に物理が重要になるのだなと思った」などの記載から，本事業の第一の目的である「大学の授業を理解するために，高校での学習がいかに重要であるかを理解してもらう」という高大接続事業としての役割については達成されていると思われた．さらに，「今回の演習で細かな頭部測定を体験し，改めて母性看護学に興味を持った．楽しく体験でき，ここで学びたいと思った」「今回の授業を体験して岡山県立大学で勉強したいという気持ちが強まりました」「とても分かりやすく社会福祉を学びたい気持ちが大きくなりました」「プログラミング言語など，プログラミングの基礎を理解することができてプログラミングに興味が出てきて楽しかった」「大学での授業の雰囲気，先生方，先輩方の様子を感じられてよかったです」など，本学で学ぶ意義や楽しさを伝えることで，本学に適性のある受験生の確保につなげるという事業の目標も達成されていると思われた．また，授業や演習では「わかりやすい授業で，理解できた」などの感想が最も多く，FD 活動などによる各教員の丁寧でわかりやすい授業への取り組みの成果も役立っていると思われる．

昨年度から各学部・学科のオリエンテーションもしくは最初の授業の中で各学科アドミッションポリシーの説明を取り入れているが，「理解できた」「まあまあ理解できた」が大部

分を占め，高校生にアドミッションポリシーを伝えることにも概ね成功していると思われる．

３　事業の広報

本事業を何で知ったか（複数回答可）に対しては，「本学のホームページ」37%，「高校の先生」26%，「オープンキャンパス」23% が多かった．また，その他 14%の中には「高校にチラシが貼ってあった」「保護者説明会を参加した親から」との回答が多かったことから，これらの広報はいずれも効果があると考えられる．なお，事業に参加した理由（複数回答可）としては，「授業の雰囲気を知りたい」が 46%と他に比べると多く，「教員の雰囲気を知りたい」19%，「受験するかの判断材料」15%が続いたが，「キャンパスや学内に入ってみたい」7% が少なかったことから，オープンキャンパスとの趣旨の違いについては参加者に十分伝わっていたと思われる．

なお，本年度の入学時アンケートの結果から，入学者の中で 2016 年度の授業開放に参加した学生が入学者の 30%を超えていた学科は，子ども学専攻（52.4%），社会福祉学専攻（35.0%），看護学科（30.8%）であり，造形デザイン学科（27.3%），栄養学科（25.0%）も入学者に占める受講者の割合は高かった．一方，推薦入試入学者に限れば，保健福祉学部全体の 75%，デザイン学部全体の 52%の学生が受講者であり，情報工学部でも人間情報工学科の 50%の学生が受講者で，本事業は本学の受験者獲得に向けて大きな効果をもたらしていると考えられる．

４　今後の課題

入学時アンケートの結果から，本学出願の参考にしたものとして，子ども学専攻を除いてすべての学科において，授業開放はオープンキャンパスよりも下回っていた．高大接続事業として本事業が高校生にとって進路の参考となることは必須の課題であり，今後もさらに広報活動を強化し，調査を続ける必要がある．出前講義の依頼が一件もなかったことについては，各学科に高校側からの直接依頼の授業との区別を含めて，あり方そのものを検討する必要がある．また，熱中症の発症予防に向けて積極的な飲料補給を促すなど大学としての十分な対策が必要である．

高校生のための臨床栄養学入門

高校生のためのケア演習

高校生のための3次元CAD入門

レリーフで作る陶磁器コースター

(2) その他の高大接続事業

本学に高校生が来校し，講義や実験などを受ける形で実施した連携事業は以下の通りである．

実施日：平成 30 年 1 月 29 日（月），1 月 31 日（水），2 月 20 日（火）
　　いずれも 16 時～18 時
内容：食品の機能性を測定する実験方法の指導
受講者：清心女子高等学校
　　総合的な学習・物質科学課題研究選択者　２年生７名，引率教員１名
場所：保健福祉学部棟 6214 生理・生化学実験室，学部共通棟（南）6207 理化学実験室
担当教員：栄養学科　伊東秀之教授

2-3-6　まとめと課題

平成 32 年度からの大学入学共通テストの導入を控え，平成 30 年度初頭にアドミッションポリシーの公表予定に向けて，これまでに収集した入学者成績追跡調査ならびに入学時アンケートの分析結果に加えて，本年度は県内高校との高大接続合同作業部会も開催され，学力の３要素を醸成に向けた高大接続改革を進めてきた．今後，高大接続事業や入試広報などの改革を積極的に進め，高大接続の更なる充実を図ることが必要と考えられる．

2-4 共通教育部会

共通教育部会は，大学教育開発センター規程第2条第1項第7号に示される「共通教育の充実及び共通教育と専門教育との連携に関する」業務を実施するために設置された部会である．共通教育科目に対するカリキュラムの企画・立案を行うとともに，教養教育の体系化，教養教育に対する評価基準の作成と実施，共通教育におけるアクティブ・ラーニング授業の企画と実施などが具体的な業務である．今年度の取組について，概要は以下の通りである．

・各学部の3つのポリシーにおいて共有すべき教養教育のあり方に基づき，共通教育プログラムカリキュラム・ポリシーを検討した．

・共通教育プログラムカリキュラム・ポリシーに基づき，平成30年度入学生からの共通教育改定カリキュラムを策定した．

・「学修効果向上を目指したアクティブ・ラーニング教室の整備」の事業名で，大学教育開発センターと連名で，8105室を対象として新規重点事業に取り組んだ．

・平成29年度から導入したクオーター制について，英語を中心に課題を抽出した．今後，クオーター制の利点を活かす取組みを推進するとともに，セメスター制と比較しながらこれを評価し，最良の開講期運用のあり方を判断することとした．

・平成28年度入学生について，TOEICスコアの経年変化を測定した．その結果に基づき，2年2Qに英語科目を配置するなど，時間割の改定を行った．

検討した共通教育カリキュラム・ポリシー（案）は下表のとおりである．

【共通教育プログラム】 共通教育プログラムでは，知的実践的自律性を培うため，教養教育の導入，理論，実践を網羅する次の科目群を編成しています．
(1)　高校の学びから大学での学びへの転換と準備ならびに大学生としての自律を促す科目群
(2)　人間や社会及び文化について考えるため，普遍的な理論や知識を習得し人間理解を深めるとともに，社会の仕組みや歴史を習得し，そのあり方を問う論理的思考力や課題発見力を養う科目群
(3)　自然現象やそれに関わる発見から普遍的な真理を探究することを通じ，論理的思考力や課題発見力などを身につけるとともに，そのために必要な情報処理などの技能を習得する科目群

(4)　心身の健康に関する理論や知識を習得し生活する上で適切な判断を導く思考力を養うとともに，生涯にわたり健全な社会生活を送るための技能を習得する科目群
(5)　グローバル化する国内外の地域で活躍するために必要な語学力を育成し，異文化理解を深める科目群
(6)　地域で活躍するために必要な地域の理解と，他者との協働性を養成する科目群

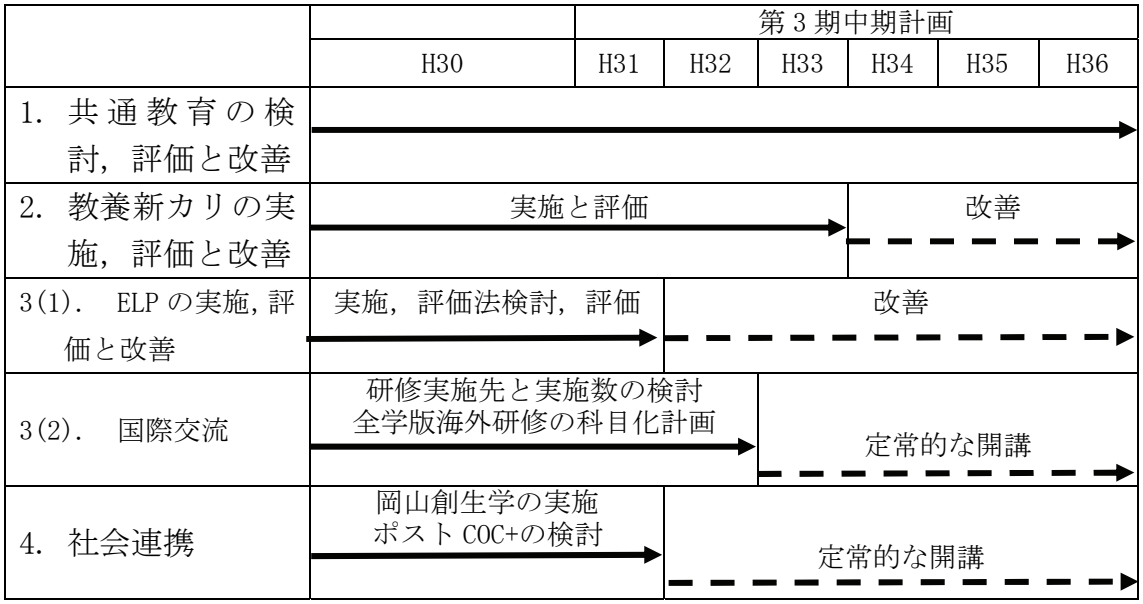
最後に共通教育部会の今後の課題について，スケジュールも含めて述べる．

1. 共通教育全般について，目標を達成すべく内容を継続して検討，評価し，評価結果に応じて改善する．

2. H30 年度から導入する教養新カリキュラム（人文・社会科学，自然科学，健康科学）について，単位数の適正化や科目数の削減も視野に入れつつ内容を検討，評価し，評価結果に応じて改善する．

3. 語学国際では，(1) H28 年度から導入した ELP の学修成果について，現在の評価方法を検証するとともに，新たな評価方法を検討する．さらに，評価結果に応じて改善する．また，(2) 国際交流センターと協働で，語学文化研修，海外研修として効果的な実施先と実施数を検討するとともに，全学版海外研修の授業科目化を計画する．

4. 社会連携では，H31 年度で終了する COC+事業について，その後のカリキュラムについて検討する．さらに，H32 年度から定常的な開講へ移行する．



2-5　FD 部会

2-5-1 概要

FD 部会では,「教育の質の改善」を目的に，主として，1）相互授業参観，2）授業評価アンケート，3）FD 研修会について取り組んだ．FD 研修会の企画に際しては，平成 29 年度より始まったクォーター制では原則週 2 回の授業が実施され，これを契機にアクティブラーニングを導入した授業が拡充されるであろうことを考慮した．また，相互授業参観結果を授業の実践に活かすための授業改善意見交換会を企画すると共に，教員への支援に関する取り組みを行った．以下，各取組についての詳細を報告する．

2-5-2　相互授業参観

2-5-2-1　相互授業参観の概要

(1)平成 29 年度授業参観の方針

平成 17 年度の講演会，平成 18 年度のモデル授業参観の実績を踏まえ，平成 19 年度より授業の工夫や改善のための研鑽機会を設けるという目的のもと，全専任教員を対象とした相互授業参観を継続実施してきた．本年度においては，実施方法は昨年度取組と同様とし，実施時期及び期間はクォーター制に応じた設定（第３クォーター及び第４クォーターに分割し，各２週間を確保）に改めた．なお諸事情により本年度は，相互授業参観 web システムの利用を休止した．

(2)平成 29 年度授業参観の実施内容

1)目的

具体的な授業の進め方や指導技術について学び，自己の授業環境で活かすことのできる指導方法を模索することにより，よりよい授業づくりを推進する．

2)実施方法

①公開授業の開示

すべての専任教員（助手を除く）は，第３クォーターまたは第４クォーターより，公開する授業科目１コマ（授業形態は問わない）を選び，授業概要，月日，時限，教室名を知らせる．共通教育を兼務する教員は当該科目の公開を行なうものとする．ただし実施期間に該当するものがない場合は学部教育科目でもよい．2 コマ以上の連続授業については，原則そのうちの１コマを公開する．

②参観授業の選択

教員は公開授業一覧より参観希望授業を選択する（他学部教員の公開授業を参観してもよい）．

③実施期間

第３クォーター　10 月 18 日（水）～10 月 31 日（火）(2 週間)　および
第４クォーター　12 月 4 日（月）～12 月 15 日（金）(2 週間)

3)授業参観レポート

授業参観終了後，参観教員は下記項目についてレポートを作成し，公開教員に提出する．

① 観点別 6 項目の意見・助言（意見・助言の記述及び，特に参考になった項目へのチェック）

項目 1　授業の準備・導入

（例）環境づくり，出欠確認の仕方，前回授業内容の振り返り，学習目標の確認　等

項目 2　授業の構成

（例）形式・構成，時間配分，アクティブラーニングの活用　等

項目 3　授業の展開技術

（例）重要ポイントの強調，話し方，板書の仕方　等

項目 4　教材の内容・活用

（例）(適切な）内容・形態，視聴覚機材等の適切な選択と使い方，教材提示のタイミング　等

項目 5　学生への関わり

（例）学生とのコミュニケーションの仕方，学生の意欲や理解を高める関わり方，理解力の異なる学生への配慮　等

項目 6　授業のまとめ

（例）授業内容の振り返り，予復習など自己学習の促進　等

②その他，授業全体を通して参考となった点・工夫が見られた点・助言等（自由記述形式）

③今後，自身の授業改善において具体的に採り入れたい点（自由記述形式）

公開教員はコメント欄にコメント記入し，レポートを参観教員と各学科授業参観担当委員の双方に提出する．

4)授業改善意見交換会

相互授業参観活動を基に，具体的な授業の進め方や指導技術について意見交換・情報共有し今後の授業改善に役立てることを目的に，平成 30 年 2 月 2 日に授業改善意見交換会を開催した（詳細は後述）．

2-5-2-2　相互授業参観の結果

相互授業参観後に提出された授業参観レポート 68 枚を分析した結果は次に示す内容であった．

(1) 参観報告者と授業公開者の集計表

学科教員数については平成29年12月1日現在、n(%)

授業公開者 / 授業参観者	看護学科 (教員21名) 公開者11名	栄養学科 (教員18名) 公開者10名	保健福祉学科 (教員27名) 公開者16名	情報通信工学科 (教員21名) 公開者17名	情報システム工学科 (教員20名) 公開者13名	人間情報工学科 (教員16名) 公開者15名	デザイン工学科 (教員19名) 公開者11名	造形デザイン学科 (教員22名) 公開者17名	計 (全教員164名) 全公開者110名
看護学科	2	1				1			4 (19.0%)
栄養学科	1	2	1						4 (22.2%)
保健福祉学科			11			1	1		13 (48.1%)
情報通信工学科	1			8	1			1	11 (52.4%)
情報システム工学科				3	4	2	1		10 (50.0%)
人間情報工学科			1			6			7 (43.8%)
デザイン工学科			1				3	2	6 (31.6%)
造形デザイン学科								13	13 (59.1%)
計	4	3	14	11	5	10	5	16	68 (41.5%)

(2) 6つの観点別の意見・助言の結果

授業の準備・導入では，53 件の意見があった.「直前のレポートの傾向を解説」「基本的な事項の指示」「前回の復習テスト」「言葉だけの振り返りだけでなく，資料を活用」など，効果的な前回授業の振り返りに関してや，「本時の学習目標を記載した資料を配布」「間違えることも許容される雰囲気作り」「関連授業で用いた資料を Web 上で公開し自主学習を促す」など効果的な授業中の学生への指針に関して，肯定的な意見があった.

授業の構成では，56 件の意見があった.「学生の相互交流する機会を設ける」「ビデオ教材を活用しながらロールプレイングやグループ討論」などアクティブ・ラーニングを効果的に活用していた意見や，「復習 10 分→導入 30 分→演習 30 分→講義」「最初の 20 分で復習、残り 70 分で講義」など効率的な時間の使い方や，「レポート提出にはっとりんを用いる」「クォーター制による演習科目の 2 コマ連続をうまく活用」といった効率的な機材の活用，クォーター制に対応した構成に関する意見があった． また，否定的な意見として，「解説の時間が長め」であるという構成に関する指摘もあった.

授業の展開技術では，56 件の意見があった.「重要な点はゆっくり解説する」「課題を問いかけて学生の関心を惹く」「文意が明瞭」「専門的な用語をできるだけ一般的な言葉で説明」「学生が気づくように少しずつヒントを出す」など，授業の展開や話し方・態度・技術に関して肯定的な意見があった．また，「重要な事項については説明を強調かつ繰り返す」など学生の理解度・到達度を確認する肯定的な意見があった．しかし「板書を活用しノートやメモが取りやすい授業」という肯定的な意見もあった一方で，演習科目で「ノートを取っている学生が少ない」など，学生の授業参加に対する指摘もあった.

教材の内容・活用では 59 件の意見があった.「学生が主体的に考えるように方向付けができていた」「学生授業参加のひとつとして音読を導入し効果を上げている」「小テスト，ペーパー資料，ビデオと受講生に飽きさせず，かつ，学習の定着率が高い教材活用」「配布物が事前に渡されており分量も適度」など，教材の内容だけではなく，配布のタイミングにも知識の習得に効果があることが述べられていた.

学生への関わりでは，61 件の意見があった.「学生のアイディアを決して否定せず，常にポジティブに評価する」「積極的に丁寧に学生に語りかけ」など，学生個々への対応が

できているといった意見や，「よく目配りして、質問を促すなど積極的なコミュニケーション」「学生への質問や声かけなどが頻繁」など，学生の参加を促す工夫が取り上げられていた．また「学生の求めるレベル・分野に対する適切な助言」「ときどき直接当てての質疑」といった学生の集中力持続への工夫が取り上げられていた．

授業のまとめでは，51 件の意見があった．「各自がノートを作成し，毎回の学びの振り返りが行える工夫」「授業のまとめは，はっとりんで行う」「次課題の予告が的確に伝えられていた」など，予習・復習，自己学習を促す工夫に対しての意見が挙げられていた．また「本日の気づきを記入する個別のワークシート作成」「授業の補足資料を Web にアップする」「授業最後に，講義内容の整理」「授業の最後にアクティブラーニングを取り入れたミニッツ・ペーパーの書き込みが行われていた」など，まとめ方の工夫があったことが取り上げられていた．

授業全体を通して参考となった点や工夫が見られた点では，54 件の意見があった．「事前の準備と，環境づくり，学生の意欲の高め方」「個々の学生の感想を尊重し，異なった意見にもそれぞれに意味やそれが導き出される背景があることを解説する」「常に深く考えさせる問いの投げかけが頻繁に行われていた」など，学生を興味深く聞き入れさせることや，学生の理解度を高めるための工夫があったこと，また，「レポート採点にルーブリックを用いる」との報告もあり，採点基準を示すことで，学生の到達目標を具体化する工夫があったことも報告されていた．

今後，ご自身の授業改善において具体的に採り入れたい点では，58 件の意見があった．「座学と思われる授業にも、グループディスカッションを取り入れたい」「学生が主体的に正解に気づいていけるような話し方」「授業最後の振り返りを自分でさせる」「その日の目的がはっきりと伝わる工夫」といった今後採り入れたいことや，「学生が主体的に取り組んだり，自分の意見を形成できるような内容」「学生自身の考える力を育成させてゆくというプロセス」など，今後授業の方法を考える上で自身の授業改善として参考にしたい内容が報告されていた．

授業公開教員コメントでは，66 件のコメントがあった．参観者の意見や助言を受けて，「理論を伝えることを優先し，学生とのコミュニケーションが不足している」と感じたり，「板書とスライドの併用」など助言に対し今後取り入れていきたいといったコメントがあった．また，参観者の肯定的な意見や参考にしたい内容に対して公開教員から丁寧に補足説明がされているコメントもあった．

2-5-3　授業評価アンケート

本学では，FD 活動の一環として，平成 16 年度より定期的（毎学期末）に授業評価アンケートを行っている．授業科目ごとの集計結果は各授業担当者にフィードバックし授業改善に活用してもらうとともに，　これらのデータに基づいた評価尺度の妥当性・信頼性の検討，評価得点の経年変化の吟味など統計的分析も随時行っている．また，組織的（学部・学科・

コース・カテゴリー 別授業科目単位等）な教育改善の資料として用いられてもいる．今まで，授業評価アンケートは変遷を経てきたが，平成 29 年度から教学システム（Campus Square,「はっとりん」）が導入されたのを機に，新しい web アンケートを開始した．試行平成 28 年度後期から開始しているが，それは web 上ではなく，紙ベースで実施されたものである．授業評価アンケートは，過去数年共通 6 科目で実施されてきたが，新アンケートでは 18 問に自由記述等を加えたものになっている（本年度教育年報の教育評価部会の項参照）．

共通 6 項目のアンケートの設問は以下に示すようなものである．

授業評価アンケート共通６項目

問１　受講して知的刺激を受けましたか

問２　真剣に受講しましたか

問３　教員の熱意が感じられましたか

問４　学生の理解度に注意していましたか

問５　授業の進め方は丁寧でしたか

問６　総合的に判断して満足しましたか

(1)授業評価アンケートの実施方法・活用方法

平成 29 年度については，原則として全授業科目（非常勤講師担当科目を含む）を評価対象とするが，学外実習をともなう科目や履修者が 4 人未満の科目などは，本学統一様式によるアンケート対象からは除いた．アンケートは授業科目ごとに全受講生を対象として無記名で学期末に実施した．なお，平成 28 年度までは従来と同じアンケート（5 段階評価，マークシート方式）を実施したが，平成 29 年度以降は Web による回答方式に改め，質問項目を大幅に見直した新アンケート（5 段階評価）に変更した．回収されたアンケートは大学教育開発センターIR 部門が集計し，後日，統計処理した資料を授業担当者に送付している．学部・学科・コース・授業科目によっては，これらの資料に基づいた授業改善策などの検討が行われている状況である．

教員に対するアンケート結果のフィードバックは設問が増えたことによる情報量や質の関係から，従来の 6 項目の場合より改善の手掛かりが得られやすいと考えられるが，その調査は今後の課題である．

一方，アンケートの回答者である学生に対する直接的なフィードバックは現在行われていない状況である．現在のシラバスに有用と思われる情報を記して科目を履

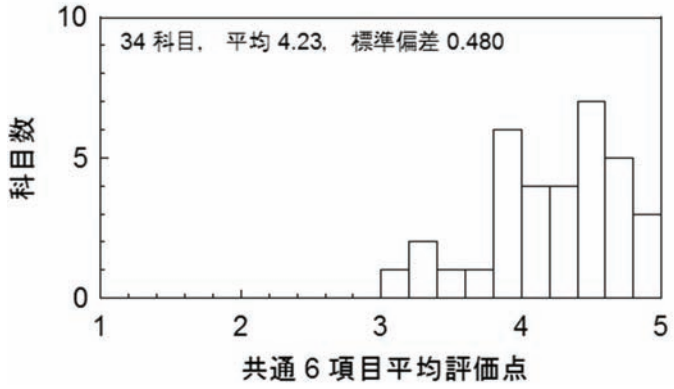
修登録する際の参考に供する方法が検討されているが，未だ具体案とはなっていない状況である．

(2)アンケート集計結果の概要（平成 28 年度後前期及び後期）

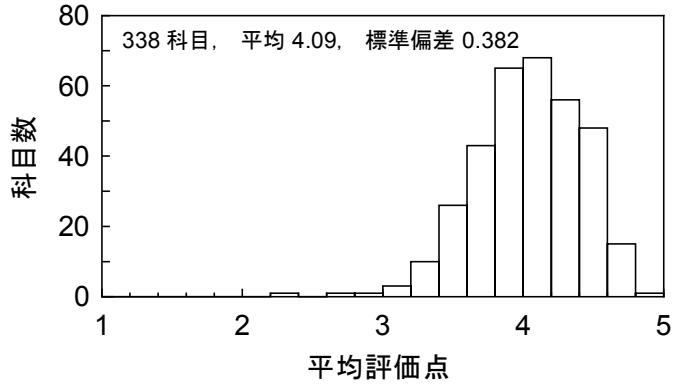
平成 28 年度後前期の実施科目数は 34 科目（実施率 100%，延べ受講生数 1732 人）であり，平均回収率は 91.3%であった． 平成 28 年度後期の実施科目数は 338 科目（実施率 98.0%，延べ受講生数 12,880 人），平均回収率は 86.7%，平成 29 年度前期の実施科目数は 402 科目（実施率 97.3%，延べ受講生数 17,586 人），平均回収率は 70.2%であった．実施率は 97.3%以上と高い値を維持している．

平成 28 年度後前期及び平成 28 年度後期に実施した授業評価アンケートの平均評価点の分布をヒストグラムにて示す．なお，ヒストグラムに示される平均評価点は，平成 28 年度後前期については共通 6 項目に対する平均値であり，平成 28 年度後期及び平成 29 年度前期については全質問に対する平均値である．

平成 28 年度後前期実施アンケートについては，共通 6 項目の平均評価点は 4.23（SD=0.480）であり，前回報告した平成 27 年度後期（377 科目，実施率 97.2%，平均得点 4.11，SD=0.45）及び平成 28 年度前期（397 科目，実施率 96.4%，平均得点 4.11，SD=0.45）と同様な結果であった．アンケート内容刷新後の平成 28 年度後期及び平成 29 年度前期については，平均評価点はそれぞれ 4.09（SD=0.382），4.21（SD=0.394）であり，いずれも高い評価を得た．



H28 後前期共通６項平均評価点



H28 後期平均評価点

(3)アンケート集計結果の概要（平成 29 年度前期）

平成 29 年度前期の実施科目数は 402 科目（実施率 97.3%，延べ受講生数 17,586 人），平均回収率は 70.2%であった．実施率は 97.3%以上と高い値を維持している．一方，平均回収率は，マークシート方式から Web 方式へと改めて以降低下しており，その向上が課題である．

回答結果については巻末の付録 1（B-2 授業評価アンケート）に掲載する．新アンケートになってから，18 の設問を A　授業への学生の取組み，B　授業の資料や進め方，C　教員の授業への対応，D　シラバスと授業の関係，E　総合的な評価（授業に対する受け止め），の 5 つのカテゴリーに分類して評価軸を増やす試みを行った．これは個別設問の増加が授業改善の指針を得られやすくするという目的には沿っているものの，ある程度設問をグループに収束させて概念化することでより多くの情報を得られるようにする目的である．

		学部				研究科		
サブカテゴリ集計	全体	共通教育	保健福祉	情報	デザイン	保健福祉	情報	デザイン
A　授業への学生の取組み	4.27	4.17	4.45	4.10	4.49	4.36	4.17	4.00
B　授業の資料や進め方	4.15	4.10	4.32	3.91	4.32	4.68	4.09	3.88
C　教員の授業への対応	4.19	4.12	4.35	3.94	4.44	4.74	4.20	4.00
D　シラバスと授業の関係	4.04	3.99	4.15	3.82	4.29	4.37	3.90	3.33
E　総合的な評価	4.07	3.94	4.32	3.78	4.35	4.60	3.95	3.56
平均	4.14	4.06	4.32	3.91	4.38	4.55	4.06	3.75

（A＝設問①～②の平均、B＝設問③～⑥の平均、C＝設問⑦～⑩の平均、D＝設問⑪～⑬の平均、E＝設問⑭～⑰の平均）

5 つのカテゴリーに分類された 17 設問の評価点（H29 前期）

学部全体でみるとカテゴリーD の「シラバスと授業の関係」の項目が低く，シラバスが授業で利用されていない傾向が認められる．これは従来の本学のシラバスが非常に利用しにくい形の Web シラバスであったことが影響していると考えられる．平成 29 年度からは従

来に比べて格段に良くなったが，それでも未だ十分使いやすいとは言い難いところがあり，平成 29 年度の改修で，平成 30 年度から使いやすさの向上が見込まれることもあって，今後の改善が期待できる可能性がある．このアンケートから，学生は授業に対しては前向きに取り組んではいるが，授業の実践における幾つかの事柄において満足できていない傾向が出ているものと思われる．その分析は今後の課題としたい．

(4)アンケート集計結果の概要（平成 29 年度後期）

平成 29 年度後期の実施科目数は 351 科目（実施率 97.2%，延べ受講生数 15,564 人），平均回収率は 48.0%であった．実施率は 97%以上と高い値を維持している．一方，平均回収率は， Web 方式へと改めてからは従来に比べて低下しているが，促進策を考えてゆく必要がある..

回答結果の詳細については，巻末の巻末の付録 1（B-2 授業評価アンケート）に掲載する．

		学部				研究科		
サブカテゴリ集計	全体	共通教育	保健福祉	情報	デザイン	保健福祉	情報	デザイン
A 授業への学生の取組み	4.31	4.14	4.43	4.25	4.48	4.67	4.33	ー
B 授業の資料や進め方	4.19	4.08	4.31	4.06	4.33	4.57	4.47	ー
C 教員の授業への対応	4.23	4.11	4.36	4.09	4.43	4.42	4.50	ー
D シラバスと授業の関係	4.09	3.98	4.21	3.96	4.29	4.51	4.36	ー
E 総合的な評価	4.08	3.87	4.28	3.96	4.33	4.30	4.51	ー
平均	4.18	4.04	4.32	4.06	4.37	4.49	4.43	ー

（A＝①～②の平均、B＝③～⑥の平均、C＝⑦～⑩の平均、D＝⑪～⑬の平均、E＝⑭～⑰の平均）

5 つのカテゴリーに分類された 17 設問の評価点（H29 後期）

全てのカテゴリーで，学部の後期は前期より評価値が若干上昇している．これは主に情報工学部における評価値の上昇が反映しているものとみなされた．今後，個別設問等についての分析を進める必要がある．

2-5-4 FD 研修会

平成 29 年度は，教育力向上支援事業成果報告会を行い研究成果の教員への周知を図ると共に，アクティブラーニングに関する研修会を実施し，相互授業参観結果を授業の実践に活かすため，授業改善意見交換会を企画した．また，日本工学教育協会、第 65 回年次大会（2017 年 8 月 29 日～31 日開催），平成 29 年度中国・四国工学教育協会大学教育部会研究会「地域創生に向けた工学教育のあり方について」（2017 年 12 月 5 日開催），および岡山県工学教育協議会主催の「教育シンポジウム～実践的工学教育・技術者育成の取り組み～」（2018 年 1 月 20 日開催）に参加し，先進事例の調査を行った．

2-5-4-1 教育力向上支援事業成果報告会

(1)開催概要

教育の充実・質の向上及び教員の教育力の向上に直接結びつく調査並びに実践活動に交付する学内競争的資金である教育力向上支援事業の成果について，従来は報告書の提出のみであったが，本年度より，教員間での共有を促進するとともに広く公表するために，報告会を開催することとした.

本年度は，平成 28 年度末に完了した 6 件の事業を対象に，下記のように成果報告会を実施した.

日　　時	平成 29 年 11 月 4 日（土），10:30～16:00 （県大祭の学内開放と同時開催）
場　　所	学部共通棟（北）１階，ホール（２）
対象事業	下記表に示す６件
発表方法	ポスター展示（B1 サイズ）

(2)参加者と結果

辻学長をはじめとして多くの参加者による聴講及び議論が活発になされ，教員間の情報共有が促進された. その結果，各教員の教育力向上のための改善策が多く生まれる良い機会になった.

事業代表者 (学科)	事　　業　　名	ブース 番号
高橋幸子 (看護学科)	e-learning を使った授業内・授業外の英語学習の構築	1
石井　裕 (情報システム工学科)	ビブリオバトルによる読書推進とコミュニケーション能力向上プログラム開発	2
岩本弘光 (デザイン工学科)	建築・デザイン海外研修による国際交流と建築・教養教育の充実３	3
岸本妙子 (栄養学科)	共通教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる管理栄養士要請プログラムの開発	4

金丸敏彦 （デザイン工学科）	ものづくり工房運営についての調査研究４	5
迫　明仁 （人間情報工学科）	学生相談室業務の機能向上と情報発信のための環境整備	6

2-5-4-2　大学教育開発センターFD 部会第 1 回教育開発講座，「ICT を活用する予習主体の授業でアクティブ・ラーニングへ誘う～反転授業～」

(1)開催概要

アクティブ・ラーニングとは，「受講者が学びの主体となって，対話・共有などの他との触れあいによって学びを深める学習状態」であり，その状態へ誘う効果的な手法があると考えられる．予習を授業の主体とする「反転授業」も手法の一つであり，この反転授業の概要とその成果を紹介し，併せて講義で容易に取り入れられるアクティブ・ラーニングを促す手法について紹介した．

開催日時	平成 29 年 11 月 16 日（木）12：40～14：10
開催場所	岡山県立大学　学部共通棟（北）8105 講義室
講師	滝澤　昇先生（岡山理科大学副学長・教育担当（工学部教授)）

(2)参加者

参加者数は教員が 44 名（保健福祉学部 11 名，情報工学部 17 名，デザイン学部 16 名)，職員が９名の合計 53 名であった．

(3)アンケート結果

参加者には用意したアンケートの回答を要請した．回収した回答は 40 通（教員 35 名，職員４名，所属未記入１）であった．研修会の満足度や講師についての満足度は以下の通りであった．

設問	教員・職員の別	とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
研修会の満足度	教員	50%	41%	6%	3%	0%
	職員	67%	33%	0%	0%	0%
	所属未記入	0%	100%	0%	0%	0%
講師についての満足度	教員	60%	31%	9%	0%	0%
	職員	75%	25%	0%	0%	0%
	所属未記入	0%	100%	0%	0%	0%

自由記述の中から，(A)今回の報告は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見，(B)今後，自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて，(C)今回のワークショップ（講演，実施方法等）に対する感想・意見，(D)今後のワークショップに希望するテーマ，の四つについて分類したものを以下に示す．

(A)今回の報告は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見

分類	記述
有用な点	・１つの基礎学力を養う授業の活用例として参考になった. ・アクティブラーニングの一例を知ることができたのはよかった. ・やはり演習が多いため形を変えて活用を試みたい. ・具体的な内容で活用したいと思えた. ・具体的手法をご紹介いただけた. ・有意義な内容だった. ・質疑応答でも丁寧に話しをいただけ，分かりやすかった. ・他の先生の授業の方法を知ることは良い機会である. ・知りたいことであった. ・知りたいこと全てではないが、ICT 活用のアクティブラーニングの事例を知れた. ・役立てたいと考えます. ・シラバスなど実用されている資料を拝見でき，有り難かった. ・シラバスもご提示いただき、大変参考になりました. ・スクラッチシートは作りやすく，自分でもやってみたい.
意見	・方法面において学生が前向きになる教材，カードなど工夫されている点は良いと思ったが、内容面において学生の興味関心がどこで高まったかは不明.

(B)今後，自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて

分類	記述
有用な点	・ICT の活用は検討したい．また ICT を活用した学びの手段についてもっと知りたい. ・Web を利用した予習クイズ，発展問題の討論. ・シラバスを詳細に書くことや，紙ベースで学生にはオフすることはとても良いと思った. ・ぜひ取り入れたいアイデアもうかんだ. ・教材研究，楽しみながらやってみようと思います. ・データ分析までは難しいが参考にしたい. ・デザイン学部は採用しやすいと思えます. ・とても応用できると思います！ぜひやってみようと思いました. ・一部利用したいと思った. ・具体的な内容で活用したいと思えた. ・自分自身の授業で使えそうなところを探しながら聞きました．アレンジが必要だと思いますが，取り入れたいと思います. ・少しずつ自分の講義に取り入れようと思う. ・前準備が大変そうなので難しい気がするが，いずれ導入したい. ・全ての単元では導入できないと考えるが，部分的に導入していきたい. ・知識を得る授業向きなので，部分的には活用できる. ・導入できる部分を検討したい.

	・今回，関心のあるテーマであった．いかに自分自身の授業で取り込んでいくか，課題は多くあると思いました． ・予習を意識した小テストというのは盲点だったので実際にやってみたい．
意見	・参考になる部分はあったが，演習の授業には応用が難しい． ・担当授業や学問分野によって導入の仕方をかなり考えなければならない．

(C)今回のワークショップ（講演，実施方法等）に対する感想・意見

分類	記述
有用な点	・アクティブラーニングとの言葉はよく聞くがきちんと学ぶ機会は少ないのでよかった． ・アクティブラーニングの具体例を知ることができた． ・テーマは非常によい． ・とても参考になりました． ・まさに知りたかったことであった． ・各授業ごとの連携や教員の熱意が大切との意見が心に残りました． ・学生が主体的に取り組むような授業を作りたい． ・具体的な取り組みが聞けてよかった． ・他の先生の授業の方法を知ることは良い機会である． ・今後の授業に活用させて頂きたいと思います． ・時代に合っていると思いました． ・自然科学系科目のアクティブラーニングであり参考になった． ・日頃から関心があるテーマ，内容であった． ・反転授業のやり方について興味があった． ・本学では未だ浸透していない概念である．
意見	・PPT と資料が連動していなかったので見づらいところもあった． ・スライドと配付資料で少し内容が違うので，スライドのハンドアウトも欲しい． ・せっかくのグループ分け（島別）だったので、もう少し活用しても良かったと考える． ・その他の手法についても具体的に知りたい。 ・基礎化学の実際の内容（教室風景）も見たい。 ・座席の向きを 90 度回転していただくと，全員が無理のない姿勢で受講できたのではないでしょうか．講師に対して後ろ向きの席になってしまい，キツかったです． ・島の席は縦向きの方がよさそう． ・難しいとは思いますが，時期は考えて欲しいと思います．

(D)今後のワークに希望するテーマ

・FD におけるアクティブラーニングの手法の色々，現代メディア論． ・シラバスの作り方（講演中で説明のあった）． ・学生側の学び方の工夫も引き出していければと思う．そのような学生 FD ができないか． ・様々な LMS の活用例を知りたい．

2-5-4-3　授業改善意見交換会

(1)実施概要

相互授業参観活動を基に，具体的な授業の進め方や指導技術について意見交換・情報共有し，今後の授業改善に役立てることを目的に，授業改善意見交換会を開催した.

本年度は，分野別の議論深化を図ることを目的に，学部及び共通教育部別のグルーピングとした。

開催日時：平成 30 年 2 月 2 日（金）16:00～17:30

開催場所：岡山県立大学 8105 講義室

プログラム：

１　開会（尾崎 FD 部会長）

２　相互授業参観の実施結果報告（西川，山口）

３　グループディスカッション（野宮）

テーマ：「よりよい授業づくりの方法とは」

相互参観授業レポートの観点 6 項目より最大 3 項目を選び,「よりよい授業づくりの方法」をテーマにディスカッションする.

・ディスカッション後，模造紙にまとめる

・各班の代表者にて発表する

４　まとめ（田内大学教育開発センター長）

５　閉会（尾崎 FD 部会長）

(2) 参加者

参加者数は 56 名，その内訳は教員が 51 名（保健福祉学部 16 名，情報工学部 22 名，デザイン学部 13 名），職員が 5 名であった.

(3)グループディスカッションについて

学部及び共通教育部別による８班（各班 6～7 名）をグルーピングし,「よりよい授業づくりの方法」をテーマに班別のディスカッション（約 40 分間）を行った．次に各班の代表者により，ディスカッションの結果を発表した（各班約 3 分）.

写真 1（ディスカッション風景）

写真 2（発表風景）

各班において選択された項目とディスカッションの内容（抜粋）は下記の通りであった．

【項目 1 授業の準備，導入】

・点呼，記述，レポートによる出席の確認がされていた．

・出席は重視せず，実力をつけることを重視されていた．

【項目 2 授業の構成】

・アクティブラーニングが向いているのか，疑問のある授業もある．

・カリキュラムのレールを敷かれた上を走るだけでよいのか，相談し合うことで解消することが必要．

・数学等で，難しい問題を学生にあてることが困難な場面がある．

・学生により主体的に考えてもらうために授業を半分に割り，後半は次の授業の内容を述べ，ディスカッションする．

・授業の最初と最後に学生の理解度を確認するためのミニッツペーパーを用意していた．

・小グループでのアクティブラーニングを取り入れている授業が参考になった．

【項目 3 授業の展開技術】

・クォーター制への対応についていくつかの意見が出た．

クォーター制に対する肯定的意見

・学生も教員も授業の準備がしやすい

クォーター制に対する否定的意見

・準備の時間が短くなった

・学生の消化不良

・インフルエンザ等 1 週間休むと理解が難しい．

クォーター制に対するその他の意見

・クォーター制に応じた授業の方法が必要

・クォーター制に向く科目、向かない科目がある．

・教員同士の連携が必要である．

・モデルコアカリキュラム，カリキュラムの検討が必要である．

・基礎を学ぶ演習をどのように実施するか．

・座学の内容を定着するために演習を実施する．

・様々な内容を理解したうえでの実習であるが，選択科目である講義を取っていないケースもある．授業を受けていない学生も対応できる資料を作成しても，学生が読んでいない場合もある．

・レポート，小テスト，プレゼンをさせる．

・プレゼンの場合，全ての学生が話すことができないことがある．

・レポートについて，他の学生のレポートを写す学生がいるが，グループのレポートの場合はコピーが難しい．但し，グループワークで学生ごとの評価が難しい．その場合はレポートで評価する．

・インタラクションを期待できる学生数は 50 人から 60 人である．学生が参加意識が持ち，

密に対応できるのは研究室の運営をイメージさせる 20 人程度ではないか．クラスの受講生人数を調整することが必要か．
・レポートは自己採点もさせている．
・TA がよく育つ．
・評価の方法を明確にする．テストやその実施時期も明確にする．
・重要な点は繰り返し板書する．
・はっとりんを活用する．
・1 年生の専門ではない科目は途中で休憩を入れ，集中力を保たせる．
・昼食後の授業は立って体操をし，寝てしまうことを避ける工夫をしている．

【項目 4 教材の内容・活用】

・実物を提示してみる．
・クイズをしたり，５分程度の演習を入れる．
・授業ノートを活用する．
・絵を描いても良いので，ノートをつくる．

【項目 5 学生への関わり】

・個別対応が必要な学生がいる．
・欠席多い学生にメール等で，その理由を確認している．
・関わろうとすると欠席する，グループになじめない学生の対応が困難である．
・学生数が多いと一人一人の把握が困難．
・学生の理解度を確認する方法の案が以下のようにあった．
  ・授業中に質問する．但し，学生にはじをかかせないようにしている．
  ・シャトルカードを使用し，授業の要点を記入すると，１６回分のカードができる．
  ・レポートを書いたり，小テストを実施する．但し，採点やコメントが大変である．
  ・グループに入り話を聞く．
  ・反転授業を実施する．
・学生によっては，見栄をはったり，空気に流されたり，恥をかくことを嫌がる気質があるが，間違うこともあることを言ったり，匿名性を保ったインタラクションを成立させる．
・初年次（1 年前期）はその後の学び方に直結するので大事である．
・学生の興味をひけるような，モチベーションをあげるためにアクティブラーニングを取り入れる．
・理解力が異なる学生への配慮として，真ん中のレベルにするという意見や，あえて高いレベルに合わせ，底上げをする方法もある，という意見があった．
・演習では，進捗状況が違ってくるが，遅れている学生へのサポートが必要になる．進捗が遅い学生には，達成しているところもあるとコメントし，やる気を出させる．
・小テストの採点を交換し，学生間の競争を促し，低い学生の意識を高める．
・叱ることが難しい風潮だが，ダメなことにはダメと言っていくことにしている．やみくもにほめるより，ダメなところを指摘していく，という意見があった．

・積極的に学生に発言させる機会を与え，誉める．それから指摘していく．
・学生の理解度意欲の底上げ，学生同士で影響し合えるような環境をつくっていく．
・社会性を高めるための環境づくりをする方法として，学生の中で役割を持たせていく．
・学生の顔を見て，声をかける．出席を取るタイミングなどを活用し，学生を把握する．
・オフィスアワーの時間を学生に伝えるとともに，いつ来てもよいと伝える．

【項目 6 授業のまとめ】

・振り返りの小テストにより，重要なポイントがどこかを理解させる．

なお，ディスカッションのテーマとして選択された項目の総数は下記の通りであった．

項目１　授業の準備・導入・・・２
項目２　授業の構成・・・３
項目３　授業の展開技術・・・７
項目４　教材の内容・活用・・・２
項目５　学生への関わり・・・９
項目６　授業のまとめ・・・１

(4)アンケート結果

参加者には用意したアンケートの回答を要請した．回収した回答は 35 通（教員 35 名，職員 0 名）であった．意見交換会の満足度等は以下の通りであった．

(A)意見交換会について	とても満足 22.5%	割合満足 60%	どちらともいえない 15%	やや不満 2.5%
(B)実施方法について	とても満足 27.5%	割合満足 47.5%	どちらともいえない 17.5%	やや不満・とても不満　7.5%
(C)講師の発表について	とても満足 20%	割合満足 40%	どちらともいえない 40%	
(D)会の長さについて	とても長い 2.6%	やや長い 17.9%	ちょうどよい 61.5%	やや短い・とても短い　18%
(E)必要な知識・方法は学べたか	かなりできた 7.9%	できた 73.7%	どちらともいえない 15.8%	あまりできない 2.6%
(F)得た知識・方法を活用しますか	是非活用したい 16.7%	できたら活用したい　72.2%	どちらともいえない 11.1%	

自由記述の中から，(A) 意見交換会についてその理由，(B) 実施方法についてその理由，(C) 講師の発表についてその理由，(D) 会の長さについてその理由，(E) 必要な知識・方法は学べたか，それはどのような点か，(F) 得た知識・方法を活用しますか，それはどのような点か，(G) 意見・要望の七つについて分類したものを以下に示す．

(A) 意見交換会についてその理由

分類	記述
肯定的な意見	・意見交換がよくできた．意見交換する機会として有効． ・各教員のアイディアを共有出来る機会なので良いと思う． ・参考になる意見を得ることができた． ・自分では気付かないような視点や考え方が分かってよかった． ・授業改善に関するディスカッションは楽しい． ・他の先生の考え方を聞けてよかった． ・他の先生方の授業についてお聞きする機会はほとんどないので勉強になった． ・今回のように，学部毎にしていただいた方が話しやすい．
否定的な意見	・私自身消化不良のような気がしています．

(B) 実施方法についてその理由

分類	記述
肯定的な意見	・グループワークにより意見を出し合い，まとめていく方法は良いと思う． ・学部でのグルーピングは良かったと思う． ・学部単位で話しやすかった． ・始めての参加だったが，おもしろい試みであったと思う． ・学部の先生でグループを作れたので、参考意見を得られた． ・同じ学部はよかった． ・情報交換できた．
否定的な意見	・学部混合と学部単位を繰り返した方がよい． ・ややディスカッションがとっちらかる傾向にあった． ・時期がもう少し前か後がよかった ・時期が悪すぎる．卒論発表会まで終了してから開催してほしい． ・若干，新鮮味がなくなってきた．

(C) 講師について，その理由

分類	記述
肯定的な意見	・いろいろな意見をお伺いすることができて良かった． ・よくまとめて下さっていました． ・グループの人数も丁度よく，時間が適当であった．（情報工学部教員） ・自グループ以外のまとまった考えが聞けた点は良かった．
否定的な意見	・理解がついて行きませんでした． ・どのような講義・演習のご意見か分からないので難しい．

(D) 会の長さについてその理由

分類	記述
肯定的な意見	・グループ内での話し合いの時間がたっぷりあり，深められた. ・よくまとめて下さっていました. ・概ね１コマくらいがちょうど良いと思う. ・話し合いの時間が十分にあった.
否定的な意見	・グループでの議論をまとめるにはもう少し時間が必要かもしれない. ・しっかり話す時間は必要かもしれない. ・やや時間オーバー. ・難しい．ディスカッションは深まってよかったと思う反面，単に長くしても発散の範囲が広がるだけという気がする. ・予定した時間に終了していただきたい.

(E) 必要な知識・方法は学べたか，それはどのような点か

記述
・かなり具体的な方法をうかがうことができ，よかった. ・グループディスカッションで，Q 制導入について感じた点を話し合った．現在，教員が難しいと感じている点について授業（科目間）での調整（教員同士の）が効果的であることが分かった．学生の教育の定着については課題である. ・シャトルカードの導入、個別のフィードバックができる. ・学生のレベルの変化に対応する方法がむずかしい. ・学生への質問を個人でなくグループに対して行う. ・研究室学生への接し方. ・資格科目、国が示すカリキュラムなどのしばりがあると，必ずしもすべては実践できないが，時間のある範囲で活用していきたい. ・資料を読ませていただいて活用したいと思います. ・自分の分野とやや異なる分野の話が多かったので，活用できる点は自分なりに応用して活用したい. ・授業における様々な工夫を知ることができた. ・授業の設計（休憩をとる，体操させる）. ・寝た学生への対応など. ・他の教員の工夫を直に聞けた. ・恥をかいても良いという雰囲気を作る. ・同じ学部の教員同士のため、問題を共有できた. ・発見はあったが、それを自分なりに消化するところまでは、この時間中では難しかった. ・理解度を都度確認することの重要性がわかった.

(F) 得た知識・方法を活用しますか，それはどのような点か

記述
・シャトルカードの活用.
・すぐに取り入れられる内容もあったので，ぜひ取り入れたい.
・できる範囲で実践していきたいが，教員同士の授業内容も確認していきたいと思う.
・学生の動機付けの方法.
・学生の理解度の把握.
・座学なら座学なりに、学生とどう関わりを持つか（資料の用意 etc も含めて）という具体的事例.
・授業の運営.
・授業の最後に課題を出し，次回冒頭で話し合う．出欠の取り方，小テスト等，学生を名前で呼ぶ.
・小グループでの議論，はっとりんに資料を載せる等.
・小テストの実施方法の工夫.
・評価方法.

(G) 意見・要望

記述
・３年生の授業を担当，２年生の授業を担当，１年生の授業を担当されている先生でグループを分けて意見交換する.
・クォーター制導入の授業への効果，影響を知りたい.
・学部グループでのディスカッションは前回よりも深い話ができた.
・今後も多くの教員が参加できる会を期待している.
・時期を変えてほしい.
・授業の展開，構成，学生への関わりに関して意見を共有することができ，よかったと思う.
・先生方の意見を聞くことができて良かった.
・大学教育は初等教養に学ぶところがあり，それを検討していくことの大切さ（意欲、興味をひきだすところからはじめる必要があるというところ).
・理系科目におけるアクティブラーニング.

2-5-6　まとめと課題

平成 29 年度の FD 部会活動を総括する．相互授業参観と授業改善意見交換会を開催することにより，他者の授業からヒントを得るだけで無く，教員同士の意見交換を通じて多くの新しい気づきが生じており，良好な結果が得られた．FD 研修会では，アクティブラーニングを題材に取り上げ，アンケートでは良好な評価を得た．従って，以上の取り組みについては，今後も継続することが望ましいと考えられる．授業評価アンケートに関しては，評価結果が高止まり傾向に有ったため，平成 28 年度後期実施以降では教育評価部会と合同で検討した新しい質問項目に変更すると共に，Web で回答する方法へと改めた．しかし，平均回収率はマークシート方式に比べて低下しており，その向上が課題である．また以上に述べた以

外にも，教育優秀教員の表彰について継続的に検討を行っており，その早期実現が課題である．

2-6 教育評価部会

教育評価部会における平成 29 年度の主な活動は，(1) 平成 29 年度版のシラバスの入力や承認，その他の各種機能について問題とされた諸点の改修，(2) 学生授業評価アンケートの見直し，(3) 科目ナンバリングの作成と構造化カリキュラムの検討であり，以下にその概要を記す．

2-6-1 平成 30 年度に向けたシラバスの改修

平成 29 年度は新しく導入した教学システム（Campus Square）上に，新シラバスを掲載するという大きな作業が実施された．新シラバスは旧シラバスとは非常に異なる様式になったため，旧シラバスからの内容移行は出来ず，全ての科目について手入力が必要であり，初年度は教・職員各位に負担を掛けることになった．しかし，次年度以降は前年度分をコピーし，それを変更することが可能になるため，初年度ほどの負荷は今後発生しない予定である．

平成 29 年度シラバスについて生じた主な問題はシラバスの登録，承認，印刷及び参照（検索）に関わるものである．細かな使い易さの向上に関するものは多数挙げられるがここでは記さない．非常に不便であったこととして，本シラバスシステムは「授業基本情報」，「授業概要情報」，「授業計画詳細情報」，「授業評価詳細情報」の 4 つにそれぞれがタブ分けされており，印刷時もそれぞれのタブの印刷を独立に行わなければならないことであったが，それらを連続させて同時印刷することを可能にした．また，シラバスは全体や群としての一括出力も必要であるため，PDF 及び HTML による一括出力も可能とした．また，シラバスは学内外の閲覧者に公開するため，検索のし易さを向上させるため，従来の前方一致検索のみでなく，部分一致方式を採用した．

平成 30 年度（2018 年度）用シラバスの形式は以下に掲げるようなものである．

2018[Campus Square]シラバス形式

授業情報／Course information

大学教育開発センター

科目名（和文） ／Course	
科目名（英文） ／Course	
時間割コード ／Registration Code	
学部（研究科） ／Faculty	
学科（専攻） ／Department	
担当教員（○：代表教員） ／Principle Instructor（○）and Instructors	
オフィスアワー ／Office Hour	
開講年度 ／Year of the Course	
開講期間 ／Term	
開講年次 ／Course Year	
対象学生 ／Eligible Students	
単位数 ／Credit(s)	

授業概要情報／Course description

更新日 ／Date of Renewal	
科目ナンバリング ／Course Numbering	
使用言語 ／Language of Instruction	
オムニバス ／Omnibus	
授業概略と目的 ／Course Description and Objectives	
履修に必要な知識・能力・キーワード ／Prerequisites and Keywords	
履修上の注意 ／Notes	
教科書 ／Textbook(s)	
参考文献等 ／References	
自主学習ガイド ／Expected Study Guide Outside Coursework/Self-Directed Learning Other Than Coursework	
資格等に関する事項 ／Attention Relating to Professional License	
備考 ／Notes	

授業計画詳細情報／Course schedule

No.	単元（授業回数） ／Unit (Lesson Number)	単元タイトルと概要* ／Unit Title and Unit Description	時間外学習** ／Preparation and Review	配布資料*** ／Handouts
1				

No.	単元（授業回数） ／Unit (Lesson Number)	単元タイトルと概要 ／Unit Title and Unit Description	時間外学習 ／Preparation and Review	配布資料 ／Handouts
		試験回は授業の中には含めず、別途設定する		

授業評価詳細情報／Course evaluation

到達目標及び観点／Learning Goal and Specific Behavioral Viewpoints

No.	到達目標 ／Learning Goal 入力が必須（3~7個の範囲で記入）	知識・理解 ／Knowledge & Understanding	技能・表現 ／Skills & Expressions	思考・判断 ／Thoughts & Decisions	伝達・コミュニケーション ／Communication	協働 ／Cooperative Attitude	**** 任意に設定*	**** 任意に設定*
1	到達目標1	○						
2	到達目標2	○						○
3	到達目標3		○	○	○	○	○	○
4	到達目標n	○						

成績評価方法と基準／Evaluation of Achievement

No.	到達目標 ／Learning Goal	定期試験 ／Exam.	任意に設定**	任意に設定**
1	到達目標1		○	○
2	到達目標2		○	○
3	到達目標3		○	○
4	到達目標n		○	○
	評価ルーブリック*** 評価割合（%） ／Allocation of Marks		50	50

シラバス入力に当たっては，シラバス登録者の便に供するため 2018 年度版「シラバス入力・承認用手引き」及び「単位制度と時間外学習について」を著し，入力しやすさと各項目の意味や意義の理解の促進に努めた．

「シラバス入力・承認用手引き」は主に科目担当者によるシラバス登録作業やカリキュラム作成責任者等による承認作業を円滑に行うために，大学教育開発センターで発行しているものである．承認者は多数の科目について，当該シラバスが要件を備えているかどうか判定しなければならず，その負荷は無視できない．そのため，この度のシラバス改修では，承認者が少ない負荷で正確かつ円滑にシラバスをチェックできるように細かい配慮がなされた．シラバス登録に関しては，この度のシラバスが，(1) 到達目標と評価項目が一致していることが最も重要なポイントとして挙げられることが強調された．これは，従来少なからずあった，授業の目的，到達目標，評価の関連が整合しないケースを排除するために有効であると考えられるものである．到達目標に関しては，どの様な学力を向上させるかという例（指標）が記載されており，それを援用するのであれば印を付け，更に教員が独自に任意の指標（複数可能）を設けられるようにも設定した．到達目標の評価方法については，様々な評価方法があることを踏まえ，定期試験に加えて，教員が任意の評価方法を複数記載できるように構成してある．授業の到達目標と評価の間に齟齬があってはならないが，この度の新シラバスでは，特に目標と評価の関係を意識しなくても自動的に表示されるので，教員にとってもまた受講する学生にとっても到達目標と評価の関係性が理解しやすいと予測される．

また，この度の新シラバスは予習，復習の促進や，教員の資料提供が履修生にとって分かりやすいような構成としている．予復習等の時間外学習は，単位を構成する重要な要素と定められているものの，講義が過密な状態にある現状では，あまりに予復習に大きなウェイトを置くと学生が課外で利用できる時間が制限されてしまうという問題が発生する．そのため，教員は所属する学科等のカリキュラムをよく理解し，また学科としてもカリキュラムの単位配分に相応しい予復習の時間を割り出す必要がある．そのため，「単位制度と時間外学習について」を配付して，時間外学習設定の参考としている．

2-6-2 学生授業評価アンケートの見直し

本学の学生による授業評価アンケートは，平成 29 年度から Web 上で実施されている．一方，アンケートの内容は平成 28 年度後期に現在に繋がる基本形態が完成し，紙の媒体で実施された．それ以前は，6 項目から成り立っていた授業評価アンケートであるが，その欠点

として，下位項目を多く含む概念化された設問になっていたため，結果のフィードバックを受けた教員が授業改善を図ろうとしても具体的な指標にならないであろうという判定に基づいて改訂がなされた．アンケートとしての継続性も考慮し，従来の 6 項目も含む 20 設問程度の問いを設定し（下記，授業評価アンケート（2018 年度実施用）を参照），それを 5 つのカテゴリーに分類した．カテゴリー1 は授業に対する学生の取り組みを，カテゴリー2 は授業の資料や進め方を，カテゴリー3 はシラバスと授業の関係を，カテゴリー4 は授業の実施状況を，カテゴリー5 は総合的な評価（授業に対する受け止め）を見るための設問としている．なお，以下の実施用アンケートの 1～5 の項目とカテゴリーは一致するものではない．

授業評価アンケート（2018 年度実施用）

１ ： あなたは，この授業への取り組みはどうでしたか

問１ ： 予習や復習，課題等に使った授業１回当たりの平均時間を教えてください．0～999（分）を半角数字で入力してください 【記述式　3 文字以内】（回答必須）
問２ ： あなたのおよその出席率を教えてください．0～100（%）を半角数字で入力してください．【記述式　3 文字以内】（回答必須）
問３ ： この授業を真剣に受講した 【5 者択 1】（回答必須）
問４ ： この授業を理解するために努力した 【5 者択 1】（回答必須）

２ ： この授業の進め方はどうでしたか

問１ ： 授業は計画的に行われていた 【5 者択 1】（回答必須）
問２ ： 授業では考える機会や時間が与えられた 【5 者択 1】（回答必須）
問３ ： 授業で用いた教科書や資料は適切だった 【5 者択 1】（回答必須）
問４ ： 授業は学生の理解度を確認しながら進められた 【5 者択 1】（回答必須）
問５ ： 授業では教員に熱意があった 【5 者択 1】（回答必須）
問６ ： 教員は学生の質問に対して丁寧に対応した（課外含む） 【5 者択 1】（回答必須）
問７ ： 授業は丁寧に進められた 【5 者択 1】（回答必須）
問８ ： 授業中に課された提出物（小テスト・レポート等）は内容をよく評価していた 【5 者択 1】（回答必須）

３ ： シラバスやシラバスと授業との関連はどうでしたか

問１ ： シラバスの内容はよく理解できた 【5 者択 1】（回答必須）
問２ ： 授業内容はシラバスにある目標に合っていた 【5 者択 1】（回答必須）
問３ ： シラバスの説明は十分に行われた 【5 者択 1】（回答必須）

４ ： この授業を受け，総合的にみてあなたはどのように受け止めましたか

問１ ： 教員の説明はわかりやすかった 【5 者択 1】（回答必須）
問２ ： 受講して内容に興味や関心が湧いた 【5 者択 1】（回答必須）
問３ ： この授業を受けて力がついた 【5 者択 1】（回答必須）
問４ ： この授業を友人や後輩にも勧めたい 【5 者択 1】（回答必須）

５ ： 自由記述欄（以下のキーワードも参考にしてください：講義，時間配分，資料，評価方法，開講日時，設備） 【記述式 500 文字以内】

《各設問共通の回答選択肢》
I. そう思わない
II. あまりそう思わない
III. どちらとも言えない
IV. ややそう思う
V. そう思う

設問数を増やした新授業評価アンケートは,試行期間として設定していた 1 年余を経て，今後しばらく上に示したような設問と回答方式でデータ蓄積を実施する予定である．今後数年間は，本アンケートの評価を行うためにデータ蓄積が必要であるが，数年後には再度改訂する必要性が考えられる．例えば，設問中には，“シラバスの利用”“提出物の評価”等が設定されている．これは本学において，シラバスを教員が積極的に利用していない傾向があることから設けられたものである．また，課題等の提出物の評価については，現状では内容評価をしていない場合も認められるため設定である．提出物の評価がなされるかどうか曖昧な場合には，受講者の時間外学習に対する取り組み態度，延いては授業への取り組みにおいても好ましからざる傾向が生じる可能性が考えられる．このような，“現状の課題”解決に向けた設問設定は，課題が解決されれば除去されるであろうし，一方普遍的な課題は存続することになる．

なお．今回の改訂に当り，実施前に学生支援部会の協力を得て，本学の学生 FD 団体による評価を行った．これは，「学生と共に作る大学」の動きの一環である．

2-6-3 科目ナンバリングの作成と構造化カリキュラムの検討

「科目ナンバリング」を，学士課程教育の全般（共通教育科目，学部教育科目，副専攻科目等）及び大学院科目に適用し平成 30 年度から実施するべく，平成 27 年から継続的に検討を行ってきた．残念ながら，手続き上の問題から実施は平成 31 年度からになったが，科目ナンバリングのシステムの基本は今年度完成することが出来た．科目ナンバリングは，文

部科学省が平成 24 年の「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」や，中央教育審議会大学分科会が同年に公表した 答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」への対応の一環となるもので，教育や学修が組織的に行われる基礎になる．どちらかというと，従来の大学における講義はアラカルト（一品料理）的な趣を持って提供されている例が多いと思われるが，コース料理，すなわち組織的なカリキュラムとして提供するべきという考え方が必要になってきている現状であり，科目ナンバリングや構造化されたシラバスはそのための基礎として非常に重要なものである．

今回，授業科目をナンバリングする過程において，多くの学科において既存のカリキュラムを見直す機会になったと考えられる．実際，授業科目の再配置や再分類が行われた学科も複数あり，構造的にカリキュラムを考える機会になったことがこのことから窺われる．以下に，次年度の本学の「履修案内」に掲載予定の科目ナンバリングの説明を掲げる．

平成 31 年（2019 年）度履修案内掲載予定の科目ナンバリング説明等

「科目ナンバリング」

岡山県立大学では 2019 年度から科目ナンバリングが導入された．科目ナンバリングは，体系的な教育カリキュラムを作るのに必要な情報を各科目について付与するものである．特に，学修順序が数（ナンバー）で示されるのが重要なポイントになる．科目ナンバリングで示される情報は，カリキュラム作成にとって有効であるばかりでなく，学生が科目を履修する際にも役立つものである．

それは，(1) 学習順序はどの様に位置づけられているか，ということに加えて，(2) 履修したい科目がどの様な分野に属しているか，(3) その科目は必修か選択か，(4) 授業の形態（講義，演習，実習等）はどの様なものか，(5) 資格や免許との関連はどうか，などの情報が含まれているためである。

この様に科目ナンバリングには様々な情報が含まれるため，それを短く表現するために略号や数字を用いている．そのため，科目ナンバリングを有効に使うためには，数字や記号の意味を予め知っておくとよい．特に，上述の (1)，(3)，(4)，(5) を憶えると利用しやすくなる．

表 1 と表 2 に，科目ナンバリングの成り立ちと，表示例をしめしたので参考にすること．

2 科目ナンバリングの表示方法

AAA.BBB-N_1N_2-N_3C-DN_4 （科目ナンバリング）

（A, B, C, Dにはアルファベット表示、$N_{1\sim4}$には数字が入る）

【表1】

表示	記号の意味	表示方法	備考
AAA	学問分野第1略号	科目の属する学問分野・領域を表す。	
BBB	学問分野第2略号	科目を表す。	同名科目で番号が付されている場合は数字を含むこととがある。
N_1	学部等	0＝共通教育部、1＝保健福祉学部、2＝情報工学部、3＝デザイン学部	
N_2	学科等	【保健福祉学部】 0=複数学科、 1＝看護学科、 2＝栄養学科、 3＝保健福祉学科・社会福祉学専攻、 4＝保健福祉学科・こども学専攻 【情報工学部】 0=複数学科、 1＝情報通信工学科、 2＝情報システム工学科、 3＝人間情報工学科 【デザイン学部】 0=複数学科、 1＝デザイン工学科、 2＝造形デザイン学科	
N_3	レベルコード	0 学士課程教育の4年間において、特に履修の年次を定めない科目 1 学士課程教育の4年間において、概ね1年次に履修することが相応しい科目 2 学士課程教育の4年間において、概ね2年次に履修することが相応しい科目 3 学士課程教育の4年間において、概ね3年次に履修することが相応しい科目 4 学士課程教育の4年間において、概ね4年次に履修することが相応しい科目 5 大学院の博士前期課程において、基礎的な内容の科目及び大学院共通授業科目等 6 大学院の博士前期課程において、専門性の高い科目、発展的な内容の科目及び研究指導科目等 7 大学院の博士後期課程における科目、研究指導科目等 8 その他、分類やレベル分けが難しい科目等	
C	必修/選択記号	R=必修科目（Required）、　E=選択科目（Elective）	
D	授業形態	L=講義（Lecture） S=演習（Seminar） P=実験、実習及び実技（Practice）	
N_4	免許資格科目	0＝免許資格に関係の無い科目、1＝免許資格に関係の有る科目	

3	科目ナンバリングの実例			
	SWS.COD-13-2R-L1　（AAA.BBB-N_1N_2-N_3C-DN_4）			
	【表2】			
	AAA	学問分野第1略号	SWS	Social Work Study 社会福祉学
	BBB	学問分野第2略号	COD	Community Organization地域福祉論
	N_1	学部等	1	保健福祉学部
	N_2	学科等	3	保健福祉学科
	N_3	レベルコード	2	概ね2年次に履修することが相応しい
	C	必修/選択記号	R	Required 必修
	D	授業形態	L	Lecture 講義
	N_4	免許資格科目	1	免許資格科目

2-6-4 まとめと課題

本年度の教育評価部会活動を総括し，課題等を掲げる．先ず新シラバスであるが，国内外のシラバスの現状調査を行い，最近の教育改革の潮流を取り込んだ良い形を模索してきた．そのような観点から考案されたシラバスを，現実の使用に供するためには，コンピュータを用いる全学教学システムの導入が不可欠であったが，それを平成 28～29 年度で備えることが出来，平成 29 年度試行，平成 30 年度完全稼働となり，実現の運びとなった．平成 29 年度は同年から開始されたシラバスシステムの改修を行い，登録，承認，印刷，検索等に係る諸問題を，概ね解決することが出来た．平成 30 年度シラバスにおける科目ナンバリング表示は叶わなかったが，平成 31 年度版では実現する見込みである．今現在，入力されたシラバスの内容評価等については系統的には実施されていないが，教員の作成するルーブリックの利用が少ないことが指摘される．新シラバス自体が大枠としてルーブリック構造を有しているが，各授業の評価の視点をより詳細に実施するためには個別のルーブリック導入が推奨される．今後，その促進に向けた部会活動が必要とされるところである．また授業評価アンケートの学生に対するフィードバックをシラバス上に記載することが有用と考えられるので，その方向で検討する必要がある．教員からのアピールや授業の理解促進のためには他科目との連携や協働についても掲載できる項（画像，映像を含む）を設けることも考慮されよう．

学生による授業評価アンケートは，一定の試行期間を経て実施の最終形態が固まった．勿論不具合がある場合は小改訂が実施されるが，基本については変更せずに進められる状態になったと考えられる．今後は有用な自由記述を得るためにどの様な促進策を講じるか，また自由記述における好ましくない表現（所謂，NG ワード等）についてどの段階でフィルタ

ーを掛けるかが課題である．教員及び学生に対するアンケート結果のフィードバックも必要とされるが，教員に対しては現在の方式を精査してより教員が授業改善に対処しやすい方式，表現法を考案する必要がある．学生に関しては，シラバスに結果を記載する（上述）ことを検討する．

科目ナンバリングは未だ実施されていないが，学科等のカリキュラム全体，また履修モデル（専門別カリキュラム）の作成や評価に有効であると考えられる．現在，本学では授業科目の種別分類（講義，演習，実習，実技，セミナー等）が全くされていない．これらを区別せずに授業評価，成績評価を行うことは乱暴な趣があると言わざるを得ないが，この問題は次年度には解決される．また，科目ナンバリングが導入されると，従来よりも精細な教学データ分析が可能になることが想定され，それらを用いて教育改革に必要な情報の得られることが大いに期待される．

2-7 キャリア形成支援部会

2-7-1　概要

キャリア形成支援部会は，学部学科横断的な全学的取組みとして以下の調査研究・企画立案業務を掲げ，本学学生のキャリア形成を支援することを目的としている．まず，キャリア教育および就職支援プログラムの現状調査と検証として，具体的には，就職支援活動とインターンシップ支援，「県大吉備塾」の企画・実施など，学生のキャリア形成意識の向上を目指した．次に，学生のキャリア形成支援において重要なツールとなる『キャリアカルテ』の運用開始に向けた検討・設計を行った．その他，本学卒業生との連携に必要な課題抽出のため，岡山県立大学１期生の主催する『Reunion Day』に協力した．加えて，本学における教育研究や学生支援のための活動の充実に向けた基礎資料を得ることを目的とした『卒業生アンケート』『就職先アンケート』の実施に向けて，内容検討に着手した．以下に本年度の活動概要を記す．

2-7-2　就職支援活動とインターンシップ

2-7-2-1　就職支援活動と実績

全学部を対象として，就職活動の時期に合わせ就職ガイダンスや自己分析検査，各種模擬テストを実施するとともに，大規模な合同企業説明会へ就職活動バスを運行するなどの支援を行った．また，専門のキャリアカウンセラーによる就職相談を週３日（休業期間等を除く）実施し，学生への個別指導等を行った．（詳細は付録１Ｆを参照のこと）

各学科においても，就職担当教員が中心となり，学科の特性に応じた就職指導やセミナー，企業説明会等を開催し，学生を細やかに支援した．

2-7-2-2　インターンシップ

本学では，学生のキャリア形成を支援するため，自らの専攻，将来のキャリアに関連した就業体験を行うため，キャンパスウェブシステムや総社市，真庭市，病院や民間企業等との連携を図り，インターンシップ参加希望学生への支援を行った．なお，情報工学部とデザイン学部においては授業科目として取り組んでいるほか，保健福祉学部においては，特定の資格取得を目的に各種実習として取り組んでいるが，本報告には含まれていない．

平成 29 年度のキャンパスウェブ，総社市及び真庭市におけるインターンシップの実施状況は次のとおりである．

（1）キャンパスウェブシステムの利用

本学では,厚生労働省が行っていたインターンシップ事業（平成 14～21 年度）を引き継いだ NPO 法人 WIL の流れをくむ(株)ナジック・アイ・サポートのインターンシップ支援サイト(キャンパスウェブ)を利用してインターンシップを実施した．平成 29 年度のキャンパスウェブシステムを利用したインターンシップ事業への参加学生は 9 人で,実習先は県内 5 企業(団体)であった．

〔厚生労働省及びキャンパスウエブを利用したインターンシップ実績〕　　単位：社,人

年　度	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	累計
受　入 企業社数	7	11	9	12	11	13	19	10	34	29	15	11	5	186
参　加 学 生 数	13	15	12	17	15	25	25	18	51	38	16	14	9	268

〔平成 29 年度実習先〕

実　習　先　企　業　・　団　体
興南設計(株)，セリオ(株)，井原放送(株)，(株)両備システムズ，(有)アグリ元気岡山

（2）総社市との連携

総社市のインターンシップは，本学と総社市の連携協力に関する協定の一環として平成 21 年度から実施しているもので，平成 29 年度は，秘書室，市民課，政策調整課，環境課，農林課，総社市図書館，総社市消防本部など多部署にわたり，30 名が参加した．また，インターンシップで体験した結果をもとに，学生が市に政策提言することを義務づけ，市はその提言の中から独創性や実現可能性などを評価して，6 名の学生を選び表彰した．

〔総社市インターンシップ参加者〕

年　度	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	累計
人　数	11	19	23	21	15	12	19	19	30	169

（3）真庭市との連携

真庭市のインターンシップは,本学と真庭市の連携協力に関する協定の一環として平成27年度から実施している．平成29年度は，勝山振興局 地域振興課，天の川こども園，落合振興局 地域振興課などの部署にわたり，3名が参加した．

〔真庭市インターンシップ参加者〕

年　度	H27	H28	H29	累計
人　数	1	3	3	7

2-7-3　県大吉備塾の開催

県大吉備塾は教育力向上支援事業の一環として平成 27 年度より取り組んでいる事業で，卒業生を特別講師として招聘し，講演会やワークショップ・ディスカッション等を開催し，学科学部を超えた教職協働の視点から在学生へのキャリア形成支援を目的として展開・構築しようとするものである．以下に平成29年度の第13回県大吉備塾から第19回までの開催概要を記す．いずれの回においても参加した学生および教員によるアンケート結果は，吉備塾の内容が意義のあるものであったとの回答が多かった．

第13回県大吉備塾

○学外講師

・倉敷中央病院　栄養治療部　管理栄養士　高須栞氏（2016年卒業）

・両備ヘルシーケア高松　管理栄養士　伊勢野悠希氏（2016年卒業）

・セブンアンドアイ・フードシステムズ イトーヨーカドー本社
社員食堂　管理栄養士　米倉加那子氏（2014年卒業）

・岡山県立早島支援学校　栄養教諭　山下茉奈美氏（2013年卒業）

○テーマ：「大学での学びは業務のこんなところで生かされている」

○実施日時：平成29年7月8日 13:00～16:30

○会場：学部共通棟（東）8902講義室

○企画運営：平松智子，田淵真愉美，吉村征浩，山下広美

○参加人数と構成：学生37名/教員6名/計43名

病院，保健福祉施設，企業および小学校に勤務する4名の卒業生を招聘し，大学での学びは業務のどのようなところで生かされているか，また多部門で活躍できる栄養関係（管理栄

養士）の仕事とはどのようなものか，さらに就職活動はどのようにしたか，などの講演を聴くと共に，情報交換会を開催した．意見交換会では，具体的な話を聞くことができ参加者の満足度は高かった．しかし「具体的な就職活動などについてもっと聴きたかった」や，「現場の人がどのような学生を求めているのか知りたかった」，「研究職についても知りたかった」などの意見もあり，今後の企画の課題も抽出できた．

第 14 回県大吉備塾

○学外講師

・岡山市中区福祉事務所　諏訪智之氏（2017 年卒業）

・岡山市立市民病院　西山美帆氏（2015 年卒業）

・社会福祉法人四ツ葉会　元気の家デイサービスセンター 佐渡悠航氏（2016 年卒業）

○テーマ：「福祉の仕事のやりがいと学生時代の過ごし方」

○実施日時：平成 29 年 11 月 9 日（木）14：20～15：50

○会場：学部共通棟（東）8903 講義室

○企画運営：桐野匡史

○参加人数と構成：学生 34 名／教員 1 名／計 35 名

第 14 回の県大吉備塾では，「福祉の仕事のやりがいと学生時代の過ごし方」をテーマとして，公務員（行政職），保健医療職（医療ソーシャルワーカー），介護職の 3 名の卒業生を迎え，各業種の仕事内容ややりがい，就職活動や学生時代にすべきことなどについて，体験談を交えてお話しいただいた．全体的に，参加者の満足度は高く，「普段聞けない内容が聞けた」，「大学生活ですべきことが聞けて良かった」，「遠すぎない年齢の先輩方で，体験談が身近に感じてよかった」など好評であった．しかし，「様々な分野の専門職の話を聞きたかった」，「質問時間がもっと欲しかった」などの意見もあり，今後の県大吉備塾の企画運営についていくつかの改善点も抽出できた．

第 15 回県大吉備塾

○学外講師

・総社市役所保健福祉部　こども課　國光純子氏（2014 年卒業）

○テーマ：「看護師から保健師へ　アセスメントの変化と学生時代の体験」

○実施日時：平成 29 年 12 月 4 日（月）14：20～15：50

○会場：学部共通棟（東）8902 講義室

○企画運営：名越恵美

○参加人数と構成：学生 120 名／教員 2 名／計 122 名

第 15 回県大吉備塾は，看護師経験を有する総社市の保健師 1 名を招き学生時代の就職決定に関する状況と看護師から保健師に職種を変えた経緯や心情，また，看護師と保健師のアセスメントの違いについて資料を基に具体的に語ってもらった．看護学科学部生 1 年生から 3 年生，大学院生合わせて 120 名参加となった．学生の評価は好評で「将来像が見えなか

ったが具体的な話から自分のイメージをつかむことができた」「大切なアセスメントの視点を詳しく教えていただきよくわかった」とコメントがあった．来年度は助産師を計画したい．

第 16 回県大吉備塾

○学外講師

・多治見市陶磁器意匠研究所／人材育成グループ　山下奈穂氏（1998 年卒業）
・（株）千趣会（ベルメゾン）／ファブリック開発チーム　月浦沙也花氏（2004 年修了）
・岡山第一ビデオ（株）／ムービー課　大宮真央氏（2012 年卒業）
・（株）山陽新聞社／事業部　宇惠明日美氏（2015 年卒業）

○テーマ：「デザイン学部で学んだことと現在の仕事」
○実施日時：平成 30 年 1 月 11 日（木）14：20～17：00
○会場：デザイン学部棟　3414 教室
○企画運営：難波久美子，斎藤美絵子，作元朋子，石王美
○参加人数と構成：学生 38 名／教員 11 名／計 49 名

第16回県大吉備塾では，セラミック・テキスタイル・映像・グラフィック分野の卒業生を講師として招聘した．講師は一期生でキャリア20年の業績から入社3年目まで，そして，他県の公的教育機関，全国ネットの通販ビジネス，地域に根ざす映像会社や新聞社という，聴講する学生にとっては，多様な職と講師のキャリアについて知る機会となった．また，研究科修了の利点や海外生活経験，転職に関する話も含まれ，様々な要素が混じり合った各講師によるプレゼンを第一部とした．第二部では，会場に講師毎のテーブル（計4カ所）を設け，学生が講師を選んで対話する企画を導入した．活発な意見交換が確認され，学生と講師双方から好評を得た．そして，アルバイトや求人情報の提供も講師からあるなど，一般の講義とは異なった吉備塾ならではの良さもあった．一方で，より多くの学生（学生参加者数38名）に参加してもらうには，学生の授業課題との関連などの視点で開催時期の検討も必要と感じた．好評であった2部ではあるが，途中に別テーブルに移動し他分野についても見識を広められるよう，2部途中で企画側からの移動示唆があればとの提案も関係者よりあり，次回に反映させたい．

第 17 回県大吉備塾

○学外講師

・林テレンプ株式会社／デザイン部アフターパーツデザイン課 板持充志氏（2017 年卒業）
・アイシン・エィ・ダブリュ株式会社／VIT 事業本部 先行システム開発部　富岡あさひ氏（2016 年卒業）
・北海道庁／建設部建築局建築整備課 鹿島夏歩氏（2017 年卒業）

○テーマ：「プロのデザイナーになるために努力してきたこと」
○実施日時：平成 30 年 1 月 18 日（木）14：20～17：30
第一部：14:20～15:30 各講師によるプレゼンテーション
第二部：15:40～16:40　座談会形式トークセッション
第二部：16:50～17:30　座談会形式トークセッション
（アンケート回収含む）
○会場：デザイン学部棟　3412 教室
○企画運営：林秀紀，朴貞淑
○参加人数と構成：学生 26 名／教員 5 名／計 31 名

第17回県大吉備塾では，製品・情報・建築分野の卒業生を講師として招聘した．講師は，自動車部品メーカーで内装部品やカーナビゲーションのデザインを担当する卒業生2名，公務員として建築整備課で公共建築の管理を担当する卒業生1名の構成である．講師が学生にとって知っている先輩であるため，親しみや興味を感じながら体験談やアドバイスに耳を傾ける学生が大多数であった．第一部では，各講師から現在の仕事の詳しい説明があった．第二部では，各講師が司会者の質問に応える形式で進め，進路の決定というテーマについて議論し，進路選択のきっかけ，迷いや心の葛藤，最終決定した理由，プロセスの詳細が語られた．第三部も座談会形式で，就職活動について，ポートフォリオの準備，インターン参加時の秘訣，実習を受ける会社の選択方法，面接や面談での注意事項など，ノウハウも含め経験談の紹介があり，学生は非常に貴重な情報を得ることができたと考える．質疑応答では，モチベーションの維持について講師から学生へアドバイスや提案があり，学生の意識改革に繋がったのではないかと感じた．ただ，実施日程が2～3年生の集中授業と重なってしまい，多くの学生が中座しなければならなかったのが運営側の反省点であった．

第 18 回県大吉備塾

○学外講師
・社会福祉法人瑠璃会 第三福田保育園 磯崎三貴子氏（1998 年卒業）
・岡山県立成徳学校 竹野美咲氏（2016 年卒業）
○テーマ：「県大で見つけた夢の実現」
○実施日時：平成 30 年 2 月 1 日(木)12:40－14:10
○会場：学部共通棟（東）8903 講義室
○企画運営：柏まり，樟本千里
○参加人数と構成：学生 11 名／教員 5 名／計 16 名

岡山県立大学卒業後，保育・児童福祉分野で夢を実現し活躍されている卒業生をお招きして，現在の仕事のことややりがい，夢の実現に至るまでの道筋，学生時代の過ごし方や就職活動について，体験談を交えながら話して頂いた．情報交換会では，お二人の先生方を囲み，小グループでの交流をおこなった．学生からの質問や相談に対してやさしく温かく，時には

ユーモアを交えて助言を頂き，有意義な交流ができた．学生にとっては，就職への不安や実際の職務についての疑問など，積極的に質問し，直接先生方からアドバイスを頂くことのできる貴重な機会となった．

第 19 回県大吉備塾

○学外講師

・三井造船システム技研株式会社

- 製造事業本部 電子ソリューション事業部設計部　吉本哲也氏（2010 年卒業）
- ビジネス事業本部ビジネソリューション事業部エネルギーシステム部　福丸邦雄氏（2006 年卒業）

○テーマ：「企業でどう働くか？企業名だけでは分からない「就職」を知ろう！」

○実施日時：平成 30 年 1 月 19 日（金）16：00～18：00

○会場：情報工学部棟　2202 講義室

○企画運営：石井裕

○参加人数と構成：学生 7 名／教員 2 名／計 9 名

第 19 回の県大吉備塾は，「企業でどう働くか？企業名だけでは分からない「就職」を知ろう！」をテーマとして，三井造船システム技研株式会社から 2 名を迎え，入社後の業務内容の違いや組織のあり方を感じていただく目的で開催した．まず福丸氏から企業向けの顧客管理・電話受付システムの開発業務に携わるご経験から，関係企業との連携や業務の流れのお話をいただいた．吉本氏からは，ハードウェアの開発に関する仕様設計から環境試験までの一連の製品製作現場の業務内容についてご紹介いただき，幅広い事業概要について説明いただいた．またご自身の就職活動での会社との出会いなど，企業名からの先入観と異なる事業内容について，経験談としてお話いただいたことで，学生からも好評であった．当日は人事担当者もご参加になり，終了後の意見交換では，学生からの就職への心構えなどについての質問を始め，企業の特色などについてお話をいただいた．ただし，今回は企業側に人選を依頼するなど，初めての試みであったことも多く，広報から実施までの時間が非常に短かったため，参加者が少なかったことが反省点である．

2-7-4　キャリアカルテの開発

近年では学士力あるいは社会人基礎力など総合的な能力が，学生に期待される指標として用いられており，学生にこれらに対する意識付けを行うことが必要とされている．しかし実際にシステムや制度の導入を想定した際の運用面については，利用率の低迷や運用コストなど様々な問題点が指摘されている．

本学においては，今年度更新導入された学務系全学情報システム「はっとりん」には，学生の就業力向上を支援する「キャリアカルテ」機能が含まれており，キャリア形成支援部会ではこの機能の運用方法について検討を進めた．部会内にキャリアカルテ検討WGを設置し，まず他大学で設置・運用されているキャリアポートフォリオシステムの調査を行っ

た．その上で，キャリアカルテ機能において，「入学前の自分について」「現在の自分について」「将来の自分について」と3つのカテゴリに分け，学生自身が入力し省察を促すことで，自己分析やその後の行動計画を支援する質問項目を整備した．平成30年度入学生よりキャリアカルテ機能の運用を開始するために，より効果的な活用について全学規模での検討を促していく．

2-7-5　卒業生と本学との連携課題（Reunion Dayへの協力）

岡山県立大学1期生主催のもと，本学同窓会後援，大学（キャリア形成部会）の協力で平成29年11月4日（土）に岡山県立大学卒業生の卒業20年を記念し，3学部合同同期会が開催された．出席者は94名（学内教員23名を含む）であった．県大祭や学内開放に足を運ぶ参加者もおり，半数以上の連絡先がアップデートされ，卒業生とのネットワークづくりなど多面的な機会創出に寄与した．開催準備に際し，大学は実行委員に対し連絡等の人的協力，同窓会は金銭的支援，実行委員は学内教員や在学生との接点を設けるよう役割を分担した．本事業は，開催初年度であるため実施を優先した．今後，退職教員や卒業生に関する個人情報は関係者間で共有となる．しかし，課題として組織間において明確になっていない部分や，目的や主体がはっきりしない部分も見受けられ，中・長期視点をもって今後の継続を目指していく．

2-7-6　卒業生・修了生アンケートおよび就職先アンケートの検討

本学の教育研究や学生支援のための活動の充実に向けた基礎資料を得ることや地域の発展に寄与できる人材を継続的に輩出していくことを目的として，平成27年度に「卒業生・修了生アンケート」及び「就職先アンケート」を実施した．

その後の社会情勢の変化を踏まえ，引き続き，卒業生，修了生及び就職先からの本学の評価に関する情報を得ることは有用であるため，継続して平成30年度にアンケート調査を実施することとした．

今年度は来年度の実施を目指し，前回のアンケートの目的や趣旨について，再度検証するとともに，調査の実施方法等について議論を行った．

2-7-7　まとめ

キャリア形成支援部会は，学部学科横断的な全学的取組みとして調査研究・企画立案業務を掲げ，学生支援班と協働して本学学生のキャリア形成を支援することを目的とした部会である．卒業生の活躍を在学生の就職支援やキャリア形成支援に結びつける目的で実施した県大吉備塾においては出席した在学生や卒業生講師によるアンケートの結果より，本取り組みに対する満足度や期待度の高さが把握できた．来年度入学生より運用を開始するキャリアカルテについては，その設計と構築まで完了することができたが，運用開始後のチェックおよびフィードバックについて検討する必要がある．また，卒業生と本学との連携における課題が明確になり，今後の改善が望まれる．

2-8　学生支援部会

2-8-1　概要

学生支援部会は，学部学科横断の全学的取組みとして，１）学生生活支援，２）正課外活動支援，３）障がい学生支援，等の業務を所掌するが，部門として学生支援室・学生相談室・保健室を擁し，学生における心身の健康や主体性の涵養に資する広汎な調査研究・立案・実施の活動を行っている．

2-8-2　学生生活支援

（１）アドバイザー制度の整備

本学では，学生の学修・生活に関する支援のためにアドバイザー制度を設けている．しかし，学生支援部会の調査の結果，有効に機能している学科とそうではない学科があることが明らかとなった．多様化する学生に対して大学として適切な支援を実施するためにアドバイザー制度の整備は喫緊の課題であった．そこで，実施体制，役割，必要な対応等を明確化し，教職員向けのマニュアルを作成した．また，学生に対しては，アドバイザー制度の目的，相談・面談方法等を示した文章を作成して，学生便覧および大学ホームページに記載することとした．

（２）オフィスアワーの整備

上記のアドバイザー制度に関連して，本学では教員が学生のために訪問時間を設けて待機し，学修や生活等における疑問や悩み等の相談を受け付けるオフィスアワー制度を設けている．しかし，各教員のオフィスアワーの情報はシラバスに掲載されているのみであり，学生はもちろん教員の認識も希薄な状態であった．そこで，アドバイザー制度の整備に関連させ，学生便覧でオフィスアワーを周知するとともに，学内 WEB システムで各教員のオフィスアワー一覧を確認できるように整備した．また，学生および教員のオフィスアワーの認識を高めるために，各教員が設定する曜日と時間を記載する全学共通の案内表示板を作成し，各研究室の扉に掲示するように整備した．

（３）学生会館の整備

学生及び教職員の健康の維持・増進，人間関係やコミュニケーションの形成，豊かな人間性の育成における学生会館の役割は大きい．福利厚生施設である学生会館の運用に当たっては，改善と継続を旨とし，学生の生活・学習環境改善につなげる必要がある．2017 年 3 月から 4 月の期間に全教職員・学生を対象とした学生会館アンケートを実施し 1681 名の回答を得た．結果の概要を以下にまとめる．

食堂に関しては，昼食時に週 1 回以上利用する教職員・学生の割合が約 46%であり，夕食時に至っては約 12%であった．利用者であっても味・量ともに満足している者は約 26%にとどまり，味に満足していない者は約 45%，量に満足していない者は約 35%であった．

さらに，未利用者の利用しない理由として，味に満足していないが約 60%，量に満足していないが約 38%のぼった．また，利用者からは混雑解消への要望が高く，その原因は「出入口が 1 カ所である」「入り口付近での食券購入」，「食券と現金での販売」などが上げられる．

売店に関しては，利用率約 83%と多くの人が利用している．しかしながら，弁当等，食品についての品揃えが十分でないと感じている回答者が約 70%にのぼっている．食品以外については，40%程度が品揃えは十分と感じている．さらに，商品価格については，60%が高い商品（食品を含む全商品）の割合が多いと感じている．

喫茶に関しては，昼食時に週 1 回以上利用する割合が約 33%であり，夕食時に至っては約 12%であった．利用者を中心に味・量・値段の評価は比較的高く，全体では味，量，値段について 40%が満足，営業時間も 65%が満足している．一方，頻繁には利用しない者や殆ど利用していない者を中心に，値段が高いといった意見や閉店時間が早いという意見が多い．

ラウンジスペースに関しては，学生を中心に 60%の利用率であった．利用目的としては余暇を楽しむためが大半を占めている．机や椅子・照明などの設備に対しての要望が多く，特に，課題を行う等，課題を行うには机が低く適当ではないとの声もあった．

以上のような結果を踏まえ，学生支援部会では必ずしも多くの学生および教職員にとって有意義な環境とは言えない状況であると判断している．そこで，特に食堂や喫茶の利便性の向上，売店を含めたニーズに応じたサービスの提供，ラウンジスペースの環境改善が福利厚生施設としての機能を満たすための改善案を提案した．現在進行中ではあるが，大学とテナント業者との面談・打ち合わせを実施し，改善へ向けて検討中である．また，ラウンジスペースに関しても学生支援団体 PZL を中心により良いスペースへ向けた検討を行っている．

（4）学生相互支援に関する調査と提言

2006 年に文部省高等教育局から出された「大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して」という報告書，いわゆる「廣中レポート」を契機として，学士課程教育において学士課程の学生を授業の支援業務に携わらせる大学が増えてきている．正課教育および正課外教育において「学生に対する教育・指導に学生自身を活用すること」は，「教育活動の活発化や充実に資するのみならず，教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身につけることができることにもなり，非常に意義深いものである」と認識されている．そこで，本学においても学生相互の支援体制を整備し，推進するために，本学における学生相互支援活動の実態調査と提言を行った．一方で，学生相互支援活動は前述のアドバイザー制度と関連させて進めていく必要があるため，アドバイザー制度の実施が進んで以降，平成 30 年度内を目標に具体的な体制整備と推進を図ることとなった．

（５）交通指導

学生の通学マナーの向上のため，春の交通安全週間（平成 29 年 4 月 6 日～15 日）及び秋の交通安全週間（平成 29 年 9 月 21 日～31 日）にあわせ，学生支援部会の教員，職員が，総社市役所及び総社警察署の方と協働で，早朝（8:10～8:40）に，交通安全の現地指導を実施した.

春は 4 月 12 日(水)，14 日（金)，秋は 9 月 26 日（火)，28 日(木）に，国道 429 号線のツタヤ北交差点及び国道 180 号線バイパス南溝手交差点に分かれ，主に自転車通学の学生に交通安全のチラシを渡し，運転中のスマートフォンやイヤホンで音楽を聴きながらの運転の禁止などを重点的に指導した.

2-8-3　正課外活動支援

（１）SAS 登録学生制度の創設

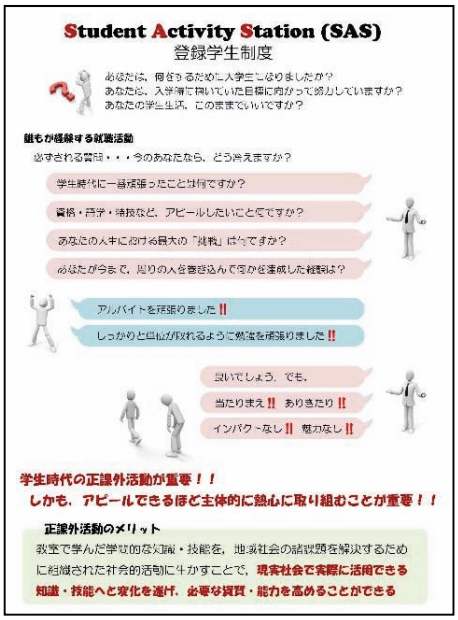
大学生にとっての正課外活動は，行動力，応用力，課題解決力，企画力，組織性，倫理性，社会性などを養ううえで重要な活動といえ，正課外活動を促進することは，学生の学びと成長を果たすことを目的としている大学の重要な役割である．正課外活動の 1 つであるボランティア活動もまた学生の成長に寄与するものである．本学には他の大学で設置しているボランティアセンターのような専門的な組織はない．そのため，多方面から大学に寄せられるボランティア募集は，学生支援班，COC+推進室，各教員が受けることになる．さらに，学生への周知の方法は全学共通の掲示板，各学部の掲示板，募集を受けた教員の声掛け等でなされている．つまり，ボランティア活動を要請する団体等からみると大学には窓口が多数あり，学生からみても情報が散乱しているという非効率な状況にあった．そこで，情報の集約と発信を一本化するために基幹場所を学生支援室 Student Activity Station：SAS）とする SAS 登録学生制度を創設した．さらに，学生相互支援（ピア・サポート）の観点および制度運用を正課外活動の一部としてとらえ，運用は学生支援団体 PZL が行うこととした．制度の概要は以下のとおりである．

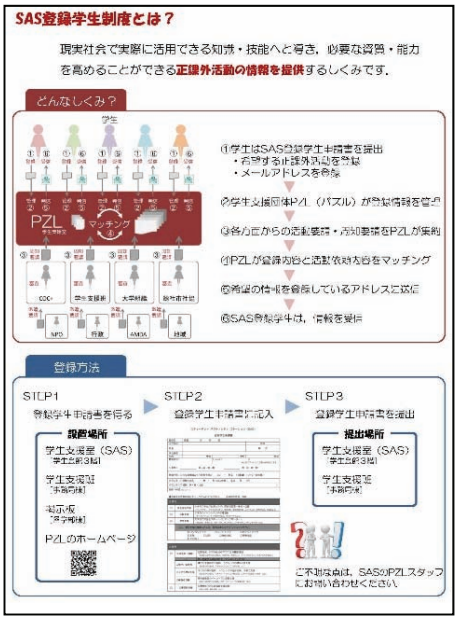
①学生は登録用紙に連絡先，活動したい分野等を記入して SAS に提出.

②PZL が SAS で登録内容を管理.

③学生支援班，COC+推進室，教員に寄せられた募集を決められたフォーマットに変換して SAS に送信.

④PZL の情報運用班が学生の登録内容とボランティア活動の内容をマッチングしてメール送信.





（２）学生 FD 活動助成の創設

教員の自己満足に陥りがちな FD に「学びの主権者」としての学生を取り入れ，学生を育てて改革の推進力にするべきであるという考えから始まった学生参画型 FD は，年々広がりをみせ，学生参画型 FD に取り組む大学は多数に及ぶ．このような状況の中，岡山県立大学では，正課外の活動を通して学生の主体性を育むこと，将来的に地域・社会で活躍できる人材を育成することを目指し，そのリーダー的役割を担う「学生による学生のための組織」である学生支援団体 PZL（パズル）を 2016 年度に発足させた．PZL の活動は大きく，「ピア・サポート」と「学生 FD 活動」に分けられる．そのうち「学生 FD 活動」としては，授業評価アンケートの見直しのための意見交換会への参加，全学情報システム（学務系）愛称ロゴ募集・選考およびロゴデザイン作成， i*See2016 への参加，学生 FD サミット 2017 春（山口大学）への参加（一部運営協力）などを行ってきた．当然ながら，これらの学生 FD 活動は今後も継続的に実施していくものであるが，学生 FD（スタッフ）は学生自らの意志と主体性のもとに進められることが基本であり，大学の FD 企画への動員や大学の FD 活動の下請けであってはならない．また大学や教職員側から方針が与えられるのではなく，あくまで学生の視点からの活動であることを保障しなければならない．さらに，学生スタッフがどのような権限をもって大学執行部や教職員に提案できるかが学生 FD 活動を推進していくためには極めて重要な要素である．そして，そのためには，他大学で開催される学生 FD サミットや i*See のような交流会，研修会へ参加させて専門性を身に付けさせることが重要である．そこで，PZL 所属の学生が他大学で開催される学生 FD サミット等の研修会や勉強会に参加する際には，参加のための費用の一部を助成する学生 FD 活動助成を創設した．

（３）PZL 活動支援

□PORU

「学生にもっと教職員の方々に興味をもってもらい，両者の距離を縮め，いろいろなことを気軽に相談できる関係にしたい.」，「この冊子を通して，PZL のことを学生や教職員の方々に知ってもらい，正課外活動を発展させたい.」という思いから，教職員の方を学生に紹介する冊子「PORU（ポル)」を作成して発行した．なお，この企画は，学生 FD サミット 2017 夏に参加した PZL メンバーから出されたもので，学生 FD 活動の一環として行われた．今後も年間に 1～2 回のペースで発行することになっている．

□しゃべり場（学生発キャリアアップ支援第一弾）

学生たちが現場で働いている人たちとほとんど会うことがなく社会に出ていくことに疑問と不安と感じて，自分たちで専門職の方との出会いをつくろうと考えて企画したイベント，「けんだい×そーしかい」を開催した．第一弾は，保健福祉学科の学生を主対象として，講師には総社市社会福祉会の方々を招いた．イベントには 39 名が参加してグループワークなどを行った．

□学生 FD サミット 2017 夏

前述の学生 FD サミット 2017 春（山口大学）に引き続き，学生 FD サミット 2017 夏（金沢星稜大学）に学生２名と教員１名が参加した（全体の参加者は 37 大学 212 名の学生・教職員)．学生 FD の歴史的背景や実践に関する講演の後，「みんなで考える理想の授業：シラバスを創ろう」のテーマのもとで，２日間のグループワーク（しゃべり場）が行われ，最終プログラムの発表会は活気あふれていた．このような学外の催しに積極的に参加することは，本学の学生 FD 活動のあり方や「しゃべり場」の運営方法等を学べる有意義な機会と捉えることができる．

□その他の活動

・宮島交流会

・AMDA こども食堂支援プラットフォーム発足フォーラム

（４）東日本大震災復興支援ボランティア

【期間】2017 年 8 月 28 日（月）～8 月 31 日（木）

【活動場所】宮城県，岩手県

【参加者】学生 8 名（看護学科 3 年生：6 名，1 年生：2 名)，引率教員 1 名（人間情報工学科　齋藤誠二)，添乗員 1 名（リョービツアーズ)

【活動内容】

8 月 28 日（月）

・宮城県南三陸町「南三陸まなびの里いりやど」にて，南三陸町についての講話.

・南三陸町内視察（戸倉中学校，災害復興住宅，旧防災対策庁舎）

8 月 29 日（火）

・南三陸町さんさん商店街にて南三陸の復興状況について講話．食品加工場見学
・AMDA の方と岩井埼，向陽高校を視察．気仙沼復興商店街視察（内湾の復興状況）．
・宿泊場所である紫会館にて商店街のイベントで展示するメッセージボードを作成．

8 月 30 日（水）

・リアスアーク美術館にて「東日本大震災の記録と津波の災害史」を鑑賞．
・陸前高田の奇跡の一本松を視察し，陸前高田の復興状況について説明を受ける．
・（社）Tsubomi 代表と大槌町内（旧大槌町役場，蓬莱島）を視察．
・大槌町コミュニティプレイスにて AMDA 大槌健康サポートセンターの方から被災当時の様子について説明を受ける．
・大槌町民生部コミュニティ総合支援室の方からコミュニティ形成の事業と課題についての説明を受ける．
・大槌町教育専門官の方から大槌町の教育の現状と課題について説明を受ける．
・地元の方々の手作り郷土料理をいただく
・大槌町金澤仮設団地　宿泊

8 月 31 日（木）

・大槌町コミュニティプレイスにて桜木の花道の会の方の指導でギンモクセイの植樹，ハイドロカルチャーの作成．
・（社）Tsubomi の方と昼食（Ce-Café）
・岡山駅　到着（22:30）

今回のボランティア活動は，天候により予定の作業を変更することもあったが，概ね AMDA 様と Tsubomi 様にご準備いただいた内容の活動ができた．昨年と同様，視察中心の活動であったが，その中でも地域の方々と触れ合えたり，仮設住宅での宿泊体験ができたりと，現地の様子，復興の現状と課題を身近に感じることのできる内容であった．これまでのバス移動とは違い，現地まで新幹線や在来線等を利用したが，現地での宿泊が 1 日多く取れ，多くの活動を実施できるため，バス移動よりも有意義であると感じた．

なお，例年と同様に参加した学生たちが活動の内容をまとめた資料を作成したので OPU フォーラム等で展示する予定である．

南三陸町視察

向陽高校視察

イベントパネルの作成

大槌町金澤仮設団地　宿泊

2-8-4　障がい学生支援

（1）対応事例　計画含む

2017 年度に提出された支援要請に対して学生支援室を中心として検討会議を重ね，合意形成がなされた項目について，以下の整備・支援・配慮を実施した．

・通路整備：学生会館 - 講堂間，体育館 - 講堂間の路面が荒く，車いす走行中の強い振動と前輪が路面に取られることが問題となり，振動の少ないバリアフリータイルを敷いた．

・多目的トイレ整備：大学にある多目的トイレは簡易なものであり，必要な設備が整っていない状況であったため，使用度の高い学生会館 1 階，情報棟 1 階，学部共通棟（南）1 階の多目的トイレの改修をはたらきかけ整備された．

・固定式椅子撤去：学部共通棟（北）の教室の固定椅子を一部撤去した．

・中長期計画作成：ハード面の合理的配慮実施計画を作成した．

・電車通学支援：車両に乗車するための支援研修会を開催し，学生 18 人，教職員 15 人が受講．日々の乗車支援を実施している．

（2）紀要執筆

本学における合理的配慮の推進体制および合意形成のプロセスを整理し，事例を取り上げ，浮かび上がった課題とその解決方法についてまとめた．

［岡山県立大学における障害のある学生への合理的支援と課題，齋藤誠二，谷口敏代，

迫明仁，高橋徹，福濱嘉宏，京林由季子，吉原直彦，岡山県立大学教育研究紀要，第1巻，第1号，p53-62］

（３）研修会開催

・大学教育開発センター・ワークショップ

『障がいのある方へのちょっとした手助けのために　あいサポート運動の取り組み』

日時：平成30年1月18日（木）

講師：中田雅章氏（岡山県社会福祉会顧問，岡山県権利擁護センター運営委員）

内容：障碍者差別解消法の趣旨と岡山県における，あいサポート運動の取り組みについて紹介いただいた．また，様々な障がいのある方々が困っていること，それを補う工夫や配慮についてガイドブックと DVD の視聴を通して解説いただいた．なお，この研修の参加者は「あいサポーター」に認定されました．

（４）研修会参加

・『平成29年度　障がい学生支援研修会』

日時：平成29年8月24日（木）

場所：岡山大学

主催：岡山大学全学教育・学生支援機構　学生総合センター

大学コンソーシアム岡山　障がい学生支援委員会

参加者：京林部会員，齋藤部会長

・『発達障害のある学生の支援のための勉強会－大1コンフュージョンへ向けた準備－』

日時：平成29年12月12日（火）

場所：岡山大学

主催：岡山大学全学教育・学生支援機構　学生総合センター

岡山発達障害者支援センター

参加者：田淵部会員

・『障害を理由とする差別解消に向けた地域フォーラム』
日時：平成 30 年 1 月 26 日（金）
場所：きらめきプラザ
主催：内閣府，岡山県
参加者：齋藤部会長（パネリスト）

2-8-5　学生相談室の活動

（1）相談体制

学生相談室は平成 6 年 5 月に開設された．開設当初は本部棟 1 階事務室横にあったが，平成 8 年からは図書館 2 階個人閲覧室の一室，平成 24 年度からは学部共通棟（西）へ移動し，さらに，平成 26 年度からは学生相談室の認知度向上を図る観点から環境を整備し，より入りやすくより安心して相談できる環境づくりを目指している．

相談室のスタッフは平成 6〜9 年度は学内カウンセラー2 名(臨床心理士)により週 2 日，平成 10 年度からは臨床心理を専門とする学内カウンセラー1 名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）1 名が新たに配置され，4 名体制で週 4 日開室していた．平成 11〜12 年度は学内カウンセラー2 名と学外嘱託カウンセラー1 名の週 3 日，平成 13〜16 年度は学内カウンセラー（臨床心理士，心理学専門）3 名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）1 名の 4 名で週 4 日開室していた．平成 17 年度からは学内カウンセラー（臨床心理士，心理学専門）3 名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）3 名の計 6 名体制となり，月〜金曜日まで毎日開室できる体制となった（ただし，休業期間中を除く）．平成 28 年度の開室時間は週 22〜26 時間である．

〔平成 29 年度　開室時間と運営スタッフ〕

曜日	時間	氏名	備考
相談室長		高橋　吉孝	学生部長
学校医（精神科）		中田　謙二	精神科医
月	10:30〜12:30	谷口　敏代	保健福祉学部教授
火	10:00〜14:00	津川　美智子	学外ｶｳﾝｾﾗｰ
	16:00〜18:00＊	迫　明仁	情報工学部教授
水	9:30〜13:30	斉藤　弘美	学外ｶｳﾝｾﾗｰ
	14:00〜18:30	疋田　基道	学外ｶｳﾝｾﾗｰ
木	8:45〜12:15	疋田　基道	学外ｶｳﾝｾﾗｰ
金	12:00〜16:00	津川　美智子	学外ｶｳﾝｾﾗｰ
	16:30〜18:30＊	京林　由季子	保健福祉学部准教授

＊第 1 週,第 2 週のみ

平成 20 年度から，精神科医である中田謙二医師が学校医として加わり，学生への面談

や相談室カウンセラーへのコンサルテーションを行っており，学生相談室長（学生部長）を含め，計 8 名のスタッフで構成され，この他に保健室及び学生支援班と連携を図りながら運営している．

（2）相談室の取組

月～金曜日の開室時間内のカウンセリング以外に様々な取組を行っている．

入学式当日には，学生相談室（愛称：ほっとルーム）のパンフレットを配布し，カウンセラーの自己紹介や学生相談室の PR を行い，気軽に来室できる雰囲気作りを行っている．同時に，誰でも予約なしで学生相談室を来訪，見学できる「ちらっとほっとルームキャンペーン」を実施した．また，相談室会議やカンファレンスを年 3 回開催した．

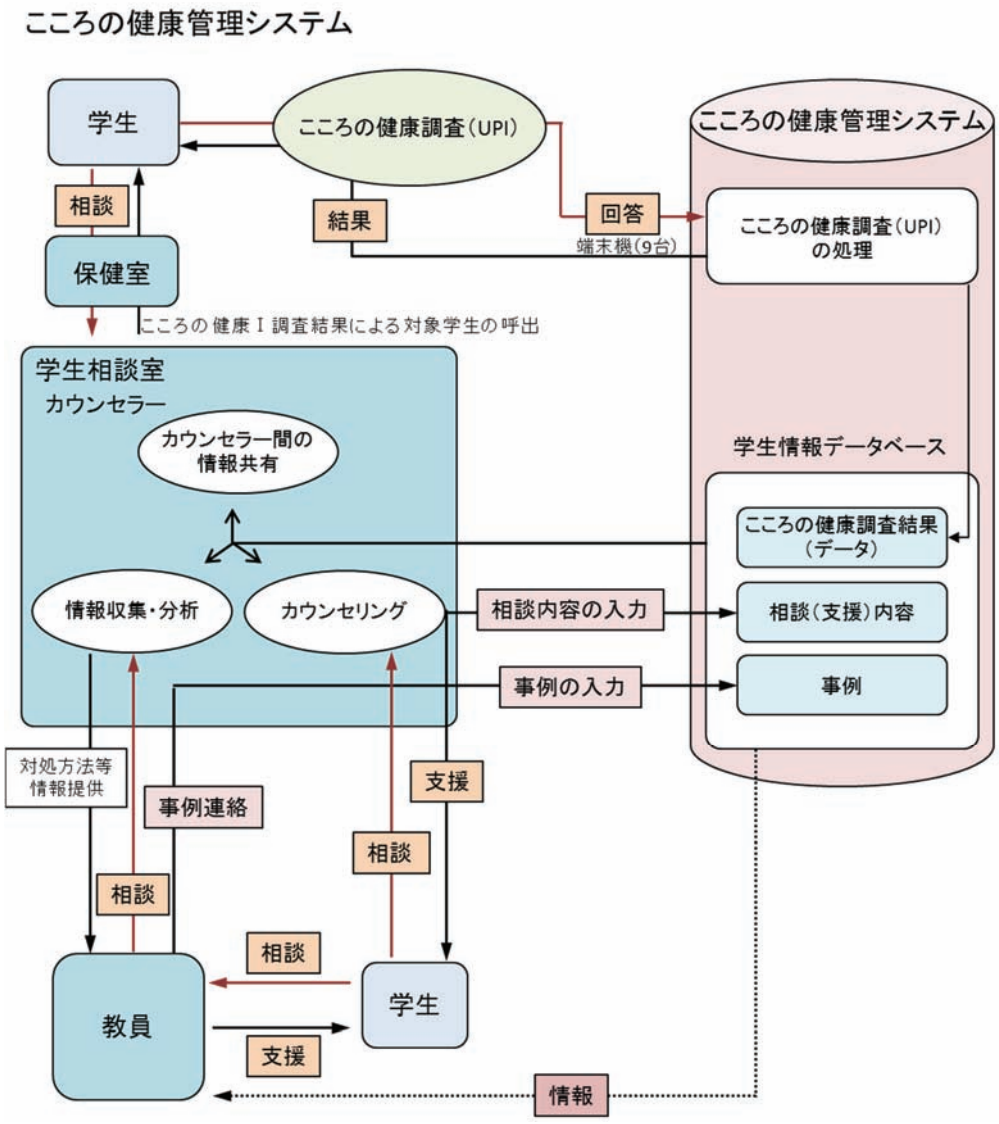
さらに，平成 26 年度より教育力向上支援事業に鑑み．デザイン学部の協力を得てパンフレットを刷新，より入りやすい雰囲気にするため外壁を装飾するなど.誰もが親しみを感じられるような明るく暖かい雰囲気の相談室にするための作業が始まっている．

〔学生相談室の取組〕

前期	概要
4 月	入学オリエンテーション （ほっとルームパンフレット配布及び掲示） こころの健康調査（UPI） （ほっとルームカード配布） ちらっとほっとルームキャンペーン
6 月	学生相談室会議・ケースカンファレンス
後期	概要
1 2 月	学生相談室会議・ケースカンファレンス
1 月	学生相談室会議・ケースカンファレンス

また，各学部教員から要請があった場合やカウンセラーが重要ケースと判断した場合，相談室長や複数のカウンセラー，関係する学部長や教員で対応について協議することとし，学生への緊急対応及び危機介入時には岡山県精神保健福祉センターに相談・協力を得ることにしている．

平成 23 年度からは，平成 22 年度に構築した「こころの健康管理システム」（別図参照）を活用し，「こころの健康調査（UPI：University Personality Inventory）」の結果や学生指導における事例等の情報管理を行い，学生個々のニーズに応じた効果的な相談を行っている．



（３）学生相談内容及び相談件数

学生相談室は来談者との秘密保持の遵守が必要である．相談の内容は，①対人関係（友人・親・教職員・アルバイト等の上司や同僚等），②修学や進路に関すること，③情緒的な問題，④教員へのコンサルテーション等である．件数は少ないが保護者からの相談もある．相談内容は多岐にわたり，中には病理水準域の学生も来室する．

来室のきっかけは，①学生の自発来談，②保健室からの紹介，③学生友人からの紹介，④教職員からの紹介に分類される．電話やメールでの相談対応は原則として行わないが，学生の状況によっては電話によるカウンセリングを行うこともある．

相談の基本的なスタンスは，学生に個別に会い，ゆったりと時間をとり，学生が語る内容を聴いて，心理臨床の専門家として必要な支援を行い，また，学生が自己を語り，自己を理解し，自己をまとめていく過程を大切にして，個々の学生の発達や成長という視点から心理

教育的な関わりを行っている．危機介入が必要な場面を除いては学生本人が自ら解決できるように支援をしていきたいと考えている．

来談者の平成 28 年度及び平成 29 年度の月別人数は，下表のとおりである．

〔月別延来談者数〕　　(H30.2.16 現在)　(人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計		うち学生来談者数	
														うち実数	延数	実数
29 年度	67	41	35	40	3	14	48	28	20	20	9		325	77	306	65
28 年度	4	55	83	12	8	47	90	44	33	33	35	1	608	69	570	55

2-8-6 保健室の活動

（1）保健室業務

保健室は，開学時より本部棟 1 階にある．主に学生の健康診断，健康相談，健康診断証明書等の発行，けがや急病の手当等，学生の心身の健康に関わる業務を行っている．

保健室のスタッフは，常勤職員は養護教諭 1 名のみであるが，平成 27 年度より医師免許を持つ教員 2 名が保健室主任を，学生部長が保健室長を兼務している．

本学では，開学当初より平成 26 年度まで森下病院の森下和郎先生，平成 27 年度より済生会総合病院の塩出純二先生に学校医を委嘱しており，学生の健康や感染症予防対策，その他保健活動に関する相談をしている．

（2）具体的内容

保健室で行う主な取組は次のとおりである．

・学生定期健康診断
・学生の心身の相談
・オープンキャンパスや大学祭等における救護業務
・健康診断証明書，検査結果証明書等の証明書発行
・「保健だより」による健康に関する情報発信
・インフルエンザ流行時期等の感染症予防対策
・けがや病気の手当及び緊急時の救急搬送依頼
・学生相談室の予約等

（３）平成 29 年度保健室利用状況　　（H30.2.16 現在）　（人）

	内科	外科	その他疾病	検査等	相談等	証明書	その他
H29 年度	76	82	16	74	147	212	7
H28 年度	118	97	10	673	765	611	5

2-8-7　まとめと課題

今年度は，学生生活支援として，「アドバイザー制度の整備」，「オフィスアワーの整備」，「学生会館の整備」，「学生相互支援に関する調査と提言」，「交通指導」を実施した．このうち，「アドバイザー制度の整備」，「オフィスアワーの整備」については，概ね体制等は整ったが，H30 年度以降の適正な実施に向けて，各学部や各学科の動向を確認しながら，継続して整備を進めていく必要があると考えている．また，「学生会館の整備」についても，アンケート結果を受けて，食堂，喫茶および売店には改善等の働きかけを行っており，PZL とも協力しながら環境改善に向けた支援・働きかけを継続していく必要がある．「学生相互支援に関する調査と提言」については，アドバイザー制度とのかかわりも考慮しながら，また他大学の調査も進めながら，スチューデント・アシスタント制度の導入を視野に今後整備を進めていく必要がある．一方，正課外活動支援については，「SAS 登録学生制度の創設」，「学生 FD 活動助成の創設」，「PZL 活動支援」，「東日本大震災復興支援ボランティア」を実施した．このうち，「SAS 登録学生制度の創設」については，それを PZL が管理運営することで学生相互の支援の形は見えてきたが，学生への周知に課題があり，登録学生数が伸び悩んでいる．さらに，PZL への負担が増してきており，負担軽減・負担分散の課題もみえてきた．

今後は，SAS 登録学生制度を柱にしながら，ボランティア推進体制を整備・見直を進めていく．「PZL 活動支援」については，学生の自主性を尊重しつつ，教職員の関わり方も考慮しながら，発展のための支援に努めていきたいと考えている．障がい学生支援については，合意形成された項目について，計画的に配慮実施が進むよう，多方面に継続的に働きかけるとともに，今後入学してくる学生についても迅速な対応ができるよう，受け入れ態勢整備を進めていく必要がある．

2-9 まとめと課題

平成 29 年度について新規事業はそれほど特にユニークなものはなかったかもしれないが，昨年度までの事業の仕上げや次年度への準備を中心に各部会で事業が実施された．教育企画室では，教学 IR 部門を立ち上げ，昨年度から稼働している教学システム Campus Square（通称「はっとりん」）を本学の教学データの要のデータベースとするべく検討を加えた．これは今後も各所の協力を得ながら継続的に実施され来年度，再来年度の完全な構築を目指している．また，今年度は，外部向けのファクトブックを発行したが，この制作によって本学が対外的に，あるいは内部的に必要としてるデータを洗い出すプロセスが始動した．

アドミッション部会では，初めてWebを使った入学時アンケートを実施し，かなり豊富なデータを得ることができている．また，現在強く要請されている新しいアドミッション・ポリシーの策定と入試方法の刷新が検討された．共通教育部会では，新しい体系の共通教育の実践及びアクティブ・ラーニングの促進が行われた．FD 部会では，授業参観と授業改善意見交換を実施し，教員の教授能力向上に寄与する取り組みを行った．教育評価部会では，平成29年度からスタートされた教学システム上に置くシラバスの問題の解決に取り組み，今後の基礎を築くことができた．キャリア形成支援部会では，県大吉備塾を継続的に実施し本学に定着させている．また学生の学士課程教育の期間におけるキャリア形成を促進するためのキャリアカルテの教学システム上での構築と評価を行い，次年度から実施に移す準備ができた．学生支援部会では，学生FDの定着と発展及びボランティアセンターの機能とシステムの検討を行った．教育改革WGにおいては，社会連携教育の方法論に関する手法を開発しつつ「岡山創生学」を進行させた．PROGの利用と評価方法についての検討も行った．

各部会が取得したデータはそれほど深く掘り下げられたものとは言えない．しかし教学IR 部門の設置によって，来年度からは相当の定量化が見込まれ，データに基づく改革，意思決定が進むことが想像される．

現時点では，大学教育開発センター事業で，本学の教育のブランド化に寄与する水準に至っているものは少ない．今後は，この点を意識した挑戦的な取り組みが望まれる所である．

3 教育力向上支援事業

3-1 目的

本学の教育力向上支援事業は大学全体や学部・学科等の人材養成の目的，学生に身につけさせるべき学修成果を明確にし，教育活動の成果として，本学が学生に保証する基本的な資質を身に付けた人材を輩出し，社会の信頼に応えるため，教育の充実・質の向上及び教員の教育力の向上に直接結びつく調査並びに実践活動に助成費を交付する事業である．

平成 29 年度事業における支援対象は共通（教養）教育の改革推進，学部教育及び大学院教育の改革推進，キャリア形成支援，ならびに教員の教育力向上・開発に関するものとした．申請書の審査にあたっては，教育研究担当理事・各学部長・共通教育部長・大学教育開発センター長ならびに教学課の協働による体制とし，採択に向けた作業を行った（14 件・採択は平成 28 年度）．

3-2 本年度実施事業及び来年度実施予定事業

（１）平成 29 年度教育力向上支援事業一覧

平成 29 年度において採択・実施された教育力向上支援事業は以下のとおり．

平成 29 年度 教育力向上支援事業 採択事業一覧（全 14 事業）

代表者所属	代表者氏名	事業名	査定額（千円）
情報工学部 情報通信工学科	杉村 藍	アメリカ研修を通した国際交流と情報・デザイン教育の充実１	2,450
情報工学部 人間情報工学科	髙戸 仁郎	地域資源を活用したスポーツ授業の開発と効果検証	513
デザイン学部 造形デザイン学科	齋藤 美絵子	情報工学部・デザイン学部 合同による協働教育プログラムの実践	371
保健福祉学部 保健福祉学科	中村 光	「岡山創生学」としての保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発	409
保健福祉学部 看護学科	實金 栄	看護アセスメント力向上のための看護理工学の導入　第Ⅰ期	550
保健福祉学部 保健福祉学科	坂野 純子	岡山創生学に向けた「音楽介在世代間交流プログラム」の再開発	600
情報工学部 人間情報工学科	井上 貴浩	実用的課題の実験科目への導入とメカトロ教育への実践	570
情報工学部	瀬島 吉裕	機械系科目の接続を考慮した学習教	425

人間情報工学科		材の開発	
保健福祉学部 保健福祉学科	佐藤 和順	リアリティショックを克服し就業継続できる力量を有した保育者養成のプログラム開発	535
デザイン学部 造形デザイン学科	作元 朋子	学外文化施設との連携によるキャリア形成への取り組み	500
デザイン学部 造形デザイン学科	島田 清徳	ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム	500
デザイン学部 造形デザイン学科	野宮 謙吾	大学間連携によるキャリア教育プログラムの実践	300
デザイン学部 造形デザイン学科	山下 万吉	キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー 及び 企画提案力向上を目的とした教育プログラムの実施	357
デザイン学部 デザイン工学科	森下 眞行	デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発	380
		計（千円）	8460

（2）平成 28 年度教育力向上支援事業の概要と成果

ア　共通（教養）教育の改革推進に関わる取組

共通教育【グローバル教育】新規

事　業　名	アメリカ研修を通した国際交流と情報・デザイン教育の充実１
代　表　者	杉村　藍（情報工学部情報通信工学科教授・語学教育推進室副室長）
目的及び 活動概要	（目的） ・ 情報・デザイン工学分野の研修を組み込んだ海外研修の企画・実施 ・ 国際感覚を身に着けた学生の育成 ・ 正課（共通教育科目「語学文化研修」）へ向けた検討

	（活動概要） ・事前指導（事前講義，安全対策研修会）6 月，7 月，8 月 ・英語自主学習（語学教育推進室の教材活用，国際交流センターでの英語村・Skype 英会話利用） ・アメリカ研修(Portland State University の Discover Portland! Program への参加．特別研修として都市計画レクチャー，Ziba 訪問，NIKE 見学）8 月 24 日～9 月 17 日（3 週間） ・事後指導（レポート提出，アンケート採取）9 月 ・研修報告会　10 月 5 日（於：8903）
成果	・17 名（保健福祉学部 3 名，情報工学部 7 名，デザイン学部 7 名）が参加し，全員がすべての研修内容を修了した． ・全体に参加学生の満足度は高く，事後アンケートでも「異なった文化や考え方などを体験・理解することができた」(88%)，「日本ではできないことを体験することができた」(94%)，「外国語能力の向上にもっと努めようと思うようになった」(71%)などの回答があり，目標としていた「国際感覚を身に着けた学生の育成」に資する研修を実施できたと考えている． ・研修先の Portland State University は CBL（コミュニティーベース教授法）で有名な大学であり，英語授業でも地域の一般の人々へのインタビューや地元小売店等の見学が含まれていた．学生にとっては地域に根差した学びを体験する貴重な機会となった．
課題等	・情報・デザイン工学分野の特別研修としてどのような内容のものを組み込むか，さらに検討していく． ・今年度は上記特別研修の一部が英語プログラムの日程と重複してしまったため，実施時期の調整が必要である． ・研修報告会は一般学生の参加者が少なかったので，今後はより多くの学生に参加してもらえるようにしたい．

共通教育【スポーツ教育】継続

事　業　名	地域資源を活用したスポーツ授業の開発と効果検証
代　表　者	氏名　髙戸 仁郎（所属　情報工学部人間情報工学科）
目的及び 活動概要	（目的） ・ 学外の地域資源を活用した非日常的な空間での教育効果の高い授業計画を策定し，実施，評価までのプロセスを通して安全で効果的な教育プログラムを開発する

	（活動概要） ・笠岡市北木島および白石島での教育プログラムを検討し，2 泊 3 日の行程で海洋スポーツとオリエンテーリングの実践を基軸とした模擬実習を実施した. ・事前学習のパイロット版として，学内のプールを用いたアクアエクササイズに SUP（Stand Up paddle board）を取り入れた.
成果	・現地では，スポーツ振興によって街づくりを実践している地域の取り組みを視察したり，旧映画館（ひかり劇場）を活用した地域おこしの実際を視察し，地域創生計画について意見交換をした. ・SUP を用いたプールでの事前学習は学生の評価も高く，扱いに慣れることやボード上での姿勢保持など基本動作の習得に有効で，波のある海上で始めるよりも効果的と考えられた. ・海洋スポーツを通した現地シーカヤックインストラクターとのコミュニケーション活動は，期待していた充分な成果は上がらなかった.
課題等	・海洋スポーツにはシーカヤックの実技講習を取り入れたが，初心者指導に熟達した指導者でなければ適切なルート設定ができず，受講者の安全が保障されないリスクも理解できた. ・初学者の指導においては，用具や指導者の質の向上が重要であることが改めて確認された. ・笠岡市の海洋資源を活用したスポーツ授業の開発を試みた．野外における様々な非日常的な活動の教育効果は先行研究と同様に高いことが確認されたが，宿泊施設と活動場所が異なる島のため，島間の移動がプログラムに時間的な制約を設けてしまうこと，指導環境や指導者の不足など，課題も多く残されている．今後は，笠岡市に限らず近隣の野外教育施設の活用も視野に入れた教育プログラムの開発が必要である.

イ　学部教育の改革推進に関わる取組

学部教育【学部横断教育】継続

事　業　名	情報工学部・デザイン学部 合同による協働教育プログラムの実践
代　表　者	齋藤 美絵子（所属 造形デザイン学科）
目的及び 活動概要	（目的） 情報工学部とデザイン学部の学生を対象とし，混合チームでウェブアプリケーション等の情報工学とデザインの両方にまたがる作品制作に取り組ませることで，以下の３点において効果を期待するものである. ・ 専攻の異なる学生や教員が混在するチームで目的・目標を共有し課

	題に取り組むことで発想力を向上させる. ・ 各々の基礎力の向上からアイデアの創出を循環させる. ・ 他者との意見交流の意義や効果を実感する.
	(活動概要) ・ オリエンテーション：実施内容の説明．外部講師紹介．使用アプリケーション説明．学部混合チーム分け. ・ 学外講師レクチャー&2days ワークショップ：外部講師による自身の作品解説およびデータ可視化についての講義．Processing チュートリアルに取り組む．チーム別作品の企画着手. ・ 企画ブラッシュアップ 1day ワークショップ:グループ別企画発表と外部講師によるアドバイスおよび企画修正．実装のための技術確認．チーム別作品制作. ・ 成果発表会：学外講師および参加者相互の合評.
成果	学部混合チームによる協働アイデアソンでは他分野学生による相互の刺激があったことが確認でき，プログラミングを伴う作品制作を行うことで各々の基礎力向上のモチベーションに繋がることが確認された．また，チームの発想力やオリジナリティを評価・後押しするよう指導を行った結果，成果物であるチーム作品が３年間の実施期間において最もオリジナリティがあり，デザイン性も高い作品が発表された．参加者アンケートおよび成果物の評価により上記の効果が確認できた.
課題等	３年間の取り組み期間を終えて，初年度（実現可能なアプリの企画)，２年目（アプリ企画とその実装)，３年目（オリジナリティとデザイン生の高い作品を完成させる）といったように，事業内容を年々改良し，参加学生に求める到達目標を向上させることができた．情報工学とデザインという異なる専門性を持つ学生同士に協働させ課題に取り組ませる教育プログラムの実践および改良ができた.

学部教育【学科横断教育】継続

事　業　名	「岡山創生学」としての保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発
代　表　者	中村　光（保健福祉学部　保健福祉学科）

目的及び 活動概要	（目的） ・ 今日の複雑化・高度化した医療・福祉の現場において不可欠な保健・医療・福祉に関わる多専門職の連携（interprofessional working: IPW）を実践的に教育する授業「チームガバナビリティ演習」を，「岡山創生学」プログラムとして改良・再開発する．
	（活動概要） ・保健福祉学部 3 学科の 3 年次生を対象にした，「チームガバナビリティ演習」（選択，1 単位）を開講した． ・授業は，「IPW に関する講義」「IPW のためのチームビルディング演習」「クライエントとの交流」「学外演習」「成果報告会」から構成した． ・新しく導入した「学外演習」では，地域の医療機関を学生グループで訪問し，インタビュー調査等を通じて地域が抱える医療的な課題と医療チームへのニーズを発見した． ・「成果報告会」では，その成果を持ちより全体で討議した．
成果	・23 名の学生（看護学科 3，栄養学科 5，保健福祉学科 15）が受講した． ・学生の授業満足度は極めて高かった．例えば，大学の授業評価アンケートへの回答は平均 4.6（最大値 5），独自の授業評価アンケートへの回答は，「他の保健福祉専門職の役割と責任について理解が深まった＝平均 6.1」，「自分の専門職としての役割について理解が深まった＝平均 6.0」，「この経験を通じて周囲の人から価値あるものを得た＝平均 6.2」（いずれも最大値 7）であった． ・学外演習も有意義であった。例えば，学生レポートでは以下の記述があった．「連携を図るときは，まずお互いに尊敬の念をもち公平であることが重要」，「専門職間で意見の衝突もあるが，それでチームとしてより良い医療を提供できる」．
課題等	・「学外演習」の導入によって，より「岡山創生学」プログラムにふさわしいものになったと考える． ・次年度の課題は以下の 3 点である．①「岡山創生学」科目としての開講初年度であり，予想される履修者数増への対応．②学外演習における事前学習の強化．③プログラムについての新たな課題を発見するための外部評価の実施．

学部教育【学科教育】継続

事　業　名	看護アセスメント力向上のための看護理工学の導入　第Ⅰ期
代　表　者	氏名　實金 栄　（所属　保健福祉学部看護学科）

目的及び 活動概要	（目的） 1）携帯型超音波画像診断装置の操作スキルの習得と画像の読影，アセスメントに関する教員への研修 2）看護基礎教育課程での試験的教育プログラムの開発
	（活動概要） 1） 教員への研修 超音波画像診断装置の操作スキル習得のための,学外での教員研修を実施した. 2） 試験的教育プログラムの開発 2年次生に看護への超音波画像の活用について紹介し，看護理工学へのニーズ調査を行った．教員に対し，導入可能な看護領域および教授内容に関するニーズ調査を行った.
成果	1） 西日本で唯一研修を行っているメディカルシミュレーションセンターひめまりあにおいて，基礎看護学1人，成人看護学1人，老年看護学1人，在宅看護学1人，母性看護学1人，助産看護学1人の計6人が学外研修を受けることができた．（追加して3月に3人受講予定．合計9人予定） 仲上豪二朗准教授による，褥瘡研究における看護理工学の意義と，看護学と他領域の科学との融合を目指し設立された Grobal Nursing Research Center の活動についての講演会を開催予定であったが，講師の都合により延期となった．今年度および次年度で日程を再調整中である． 2） 看護学生へのニーズ調査では，病院での超音波診断装置の存在を94.9%の学生が「知らない」と回答していた．しかし，超音波診断装置を授業で紹介した後には,「教授を希望」する学生は84.6%であり，学生のニーズは高く，早期の導入が期待される． 教員へのニーズ調査は，講演会の開催の有無にかかわらず，教員の学外研修終了後に実施し,超音波画像診断装置を用いた看護アセスメントの導入領域および達成目標を検討する予定である.
課題等	さらなる教員の超音波画像診断装置の操作スキルと，画像読影力の向上のための研修が必要である．また学内でも教員,学生が演習できるよう，超音波画像診断装置の整備など物的環境整備が望まれる.

学部教育【学科教育】新規

事　業　名	岡山創生学に向けた「音楽介在世代間交流プログラム」の再開発
代　表　者	氏名　坂野　純子（所属 保健福祉学部 保健福祉学科）

目的及び 活動概要	（目的） ・ 市民音楽ボランティアと協働で学生が世代間交流を実践するためのプログラムの再開発 ・ 基礎ゼミナールにおける「音楽介在世代間交流プログラム」の実施
	（活動概要） ・ 基礎ゼミナールでの交流型音楽活動のためのグループワーク演習 ・ 総社市昭和地区の養護老人ホーム清梁園を訪問し，音楽ボランティアによる「音楽介在世代間交流プログラム（さわやかコンサート)」に参加した. ・ 本学講堂で開催された「人と人がつながる音楽会」で基礎ゼミナールにて学んだ音楽介在世代間交流を実践した. ・ 成果報告会を実施した.
成果	・ 従来の音楽ボランティアのプログラムに学生が高齢者のニーズに配慮し提案した曲を加えることにより, 1)高齢者の参加意欲の向上, 2)学生の対象理解の深化がみられた. ・ 事後アンケートの結果,「音楽」という手段を活用した多様な背景をもつ世代間交流の経験は, 学生のコミュニケーション不安の解消, 社会参加意欲の向上等に有効であることが確認された.
課題等	・ 本年度は，２年次の基礎ゼミナール（必須科目）の授業時間で音楽介在世代間プログラムの演習を行い，昭和地区におけるフィールドワークは課外活動として実施した. ・ 「岡山創生学」の一環としての「地域保健福祉演習」は，３年次以上の選択科目であるため，学年や参加人数に対応したプログラム内容を検討する必要がある.

学部教育【学科教育】継続

事　業　名	実用的課題の実験科目への導入とメカトロ教育への実践
代　表　者	氏名 井上　貴浩（所属 人間情報工学科）
目的及び 活動概要	（目的） ・ 当学科完成年度を迎えるにあたり，ものづくり教育の再構成 ・ メカトロを基礎とした工学技術の養成と創造・解決スキルの向上 ・ 学科名称とカリキュラムポリシーに沿った課題の開発と導入

	（活動概要） ・ 基礎課題を各自で取り組ませるために，マイコンをグレードアップする機会に 40 名分のマイコンボードを製作した. ・ 応用課題として筋電ロボット製作を最終目標に掲げ，筋電回路・モータ駆動回路・LED 等表示回路の自作課題を作成し，グループで取り組めるように工夫した. ・ 学生のやる気や意欲を持続させるために，製作したロボットによる対戦形式のゲームを考案し実施した.
成果	・ 決まった解決法ではなくグループ単位で最善の方法を熟考し考案するようになった. ・ 学科のポリシーや人材育成像に相応しい課題作りができたため，学生自身が当学科で学ぶべきことを自ら考えるようになった. ・ 3 名グループで構成したため役割分担を明確化し情報共有のためのコミュニケーション能力が身についた. ・ メカトロ基礎から応用技術まで習得できた.
課題等	・ グループ学習の問題として常に挙げられる取り組みへの各学生の貢献度をどのように平準化するのか. ・ 結果と頑張りが比例しないときの成績評価 ・ 解決法探索に時間を要するときの教員による指導のタイミング ・ プレゼンテーションによる成果発表を今後取り入れる.

学部教育【学科教育】継続

事　業　名	機械系科目の接続を考慮した学習教材の開発
代　表　者	瀬島 吉裕（情報工学部人間情報工学科　助教）
目的及び 活動概要	（目的） ・ 人間情報工学科のディプロマ・ポリシーの中核である「人間中心の設計思想」の育成を目標として，人間の周囲環境を構成するハードウェア（機械）の設計製作に関する授業環境の充実化

	（活動概要） ・設計製図演習Ⅰ（2 年第 4 クォータ）において，前年度に導入・整備した卓上旋盤加工機を用いて，旋盤加工の実演を行った．さらに，学生自身に切削作業を体験させ，モノづくりに必要な知識および技能を体験的に学習させた． ・創造設計実験Ⅱ（3 年第 3 クォータ）において，自分で切削加工した物品の仕上がりについて，測定装置を用いて測定させ，加工における精度や表面粗さ等について体験させた． ・来年度に開講する「設計製図演習Ⅱ（3 年第 2 クォータ）」において，設計した 3DCAD モデルを容易に造形できる 3D プリンタを導入・整備した．
成果	・DVD による視聴だけでなく，旋盤での切削加工を実演することで，加工法や加工手順に関する知識が深まるだけでなく，加工手順を考慮した図面作成等，製図法への理解向上に寄与することが出来た． ・人間の運動機能を代替する動作（例えば，筋電信号に基づいてロボットが上肢運動を模倣する等）を設計課題とすることで，人間の動作理解だけでなく，動作原理に基づく強度計算や機構設計等，人間中心設計思想を深めることが出来た． ・3D プリンタを導入することで，設計した 3D モデルを実際に製作し，他の部品との干渉を検証する等，理論設計だけでなく，実物のモノづくりが可能となった．
課題等	・人間の運動機能を模倣するモノづくりでは，理論設計（シミュレーション）だけでなく，個人への最適化（カスタマイズ）が求められる．現状の学習教材では，理論設計に基づく製作作業に留まっており，本来の「人間中心設計」には至っていない．そのため，ディプロマ・ポリシーの中核である本思想を理解するには，設計から製作に至る PDCA サイクルの循環を早め，構成論的アプローチによる学習定着率を高める必要がある．とくに，クォータ制に伴う作業時間の限定が生じていることから，学生の負担度合いや学習定着率を適切に捉えながら，循環速度を制御する必要があると考えられる．

ウ　キャリア形成支援に関わる取組

キャリア形成支援【学科キャリア教育】継続

事　業　名	リアリティショックを克服し就業継続できる力量を有した保育者養成のプログラム開発
代　表　者	佐藤和順（保健福祉学科）

目的及び 活動概要	（目的） ・リアリティショックを克服できる保育者養成 ・研究力量を有する保育者養成
	（活動概要） ・幼稚園・保育所・施設等の見学・体験学習,専門性を醸成する各種講演会，現職者の講話及び「チュッピーひろば」を活用した地域貢献力・保育実践力の醸成を目指す協働授業の実施 ・基礎ゼミナール合同研究発表会の実施及び第 58 回中四国保育学生研究大会（於：四国学院大学）への参加・研究発表　題目「日ようび子ども大学における『まっくらワールド』の取り組み」（発表者：山口和徳（学生）他 21 名） ・子ども学専攻学生（1 期生）の卒業後の就職状況調査の実施
成果	・各施設等の見学，講演会，現職者の講話，チュッピーひろばへの参加等を通して,保育職の現状を理解し，自らの理想の保育者像を明確化することができた.学修成果については，学修した知見・技術が総合的に求められる「教育実習」において確認.その際，実習園の担当者からの他者評価も取り入れた. ・基礎ゼミナール合同研究発表会の結果を踏まえ，保育学生研究大会にて研究発表を実施し,研究力量の芽生えとすることができた.学修成果については，レポートにて学生自身に確認させ,「専門ゼミナール」との連続性・発展性にも言及することできた. ・卒業生を対象にした就職状況調査は 76.2%の回収率であり，主な質問項目は,「大学時代（子ども学在籍時）の生活に満足している」,「就職後,リアリティショックを感じた」,「大学での学びが就業継続に役立った」等である. 回答から子ども学での学びには満足度が高いこと,就職後,約半数がリアリティショックを実感していることを把握した.
課題等	・卒業生を対象にした調査から，本プログラムの効果も一定程度確認されたが，大学生活の満足度と就業継続に役立ったという認識の間には乖離が存在し,今後,さらに就業継続改善に焦点化したプログラムの変更の必要性が顕在化した.

キャリア形成支援【学科キャリア教育】継続

事　業　名	学外文化施設との連携によるキャリア形成への取り組み
代　表　者	氏名 作元朋子（所属 デザイン学部造形デザイン学科）

目的及び 活動概要	（目的） ・ 学外文化施設（高梁市成羽美術館，ギャラリーKICHIZAEMON）との連携によるプロジェクトやキャリア形成支援のための実践的な活動を行う ・ 技術者としての知識や造形スキルを養う ・ 社会人としてとして自律的に仕事のできる能力，企画提案力，問題解決力，コミュニケーションスキル，自己管理力の向上を目指す
	（活動概要） ・高梁市成羽美術館のミュージアムショップでの販売を想定したグッズの開発に取り組む ・ ギャラリーKICHIZAEMON で陶磁器作品を展示する ・ 第 23 回ヤングセラミストミーティングに参加する
成果	・ 学習成果を公の場で展示することは，学生自身の成果物に完成度を上げるきっかけ作りとなり，責任感を持って課題に取り組む姿勢が見られた. ・ 展示に至るまでの関係者との連携や，来場者との作品を通じたコミュニケーションを通して，作品作りに終わらず社会人として学外の方とプロジェクトを進めていく力が向上した. ・ 高梁市成羽美術館では，ミュージアムショプにおいて 3 年次生 8 名が企画制作したオリジナルのミュージアムグッズを陳列し，成果発表を行った。（展示期間：平成 29 年 7 月 13 日～9 月 3 日 ，学生によるギャラリートークの実施：平成 29 年 7 月 15 日） ・ ギャラリーKICHIZAEMON での展示では，在学生に加え，日本各地で活躍する卒業生８名も出品者として参加し，幅広い作風の陶磁器を鑑賞する場となった.（展示期間：平成 30 年 3 月 8 日～12 日） ・ 第 23 回ヤングセラミストミーティングでは,作品部門の大賞と準大賞を受賞した.
課題等	・高梁市成羽美術館とのプロジェクトでは対応授業の特性からテキスタイル分野が中心となっているので，平成 31 年度の実施に向け，他の分野の参加を検討していきたい. ・ギャラリーKICHIZAEMON での展示では，対象学生が少なかったため，教育効果は上がったと感じるが，セラミック分野への興味づけをもっと低学年のうちから行っておく必要性を感じた.

キャリア形成支援【学科キャリア教育】継続

事　業　名	ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム
代　表　者	氏名 島田 清徳（所属　デザイン学部　造形デザイン学科）
目的及び活動概要	（目的） ・ 学生の自立心を涵養するため，地域の幅広い年齢層に対応できうるワークショップを学生自らが企画立案し，教員・美術館学芸員の監督のもと実施する． ・ 実践的な専門能力・実務能力を養うとともに，年齢の異なる人々と交流することにより世代間コミュニケーションを学び，社会への適応能力を高める．
	（活動概要） ・平成 29 年 11 月 12 日（日），19 日（日），26 日（日），12 月 3 日（日），岡山県立美術館において，伝統工芸展の来館者に向けて学生が企画した登り窯体験，機織り体験，組紐，糸つむぎ，藍染，たまねぎ染めなどのワークショップを計 6 回実施し，平成 30 年 2 月には山陽新聞社さん太ギャラリーにおいてワークショップと展示形式による学修成果発表を行った．
成果	・ 相手の立場に立った計画立案，準備計画，伝えること教えることなど，受入組織および一般の方を意識しながら様々な体験を通して学習に対するモチベーションを高めることができた． ・ 学んできた専門知識や技術を通して社会と関係を持つことにより，実社会における本プログラムの意義を再確認し，学修意欲の向上に繋がったことが，実施後のアンケートから確認できた．
課題等	・ 普段は経験することのできない登り窯，機織り，染め，組紐などを体験できることから，参加者にはたいへん好評であったため，今後もこのプログラムを何らかの形で継続・発展させたいと考える． ・ 平成 29 年度（最終年度）は，学生アンケートを実施し，学習成果と本プログラムの意義の確認を行った．また，学生自身が学習する専門分野と地域との連携についての理解を深めるために，地域貢献活動の記録として進路開拓のためのポートフォリオに掲載した． ・ 学生が主体的に計画実施した学科のインターンシップ報告会において成果発表を行い，学外の施設において総括としてのワークショップの実施と事業および学修成果の発表会を実施した．

キャリア形成支援【学部キャリア教育】継続

事　業　名	大学間連携によるキャリア教育プログラムの実践
代　表　者	野宮 謙吾（デザイン学部造形デザイン学科）
目的及び活動概要	（目的） ・ 平成 24～26 年度実施の産業界ニーズ GP 事業でサブグループを形成した３大学（本学，岡山理科大学，山口東京理科大学）における継続取組の位置付けである． ・ 本事業では連携協定項目に準じ，①連携大学開講の授業参観，②取り組みの合同発表会（平成 29 年度に計画），③「自律的な技術者に要求される能力の共通指標」の検証を実施する．
	（活動概要） ・SPU 活動 1 件（連携先：総社水辺の楽校，教育委員会生涯学習課）の実施（4～11 月） ・「自律的な技術者に要求される能力の共通指標」に基づく学生アンケートの実施（11 月） ・産学官連携授業 2 件（株式会社ザグザグ服部氏/高知大学特任教授中澤氏）の実施(11 月 14 日/2 月 2 日） ・本学教員の山口東京理科大学授業の参観（2 月 5 日） ・学生による取り組みの合同発表会（2 月 20 日）
成果	・産学官連携事業（SPU 活動，産学連携授業）では，アンケート結果より，学生のキャリア教育並びに教員の FD 研修における効果が得られたことを確認した． ・SPU 活動に参加した学生 8 名に自律的な技術者に要求される能力の共通指標 17 項目によるアンケートを実施し，指標の精度を検証した． ・３大学連携による「学生による取組の合同発表会」（会場：岡山理科大学）では，他大学の取組み見学と学生交流を実施，本学学生においてはキャリア教育の観点から新たな視座や刺激を得る機会となった．
課題等	・学生による取組の合同発表会開催にあたっては，3 大学の教務スケジュールが大きく異なるため，開催日の調整が困難であった． ・また，岡山で開催の場合，山口東京理科大学の学生は移動時間や，経費の問題により参加できない状況であった． ・本事業は本年度をもって終了となるが，以上の解決を図りながら，今後も３大学連携取組を継続していく計画である．

キャリア形成支援【学科キャリア教育】継続

事　業　名	キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー及び企画提案力向上を目的とした教育プログラムの実施
代　表　者	氏名 山下 万吉（所属 デザイン学部造形デザイン学科）
目的及び活動概要	（目的） ・ 学科生を対象としたキャリア形成支援「進路選択や就職への意識向上」「ビジネスに対する企画提案力及び制作意欲の強化」 ・ 学科教員の指導方法の向上・開発
	（活動概要） ・ ポートフォリオセミナー①「ポートフォリオプレゼンと公開講評」開講(実施日 7/26):外部講師／菅公学生服株式会社 開発本部　部長・岩井聡氏 ・ 特別講義の開講（実施日 10/5）：外部講師／株式会社プロダクションI.G 取締役／シグナルエムディ 代表取締役・森下勝司氏 ・ ポートフォリオセミナー②「デザイン会社採用担当によるポートフォリオを使ったセルフブランディング」開講（実施日 12/8）：外部講師／株式会社アドブレーン ディレクター・芝原忍氏 ・ 特別講義及びポートフォリオセミナー③の開講（実施日12/11）：外部講師／テキスタイルデザイナー・松永彩氏 ・ ポートフォリオセミナー④「ポートフォリオプレゼンと公開講評」開講（実施日 2018.1/26）：外部講師／凸版印刷株式会社 環境デザイン事業部クリエイティブ本部 国内デザイン部長・寺村和眞氏
成果	・ それぞれの活動にて学生アンケートを実施. 内容の満足度が非常に高い結果が出た. また成果として, 段階的にポートフォリオの制作を進めることが出来たため, 具体的な制作ノウハウの修得, クオリティ向上に繋がったことが伺えた. ・ 聴講した担当教員にとって, 具体的に各自の授業等に反映できる教育のノウハウを学ぶことが出来た.
課題等	・ 総括として, 本事業がもたらした学修成果の評価方法及び就活への影響について, アンケート以外の明確な手法が得られないまま取組み期間が終了したのは大きな課題である. しかし, 本事業が学生たちの単なる刺激となるだけでなく, 具体的な制作ノウハウの修得, 就活への意識向上等に影響を与えたことは, 学生が制作したポートフォリオ及び各回後の修正から伺えたため, 意義のある取り組みであったと考える.

学部教育【学部知財教育】継続

事　業　名	デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発
代　表　者	森下　眞行（デザイン学部デザイン工学科）
目的及び活動概要	（目的） １．デザインパテントコンテスト参加による知財リテラシー向上 ２．産学連携授業（PBL）での現実的なニーズに対する課題設定力，それに対する問題解決力（アイデア創造力を含めた）の向上
	（活動概要） １．知的財産権教育の実施 ２．平成 29 年度デザインパテントコンテスト応募 ３．芸術系大学での知的財産権教育の現状調査 ４．取組４年間の成果検証として，外部評価
成果	１．知的財産権教育の実施 ・全学講義「大学で学ぶ」にて，弁理士（福井健策氏）による著作権導入教育を実施（平成 29 年 5 月 10 日） ・フレシュマンセミナーにて，三野明洋氏（株式会社NexTone会長）による著作権導入教育を実施（平成29年6月1日） ・弁理士（大西正夫氏）による意匠権セミナーを実施（平成29年7月12日） ・特許庁審査官（藤澤崇彦氏）による意匠審査官へのキャリア教育を実施（平成 29 年 10 月 25 日） ２．平成 29 年度デザインパテントコンテストへの応募 製品・情報デザイン演習Ⅲa/b 履修対象者 26 名の内 23 名が事前セミナーを受講．6 名が応募し，1 名が優秀賞（登録出願支援対象創作）に選考された． ・受賞選考者への意匠出願指導を実施 ３．芸術系大学卒業制作展示会での知的財産権教育の現状調査を実施 ・愛知県立芸術大学，名古屋工業大学，名古屋芸術大学，名古屋造形大学 4 校で実施 ４．産学連携先，選考対象者，弁理士へのヒヤリングの実施と分析
課題等	１．知的財産権教育に関しては対象学年を拡大し実施したが，一時的な効果しか期待できないので，初年次教育やキャリア教育に組み込んだ持続的な実施が必要になる． ２．産学連携授業の学修成果を知財リテラシー向上と連動させるには学生のモチベーションや連携先からの制約も多いので，講義・演習と組

	み合わせた両輪教育プログラム（資格取得目的）が必要になる.

（３）平成 30 年度教育力向上支援事業

平成 30 年度事業については 10 件の申請があり，教育研究担当理事・各学部長・共通教育部長・大学教育開発センター長ならびに教学課の協働による審査ならびに査定案作成作業を実施した．応募件数の減少については，29 年度で計画が終了した事業が複数あったことが主な理由であるが，他の事業費や助成費での申請に転換した案件もあったことが，理由として挙げられる．審査については，他の事業費等に該当するか否かも観点に含みながら，平成 29 年 11 月に実施した.その結果として採択・実施された教育力向上支援事業(7 件)は以下のとおり.

平成 30 年度 教育力向上支援事業 採択事業一覧（全 7 事業）

代表者所属	代表者氏名	事業名	査定額（千円）
保健福祉学部 看護学科	名越　恵美	SBAR を用いたシミュレーション演習プログラムの作成	390
保健福祉学部 看護学科	實金　栄	看護アセスメント力向上のための看護理工学の導入　第Ⅰ期	496
保健福祉学部 栄養学科	新田 陽子	韓国又松大学校での調理実習を通したグローバル教育の推進	620
保健福祉学部 保健福祉学科	中村　光	「岡山創生学」としての保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発	517
保健福祉学部 保健福祉学科	新山　順子	保育士養成課程の見直しに対応した岡山県立大学モデルカリキュラムの開発	522
デザイン学部 デザイン工学科	津田　勢太	建築学科（仮称）の教育体制構築に向けた課題調査	560
デザイン学部 造形デザイン学科	野宮 謙吾	デザイン学科（仮称）における DP・CP 達成に関する教育状況調査	550
		計（千円）	3,655

3-3 まとめと課題

平成 29 年度における個別の事業の成果については，3-2-(2)で紹介した通りだが，このうち新規申請事業は 14 件中 4 件である．内訳としては，共通教育関連 2 件，学部横断教育 1 件，学部知財教育 1 件，学科横断教育 1 件，学科専門教育 4 件，学部学科キャリア教育 5 件であった．このうち学科専門教育関連は保健福祉学部及び情報工学部，キャリア教育関連はデザイン学部と偏りがみられた．また共通・専門教育ともアクティブ・ラーニング（AL）を

主題とするものが目立たなかった．とくに多くの事業に含まれているはずの AL 取組が，専門分野を越えて汎用性をもって成果共有されるに至っていない点が惜しまれる．

平成 30 年度事業については,7 件採択されたうち 3 件について，第 3 期中期計画に向けた準備事業であり，他は専門教育の手法等に関するもので占められた．

以上の経緯から，他の事業費等との兼ね合い等を含めて申請事業数が小規模に至っていることもあり，本事業そのもののあり方を第３期中期計画期間に向けて抜本的に見直す時期がきていると考えられる．

今後は，学修成果の改善を念頭に，個別事業の枠を超えて汎用性をもって成果共有できるよう募集段階での方向づけを行う必要がある．例えば「アクティブ・ラーニング」や「ルーブリック活用による質評価」など，予め設定されたテーマに基づく募集が考えられる．

第２章　国際交流センターの活動と成果

１　概要

国際交流センターは，本学同窓会から寄贈された建物を活用する形で，平成２６年１０月にオープンした．本学の関係規程により，業務は以下の通りと定められており，「機能としてのセンター」及び「場としてのセンター」の２つの側面を持っている．

(1)　本学の教育研究に係る国際交流推進のための企画立案並びに情報の収集及び提供に関すること．
(2)　本学の教育研究に係る国際交流事業の企画及び実施に関すること．
(3)　学生及び教職員の外国語能力並びに外国人の日本語能力の向上支援に関すること（岡山県立大学語学教育推進室が所掌する業務を除く）．
(4)　学生及び教職員の海外派遣の企画並びに調整に関すること．
(5)　海外からの研究者，留学生等の受入推進に関すること．
(6)　各学部，学科等が実施する国際交流事業への協力に関すること．
(7)　海外協定大学との交渉及び接遇に関すること．
(8)　センターに設置する機器等の運用及び維持管理に関すること．
(9)　その他国際交流の推進に関すること．

開設された平成２６年度の活動は半年間であったが，アデレイド大学英語教育センターの協力のもとでの Skype 英語や，学内外の英語教員による「英語村」等を試験的に実施しながら，より効果的な取組の推進に向けて，課題や改善点等を探った．

平成２７年度は，専任でセンター長を務める特任教授を４月から新たに採用するとともに，各学科代表８名，英語教員代表１名，事務代表１名の総勢１０名の幹事を選任して，本格的に活動をスタートさせた．そして平成２８年度及び平成２９年度には，各種の取組を一層充実発展させていくことができるよう，様々な工夫を凝らした．

センター幹事会議は合計３回開催し，基本的方向性や具体の取組内容等を随時協議した．

「機能としてのセンター」では，学長方針に基づく国際交流協定校の増大や学生海外短期研修の充実，香港，台湾，インドネシア，イギリス，ニュージーランド等の大学との共同研究の推進への支援，留学生受入拡大のための各種調査研究やＰＲ活動の実施及び「博士後期課程留学生特別入学試験制度」の推進など，従来の取組を強化するとともに，日本学生支援機構の「海外留学支援制度」への申請や，学生の中長期留学をサポートする「おかやま若者グローバルチャレンジ応援事業」への申請支援等の新たな取組にもチャレンジした．

「場としてのセンター」では，学期中は英語村を毎日「開村」（月～金の４時間）するとともに，週１回の Skype 英語を継続したほか，「韓国語村」や季節毎のイベント等を随時開催した．更に，海外とインターネット接続できる機器を活用して，海外の様々な場所と結び，学生交流や入学者選考の審査等を支援した．

２　国際交流における教育活動

2-1 国際交流協定校

大学間の協定校は，平成２８年度末時点で１６校だったが，平成２９年度には１校増やして，合計で１７校となった．１月に学長を団長とする友好訪問団をタイへ派遣して調印式に臨むとともに，交流拡大に向けたトップ会談を行った．

【大学間協定校】

平成８年度　　（１）バンガー大学（英国），（２）セント・アンドリュース大学（英国）
平成１７年度　（３）又松大学校（韓国）
平成１９年度　（４）四川大学（中国），（５）南昌大学（中国）
平成２０年度　（６）延辺大学（中国）
平成２３年度　（７）東北師範大学（中国）
平成２６年度　（８）ハサヌディン大学（インドネシア），（９）アデレイド大学（豪州）
平成２７年度　（１０）トリブバン大学（ネパール），（１１）雲林科技大学（台湾）
　　（１２）モンテレイ工科大学プエブラ校（メキシコ）
　　（１３）モンテレイ大学（メキシコ）
平成２８年度　（１４）河南科技大学（中国），（１５）ポートランド州立大学（アメリカ）
　　（１６）東南大学（中国）
平成２９年度　（１７）カセサート大学（タイ）

また平成２９年度は，この他にも複数の大学との間で交流拡大に向けた意見交換等を行っており，平成３０年度以降の進展が期待されるところである．

学部間交流協定では，情報工学部が，韓国の群山大学工学部と９月に協定を締結した．

カセサート大学での調印式

群山大学での調印式

2-2 語学文化研修等

まずは，平成２８年度の参加者による報告会を４月に開催して，平成２９年度プログラムへの学生の興味関心を喚起した．約１００名の参加者があり，学生アンケートを実施して，「海外研修等で訪問したい国・地域」を尋ねたところ，以下の結果であった．

オーストラリア　５３名，　イギリス　３９名，　アメリカ　３６名，

韓国　４０名，　台湾　１７名，　香港　１７名　　（回収数：８６名）

英語に関しては，例年通り２月末から約３週間，９名の学生をオーストラリアのアデレイドへ派遣した．平成２５年度のプログラム開始から５回目となったアデレイド大学については，課外活動の充実が課題であったことから，同大学の課外研修プログラムに追加する形で，平成２７年度に委嘱した芳賀浩本学客員教授（アデレイド在住）の支援も得ながら，岡山県とのこれまでの交流の概要や，都市計画，交通対策，環境対策などに関する特別指導を１回実施した．

なお，派遣が継続していたイギリスのバンガー大学については，募集を行い，参加希望者が３名いたものの，同国内でテロが複数回発生したこともあり，共通教育部教授会で審議した結果，研修への参加自体を本学としては中止することとなった．

韓国語は，又松大学校での研修が実施されなかったことから，平成２８年度に続き，ソウル市の梨花女子大学における研修（８月下旬からの１８日間）に，３名の学生を派遣した．

アデレイド大学での語学文化研修

梨花女子大学での語学文化研修

中国語については，応募者がなく，５年連続で不成立となった．

平成２９年度から授業化された「保健福祉学スタディツアー」は，３カ所で実施された．

平成２６年度スタートの「南オーストラリア州保健福祉学スタディツアー」には，１２名の学生が参加して，３月中旬～下旬の約１週間，専門研修，英語研修，福祉施設訪問，学校訪問，ホームステイ等を行った．

いずれも２回目となるが，９月実施の香港（香港理工大学）には，８名が参加するとともに，２月実施の韓国（又松大学校）には，９名が参加した．これら３つの保健福祉学スタディツアーへの参加学生２９名は，すべて女子学生であった．

これらに加えて，３回目となる香港スタディツアー（４名参加）を９月に実施して，大学訪問（２大学で授業参観や学生交流等），文化体験，地域視察，課題設定自主研修等を行った．

また，２回目の台湾スタディツアー（５名参加）を３月に実施して，大学訪問（２大学で授業参観や学生交流等），文化体験，地域視察，ホームステイ等を行った．

さらに，アメリカのポートランド州立大学での初めてのスタディツアー（１７名参加）を８月～９月に実施して，英語研修，各種課外活動，企業訪問等を行った．

一方，例年通り「日本語・日本文化研修」を７月に本学で実施し，台湾の雲林科技大学と淡江大学，中国の河南科技大学の３大学から，学生１５名を受け入れた．

アデレイドでの保健福祉学スタディツアー

香港での保健福祉学スタディツアー

韓国での保健福祉学スタディツアー

香港スタディツアー

台湾スタディツアー

アメリカスタディツアー

2-3 教育交流

平成２７年度と２８年度に受け入れた，インドネシアのハサヌディン大学の学生民俗音楽舞踊グループについては，平成２９年度には，残念ながら招聘が実現しなかった．

平成２８年度に引き続き，香港の香港城市大学の学生グループを，７月に１日受け入れ，デザイン学部の授業への参加，国際交流センターでの交流（七夕祭り等）など，本学学生との交流の機会を用意した．

また，メキシコのモンテレイ工科大学からの学生研修グループが，３年連続で来学した際（７月）に，学生交流への支援等を行った．さらに，アメリカのポートランド州立大学からの（７月），そして香港理工大学からの（８月），それぞれの学生研修グループが，いずれも初めて来学した際に，学生交流やホームステイ手配等の支援を行った．

ポートランド州立大学では，地域課題解決型学習（Community Based Learning)を推進しており，本学での教育に反映できるよう，１０月に実施された専門研修に教員１名を派遣した．

香港城市大学の学生グループの来学

モンテレイ工科大学の学生グループの来学

2-4 国際交流センター（建物）内での様々な活動

英語村は，英語のネイティブ・スピーカー等とのおしゃべりやゲームを通じて，学生に英語の楽しさを体得させる取組であるが，学期中は月～金の毎日，１１：００から１５：００まで開村した．指導者は，いずれも学外者の中からアメリカ人とカナダ人の男性２名が務め，合計約１５０回の開村にのべ約１，２００名の学生が来訪した．取組のＰＲと体験者増大を目的に，合計１１回の特別イベント（クリスマス・パーティなど）も実施した．

本学で韓国語も教えるデザイン学部教員が，語学学習支援と韓国理解の促進のため，昨年度に引き続き，原則週１回，各１時間の韓国村を開催し，のべ約６０名が参加した．

アデレイド大学との Skype 英語は，アデレイド大学での語学文化研修やポートランド州立大学でのスタディツアー等の事前研修としての位置付けも加えながら，原則木曜日（不定期）の夕方に１時間実施した．合計で，のべ５０名の学生が参加した．

その他，留学相談，各種会議や視察など，平成２９年度は，総計で約２，１００名が来訪

した.

英　語　村

Skype 英語

平成２９年度は，英語村への来村の回数や目的，利用前後の変化について，２回目のアンケートを実施した．リピーターが中心であったことから，サンプル数は多くはないが，以下の結果となった．

(回答者)　２２名（男子：９名，女子：１３名）
(学年) 学部１年生：１２名，２年生：５名，４年生：３名，大学院生：１名，
　　研究生：１名
(利用回数)　５回以下：７名，６～１０回：４名，１１～２０回：４名，
　　２１回以上：４名，３１回以上：３名
(利用目的)　＊複数回答可
「英語を話したい」１７名，「英語が上手になりたい」１５名，
「外国人と話したい」１３名，「自分を向上させたい」１２名，
「異文化を体験・理解したい」８名，「外国旅行の準備のため」７名，
「英語の成績を向上させたい」５名，「国際感覚を身に付けたい」５名
(利用前後の変化)
「英語でのコミュニケーションに，より積極的になったと思う」
　とても当てはまる：６名，まあまあ当てはまる：１４名，あまり当てはまらない：２名
「英語が上手になったと思う」
　とても当てはまる：４名，まあまあ当てはまる：１０名，あまり当てはまらない：８名
「英語の成績が向上したと思う」
　とても当てはまる：１名，まあまあ当てはまる：９名，あまり当てはまらない：１１名
「英語をもっと勉強しようと思うようになった」
　とても当てはまる：１３名，まあまあ当てはまる：８名，あまり当てはまらない：１名
「異文化への理解が進み，より関心が高まったと思う」
　とても当てはまる：１１名，まあまあ当てはまる：10 名，あまり当てはまらない：１名

「海外のことをもっと知りたいと思うようになった」
　とても当てはまる：１２名，まあまあ当てはまる：９名，あまり当てはまらない：１名
「外国旅行に出掛けたいと，より強く思うようになった」
　とても当てはまる：１７名，まあまあ当てはまる：４名，あまり当てはまらない：１名
※回答結果から，多くの利用者は，以下のように考えているらしいことが分かった．
○英語村で外国人と英語を話すことで，自分の英語力を向上させたい，異文化を体験・理解したいと希望しているものの，英語の成績を上げたいとはそれほど考えていない．
○英語村を利用してみて，英語の成績が上がったり，英語が上手になったりすることはあまりないものの，英語でのコミュニケーションにより積極的になったり，英語をもっと勉強しようと思うようになったり，異文化への理解や関心が高まったり，海外のことをもっと知りたいと思うようになったり，外国旅行に出掛けたいと思うようになったりしている．

また，Skype 英語の参加者に対するアンケートも，初めて１月に実施した．サンプル数は多くはないが，以下の結果となった．

(回答者)　７名（男子：２名，女子：５名）
(学　年)　学部１年生：４名，２年生：１名，大学院生：１名，研究生：１名
(参加回数)　１回：４名，４～５回：１名，６回～１０回：２名
(参加目的)　＊複数回答可
「英語が上手になりたい」６名，「英語を話したい」５名，
「外国人と話したい」４名，「外国旅行の準備のため」３名，
「異文化を体験・理解したい」２名，「国際感覚を身に付けたい」２名，
「英語の成績を向上させたい」１名，「自分を向上させたい」１名
(参加前後の変化)
「英語でのコミュニケーションに，より積極的になったと思う」
　とても当てはまる：３名，まあまあ当てはまる：４名
「英語が上手になったと思う」
　とても当てはまる：１名，まあまあ当てはまる：４名，あまり当てはまらない：２名
「英語の成績が向上したと思う」
　とても当てはまる：２名，まあまあ当てはまる：２名，あまり当てはまらない：３名
「英語をもっと勉強しようと思うようになった」
　とても当てはまる：３名，まあまあ当てはまる：４名
「異文化への理解が進み，より関心が高まったと思う」
　とても当てはまる：５名，まあまあ当てはまる：１名，あまり当てはまらない：１名
「海外のことをもっと知りたいと思うようになった」
　とても当てはまる：２名，まあまあ当てはまる：５名
「外国旅行に出掛けたいと，より強く思うようになった」
　とても当てはまる：４名，まあまあ当てはまる：３名
※回答結果は，英語村利用者対象アンケートと，ほぼ同様の傾向を示した．

2-5 共通教育との連携

小さなちらしを頻繁に作成して，英語等の授業の中で配付するなど，国際交流センター内での各種活動のＰＲ及び来訪者増のための様々な取組を，語学教育推進室を始めとした多くの教員と連携しながら推進した．こうしたことも活かしつつ，海外での語学文化研修などの企画・実施に当たっては，協働体制を一層強化することができた．

2-6 まとめと課題

本格的な取組が実施されて３年目の年であったが，国際交流センターの利用者数は，英語村が１，０００名を超えるなど，総計でのべ約２，１００名となり，単純計算で本学の学生数以上となった．学生が実践的な英会話を学んだり，国際交流関連の情報を得たりする場所等として，一定の貢献はできていると考えられる．

一方で，センター来訪者の固定化がある程度見られることから，より多様な学生の利用に結び付くよう，情報発信の工夫と強化が必要となっている．その際には何よりも，学生に最も近い立場である教員一人ひとりの理解と協力が欠かせない．

「機能としてのセンター」の役割も含め，取組推進のための「学内人的ネットワーク強化」としては，センター幹事を中心に，その先のつながりも大切にする必要がある．平成２９年度までの様々な挑戦を通じて，センターの機能や取組に対する学内理解も進んできており，スモール・サクセスを着実に積み上げて多くの学生・教職員の信頼を得ることが肝要である．

【国際交流センターの主な活動の学部・研究科別のべ利用者数（平成２９年度)】

	(保健福祉学)	(情報工学)	(デザイン学)
〈英語村〉	４００ 名	３０３ 名	４８６ 名
〈韓国語村〉	４６ 名	１ 名	１１ 名
〈スカイプ英語〉	１１ 名	２７ 名	１３ 名

３　国際交流における教育・研究支援活動

3-1 国際交流協定校

平成２７年度に創設した「博士後期課程留学生特別入学試験制度」について，対象校を，中国，韓国，台湾，インドネシア，ネパールの協定校６校に，中国の２校を加え，合計８校とした．また７月には，ハサヌディン大学においてこの制度の説明会を開催した．平成２９年度に実施した入学試験には，ネパールのトリブバン大学からの１名が合格し，平成３０年４月に入学予定である．

〈概要〉　入学金・授業料は免除，月額８万円の奨学金，選考は書類と面接（Skype 利用可）

協定校等からの留学生を支援するため，７月に留学生連絡会議を開催して，困り事等の確認及び対応策の検討を行った．

協定校等からの留学生を含め在籍する留学生の支援のため，週２回の「特別日本語指導」（初級：１クラス，中級：１クラス）を行った．

協定校との意見交換や連携強化等のために，学長，センター長，センター幹事等が，又松大学校，ハサヌディン大学，アデレイド大学，雲林科技大学，ポートランド州立大学を訪問した．

3-2 国際研究協力

ハサヌディン大学については，本学教員が訪問（７月）するとともに，同大学からの教員の受入が２回（４月，５月）あったほか，同大学若手教員２名を，大学院博士後期課程で受け入れており，国際共同研究の機運が盛り上がっている．

雲林科技大学については，「高齢者等の見守り」に係る特別プロジェクトを，本学と連携しながら，多学部参加で推進する構想が進められており，今後の国際研究協力が期待できる．

香港理工大学については，本学教員が９月と１２月に訪問するなど，複数の国際共同研究が進行中である．また，本学教員が１２月に香港大学を訪問しており，今後の国際研究協力が期待できる．

ニュージーランドのマセィ大学から，研究者２名を１月に招聘して，特別講義やワークショップを実施しており，今後の国際研究協力が期待できる．

バンガー大学については，本学教員が９月に訪問して，国際共同研究に関して協議した．

上記の各取組に対して，要所において，センターとして可能な支援・協力を行った．

香港大学での意見交換

マセィ大学からの研究者による特別講義

3-3 基盤整備

学内外へのＰＲの強化のため，平成２７年度に開設した国際交流センターのホームページについて，１年を通して，その内容の充実に努めた．

本学が受け入れている留学生は，１桁であり，その増大が喫緊の課題となっている．このため，本学のＰＲの強化，入学試験制度の改善，協定校との学生交流のための要領の整備，留学生への効果的支援，教職員の意識改革など，受入拡大に向けて，課題の抽出や国内外の先進事例調査を，年度を通して実施した．

海外における各種取組の充実のため，香港及びアデレイドに配置している各１名の客員教授との連携を強化した．また，交流が進展している台湾，アメリカのポートランドについ

て各１名，そして香港には更に１名の客員教授の委嘱・配置を決定し，合計で５名体制となった.

3-4 まとめと課題

新たな取組を幾つもスタートさせるとともに，基盤整備の面でも前進があった.

そうした中で，ホームページを始め，例えば外国語対応の充実等，ＰＲの方法・内容については，改善の余地が大きい. 広報メディア開発センター等の学内関係機関とも連携を密にしながら，積極的に取り組んでいく必要がある.

第３章　学術研究推進センターの活動と成果

1 概要

本章では，平成 27 年 10 月に発足した学術研究推進センターについて，平成 29 年度における次の活動内容について報告する．

１　コンプライアンス・研究倫理教育に関する研修会の実施
２　科研費計画書の作成に係る研修会の実施
３　科研費計画書の提出前検討会の実施
４　科研費採択計画書の閲覧制度
５　教員の研究活動に係る環境整備

2 学術研究推進と教育活動

2-1　コンプライアンス・研究倫理教育に関する研修会の実施

平成 29 年 4 月に大学院新入生オリエンテーションにおいて，金川学術研究推進センター長が全研究科全専攻科新入生を対象に研究倫理教育を実施した．また，本学に赴任してきた新任教員に対しては，事務局による新任教員研修会においてコンプライアンス・研究倫理教育研修会を実施した．また，平成 30 年 3 月に一般財団法人公正研究推進協議会が主催する「2017 年度公正研究推進連絡会議」に企画広報室（１名）が参加し，コンプライアンス・研究倫理教育分野に関する最新の事例について情報収集を行った．

2-2 科研費計画書作成研修会

平成 30 年度公募から科学研究費制度改正により，審査方式や計画調書等の様式の見直しが行われるため，平成 29 年 6 月及び 8 月に行われた文部科学省・日本学術振興会による「科学研究費改革説明会」に金川学術研究推進センター長，企画広報室（１名）が参加し，情報収集を行った．

上記説明会を受けて，平成 29 年 9 月に本学の学術研究推進センター主催による「科研費制度改革を踏まえた科研費計画書の書き方研修会」を開催した．金川センター長による挨拶のあと，ロバスト・ジャパン株式会社矢野覚士氏による研修会が行われた．内容は，平成 30 年度科研費制度改革に関して審査方式の変更点や計画書の書き方の注意点等を中心に説明を行い，併せて企画広報室から，本学の科研費獲得状況及びコンプラインス・研究倫理教育について，最近の研究費・研究活動における不正事例を交えながら注意喚起を図った．

開催日時	平成 29 年 9 月 11 日（月曜日）14 時 00 分～16 時 00 分
開催場所	学部共通棟（東）8901 講義室
挨拶	岡山県立大学学術研究推進センター長　　金川明弘教授
講師	ロバスト・ジャパン株式会社　矢野　覚士

講演内容	科研費制度改革・新様式に対応した申請戦略

開催資料

研修資料は，学内教職員専用ホームページで閲覧可能とし，ビデオ記録も学内教職員に対して貸し出しを行えるようにした．また，当日出席できなかった教員・職員対象に対しては，当ビデオ記録を当センターのウェブページにて閲覧ができるようにして視聴機会を設けた．

参加者

本研修会の参加者は 53 名で，その内訳は，教員 46 名，職員 5 名，学生 2 名であった．なお，全教職員に参加を義務付けている研究者倫理研修会は，研究活動における不正行為防止規程により「少なくとも３年に１回は行う」ととしており，平成 30 年度が該当年度であるため，その実施向けて準備を行っている．

アンケート結果

本研修会後に回収されたアンケート結果については以下のとおり．（回収数 38 件）

１．本日の研修会の内容について，いずれかに○をおつけください．

①非常に良かった　②良かった　③普通　④あまり良くなかった　⑤良くない

14 名　16 名　8 名

２．研修会の時間配分について，いずれかに○をおつけください．

①長い　②普通　③短い

10 名　28 名

３．今後，本学の学術研究に関する研修会で取り組んでほしいテーマについていずれかに○をおつけください．（複数回答可）

①科研費申請支援　②その他の外部資金獲得支援　③コンプラ・研究倫理教育

27 名　21 名　4 名

４．その他意見

・共同研究等の実例を交えた具体的な講演内容といてほしい．

・大型外部資金獲得のための呼び水となる研究費申請について講演を行ってほしい．

2-3 科研費計画書の提出前検討会の実施

科研費計画書について，研究内容，経費の妥当性等の事前検討を行う場として，添削指導機会（学内ベテラン教員又は外部業者による添削指導の選択）を設け，助教，准教授を中心に７件の添削依頼があった．

・申込募集期間　７月１８日から８月７日

・計画書提出期限　８月２４日

また，実際に採択された計画書のうち，教員本人から承諾があった計画書を各学部事務室において閲覧提供している．

2-4 教員の研究活動に係る環境整備

昨年度，本学において実施した教員の研究環境の整備に関するアンケート調査について，今年度も各担当部局において要望度が高い項目から，必要性，優先度を勘案して順次改善が図られているところである．

また，平成 29 年 12 月に本学学術研究推進センターと国立大学法人岡山大学自然生命科学研究支援センターとの間で研究設備・機器の共同利用に関する覚書を取り交わし，地域の研究と教育を推進していくこととされた．この研究設備・機器の共同利用の具体的な方針等については，今後の連携会議等を踏まえながら検討していきたい．

2-5 まとめと課題

本年度は，学術研究推進センターが当初掲げた取組はほぼ達成されたと言えよう．科研費については，その新規採択件数が減少したため，引き続き，科研費取得に向けて学内の支援を精力的に行う必要がある．

また，来年度は科研費申請要件である研究倫理講習の開催年度にあたることから，コンプライアンスならびに研究倫理に関する講習会を企画する．

さらに，研究環境改善については，昨年度のアンケート調査結果から必要性，優先度を勘案しながら，改善が図られるよう関係部署と情報を共有していく必要がある．

第３部　附属図書館の活動と成果

1　概要

本学図書館は，大学設置基準第 38 条に示す大学附属図書館として，学部の種類，規模等に応じ，専門書，学術雑誌，視聴覚資料等の教育研究上必要な専門的資料を系統的に備えるべく努力をしてきた．また，グローバル化の中で学生に必要とされる広い視野と教養を涵養すべく，一般教養図書，語学学習推進図書についても各学部教員，また共通教育部教員の視点で選書し，充実を図っている．さらに学術情報の電子化や検索システムの整備を行い，学生，教員，地域に向けたサービスの充実・向上を目指し，積極的な取組を進めている．

1-1　図書館活用の推進

1-1-1　図書館の利用状況

平成 29 年 4 月から平成 30 年 3 月の期間における図書館の利用状況を以下に示す．

蔵書冊数は約 21 万冊でその内訳として，和書が約 8 割，洋書が約 2 割を占め，その他視聴覚資料が約 2．5%となっている．入館者数は約 9 万人で貸出冊数は約 2 万冊となり，平成 25 年からほぼ同様の推移となっている．施設等の利用状況として，館内 PC，研究閲覧室及びグループ閲覧室の貸し出し件数は平成 25 年から増加傾向にあったが,昨年度はともに約 1．5 倍増の利用があった．研究閲覧室及びグループ閲覧室は，学生の主体的，能動的な学修を支援する場として設けられているスペースで，近年多くの大学や図書館で設けられているラーニングコモンズに準じたものである．グループ学習等による自発的な学修の意識が定着してきていると推察する．当館のエントランス部分に設けたラーニングコモンズの稼働率については未測定であるが，常時学生がグループでの学習を進めている様子が見受けられた．

平成 29 年度図書館利用状況について

（1）蔵書冊数　　(H30．3．31 現在)

分　類	和　書	洋　書	視聴覚	合　計
0　総　記	13，106	3，140	168	16，414
1　哲　学	8，033	1，249	188	9，470
2　歴　史	6，368	565	465	7，398
3　社会科学	37，208	5，258	897	43，363
4　自然科学	45，223	13，389	1，488	60，100
5　工学・工業	17，756	5，220	379	23，355
6　産　業	2，741	433	50	3，224
7　芸術・スポーツ	19，545	4，411	1，447	25，403
8　語　学	4，447	3，983	31	8，461

9　文　　学	11，404	1，000	67	12，471
合計	165，831	38，648	5，180	209，659
構成比	79.1%	18.4%	2.5%	100%

（2）入館者数等

項　目	開館日数	入館者数（人）		貸出冊数（冊）		貸出人数（人）		学外者利用（人）
			1日平均		1日平均		1日平均	
29年度	268	90，919	339	17，873	67	7，852	29	1,971
28年度	269	91，458	340	18，395	68	8，323	31	2,030

（3）資料受入状況

項　目	和　書		洋　書		計	
	29年度	28年度	29年度	28年度	29年度	28年度
図　書	2，182	1，902	500	612	2，682	2，514
雑　誌	134	131	32	28	166	159
視聴覚資料	93	72	2	14	95	86

（4）相互協力

項　　目		件　数	
		29年度	28年度
文献複写	複写提供件数	685	400
	複写取寄件数	1，310	1，535
相互協力	借受冊数	85	41
	貸出冊数	94	161

（5）施設等の利用

項　　目	件　数	
	29年度	28年度
館内パソコン利用者数	6，174	4，747
研究閲覧室	1，912	1，255
グループ閲覧室	155	114

1-1-2　図書館ギャラリーの利用状況

図書館では，学生・教職員・院生の貸出冊数の増加，また特集本コーナーや，図書館のギャラリーの貸出しにより，図書館の利用率向上を目指している．図書館ギャラリーは，

学生や教員に館内の壁面等の空間を有効活用してもらうことにより図書館利用の増加を図ったもので，平成 29 年度はデザイン学部の学生や教員により多く利用された．図書館利用者に安らぎを与えるような展示を意図した．本年度の図書館ギャラリーの利用状況を以下に示す．

	申 込 者	作　　品	展示期間	作品紹介
1	Okayama Bookworms	ビブリオバトルの実施	5/30	ビブリオバトルを新入生やより多くの人に知ってもらうため実演し，どんなものかを感じてもらう
2	デザイン学部 担当教員	コピーライティング課題作品(2 年生)	6/7 ～7/12	自分の句集のイメージをビジュアル化した作品
3	デザイン学部 担当教員	グラフィックアート～俳句のビジュアライズ～	7/14 ～8/10	吟行(大学内)により自作の俳句を作成し，俳句のイメージをグラフィックデザインの手法を用いて視覚的に表現した作品
4	①デザイン学部 担当教員	①フォトグラム -光と影の風景-	10/3 ～11/7	①カメラを用いず，印画紙に直接物体を置いて露光し，配置した物体の構成により風景を表現したモノクロ写真
	②デザイン学部 担当教員	②まとう/つつむ プリントテキスタイル		②身に纏うこと・物を包むことを目的に図案を構成し，プリント手法を用いて制作したテキスタイル作品
5	Okayama Bookworms	ビブリオバトル全国大会予選会	10/24	エントランスにてビブリオバトル全国大会の予選会を実施
6	Okayama Bookworms	ビブリオバトル in 県大祭	11/4	県大祭に合わせてビブリオバトルを開催

1-1-3　学生を対象とした図書館利用教育

図書館では蔵書検索方法やデータベース活用法を具体的に示す「図書館ガイダンス」への受講を学生に勧め，学生への教育・研究支援を図ってきた．共通教育講義科目「大学で学ぶ」（対象：全学科 1 年，必修）での図書館長担当授業において，図書館ガイダンス受講を復習課題として導入した．その他の正課内及び正課外でのガイダンス受講状況を以下に示す．

平成 29 年度　図書館ガイダンス実施結果

○新入生ガイダンス

実施日	参加人数	申込内容	学科
4 月～5 月	41	大学で学ぶ	看護

	45	ガイダンス＋ＯＰＡＣ検索	栄養
	64		保健福祉
	64		通信
	65		システム
	47		人間情報
	40		デザイン工学
	53		造形デザイン
合計	419		

○文献の探し方

実施日	参加人数	申込内容	学科
10 月 3 日	8	文献の探し方 （PubMed・医中誌）	看護学科
10 月 20 日	3	文献の探し方 （医中誌・CiNii）	保健福祉学科
合計	11		

○その他

実施日	参加人数	申込内容	学科
10 月 3 日	10	ガイダンス	総社東小学校生活科授業 「大学の施設見学」
10 月 19 日	40	ガイダンス	倉敷工業高校ファッション技術科 1 年生
10 月 30 日	40	ガイダンス	西大寺高校普通科 2 年生
合計	90		

1-1-4　選書ツアー・ブックフェアへの学生参加状況及び学生希望図書の状況

平成 21 年度より実施している選書ツアーは,学生が学習や研究に役立つ書籍を書店で実際に手に取って選書する企画である．本年度は 9 名の学生が参加し，教養書や専門書を選書した．内訳を以下に示す．あわせて，今年度に図書館内で書店が準備した本の中から学習等に必要な本を学生及び教職員が選んだ「ブックフェア」の内容も以下に示す．また学内で希望図書の申請のあった図書数を以下に示す.

(1)選書ツアー2017

実 施 日：平成 29 年 5 月 27 日（土）
場　　所：紀伊国屋書店クレド店
参加人数：9 名
購入冊数：94 冊

(2)ブックフェア

実 施 日：平成 29 年 10 月 24 日（火）
場　　所：図書館エントランス

参加人数：101 名
購入冊数：225 冊

(3)学生希望図書（平成 29 年度）

学部等	大学院			保健福祉			情報工			デザイン		総計
学科	保健福祉学	情報系工学	デザイン学	看護	栄養	保福福祉	情報通信	情報システム	人間情報	デザイン工学	造形デザイン	
受付数	10	10	3	3	1	5	2	19	7	4	3	67
購入	7	9	3	2	1	4	1	16	7	4	3	57
購入不可	3	1	0	1	0	1	1	3	0	0	0	10
申込者数	5	3	1	2	0	3	1	5	3	2	1	26

1-1-5　附属図書館にかかる学生アンケートの実施

(1)実施概要

10 月 1 日から 31 日まで全学情報システム「はっとりん」のアンケート機能を利用してアンケートを実施した．アンケートでは施設・設備の満足度のほか，図書館に対する要望の設問を設け，改善を図るうえでの参考とした．

(2)回答状況

学生及び院生約 1,791 名に対し，回答は 304 名，回答率は 17．0%

(3)回答分析

①図書館利用

・ 週 1～2 回及び月 1～2 回の利用が約 65%と割合が高い．利用しない率は約 3%であり，ほとんどの学生等が図書館を利用している．

・個人利用が約 80%と高く，閲覧席（個席・複数席）の利用が中心で，蔵書検索パソコン及びパソコンコーナーの利用も 20%以上と高い．

・ホームページ利用は蔵書検索が約 45%と高い．

・県立図書館利用システム認知度は約 87%と高い．

・新入生を対象に行うガイダンスが効果を発揮していると推察する．

②蔵書の充実度

・研究・学習用図書の満足度は約 49%，余暇・教養のための図書は約 40%であるが，改善要望度は前者が約 32%，後者は約 35%であった．蔵書スペースが限界に達している中で，学術系図書を中心に収集しているが，今後も資料収集基準に従い，図書館専門委員，アドバイザー教員に学生及び院生のニーズの把握を呼びかけるとともに，更なる学生希望図書制度（リクエスト）の広報（館内広報及びホームページでの広報，ガ

イダンス等での周知）に努める．

・学術雑誌（電子ジャーナル含む），一般雑誌の不満足度は低い．

③サービス

・貸出冊数，貸出期間，図書館ガイダンス，図書の購入希望，職員の対応等いずれも満足度は高い．

④蔵書検索

・検索のしやすさ，機器の設置台数とも満足度は高いが，検索のしやすさの改善要望度は約 35%であったため，ガイダンス等で周知に努める．

⑤施設等

・館内の案内表示，パソコンの設置台数，照明及びトイレの満足度等はいずれも高かったが，空調については不満足が約 22%，改善要望度が約 23%とやや高かった．

・資料の探しやすさの改善要望度が約 23%であったため，今後も図書館ガイダンス等で周知に努める．

⑥開館時間

・平日・休日開館時間日曜閉館とも要望度は約 20%以上であったものの，改善の必要なしも約 43%と高い．

1-2　英語文献利用講習会

英語文献の利用推進を図るため,平成 30 年 1 月 20 日に講師を招いて講習会を実施した．講義は，論文執筆に役立つ無料文献管理ツールの使い方を中心に行った．参加人数は 47 名であった．参加者の内訳を以下に示す．

教　　員　9 名（看護 2，栄養 1，保福 3，システム 2，造形デザイン 1）

大学院生　6 名（看護 3，栄養 2，情報 1）

学 部 生 32 名（栄養 26，保福 4，通信 2）

1-3　電子ジャーナルの利用

教育・研究推進に必要不可欠な英語文献の電子ジャーナル契約の要望が増えている．以下に本学で契約中の電子ジャーナルのタイトル及びその利用状況を示す．

平成 29 年度　利用可能な電子ジャーナルタイトル

（平成 30 年 3 月 31 日現在）

	分　野
ScienceDirect（約 1，000 タイトル）	健康科学・神経科学等
タイトル名	分　野
The American journal of clinical nutrition	食品科学・栄養学
Applied physics letters	物理学一般/応用物理学

Journal of biological chemistry	生化学・分子生物学
Journal of nursing administration	看護管理
The Journal of nutrition	食品科学・栄養学
Nursing older people	老年医学
Nursing research	看護学
Nursing science quarterly	看護学
Proceedings of national academy of sciences	科学技術一般
American Journal of Public Health	公衆衛生・疫学
American Journal of Psychology	心理学
Machine-Learning	認知科学・人工知能
The Journals of Gerontology: Series A	老年医学/生理学
Journal of the ACM	情報理論・データ構造・暗号学/データベース/コンピュータ一般
Public health nursing	看護学/公衆衛生・疫学
Journal of Agricultural and Food Chemistry	農業・食品/農学/食品科学・栄養学

1-4　リポジトリ公開登録及び利用状況

現在，日本の機関リポジトリ設置機関数は世界有数の規模にまで広がり，教育研究成果の公開やオープンアクセスの義務化も検討されようとする現状にある．このような中，オープンアクセスへ寄与することは研究者や大学，研究機関として必要とされる条件となりつつある．本学におけるリポジトリ公開登録件数及び利用状況を以下に示す.

リポジトリ公開登録件数　　1，528 件（平成 30 年 3 月 31 日現在）

	公開登録件数	ダウンロード数	閲覧
平成 29 年度	51 件	160，913 件	19，682 件
平成 28 年度	242 件	74，318 件	13，269 件
平成 27 年度	879 件	34，399 件	6，286 件

1-5　まとめと課題

図書館利用推進の一環として本年度も図書館ギャラリーの貸出しや学生を対象とした図書館利用教育を実施した．また学生が書店で実際に学習や研究に役立つ書籍を選書できる選書ツア

ーでは，9 名の参加者により 94 冊の選書が行われたが，応募状況はやや少ない状況であり，今後は企画の周知ならびに意義を認知させる工夫が必要と考えられる．そのため，今年度は学内で学生及び教職員を対象にした，書店が準備した本の中から学習等に必要な本を選ぶブックフェアを開催し，101 名（学生 70 名，教職員 31 名）の参加者により 225 冊の選書が行われた．また年間を通じて受付けている学生希望図書には 26 名から申し込みがあり 57 冊を蔵書として加えた．昨年度と比べると希望図書数は増えており，図書館ガイダンスやホームページでの広報が功を奏したと推察する．電子ジャーナルの活用促進を目的として開催した講習会では，参加した学生及び教員に対して文献管理ツールの活用法を教示した．洋雑誌及び電子ジャーナルの利用統計を蓄積し今後も利用状況をモニタリングして，よりより学修環境の提供に努めたい．また，学生の多様なニーズに対応するため、29 年度実施した学生アンケートの追跡調査を行う予定である．

付録 1
Ａ　入試統計
A-1 学士課程

一般入試　　単位：人　　単位：人

学部	学科	平成29年度						平成30年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	28	105	64	33	28	1.9	28	104	55	31	30	1.8
	栄養学科	28	106	102	35	32	2.9	28	105	102	34	30	3.0
	保健福祉学科社会福祉学専攻	28	93	56	33	28	1.7	28	123	68	38	29	1.8
	保健福祉学科子ども学専攻	14	68	43	17	15	2.5	14	84	61	15	14	4.1
	学部計	98	372	265	118	103	2.2	98	416	286	118	103	2.4
情報工学部	情報通信工学科	37	527	297	105	51	2.8	37	655	389	97	46	4.0
	情報システム工学科	37	696	351	126	48	2.8	37	1,012	548	119	37	4.6
	人間情報工学科	27	375	211	65	29	3.2	27	299	194	54	27	3.6
	学部計	101	1,598	859	296	128	2.9	101	1,966	1,131	270	110	4.2
デザイン学部	デザイン工学科	30	118	112	35	29	3.2	30	86	82	37	33	2.2
	造形デザイン学科	38	97	89	41	40	2.2	38	102	100	41	37	2.4
	学部計	68	215	201	76	69	2.6	68	188	182	78	70	2.3
合計		267	2,185	1,325	490	300	2.7	267	2,570	1,599	466	283	3.4

推薦入試　　単位：人　　単位：人

学部	学科	平成29年度						平成30年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	12	37	37	13	13	2.8	12	41	41	14	14	2.9
	栄養学科	12	33	33	12	12	2.8	12	29	29	13	13	2.2
	保健福祉学科社会福祉学専攻	12	26	26	13	13	2.0	12	29	29	12	12	2.4
	保健福祉学科子ども学専攻	6	22	22	6	6	3.7	6	19	19	6	6	3.2
	学部計	42	118	118	44	44	2.7	42	118	118	45	45	2.6
情報工学部	情報通信工学科	13	25	25	13	13	1.9	13	21	21	13	13	1.6
	情報システム工学科	13	26	26	14	14	1.9	13	30	30	13	13	2.3
	人間情報工学科	13	25	25	14	14	1.8	13	26	26	13	13	2.0
	学部計	39	76	76	41	41	1.9	39	77	77	39	39	2.0
デザイン学部	デザイン工学科	10	19	19	11	11	1.7	10	18	18	10	10	1.8
	造形デザイン学科	12	26	26	12	12	2.2	12	42	42	13	13	3.2
	学部計	22	45	45	23	23	2.0	22	60	60	23	23	2.6
合計		103	239	239	108	108	2.2	103	255	255	107	107	2.4

○倍率＝受験者数/合格者数

A-2 大学院課程

博士前期課程・修士課程　　単位：人　　単位：人

研究科	専攻	平成29年度						平成30年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	看護学専攻	7	16	16	14	11	1.1	7	15	15	12	10	1.3
	栄養学専攻	6	3	3	3	3	1.0	6	7	7	7	7	1.0
	保健福祉学専攻	7	7	7	7	7	1.0	7	6	6	6	5	1.0
	研究科計	20	26	26	24	21	1.1	20	28	28	25	22	1.1
情報系工学研究科	システム工学専攻	52	55	53	50	46	1.1	52	42	42	42	41	1.0
デザイン学研究科	デザイン工学専攻	7	2	2	2	2	1.0	7	2	2	2	2	1.0
	造形デザイン学専攻	9	2	2	2	2	1.0	9	1	1	1	1	1.0
	研究科計	16	4	4	4	4	1.0	16	3	3	3	3	1.0
合計		88	85	83	78	71	1.1	88	73	73	70	66	1.0

博士後期課程　　単位：人　　単位：人

研究科	専攻	平成29年度						平成30年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	保健福祉科学専攻	5	9	9	8	8	1.1	5	9	9	7	7	1.3
情報系工学研究科	システム工学専攻	6	4	4	4	3	1.0	6	1	1	1	1	1.0
合計		11	13	13	12	11	1.1	11	10	10	8	8	1.3

○倍率＝受験者数/合格者数

Ｂ　卒業時・修了時アンケート及び授業評価アンケートの詳細

卒業時アンケート

調査項目：以下の集計表に示す 21 項目

調査時期：平成 29 年 3 月 24 日

調査対象：平成 28 年度卒業生（384 人）

回 収 率：97.7%（保健福祉学部 145 人，情報工学部 149 人，デザイン学部 81 人）

集計方法：学部別・項目ごとの有効回答の範囲内での単純集計

問 1. あなたの入学年は，

① 平成 27 年，② 平成 26 年，③ 平成 25 年，④ 平成 24 年，⑤ 平成 23 年以前

（単位：人）

学　　部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	1	4	124	12	0	4
情報工学部	1	0	123	20	4	1
デザイン学部	0	1	68	8	3	1
全　　体	2	5	315	40	7	6

問 2. 本学に合格した入学試験の種別は，

① 前･中･後期日程入試，② 推薦入試，③ 編入学，④ 再入学，⑤ 私費外国人留学生･帰国子女特別選抜･社会人特別選抜

（単位：人）

学　　部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	96	45	3	0	1	0
情報工学部	109	40	0	0	0	0
デザイン学部	61	18	2	0	0	0
全　　体	266	103	5	0	1	0

問 3. 卒業後の進路は，

① 就職（専攻と関連する職業），② 就職（専攻と関連しない職業），③ 進学（大学院･編入），④ 進学（再入学･専攻の変更），⑤ 未定･その他

（単位：人）

学　　部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	97	32	12	2	2	0
情報工学部	69	28	47	5	0	0
デザイン学部	53	15	1	3	9	0
全　　体	219	75	60	10	11	0

問 4～21 については，次ページに一覧を示す

平成28年度「卒業時アンケート」の結果

	看護学科	栄養学科	保健福祉学科	情報通信工学科	情報システム工学科	スポーツシステム工学科	デザイン工学科	造形デザイン学科	保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	全体
対象者数	43	40	63	61	53	43	40	41	146	157	81	384
回答者数	43	40	62	58	52	39	40	41	145	149	81	375
回収率（%）	100.0	100.0	98.4	95.1	98.1	90.7	100.0	100.0	99.3	94.9	100.0	97.7
【教養的成長】次の全学教育科目群は，あなたの成長にどの程度意義がありましたか												
「コミュニケーション　（語学教育 ）」系は	3.60	3.20	3.52	3.28	3.00	3.05	3.28	3.39	3.46	3.12	3.33	3.30
「人間と文化の理解」系は	3.53	3.25	3.55	3.29	2.90	3.03	3.30	3.46	3.46	3.09	3.38	3.30
「現代社会に生きる」系は	3.49	3.23	3.61	3.34	2.94	3.10	3.23	3.39	3.47	3.14	3.31	3.30
「科学技術と環境」系は	3.33	3.45	3.26	3.21	3.21	3.21	3.25	3.12	3.33	3.21	3.19	3.25
「健康の維持・増進　（体育を含む ）」系は	3.58	3.50	3.65	3.28	3.19	3.46	3.43	3.46	3.59	3.30	3.44	3.44
教育的成長の平均	*3.51*	*3.33*	*3.52*	*3.28*	*3.05*	*3.17*	*3.30*	*3.37*	*3.46*	*3.17*	*3.33*	*3.32*
【専門的成長】次の教育科目群　（主に学部教育に関するもの　）は，あなたの成長にどの程度意義がありましたか												
全学教育科目群「学部教育への準備」系は	3.67	3.83	3.76	3.53	3.29	3.33	3.65	3.44	3.75	3.40	3.54	3.56
学部育科目の講義は	3.98	4.23	4.18	3.78	3.65	3.44	4.05	3.90	4.13	3.64	3.98	3.90
実験・実習・演習は	4.30	4.48	4.53	4.02	4.12	3.77	4.28	4.24	4.45	3.99	4.26	4.22
卒業研究は	4.14	4.30	4.45	4.07	3.96	3.90	4.13	4.07	4.32	3.99	4.10	4.14
専門的成長の平均	*4.02*	*4.21*	*4.23*	*3.85*	*3.75*	*3.61*	*4.03*	*3.91*	*4.16*	*3.75*	*3.97*	*3.96*
【総合的成長】あなたが本学在学中に身につけた能力について尋ねます												
社会の一員として生きる力は	3.84	4.15	3.95	3.47	3.44	3.64	3.63	3.44	3.97	3.50	3.53	3.69
基礎学力は	3.81	4.15	3.84	3.38	3.44	3.51	3.23	3.05	3.92	3.44	3.14	3.56
専門的な知識と技術の広がりは	3.88	4.18	4.10	3.72	3.81	3.59	4.05	3.85	4.06	3.72	3.95	3.90
創造的に考える力は	3.86	3.95	3.84	3.28	3.63	3.59	4.00	3.78	3.88	3.48	3.89	3.72
自らをみがき発展させる力は	3.79	4.08	3.82	3.36	3.46	3.67	3.78	3.68	3.88	3.48	3.73	3.69
コミュニケーションの力は	3.86	4.03	4.05	3.31	3.46	3.46	3.75	3.33	3.99	3.40	3.54	3.66
ソーシャルスキル・ビジネスマナーは	3.71	3.98	3.79	2.90	3.04	3.29	3.30	3.10	3.82	3.05	3.20	3.38
職業人（プロ ）となる意識は	3.81	4.10	3.98	3.10	3.29	3.41	3.55	3.39	3.97	3.25	3.47	3.57
総合的成長の平均	*3.82*	*4.08*	*3.92*	*3.31*	*3.45*	*3.52*	*3.66*	*3.45*	*3.93*	*3.41*	*3.55*	*3.65*
【全般的満足】全般的に本学の教育は満足でしたか												
全般的に本学の教育は満足でしたか	4.14	4.33	4.48	3.60	3.87	3.74	3.55	3.63	4.34	3.73	3.59	3.94

注)アンケートの集計結果は，５段階評価　　(1:否定?　5:肯定)の平均値を示す

平成28年度「修了時アンケート」の結果

	看護学	栄養学	保健福祉学	保健福祉科学	システム工学	デザイン工	造形デザイン学	保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	全体
対象者数	8	6	3	3	59	2	4	20	59	6	85
回答者数	7	6	3	3	59	2	4	19	59	6	84
回収率(%)	87.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	95.0	100.0	100.0	98.8
【教育と学修】											
修士課程のカリキュラム・教育等は、専門力を身につける上で、適切でしたか。	4.14	4.80	2.33	3.33	3.19	4.50	3.00	3.89	3.19	3.50	3.36
教育と学修の平均	*4.14*	*4.80*	*2.33*	*3.33*	*3.19*	*4.50*	*3.00*	*3.89*	*3.19*	*3.50*	*3.36*
【教育と学習】											
	3.57	4.67	3.33	3.00	3.85	3.50	4.50	3.79	3.85	4.17	3.86
大学院の学業に意欲的に取り組んだと思いますか。	4.29	4.83	4.67	5.00	3.85	4.00	4.50	4.63	3.85	4.33	4.06
修士論文の作成や日常の研究について、指導教員から十分な指導を受けることができましたか。	4.29	4.83	4.00	5.00	4.24	3.00	4.75	4.53	4.24	4.17	4.30
教育と学習の平均	*4.05*	*4.78*	*4.00*	*4.33*	*3.98*	*3.50*	*4.58*	*4.32*	*3.98*	*4.22*	*4.07*
【学びの実践】											
研究倫理について学ぶ機会がありましたか。	3.57	3.67	2.67	4.33	3.69	3.00	4.25	3.58	3.69	3.83	3.68
研究を行うための基礎知識やスキルは身についたと思いますか。	3.86	4.83	4.33	4.00	4.05	3.00	3.75	4.26	4.05	3.50	4.06
自分が行った研究を学会等で発表する機会がありましたか。	1.71	3.00	2.00	3.67	3.31	3.00	1.50	2.47	3.31	2.00	3.02
自分が行った研究を学会等の論文に執筆する機会はありましたか。	1.43	1.40	2.00	3.33	2.17	2.50	1.00	1.83	2.17	1.50	2.05
学びの実践の平均	*2.64*	*3.23*	*2.75*	*3.83*	*3.31*	*2.88*	*2.63*	*3.04*	*3.31*	*2.71*	*3.20*
【能力獲得】											
自分で研究課題を発見する力が身についたと思いますか。	4.00	4.40	4.33	4.67	3.68	4.00	3.75	4.28	3.68	3.83	3.82
自分で発見した課題や与えられた課題を研究する場合、研究計画を立てる力が身についていると思いますか。	3.86	4.33	4.00	4.33	3.61	2.50	3.50	4.11	3.61	3.17	3.69
修士課程で学んで、取り組んだ課題を解決するための分析や評価方法を学びましたか。	4.00	4.17	4.00	4.67	4.07	4.00	4.25	4.16	4.07	4.17	4.10
修士課程での学業や経験は今後の進路（進学先または就職先）で役立つと思いますか。	4.43	3.83	4.67	5.00	4.08	3.50	4.75	4.37	4.08	4.33	4.17
能力獲得の平均	*4.07*	*4.18*	*4.25*	*4.67*	*3.86*	*3.50*	*4.06*	*4.23*	*3.86*	*3.88*	*3.94*
【満足度】											
本学の教育について満足することができましたか。	4.14	4.83	3.67	5.00	3.90	3.50	4.50	4.42	3.90	4.17	4.04

注)アンケートの集計結果は，５段階評価(1:否定～5:肯定)の平均値を示す

【2017年度前期・授業評価アンケート実施報告】 回答数 12,350 (69.30%) / 全17,822件中

質問内容	大学 平均 全体 (n=12350)	大学 選択肢回答の度数(%) 1. そう思わない	2. あまりそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. そう思う	学部 平均 共通教育 (n=4677)	保健福祉 (n=3760)	情報 (n=2359)	デザイン (n=1319)	研究科 平均 保健福祉 (n=52)	情報 (n=179)	デザイン (n=4)
①【取組み】真剣に受講した	4.27	260 (2.1%)	374 (3.0%)	1289 (10.4%)	4219 (34.2%)	6208 (50.3%)	4.17	4.46	4.09	4.48	4.42	4.17	4.25
②【取組み】この授業を理解するために努力した	4.27	247 (2.0%)	344 (2.8%)	1278 (10.3%)	4407 (35.7%)	6074 (49.2%)	4.17	4.43	4.11	4.50	4.29	4.17	3.75
【取組み】予習や復習に使った授業1回当たりの時間を教えてください(課題を含む)	2.17	5098 (41.3%)	3484 (28.2%)	1638 (13.3%)	832 (6.7%)	1298 (10.5%)	1.77	2.14	2.38	3.31	2.56	2.08	2.25
【取組み】あなたのおよその出席率を教えてください	4.73	39 (0.3%)	35 (0.3%)	249 (2.0%)	2560 (20.7%)	9467 (76.7%)	4.74	4.84	4.61	4.63	4.75	4.66	5.00
③【進め方】授業は計画的に行われていた	4.29	255 (2.1%)	426 (3.4%)	1343 (10.9%)	3836 (31.1%)	6490 (52.6%)	4.27	4.39	4.06	4.43	4.75	4.28	4.00
④【進め方】授業では考える機会や時間が与えられた	4.19	285 (2.3%)	578 (4.7%)	1722 (13.9%)	3636 (29.4%)	6129 (49.6%)	4.15	4.32	3.99	4.34	4.75	4.17	4.25
⑤【進め方】授業で用いた教科書や資料は適切だった	4.17	324 (2.6%)	417 (3.4%)	1898 (15.4%)	3846 (31.1%)	5865 (47.5%)	4.11	4.39	3.87	4.34	4.58	4.00	3.75
⑥【進め方】授業は学生の理解度を確認しながら進められた	3.96	461 (3.7%)	787 (6.4%)	2307 (18.7%)	4014 (32.5%)	4781 (38.7%)	3.85	4.19	3.70	4.15	4.62	3.91	3.50
⑦【対応】授業では教員に熱意があった	4.30	214 (1.7%)	300 (2.4%)	1508 (12.2%)	3839 (31.1%)	6489 (52.5%)	4.25	4.50	3.99	4.49	4.77	4.29	4.25
⑧【対応】教員は学生の質問に対して丁寧に対応した(課外含む)	4.23	255 (2.1%)	321 (2.6%)	1985 (16.1%)	3589 (29.1%)	6200 (50.2%)	4.14	4.40	3.99	4.47	4.81	4.09	4.50
⑨【対応】授業は丁寧に進められた	4.26	285 (2.3%)	391 (3.2%)	1539 (12.5%)	3803 (30.8%)	6332 (51.3%)	4.21	4.43	3.95	4.44	4.83	4.23	3.50
⑩【対応】提出物(レポート等)は内容をよく評価していた	3.98	252 (2.0%)	263 (2.1%)	3712 (30.1%)	3321 (26.9%)	4802 (38.9%)	3.88	4.08	3.82	4.34	4.54	4.17	3.75
⑪【シラバス】シラバスの内容はよく理解できた	4.07	211 (1.7%)	284 (2.3%)	2828 (22.9%)	4107 (33.3%)	4920 (39.8%)	4.03	4.21	3.82	4.32	4.35	3.87	3.50
⑫【シラバス】授業内容はシラバスにある目標に合っていた	4.13	184 (1.5%)	208 (1.7%)	2711 (22.0%)	4011 (32.5%)	5236 (42.4%)	4.08	4.25	3.89	4.37	4.50	3.97	3.50
⑬【シラバス】シラバスの説明は十分に行われた	3.91	329 (2.7%)	593 (4.8%)	3248 (26.3%)	3831 (31.0%)	4349 (35.2%)	3.86	3.99	3.75	4.17	4.27	3.87	3.00
【総合】授業は難しかった	3.64	661 (5.4%)	1576 (12.8%)	2634 (21.3%)	4102 (33.2%)	3377 (27.3%)	3.35	3.69	3.95	3.94	3.73	3.97	4.50
⑭【総合】教員の説明はわかりやすかった	4.04	378 (3.1%)	658 (5.3%)	1932 (15.6%)	4529 (36.7%)	4853 (39.3%)	3.97	4.22	3.77	4.22	4.56	4.08	3.00
⑮【総合】受講して内容に興味や関心が湧いた	4.05	411 (3.3%)	689 (5.6%)	1955 (15.8%)	4101 (33.2%)	5194 (42.1%)	3.88	4.34	3.74	4.41	4.60	3.78	3.50
⑯【総合】授業に満足できた	4.11	398 (3.2%)	552 (4.5%)	1774 (14.4%)	4159 (33.7%)	5467 (44.3%)	4.00	4.36	3.79	4.36	4.63	4.11	4.00
⑰【総合】この授業を受けて力がついた	4.08	396 (3.2%)	571 (4.6%)	1892 (15.3%)	4315 (34.9%)	5176 (41.9%)	3.90	4.34	3.82	4.41	4.62	3.84	3.75
平均(①～⑰)	4.14	303 (2.5%)	456 (3.7%)	2054 (16.6%)	3974 (32.2%)	5563 (45.0%)	4.05	4.31	3.89	4.37	4.58	4.06	3.75

※「全体」は、前期に収集されたアンケート全部で集計。
※「共通教育」は、2017年度学生便覧に共通教育として記載されているものを集計。
※「保健福祉(学部)」は、回答者の学籍番号が保健福祉学部であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「情報(学部)」は、回答者の学籍番号が情報工学部であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「デザイン(学部)」は、回答者の学籍番号がデザイン学部であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「保健福祉(研究科)」は、回答者の学籍番号が保健福祉学研究科(博士前期＆後期)であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「情報(研究科)」は、回答者の学籍番号が情報系工学研究科(博士前期＆後期)であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「デザイン(研究科)」は、回答者の学籍番号がデザイン学研究科(修士)であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※問1-3の選択肢:1 = O. 5時間未満、2 = ～1時間、3 = ～1. 5時間、4 = ～2時間、5 = 2時間以上
※問1-4の選択肢:1 = 20%未満、2 = ～40%、3 = ～60%、4 = ～80%、5 = 100%

サブカテゴリ集計	全体	学部 共通教育	保健福祉	情報	デザイン	研究科 保健福祉	情報	デザイン
A 授業への学生の取組み	4.27	4.17	4.45	4.10	4.49	4.36	4.17	4.00
B 授業の資料や進め方	4.15	4.10	4.32	3.91	4.32	4.68	4.09	3.88
C 教員の授業への対応	4.19	4.12	4.35	3.94	4.44	4.74	4.20	4.00
D シラバスと授業の関係	4.04	3.99	4.15	3.82	4.29	4.37	3.90	3.33
E 総合的な評価	4.07	3.94	4.32	3.78	4.35	4.60	3.95	3.56
平均	4.14	4.06	4.32	3.91	4.38	4.55	4.06	3.75

(A＝設問①～②の平均、B＝設問③～⑥の平均、C＝設問⑦～⑩の平均、D＝設問⑪～⑬の平均、E＝設問⑭～⑰の平均)

＊前年との比較

	全体 2017年	2016年	差異	共通教育(学部) 2017年	2016年	差異	保健福祉(学部) 2017年	2016年	差異	情報(学部) 2017年	2016年	差異	デザイン(学部) 2017年	2016年	差異	保健福祉(研究科) 2017年	2016年	差異	情報(研究科) 2017年	2016年	差異
①【取組み】真剣に受講した	4.27	4.1	0.17	4.17	4.0	0.17	4.46	4.4	0.06	4.09	4.0	0.09	4.48	4.3	0.18	4.42	4.6	-0.18	4.17	4.3	-0.13
②【取組み】この授業を理解するために努力した	4.27	4.1	0.17	4.17	3.9	0.27	4.43	4.3	0.13	4.11	4.0	0.11	4.50	4.3	0.20	4.29	4.5	-0.21	4.17	4.0	0.17
【取組み】予習や復習に使った授業1回当たりの時間を教えてください(課題を含む)	2.17	2.7	-0.53	1.77	2.3	-0.53	2.14	2.3	-0.16	2.38	2.8	-0.42	3.31	3.3	0.01	2.56	3.6	-1.04	2.08	2.9	-0.82
【取組み】あなたのおよその出席率を教えてください	4.73	4.5	0.23	4.74	4.4	0.34	4.84	4.4	0.44	4.61	4.5	0.11	4.63	4.5	0.13	4.75	4.7	0.05	4.66	4.5	0.16
③【進め方】授業は計画的に行われていた	4.29	4.2	0.09	4.27	4.1	0.17	4.39	4.1	0.29	4.06	4.0	0.06	4.43	4.3	0.13	4.75	4.4	0.35	4.28	4.5	-0.22
④【進め方】授業では考える機会や時間が与えられた	4.19	4.1	0.09	4.15	4.0	0.15	4.32	4.0	0.32	3.99	3.9	0.09	4.34	4.3	0.04	4.75	4.6	0.15	4.17	4.3	-0.13
⑤【進め方】授業で用いた教科書や資料は適切だった	4.17	4.0	0.17	4.11	4.0	0.11	4.39	4.0	0.39	3.87	3.8	0.07	4.34	4.2	0.14	4.58	4.4	0.18	4.00	4.2	-0.20
⑥【進め方】授業は学生の理解度を確認しながら進められた	3.96	4.0	-0.04	3.85	3.9	-0.05	4.19	3.9	0.29	3.70	3.7	0.00	4.15	4.1	0.05	4.62	4.5	0.12	3.91	4.2	-0.29
⑦【対応】授業では教員に熱意があった	4.30	4.1	0.20	4.25	4.1	0.15	4.50	4.1	0.40	3.99	3.9	0.09	4.49	4.4	0.09	4.77	4.5	0.27	4.29	4.5	-0.21
⑧【対応】教員は学生の質問に対して丁寧に対応した(課外含む)	4.23	4.1	0.13	4.14	4.0	0.14	4.40	4.0	0.40	3.99	3.8	0.19	4.47	4.3	0.17	4.81	4.6	0.21	4.09	4.3	-0.21
⑨【対応】授業は丁寧に進められた	4.26	4.1	0.16	4.21	4.1	0.11	4.43	4.1	0.33	3.95	3.9	0.05	4.44	4.3	0.14	4.83	4.4	0.43	4.23	4.4	-0.17
⑩【対応】提出物(レポート等)は内容をよく評価していた	3.98	4.0	-0.02	3.88	3.9	-0.02	4.08	3.9	0.18	3.82	3.8	0.02	4.34	4.3	0.04	4.54	4.4	0.14	4.17	4.3	-0.13
⑪【シラバス】シラバスの内容はよく理解できた	4.07	3.9	0.17	4.03	3.8	0.23	4.21	3.8	0.41	3.82	3.7	0.12	4.32	4.1	0.22	4.35	4.2	0.15	3.87	4.0	-0.13
⑫【シラバス】授業内容はシラバスにある目標に合っていた	4.13	3.9	0.23	4.08	3.9	0.18	4.25	3.9	0.35	3.89	3.7	0.19	4.37	4.2	0.17	4.50	4.3	0.20	3.97	4.1	-0.13
⑬【シラバス】シラバスの説明は十分に行われた	3.91	3.8	0.11	3.86	3.7	0.16	3.99	3.7	0.29	3.75	3.6	0.15	4.17	4.1	0.07	4.27	4.0	0.27	3.87	3.7	0.17
【総合】授業は難しかった	3.64	3.7	-0.06	3.35	3.4	-0.05	3.69	3.4	0.29	3.95	3.9	0.05	3.94	3.7	0.24	3.73	3.3	0.43	3.97	3.5	0.47
⑭【総合】教員の説明はわかりやすかった	4.04	4.0	0.04	3.97	3.9	0.07	4.22	3.9	0.32	3.77	3.7	0.07	4.22	4.1	0.12	4.56	4.3	0.26	4.08	4.3	-0.22
⑮【総合】受講して内容に興味や関心が湧いた	4.05	3.9	0.15	3.88	3.8	0.08	4.34	3.8	0.54	3.74	3.6	0.14	4.41	4.2	0.21	4.60	4.3	0.30	3.78	4.3	-0.52
⑯【総合】授業に満足できた	4.11	4.0	0.11	4.00	3.9	0.10	4.36	3.9	0.46	3.79	3.7	0.09	4.36	4.2	0.16	4.63	4.4	0.23	4.11	4.4	-0.29
⑰【総合】この授業を受けて力がついた	4.08	4.0	0.08	3.90	3.8	0.10	4.34	3.8	0.54	3.82	3.7	0.12	4.41	4.2	0.21	4.62	4.3	0.32	3.84	4.2	-0.36

【2017年度後期・授業評価アンケート実施報告】回答数 7,469(48%) / 全15,564件中

質問内容	大学 平均 全体 (n=7469)	大学 選択肢回答の度数(%) 1. そう思わない	2. あまりそう思わない	3. どちらとも言えない	4. ややそう思う	5. そう思う	学部 平均 共通教育 (n=2249)	保健福祉 (n=2279)	情報 (n=1665)	デザイン (n=899)	研究科 平均 保健福祉 (n=15)	情報 (n=92)	デザイン (n=0)
①【取組み】真剣に受講した	4.30	140 (1.9%)	176 (2.4%)	797 (10.7%)	2526 (33.8%)	3830 (51.3%)	4.14	4.43	4.25	4.47	4.60	4.27	−
②【取組み】この授業を理解するために努力した	4.31	123 (1.6%)	171 (2.3%)	775 (10.4%)	2622 (35.1%)	3778 (50.6%)	4.14	4.43	4.25	4.49	4.73	4.38	−
【取組み】予習や復習に使った授業1回当たりの時間を教えてください(課題を含む)	2.20	3193 (42.8%)	1924 (25.8%)	938 (12.6%)	483 (6.5%)	931 (12.5%)	1.76	2.04	2.36	3.24	2.67	1.99	−
【取組み】あなたのおよその出席率を教えてください	4.66	20 (0.3%)	16 (0.2%)	147 (2.0%)	2094 (28.0%)	5192 (69.5%)	4.58	4.77	4.66	4.61	4.47	4.50	−
③【進め方】授業は計画的に行われていた	4.29	171 (2.3%)	246 (3.3%)	759 (10.2%)	2358 (31.6%)	3935 (52.7%)	4.22	4.39	4.20	4.36	4.53	4.58	−
④【進め方】授業では考える機会や時間が与えられた	4.24	167 (2.2%)	309 (4.1%)	940 (12.6%)	2185 (29.3%)	3868 (51.8%)	4.18	4.30	4.13	4.41	4.87	4.50	−
⑤【進め方】授業で用いた教科書や資料は適切だった	4.17	202 (2.7%)	273 (3.7%)	1095 (14.7%)	2346 (31.4%)	3553 (47.6%)	4.01	4.34	4.05	4.39	4.53	4.38	−
⑥【進め方】授業は学生の理解度を確認しながら進められた	4.04	263 (3.5%)	431 (5.8%)	1219 (16.3%)	2415 (32.3%)	3141 (42.1%)	3.92	4.21	3.86	4.17	4.33	4.40	−
⑦【対応】授業では教員に熱意があった	4.30	155 (2.1%)	175 (2.3%)	850 (11.4%)	2347 (31.4%)	3942 (52.8%)	4.19	4.47	4.12	4.53	4.27	4.52	−
⑧【対応】教員は学生の質問に対して丁寧に対応した(課外含む)	4.26	151 (2.0%)	181 (2.4%)	1079 (14.4%)	2213 (29.6%)	3845 (51.5%)	4.14	4.40	4.11	4.49	4.53	4.49	−
⑨【対応】授業は丁寧に進められた	4.27	173 (2.3%)	233 (3.1%)	879 (11.8%)	2338 (31.3%)	3846 (51.5%)	4.16	4.42	4.11	4.41	4.47	4.58	−
⑩【対応】提出物(レポート等)は内容をよく評価していた	4.07	137 (1.8%)	126 (1.7%)	1968 (26.3%)	2082 (27.9%)	3156 (42.3%)	3.93	4.15	4.00	4.29	4.40	4.42	−
⑪【シラバス】シラバスの内容はよく理解できた	4.12	123 (1.6%)	138 (1.8%)	1579 (21.1%)	2483 (33.2%)	3146 (42.1%)	4.04	4.25	3.96	4.29	4.60	4.37	−
⑫【シラバス】授業内容はシラバスにある目標に合っていた	4.16	113 (1.5%)	115 (1.5%)	1536 (20.6%)	2401 (32.1%)	3304 (44.2%)	4.05	4.28	4.03	4.35	4.67	4.43	−
⑬【シラバス】シラバスの説明は十分に行われた	3.98	197 (2.6%)	312 (4.2%)	1817 (24.3%)	2224 (29.8%)	2919 (39.1%)	3.84	4.10	3.89	4.22	4.27	4.29	−
【総合】授業は難しかった	3.75	322 (4.3%)	781 (10.5%)	1600 (21.4%)	2479 (33.2%)	2287 (30.6%)	3.34	3.90	3.98	3.97	3.47	3.72	−
⑭【総合】教員の説明はわかりやすかった	4.08	221 (3.0%)	356 (4.8%)	1126 (15.1%)	2635 (35.3%)	3131 (41.9%)	3.96	4.26	3.92	4.24	4.47	4.55	−
⑮【総合】受講して内容に興味や関心が湧いた	4.05	243 (3.3%)	396 (5.3%)	1241 (16.6%)	2483 (33.2%)	3106 (41.6%)	3.81	4.26	3.86	4.41	4.53	4.52	−
⑯【総合】授業に満足できた	4.11	241 (3.2%)	322 (4.3%)	1083 (14.5%)	2536 (34.0%)	3287 (44.0%)	3.91	4.30	4.00	4.31	4.07	4.55	−
⑰【総合】この授業を受けて力がついた	4.09	237 (3.2%)	296 (4.0%)	1180 (15.8%)	2575 (34.5%)	3181 (42.6%)	3.81	4.29	4.04	4.37	4.13	4.42	−
平均(①～⑰)	4.17	180 (2.4%)	250 (3.4%)	1172 (15.7%)	2398 (32.1%)	3469 (46.5%)	4.03	4.31	4.05	4.36	4.47	4.45	−

※「全体」は、後期に収集されたアンケート全部で集計。
※「共通教育」は、2017年度学生便覧に共通教育として記載されているものを集計。
※「保健福祉(学部)」は、回答者の学籍番号が保健福祉学部であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「情報(学部)」は、回答者の学籍番号が情報工学部であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「デザイン(学部)」は、回答者の学籍番号がデザイン学部であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「保健福祉(研究科)」は、回答者の学籍番号が保健福祉学研究科(博士前期＆後期)であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「情報(研究科)」は、回答者の学籍番号が情報系工学研究科(博士前期＆後期)であり、科目が共通教育ではないものを集計。
※「デザイン(研究科)」は、回答者の学籍番号がデザイン学研究科(修士)であり、科目が共通教育ではないものを集計したが、該当者なし。
※問1-3の選択肢:1 = 0．5時間未満、2 = ～1時間、3 = ～1．5時間、4 = ～2時間、5 = 2時間以上
※問1-4の選択肢:1 = 20%未満、2 = ～40%、3 = ～60%、4 = ～80%、5 = 100%

サブカテゴリ集計	全体	学部 共通教育	保健福祉	情報	デザイン	研究科 保健福祉	情報	デザイン
A 授業への学生の取組み	4.31	4.14	4.43	4.25	4.48	4.67	4.33	−
B 授業の資料や進め方	4.19	4.08	4.31	4.06	4.33	4.57	4.47	−
C 教員の授業への対応	4.23	4.11	4.36	4.09	4.43	4.42	4.50	−
D シラバスと授業の関係	4.09	3.98	4.21	3.96	4.29	4.51	4.36	−
E 総合的な評価	4.08	3.87	4.28	3.96	4.33	4.30	4.51	−
平均	4.18	4.04	4.32	4.06	4.37	4.49	4.43	−

(A=①～②の平均、B=③～⑥の平均、C=⑦～⑩の平均、D=⑪～⑬の平均、E=⑭～⑰の平均)

＊前年との比較

	全体 2017年	2016年	差異	共通教育 2017年	2016年	差異	保健福祉 2017年	2016年	差異	情報 2017年	2016年	差異	デザイン 2017年	2016年	差異
①【取組み】真剣に受講した	4.30	4.1	0.20	4.14	4.0	0.14	4.43	4.40	0.03	4.25	4.00	0.25	4.47	4.30	0.17
②【取組み】この授業を理解するために努力した	4.31	4.1	0.21	4.14	3.9	0.24	4.43	4.30	0.13	4.25	4.00	0.25	4.49	4.30	0.19
【取組み】予習や復習に使った授業1回当たりの時間を教えてください(課題を含む)	2.20	2.7	−0.50	1.76	2.3	−0.54	2.04	2.30	−0.26	2.36	2.80	−0.44	3.24	3.30	−0.06
【取組み】あなたのおよその出席率を教えてください	4.66	4.5	0.16	4.58	4.4	0.18	4.77	4.40	0.37	4.66	4.50	0.16	4.61	4.50	0.11
③【進め方】授業は計画的に行われていた	4.29	4.2	0.09	4.22	4.1	0.12	4.39	4.10	0.29	4.20	4.00	0.20	4.36	4.30	0.06
④【進め方】授業では考える機会や時間が与えられた	4.24	4.1	0.14	4.18	4.0	0.18	4.30	4.00	0.30	4.13	3.90	0.23	4.41	4.30	0.11
⑤【進め方】授業で用いた教科書や資料は適切だった	4.17	4.0	0.17	4.01	4.0	0.01	4.34	4.00	0.34	4.05	3.80	0.25	4.39	4.20	0.19
⑥【進め方】授業は学生の理解度を確認しながら進められた	4.04	4.0	0.04	3.92	3.9	0.02	4.21	3.90	0.31	3.86	3.70	0.16	4.17	4.10	0.07
⑦【対応】授業では教員に熱意があった	4.30	4.1	0.20	4.19	4.1	0.09	4.47	4.10	0.37	4.12	3.90	0.22	4.53	4.40	0.13
⑧【対応】教員は学生の質問に対して丁寧に対応した(課外含む)	4.26	4.1	0.16	4.14	4.0	0.14	4.40	4.00	0.40	4.11	3.80	0.31	4.49	4.30	0.19
⑨【対応】授業は丁寧に進められた	4.27	4.1	0.17	4.16	4.1	0.06	4.42	4.10	0.32	4.11	3.90	0.21	4.41	4.30	0.11
⑩【対応】提出物(レポート等)は内容をよく評価していた	4.07	4.0	0.07	3.93	3.9	0.03	4.15	3.90	0.25	4.00	3.80	0.20	4.29	4.30	−0.01
⑪【シラバス】シラバスの内容はよく理解できた	4.12	3.9	0.22	4.04	3.8	0.24	4.25	3.80	0.45	3.96	3.70	0.26	4.29	4.10	0.19
⑫【シラバス】授業内容はシラバスにある目標に合っていた	4.16	3.9	0.26	4.05	3.9	0.15	4.28	3.90	0.38	4.03	3.70	0.33	4.35	4.20	0.15
⑬【シラバス】シラバスの説明は十分に行われた	3.98	3.8	0.18	3.84	3.7	0.14	4.10	3.70	0.40	3.89	3.60	0.29	4.22	4.10	0.12
【総合】授業は難しかった	3.75	3.7	0.05	3.34	3.4	−0.06	3.90	3.40	0.50	3.98	3.90	0.08	3.97	3.70	0.27
⑭【総合】教員の説明はわかりやすかった	4.08	4.0	0.08	3.96	3.9	0.06	4.26	3.90	0.36	3.92	3.70	0.22	4.24	4.10	0.14
⑮【総合】受講して内容に興味や関心が湧いた	4.05	3.9	0.15	3.81	3.8	0.01	4.26	3.80	0.46	3.86	3.60	0.26	4.41	4.20	0.21
⑯【総合】授業に満足できた	4.11	4.0	0.11	3.91	3.9	0.01	4.30	3.90	0.40	4.00	3.70	0.30	4.31	4.20	0.11
⑰【総合】この授業を受けて力がついた	4.09	4.0	0.09	3.81	3.8	0.01	4.29	3.80	0.49	4.04	3.70	0.34	4.37	4.20	0.17

C　全学的就職支援の実施状況

C-1-1　就職ガイダンスの実施状況

実施日	ガイダンスの内容	実施機関等	参加学生数
6月15日	進路・就職ガイダンス	(株)リクルートキャリア	163
7月 6日	公務員試験ガイダンス	(株)東京リーガルマインド	34
10月 5日	就職ガイダンス	(株)マイナビ	100
10月12日	内定者・就職活動報告会	本学キャリアカウンセラー	10
10月19日	自己分析・志望動機ワークショップ	(株)リアセック	17
10月26日	エントリーシート対策講座	(株)ディスコ	46
11月 2日	就活ゼミ～新聞の読み方・活かし方～	(株)山陽新聞社	8
11月 9日	業界・職種研究講座	(株)学情	33
11月30日	求人NAVI操作説明会	(株) ジェイネット	11
12月 7日	面接力ＵＰセミナー	本学キャリアカウンセラー	42
12月21日	地元優良企業の探し方	(株)ビザビ	16
1月11日	グループディスカッション対策講座	(株)リクルートキャリア	13
1月18日	公務員試験ガイダンス	(株)東京リーガルマインド	25
1月25日	就活直前！総まとめ講座	本学キャリアカウンセラー	69

C-1-2　職業適性検査等の実施と解説

実施日	検査名	実施機関等	受検学生数
6月19日～30日 9月22日～10月6日	職業適性診断	(株)リアセック	50
7月20日	職業適性診断解説講座		

C-1-3　各種模擬テスト等の実施

実施日	試験名	実施機関等	受験学生数
7月14日	SPI＋一般常識・時事Web模擬テスト	(株)マイナビ	16
11月16日	SPI模擬試験	(株)ジェイブロード	21
12月14日	言語・非言語Webテスト受検会	(株)リクルートキャリア	34
12月16日	公務員トライアル模試	(株)東京リーガルマインド	7

C-1-4　就職活動バス（合同企業説明会へのバス）の運行

運行日	合同企業説明会参加場所	主　　催　　者	参加学生数
3月 1日	大阪（インテックス大阪）	(株)マイナビ	31

C-1-5　就職相談員による就職相談

相談日	相談時間	内　　容　　等
毎週 月曜日 火曜日 金曜日	10:30～15:30	キャリアカウンセラーによる各種相談を実施 ◇相談内容等 ・就職活動のすすめ方 ・履歴書・エントリーシート等書類に関する相談 ・面接対策　　など ◇H29年度相談件数 ・１，３９４件

C-2　県大吉備塾に関する学生アンケート結果

質問1. 今回の「県大吉備塾」はいかがでしたか（有効回答）

	5点 （満足）	4点	3点	2点	1点 （物足りない）	合計
第13回	23	9	1	0	0	33
	(69.7%)	(27.3%)	(3.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第14回	9	14	6	0	0	29
	(31.0%)	(48.3%)	(20.7%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第15回	81	33	4	0	0	118
	(68.6%)	(28.0%)	(3.4%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第16回	19	9	4	1	0	33
	(57.6%)	(27.3%)	(12.1%)	(3.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第17回	7	11	5	0	0	23
	(30.4%)	(47.8%)	(21.7%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第18回	8	3	0	0	0	11
	(72.7%)	(27.3%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第19回	2	3	1	2	0	8
	(25.0%)	(37.5%)	(12.5%)	(25.0%)	(0.0%)	(100.0%)

質問2. 今回の「県大吉備塾」は今後の大学生活を過ごす上で役立つと思いますか（有効回答）

	かなり役立つ	役立つ	まあ役立つ	役立たない	わからない	合計
第13回	16	15	2	0	0	33
	(48.5%)	(45.5%)	(6.1%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第14回	4	17	6	0	1	28
	(14.3%)	(60.7%)	(21.4%)	(0.0%)	(3.6%)	(100.0%)
第15回	44	63	11	0	0	118
	(37.3%)	(53.4%)	(9.3%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第16回	12	14	0	0	0	26
	(46.2%)	(53.8%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第17回	8	10	4	0	1	23
	(34.8%)	(43.5%)	(17.4%)	(0.0%)	(4.3%)	(100.0%)
第18回	8	3	0	0	0	11
	(72.7%)	(27.3%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第19回	1	4	1	0	2	8
	(12.5%)	(50.0%)	(12.5%)	(0.0%)	(25.0%)	(100.0%)

質問3. 今回の「県大吉備塾」は今後の就職活動に役立つと思いますか（有効回答）

	かなり役立つ	役立つ	まあ役立つ	役立たない	わからない	合計
第13回	12	19	2	0	0	33
	(36.4%)	(57.6%)	(6.1%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第14回	4	18	5	0	1	28
	(14.3%)	(64.3%)	(17.9%)	(0.0%)	(3.6%)	(100.0%)
第15回	38	60	19	0	0	117
	(32.5%)	(51.3%)	(16.2%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第16回	10	16	0	0	0	26
	(38.5%)	(61.5%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第17回	9	10	3	0	1	23
	(39.1%)	(43.5%)	(13.0%)	(0.0%)	(4.3%)	(100.0%)
第18回	7	4	0	0	0	11
	(63.6%)	(36.4%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)
第19回	2	4	0	1	2	9
	(22.2%)	(44.4%)	(0.0%)	(11.1%)	(22.2%)	(100.0%)

D　国際交流

【語学文化研修】

・語学文化研修（英語：英国）の計画概要
①期　　間：平成２９年８月２８日（月）～９月２０日（水）
②研修内容：バンガー大学（英国ウェールズ北部）における英語力向上と英国文化体験など
③申込学生：３名
④費　　用：約４００，０００円　※学生負担想定額
英国内でテロが頻発したため安全を考慮して中止とした.

・語学文化研修（韓国語：韓国）の実績概要
①期　　間：平成２９年８月２９日（火）～９月１５日（金）
②研修内容：梨花女子大学（韓国ソウル市）にて韓国語力向上と梨花女子大学学生との交流，韓国伝統文化体験など
③参加学生：３名
④費　　用：約１３０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，授業料及び宿泊代などが含まれている.

・語学文化研修（中国語：台湾）の計画概要
①期　　間：平成２９年８月２０日（日）～８月２７日（日）
②研修内容：淡江大学（台湾台北市）にて中国語力向上と文化体験など
③募集人数：５名程度（最少催行人数なし，応募人数０名）
④費　　用：約８０，０００円　※学生負担想定額
上記の費用には往復航空運賃，授業料，宿泊代，施設見学費，諸経費などが含まれている.

・語学文化研修（英語：豪州）の実績概要
①期　　間：平成３０年２月２４日（土）～３月１９日（月）
②研修内容：アデレイド大学（南オーストラリア州アデレイド市）における英語力向上と文化体験など
③参加学生：９名
④費　　用：約３９０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，授業料，ホームステイ費，ソーシャルアクティビティ（交通費）及び諸経費などが含まれている.

【スタディツアー】

・米国スタディツアーの実績概要
①期　　間：平成２９年８月２４日（木）～９月１７日（日）
②研修内容：ポートランド州立大学（米国オレゴン州）における英語力向上，企業視察及び文化体験など
③参加学生：１７名
④費　　用：約４４０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，授業料及びホームステイ費などが含まれている.

・香港スタディツアーの実績概要
①期　　間：平成２９年９月１２日（火）～９月１９日（火）
②研修内容：中華人民共和国香港特別行政区における企業視察，文化体験，香港大学及び香港城市大学学生との交流及び授業参観など
③参加学生：４名
④費　　用：約６０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，宿泊代及び諸経費などが含まれている.

・台湾スタディツアーの実績概要
①期　　間：平成３０年３月６日（火）～３月１３日（火）
②研修内容：台湾における企業視察，文化体験，雲林科技大学及び淡江大学学生との交流及び授業参観，ホームステイなど
③参加学生：５名
④費　　用：約６０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，宿泊代及び諸経費などが含まれている．

【保健福祉学スタディツアー】
・保健福祉学スタディツアー（香港）の実施概要
①期　　間：平成３０年９月１６日（土）～９月２３日（土）
②研修内容：香港理工大学（中華人民共和国香港特別行政区）における専門分野の研修，学生との交流及び文化体験など
③参加学生：８名
④費　　用：約６０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，授業料，宿泊費及び諸経費などが含まれている．

・保健福祉学スタディツアー（韓国）の実施概要
①期　　間：平成３０年２月１９日（月）～２月２３日（金）
②研修内容：又松大学校（韓国大田広域市）における専門分野の研修，学生との交流及び文化体験など
③参加学生：１２名
④費　　用：約５０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，授業料，交通費・宿泊費及び諸経費などが含まれている．

・保健福祉学スタディツアー（豪州）の実施概要
①期　　間：平成３０年３月１６日（金）～３月２６日（月）
②研修内容：TAFE　SA（南オーストラリア州アデレイド市）における英語による専門分野の研修及び現地小学校・高校を訪問しての文化交流など
③参加学生：１２名
④費　　用：約２１０，０００円　※学生負担額
上記の費用には往復航空運賃，授業料，ホームステイ費，国内宿泊費及び諸経費などが含まれている．

【日本語・日本文化研修】
①期　　間：平成２９年７月１８日（火）～７月２６日（水）（９日間）
②研修内容：主として本学と国際交流協定を締結している海外の大学の学生を対象に，日本語講座の開講，本学学生や地域住民との交流，岡山県内の産業・史跡・文化財見学などを行い，研修を通じて学生の日本語能力の向上や相互理解を深めるもの
③参加人員：１５名
④実施結果：本年度は，台湾雲林科技大学から９名（男性４名，女性５名），台湾淡江大学から５名（女性５名），中国河南科技大学から１名（女性）の学生を受け入れた．本年度の研修は，次のプログラムにより実施しており，昨年に引き続きホームステイを企画して地域住民との交流の充実を図った．

月日 （曜日）	10:00～10:50	11:00～11:50	13:00～13:50	14:00～14:50	15:00～15:50	16 時以降
7 月 18 日 （火）	開講式	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	
7 月 19 日 （水）	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	
7 月 20 日 （木）	日本語講座	日本語講座	本学学生との交流		自由行動	
7 月 21 日 （金）	岡山県南視察 （三菱自動車工場，瀬戸大橋，岡山後楽園）					歓迎ﾊﾟｰﾃｨｰ
7 月 22 日 （土）	ホームステイ					
7 月 23 日 （日）	ホームステイ					
7 月 24 日 （月）	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	
7 月 25 日 （火）	自由行動		総社市内視察・総社市民との交流			
7 月 26 日 （水）	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	修了式	

Ｅ　高大連携協定等に基づく授業に係る高等学校への講師派遣及び生徒の受入

E-1　講師派遣

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
岡山南高等学校	岡山南高校	情報工学	教授	高戸　仁郎	「介護予防について」講義・実技指導	20	3	H29.7.10
玉島高等学校	玉島高校	保健福祉	准教授	佐々木　新介	キャリアデザイン事業　講義	38	1-3	H29.7.13
倉敷鷲羽高等学校	倉敷鷲羽高校	保健福祉	教授	井村　圭壮	福祉・看護・保育・栄養系に進む高校生に伝えたいこと	10	3	H29.7.13
林野高等学校	林野高校	保健福祉	教授	川上　貴代	管理栄養士・栄養士ガイダンスと模擬講義	45	1-3	H29.7.18
		保健福祉	教授	吉永　早苗	保育士・幼稚園教諭ガイダンスと模擬講義	46	1-3	
邑久高等学校	邑久高校	保健福祉	教授	井村　圭壮	社会福祉系学部で学べること、社会福祉士、看護師の仕事内容等について	18	1-3	H29.8.22
倉敷南高等学校	倉敷南高校	保健福祉	教授	久保田　恵	「キャリアⅠ」学問の哲人講座：医療保健分野	66	1,2	H29.10.3
		デザイン	准教授	益岡　了	「キャリアⅠ」学問の哲人講座：芸術分野	27	1,2	
岡山龍谷高等学校	岡山龍谷高校	保健福祉	教授	井村　圭壮	福祉・保育・看護・栄養への進学を考えている生徒の進路指導	40	1,2	H29.10.13
岡山商科大学附属高等学校	岡山商科大学附属高校	保健福祉	教授	井村　圭壮	産業社会と人間	20	1	H29.10.18
岡山朝日高等学校	岡山朝日高校	保健福祉	准教授	樂木　章子	キャリア教育講演会	359	2	H29.12.15
岡山南高等学校	岡山南高校	情報工学	教授	高戸　仁郎	「高齢者の健康」講義・実技指導	80	2	H30.1.18、H30.2.8

E-2　生徒の受入

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
総社高等学校	岡山県立大学	デザイン	教授	森下　眞行	ユニバーサルデザイン※	27	2	H29.11.7、11.21
			教授	山下　明美	カラーコーディネート※			H29.10.17、10.24
			講師	朴　貞淑	住環境※			H29.9.26、10.3
清心女子高等学校	岡山県立大学	保健福祉	教授	伊東　秀之	総合的な学習・物質科学課題研究※	7	2	H30.1.31、2.20
総社南高等学校	岡山県立大学	情報工学	教授 教授 准教授 准教授 准教授 准教授 助教 助教	金川 明弘 佐藤 洋一郎 岸原 充佳 山崎 大河 井上 貴浩 齋藤 誠二 泉　晋作 大山 剛史	プログラムによる直流モータの制御 ロボット制御のシミュレーション 半導体の特性測定 骨格筋収縮時の筋電信号 対戦ゲームにおける局面評価アルゴリズム 筋電義手で物体把持	74	2	H29.9.19
岡山南高等学校	岡山県立美術館	デザイン	教授 准教授	難波 久美子 島田 清徳	テキスタイルワークショップ	40	2	H29.11.19

※ 講義内容等の※印は連携講座（高校が単位認定を行うことができるもの。）

Ｆ　高等学校への講師派遣及び生徒の受入（授業以外）

F-1　講師派遣（校内ガイダンス）

月　日	高等学校名	受講者		内　　容
		学年	人数	
4月25日	岡山県立井原高校	2,3	28	看護学科の説明
6月12日	創志学園高校	1	7	栄養学科の説明
6月12日	岡山県立倉敷中央高校	3	22	大学全体の説明
6月21日	岡山県立一宮高校	1	30	保健福祉学科の説明
6月22日	岡山県立玉島高校	1	22	デザイン学部の説明
6月27日	岡山県立総社南高校	1	50	情報工学部、デザイン学部の説明
7月26日	岡山県立西大寺高校	2	38	大学全体の説明
9月27日	岡山県立勝山高校	1,2	36	保健福祉学科の説明
10月2日	岡山県立倉敷中央高校	2	20	看護学科の説明
10月3日	岡山県立岡山東商業高校	2	11	デザイン学部の説明
10月10日	岡山県立倉敷鷲羽高校	1	21	看護学科の説明
10月20日	岡山市立岡山後楽館高校	1	15	大学全体の説明
10月25日	岡山県立総社南高校	2	7	デザイン学部の説明
10月26日	就実高校	1,2	47	情報工学部の説明
11月9日	県立倉敷商業高校	2	13	デザイン学部の説明
12月12日	県立津山東商業高校	1	10	デザイン学部の説明
12月13日	県立備前緑陽高校	2	30	情報工学部、デザイン学部の説明

F-2　生徒の受入

月　日	高等学校名	訪問者		内　　容
		学年	人数	
4月21日	兵庫県立浜坂高校	2	43	事務局でDVD鑑賞後各学部に分かれて施設見学・説明
5月30日	岡山県立倉敷鷲羽高校	2	30	事務局でDVD鑑賞後各学部に分かれて施設見学・説明
10月30日	岡山県立西大寺高校	2	37	事務局で資料配付・大学概要説明後、保健福祉学部概要説明・施設見学

※ 訪問者数には引率教員等を含む。

G　学生・クラブの表彰

G-1　学生の表彰

保健福祉学部	栄養学科	4年	宮瀬 星織	総社市奨励賞
保健福祉学研究科	保健福祉科学専攻（博士後期）	3年	丸田 ひとみ	おかやまバイオアクティブ研究会 第52回シンポジウム学生プレゼンテーション学生奨励賞
			杉山 京	日本在宅ケア学会　平成29年度優秀論文賞
	保健福祉学専攻（博士前期）	1年	倉本 亜優未	日本認知症ケア学会　平成29年度石﨑賞
情報工学部	情報通信工学科	4年	佐々木　友弥	情報処理学会第80回全国大会学生奨励賞
			原田 脩平	総社市奨励賞
情報系工学研究科	システム工学専攻（博士後期）	3年	板野 由佳	仁科顕彰会　仁科賞
	システム工学専攻（博士前期）	2年	上林 和正	第67回 電気・情報関連学会中国支部連合大会情報処理学会中国支部奨励賞
			井内 健人	第67回 電気・情報関連学会中国支部連合大会情報処理学会中国支部奨励賞
			江川 翔一	第68回　電気・情報関連学会中国支部連合大会奨励賞
			江川 翔一	第68回　電気・情報関連学会中国支部連合大会電気学会優秀論文発表賞B
			江川 翔一	第14回子ども学会議（学術集会）優秀発表賞
			新田 純平	第20回　舗装技術に関する懸賞論文佳作 一般社団法人 日本道路建設業協会
			新田 純平	4th International Symposium on Asphalt Pavements & Environment 2017 Excellent paper Award（共著者他3名）
			福田 大晃	日本機械学会若手優秀講演フェロー賞
			北野 大志	電気学会優秀論文発表賞A賞（C部門研究会）
			広瀬 拓	2017年度自動車技術会　大学院研究奨励賞
			今井 秋介	日本機械学会スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス部門部門学生優秀講演表彰
		1年	平松 照清	第68回 電気・情報関連学会中国支部連合大会電気学会中国支部奨励賞

			石原 雅之	学生マイクロ波回路設計コンテスト3位 電子情報通信学会
情報系工学研究科	システム工学専攻 （博士前期）	1年	中村 匠吾	学生マイクロ波回路設計コンテスト3位 電子情報通信学会
			小松原 拓矢	学生マイクロ波回路設計コンテスト3位 電子情報通信学会
			東野 祐哉	日本フットボール学会学会奨励賞（筆頭著者含め他5名）
			井上 秀一郎	日本エネルギー学会奨励賞
			西江 裕	日本電磁波エネルギー応用学会 JEMEA ベストポスター賞
			井上 隼貴	第19回 IEEE 広島支部学生シンポジウム功労賞
			依田 直也	第19回 IEEE 広島支部学生シンポジウム功労賞
			阪本 永李	第19回 IEEE 広島支部学生シンポジウム功労賞
デザイン学部	デザイン 工 学 科	4年	有村 望	JIA 全国学生卒業設計コンクール岡山地域会 2018　優秀賞
			河野 純平	
			渡邊 桜帆	JIA 全国学生卒業設計コンクール岡山地域会 2018　奨励賞
			高木 菜生	（一社）岡山県建築士事務所協会平成29年度第13回優秀卒業作品表彰制度　最優秀賞
			有村 望	（一社）岡山県建築士事務所協会平成29年度第13回優秀卒業作品表彰制度　優秀賞
			渡邊 桜帆	
			河野 純平	平成29年度日本建築学会中国支部優秀卒業設計 構造賞・卒業研究賞
			有村 望	平成29年度日本建築学会中国支部優秀卒業設計 作品賞
		3年	志水 瞭斗	平成29年度デザインパテントコンテスト優秀賞
			板井 翔大	建築新人戦 2017　100選
			片嶋 倖助	
			山本 蓉	

		2年	西林 侑哉	第3回「わが街健康プロジェクト」ＰＲポスター優秀賞
	造形デザイン学　　科	4年	大橋　由佳	第15回ふろしきデザインコンペ佳作 日本風呂敷協会
デザイン学部	造形デザイン学　　科	4年	土田 ひかり	総社市奨励賞
		3年	大槇 美穂	中四映連 映像グランプリ 2017 学生部門（専門学校・短大・大学の部）最優秀賞
			尾野 歩由美	
			井料 雄大	
			前田 凛々子	
			繁本 寛子	中四映連 映像グランプリ 2017 学生部門（専門学校・短大・大学の部）最優秀賞
			西村 百花	
			綾田 奈津美	
			児玉 みのり	
			清水 眞帆	中四映連 映像グランプリ 2017 学生部門（専門学校・短大・大学の部）優秀賞
			宮永 はるか	
			山本 千春	
			森永 里佳子	
			野口 朋子	第24回ヤングセラミスト・ミーテイィング in 中四国　作品部門大賞　日本セラミックス協会中国四国支部
			宮下 珠紀	第24回ヤングセラミスト・ミーテイィング in 中四国　作品部門準大賞　日本セラミックス協会中国四国支部
		2年	濱見 志歩	第3回「わが街健康プロジェクト」ＰＲポスターグランプリ
			前川 和美	第3回「わが街健康プロジェクト」ＰＲポスター優秀賞
			平尾 美奈	
			西川 紗世	第3回「わが街健康プロジェクト」ＰＲポスターサポーター賞

			松本 志保	富山デザインフェア「2017 パッケージデザインコンペティション」富山テレビ放送株式会社賞
デザイン学研究科	造形デザイン学　専　攻（修士課程）	1年	藤井 夏美	Fillil　SS長期コンペ「北欧サバンナ」　入賞
			藤井 夏美	第48回毎日・DAS学生デザイン賞<金の卵賞>ファッション＆テキスタイル部門　入選　一般社団法人総合デザイナー協会

G -2　クラブの表彰

サークル名		大会名	成績等
バレーボール部		第85回中国大学バレーボールリーグ戦春季大会	3位
ロボット研究サークル「メヒャニカ」		第17回レスキューロボットコンテスト	ベストプレゼンテーション賞
造形デザイン学科	大橋　由佳（4年）	第15回ふろしきデザインコンペ	佳作
人間情報工学科	深津　直也（3年）	第26回岡山県実業団学生対抗陸上競技選手権大会	第1位
フットサル部		第13回全日本大学フットサル大会岡山県予選会	優勝
卓球部		平成29年度第2回(後期)総社市体育協会卓球大会	優勝
人間情報工学科	千神　まどか（3年）	平成29年度井原卓球協会後期個人戦卓球大会	優勝
情報システム工学科	大寺　宏樹（3年）	平成29年度第2回総社市体育協会卓球大会	優勝

Ｈ　委員会等の審議事項

H-1　大学活動委員会

第１回（平成 29 年 5 月 16 日）
（１）平成 29 年度教育研究開発機構（国際交流分野）客員教授の候補者について
（２）平成 29 年度後期交換留学生の募集について
（３）学生参加型ＦＤ（学生ＦＤ活動）への経済的支援について
（４）地域共同研究機構平成 29 年度活動方針（案）について
（５）平成 29 年度大学教育開発センター活動計画について

第２回（平成 29 年 6 月 8 日）
（１）副専攻「岡山創生学」おかやまボランティア演習及び地域協働演習に係る移動経費等の助成要綱（案）について
（２）３学部アドミッションポリシーの改訂について
（３）平成 29 年度教育力向上支援事業の計画内容変更について

第３回（平成 29 年 7 月 13 日）
（１）第３期中期計画における全学３ポリシーについて
（２）平成 29 年度第２回国際交流推進助成費について
（３）オーエム産業(株)表面処理研究所との連携大学院協定について

第４回（平成 29 年 8 月 10 日）
（１）第３期中期計画における全学ＤＰ（学位授与の方針）について
（２）平成 29 年度ＦＤ活動における相互授業参観の実施について
（３）教育力向上支援事業成果報告会の実施について
（４）平成 30 年度前期交換留学生の募集について（又松大学校、河南科技大学）
（５）平成 30 年度転学生の募集について（又松大学校、河南科技大学）
（６）学籍番号体系の見直しについて

第５回（平成 29 年 9 月 14 日）
（１）第３期中期計画における全学ポリシーについて
（２）科目ナンバリングの概要と実施計画について
（３）「ＯＰＵフォーラム 2018」（案）について
（４）平成 29 年度地域共同研究機構客員教授について（新規追加分）

第６回（平成 29 年 10 月 12 日）
（１）第３期中期計画における全学ポリシーについて
（２）平成 30 年度「大学で学ぶ」及び「フレッシュマンセミナー」について
（３）平成 29 年度第３回国際交流推進助成費について
（４）学生参加型ＦＤ（学生ＦＤ活動）への経済的支援について

第７回（平成 29 年 11 月 9 日）
（１）第３期中期計画学内案作成スケジュールについて
（２）2017 年度教育年報の作成について
（３）アドバイザー制度の整備について

第８回（平成 29 年 12 月 14 日）
（１）平成 29 年度第４回国際交流推進助成費について
（２）第３期中期計画における各学部学科の３ポリシーについて
（３）カリキュラム・ポリシーの改訂について（保健福祉学部）
（４）授業改善意見交換会の実施について

（５）アドバイザー制度の整備について
（６）社会貢献年報 2017 について
（７）平成 30 年度教育力向上支援事業について

第９回（平成 30 年１月 11 日）
（１）タイのカセサート大学との大学間学術交流協定（ＭＯＵ）の締結について
（２）平成 29 年度地域共同研究機構客員教授について

第１０回（平成 30 年２月８日）
（１）第３期中期計画における各学部学科の３ポリシーの検討状況について
（２）各研究科の３ポリシーの検討状況について
（３）岡山県立大学履修規程の一部改正について
（４）岡山県立大学大学院履修規程の一部改正について
（５）アドバイザー制度の実施について

第１１回（平成 30 年３月５日）
（１）平成 33 年度全学３ポリシー改訂版について
（２）平成 30 年度地域共同研究機構客員教授等について
（３）岡山県立大学共同研究取扱規程の全部改正について
（４）岡山県立大学受託研究取扱規程の全部改正について
（５）平成 30 年度重点領域研究助成費の採択（案）について
（６）平成 30 年度教育研究開発機構客員教授等について
（７）平成 30 年度第１回国際交流活動費について
（８）平成 30 年度地域連携事業及び企業人材育成事業について

H-2　教務専門委員会

第１回（平成 29 年５月 16 日）
（１）全学情報システム（学務系）「はっとりん」に関する意見について
（２）科目の新設について
（３）オーエム産業(株)表面処理研究所との連携大学院協定について
（４）オフィスアワー制度実施要領について
（５）４年次生に係る平成 29 年度末日程について
（６）平成 29 年度教務専門委員会開催日程について

第２回（平成 29 年６月８日）
（１）平成 30 年度授業開講計画の協議スケジュールについて
（２）平成 30 年度共通教育科目の開講計画への要望等について（依頼）

第３回（平成 29 年７月 13 日）
（１）平成 30 年度共通教育科目開講計画について
（２）平成 30 年度学部教育科目の開講計画等について
（３）平成 29 年度 TOEIC L&R IP テストの実施について
（４）教育職員免許法施行規則等第 66 条の６に定める科目について

第４回（平成 29 年８月 21 日）（持ち回り）
（１）平成 31 年度における保健福祉学科・精神保健福祉士養成課程の設置に係る開講科目の承認について

第５回（平成 29 年９月 14 日）

（１）平成 30 年度共通教育科目の時間割について
（２）平成 30 年度入学生の卒業要件及び学部教育科目の開講計画について
（３）平成 31 年度保健福祉学部保健福祉学科社会福祉学専攻　スクールソーシャルワーカー認定資格科目の設置について
（４）平成 30 年度大学院教育科目の開講計画等について
（５）平成 29 年度後期大学院博士前期課程授業科目「情報検索と情報抽出」の不開講について
（６）クォーター制導入に伴う定期試験不正行為への対応について
（７）科目ナンバリングの導入について

第６回（平成 29 年 10 月 12 日）
（１）平成 30 年度全学講義にかかる講師選定について
（２）平成 30 年度教務・学生生活関係スケジュールについて

第７回（平成 29 年 11 月 9 日）
（１）平成 30 年度学部教育科目の時間割について
（２）平成 30 年度履修案内の原稿作成について
（３）履修モデルについて
（４）開講計画の修正について
（５）平成 30 年度「大学コンソーシアム岡山」単位互換提供科目について

第８回（平成 29 年 12 月 14 日）
（１）平成 30 年度授業科目の新設・廃止について
（２）平成 30 年度大学院教育科目の開講計画・時間割について
（３）平成 31 年度授業科目の新設について（保健福祉科学研究科）
（４）平成 31 年度大学院教育科目の開講計画について（保健福祉学研究科）
（５）平成 30 年度臨時に設ける授業科目について
（６）平成 30 年度履修案内の作成について
（７）平成 30 年度共通教育科目の時間割の変更について
（８）平成 30 年度保健福祉学部開講計画の修正について（保健福祉学科）
（９）平成 31 年度スクールソーシャルワーカー認定資格科目及び精神保健福祉士養成課程の修正について
（１０）平成 30 年度の副専攻「岡山創生学」の実施について
（１１）平成 30 年度「大学コンソーシアム岡山」単位互換提供科目について
（１２）平成 30 年度アクティブ・ラーニング教室(8105 教室)の希望調査について

第９回（平成 30 年 1 月 11 日）
（１）平成 30 年度履修案内について（大学院）
（２）平成 30 年度「大学で学ぶ」の実施について
（３）科目の廃止について（共通教育科目）
（４）平成 30 年度デザイン学部開講計画の修正について（デザイン工学科）
（５）平成 30 年度臨時に設ける授業科目について
（６）平成 30 年度新入生オリエンテーションについて（学部・院）
（７）平成 30 年度「シラバス」の作成について

第１０回（平成 30 年 2 月 8 日）
（１）平成 30 年度「フレッシュマンセミナー」について
（２）平成 30 年度保健福祉学部開講計画の修正について（保健福祉学科）

（３）平成 30 年度臨時に設ける授業科目について（大学院）
（４）平成 30 年度臨時に設ける授業科目の修正について（情報工学部）
（５）平成 30 年度履修案内について（大学）
（６）平成 30 年度履修案内について（大学院）
（７）アドバイザー制度の実施について
（８）平成 30 年度共通教育科目の授業開講計画の修正について
（９）平成 30 年度シラバス入力・承認用手続き等について

第１１回（平成 30 年 3 月 5 日）
（１）平成 30 年度ＰＲＯＧテスト実施要領について
（２）「インターンシップ」と後継科目「エンジニアリング演習」の取扱方針について
（３）平成 30 年度履修案内について（平成 29 年度以前入学生用：四大）について
（４）平成 30 年度履修案内について（平成 29 年度以前入学生用：大学院）について
（５）平成 30 年ＴＯＥＩＣ　Ｌ＆Ｒ　ＩＰテストの実施について

付録２

Ａ　学部ディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，アドミッション・ポリシー

※　表における表記は次のとおり．
ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）：ＤＰ
カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）：ＣＰ
アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）：ＡＰ

１　大学

ＤＰ （学位授与の方針）	本学は、建学の理念である「人間尊重と福祉の増進」の具現化に向けて、地域社会や他の教育研究機関との自由かつ緊密な交流連携のもとに、人間・社会・自然の関係性を重視した実学を創造し、それを研究教授することによって知性と感性を育み、豊かな教養と深い専門性を備えて新しい時代を切り拓く人材の育成を図り、もって地域の学術文化の進展及び産業の振興に寄与することを目的としています。 したがって、次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 ● 豊かな教養と高い人間性を身に付けている。 ● グローバル並びにローカルに活躍し得る企画提案力とコミュニケーション力を身に付けている。 ● 専門性を修得し、課題を発見し解決できる能力を身に付けている。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	本学は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 １　カリキュラムは、共通教育科目、学部教育科目及び教職教育科目に区分しています。 ２　共通教育科目では、基礎的知識の体系的理解、生涯にわたる知的活動や社会生活に必要な論理的思考力・問題発見力・批判力・情報処理など汎用的技能の修得、地域連携を通じた社会人基礎力や課題解決力の修得、グローバル化の時代に役立つ語学・異文化理解によるコミュニケーション力の修得を柱として、知的自律性を培うための教養と技能を涵養する教育を全学生に実施します。 ３　学部教育科目では、共通教育科目の修得で獲得した知識と技術を基盤に、所属学科・専攻等ごとに専門の学術を学び、さまざまな社会的要請に的確に対応できる専門性と実践的能力を育成します。 ４　学部教育のカリキュラムは、所属する学科等のカリキュラム・ポリシーに基づいて専門性・問題解決能力の修得に向け編成しています。 ５　共通教育科目及び各学部教育科目を通じて、地域課題を知り、それを解決に導くための理論と基礎及び実践的方法を修得します。 ６　教職教育科目では、栄養学科に栄養教諭一種免許課程、保健福祉学科子ども学専攻に幼稚園教諭一種免許課程を設けています。
ＡＰ （入学者受入の方針）	岡山県立大学は、保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部の３学部からなり、「人間尊重と福祉の増進」を建学の理念として、平成５年に設立されました。 本学は、建学の理念の具現化に向けて、地域社会や他の教育研究機関との自由かつ緊密な交流連携のもとに、人間・社会・自然の関係性を重視した実学を創造し、それを研究教授することによって知性と感性を育み、豊かな教養と深い専門性を備えて新しい時代を切り拓く人材の育成を図り、もって地域の学術文化の進展及び産業の振興に寄与することを目的としています。

	したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● 人間・社会・自然について幅広く学び、それらの関係性を探究したい学生 ● 実学を身に付け、国内・国外の幅広い分野で社会に貢献したい学生 ● 新技術・知識の創出に意欲を持ち、地域と世界へ向けて情報発信したい学生

２　保健福祉学部

ＤＰ （学位授与の方針）	保健福祉学部は、地域の人々の健康維持と増進に積極的に貢献できる保健、医療、福祉に関する基本的知識と技術を修得し、健康課題に対して科学的な思考や分析に基づいた課題解決能力を備え、高い倫理観と豊かな人間性にあふれ、さらに社会の変化やグローバル化に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を有する人材を養成することを目指しています。 したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養】 豊かな教養を身に付けている。 【倫理観】 豊かな感性、倫理観を有し、人を支援する心を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 外国語を含めたコミュニケーション能力と企画提案力を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性】 看護、栄養、福祉のそれぞれの分野における十分な専門的知識と技術を身に付けている。 【課題発見・解決力】 科学的、論理的思考に基づいた課題探究と解決に必要となる多様な基礎知識とそれらを活用する能力を身に付けている。 【生涯学習力】 将来にわたって応用知識・技術を積み上げていける力を身に付けている。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	保健福祉学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 １年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養】 幅広い教養とともに専門教育を学ぶために必要な基礎知識を身に付けるための共通教育科目として、「人文・社会科学要論」をはじめとする人文・社会科学群科目や「自然科学要論」をはじめとする自然科学科目群において基礎的知識の体系的理解を行います。 【倫理観１】 「大学で学ぶ」、「フレッシュマンセミナー」では大学生活に必要な汎用的技能に加えて豊かな人間性と倫理観を身に付けます。 【倫理観２】 臨地実習と統合実習・総合演習では、倫理観と人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。 【異文化理解・コミュニケーション力１】 「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 「海外研修（保健福祉学）」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。

	【専門性】 専門教育においては、現場での課題解決に必要となる多様な基礎知識と、それらを活用できる実践力を養成するために、各学科において、基礎から専門にかけて講義科目を体系的に配置するとともに、臨地実習を含む豊富な演習・実験・実習科目を設置しています。 【課題発見・解決力】 【生涯学習力】 科学的・論理的思考に基づいた課題発見力と解決力、批判力を育成し、将来にわたって応用知識・技術を積み上げていける力を身に付ける卒業研究を、いずれの学科においても１年以上履修します。 【資格取得】 共通教育と専門教育を通じて、各学科で国家試験受験資格を含む各種資格ならびに教諭一種免許等を得るために必要な科目が履修できます。 【教育力】 教職課程を設置している学科・専攻において、履修生は課程の学びを通じて、求められる教育力を養います。
ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 保健福祉学部は、看護学科、栄養学科、保健福祉学科の３学科で構成されています。 本学部は、地域の人々の健康維持と増進に積極的に貢献できる保健、医療、福祉に関する基本的知識と技術を修得し、健康課題に対して科学的な思考や分析に基づいた課題解決能力を備え、高い倫理観と豊かな人間性にあふれ、さらに社会の変化やグローバル化に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を有する人材を養成することを目指しています。したがって求める学生像は次のとおりです。 ● 看護・栄養・福祉のそれぞれの分野に明確な目的意識と意欲、情熱を持っている学生 ● 十分な基礎学力を備え、論理的思考能力を貴ぶ学生 ● 人間理解に基づく保健・医療・福祉を学び、その成果を広く地域や世界に発信する意欲と創意にあふれる学生 ● 豊かな感性を育み、様々な人とコミュニケーションできる能力、人を支援する心を身に付けたい学生

2－(1)　看護学科

ＤＰ （学位授与の方針）	看護学科は、人々が健康で豊かなその人らしい人生が実現できるように、看護の専門知識と技術を活かして、地域におけるあらゆる健康レベルの人々（家族・集団・地域）の生涯を通じた健康を支援し地域社会に貢献できる看護専門職の育成を目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養】 豊かな教養を身に付けている。 【倫理観】 看護専門職としてのアイデンティティを形成し、専門職業人の持つべき知識・価値観・倫理観を自ら継続・発展させていく能力を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 グローバルな視点を持ち、看護の実践・教育・研究領域におけるリーダーやスペシャリストとして、必要な看護を創造するために企画や解決策を提案し、社会に貢献できる能力を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 人間理解を基盤にしたヒューマンケアリングが実践できる能力を身に付けている。 【専門性２】 看護の専門知識・技術を用いて、人々の生涯にわたる多様な健康レベルの人々の健康課題を科学的・論理的に判断し、解決方策を提案できる能力を身に付けている。 【専門性３】 保健医療福祉チームにおける看護の役割を理解し、多職種と連携・協働できるマネジメント力、実践力を身に付けている。 【課題発見・解決力】【生涯学習力】 自ら学び続け、将来は看護の実践・教育・研究領域において、問題解決できる力と将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	看護学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 １年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養】 １年次から２年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文・社会科学要論」「自然科学要論」、専門分野共通の基礎として「健康科学要論」などを設けています。 【倫理観１】 共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理学」などの科目を設けています。 【倫理観２】 専門科目における「統合と実践カテゴリー」科目をはじめとして、多くの科目において、倫理観を養い、人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。 【異文化理解・コミュニケーション力１】

	「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 「海外研修（保健福祉学）」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得するほか、「国際保健看護論」などを通じて、専門分野の異文化理解を深めます。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。 【専門性１】 １年次から２年次までに学部教育「専門基礎分野」等の科目を履修します。ここで、人体の仕組みと病態や人間生活、健康支援や社会制度を学びます。さらに３～４年次への「専門分野」導入として「基礎看護学カテゴリー」をはじめとする、各種の看護学カテゴリー科目について学び、基礎的な知識と技術を修得します。 【専門性２】 ２年次から３年次には「専門分野」科目を主に履修します。ここで「小児、成人、母性、老年や精神看護学カテゴリー」など各領域の学びをはじめるほか、「統合と実践カテゴリー」における看護アセスメント、マネジメント教育等を通じて、主要な健康課題と健康増進のための理論を修得するとともに、倫理観に基づいた看護実践を提供できる基盤としての能力を育成します。その上で、健康問題を持つ個人・集団・地域を対象に看護診断をし、解決に必要な知識と技術を育成します。 さらに他の専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成する「チームガバナビリティ演習」を設けています。 【専門性３】 ３年次から４年次には「小児、成人、母性、老年や精神看護学」など、各領域別の講義や臨地実習を行います。これらの科目を通じて、人間の尊厳や多様性を学び、科学的根拠に基づくアセスメント及びヒューマンケアリングが実践できる基盤を育成するとともに、他の医療専門職と連携し協働する力を養います。さらに「統合実習」を通じて、これまで学んだ知識・技術・態度を統合し、看護実践力とともに倫理観を高めます。 【課題発見・解決力】【生涯学習能力】 ３年次から４年次に「看護研究」「卒業研究」の科目を通じて、これまでに学んだ専門的知識や実践力を広い視点で統合し、生涯に渡って研究的な方法を用いて健康課題を特定し解決策を論理的に説明するとともに企画提案できる能力を育成し、保健医療分野でのリーダーとして必要な基盤を育成します。 【資格取得】 本学科は、看護師国家試験受験資格を満たす科目を卒業要件とし、一部の者には助産師国家試験受験資格に必要な科目が選択できるように配置しています。

ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 看護学科は、人々が健康で豊かなその人らしい人生が実現できるように、看護の専門知識と技術を活かして、地域におけるあらゆる健康レベルの人々（家族・集団・地域）の生涯を通じた健康を支援し、地域社会に貢献できる看護専門職の育成を目指しています。 したがって､求める学生像は次のとおりです。 ● 人々の健康に関心があり、学ぶことに対する意欲がある学生 ● 他者を思いやり、主体性をもって多様な人と協働することができる学生 ● 看護の多様な側面を学ぶ上で必要な理数系または文科系の基礎学力がある学生 ● 探求心があり、根拠を基に論理的に解決する学生 ● 何事にも前向きに取り組み、チャレンジ精神が旺盛な学生 ● 看護専門職として、地域や国際社会に貢献したい学生 【入学者選抜の基本方針】 看護学科では、高等学校で主体性をもって学習することによって、看護を学問として追及するための基礎学力を備えた学生、看護の実践を発展させる可能性を持つ好奇心豊かで行動力のある学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別選抜（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。 ・一般入試（前期日程、後期日程） 前期日程および後期日程ともに、大学入試センター試験では５教科５科目又は５教科６科目および個別学力検査では小論文と面接を課し、高等学校で得た基礎的な知識や技能、思考力、判断力、表現力等を総合評価します。 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。 面接は、集団による方法で実施し、出願書類を参考に学習意欲、表現力、社会性、協調性等を総合評価します。 ・推薦入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接は、個人面接を行い、出願書類を参考に関心、豊かな人間力、知識、教養、探求心等を総合評価します。 ・帰国生入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格とすることがあります。 ・私費外国人留学生入試 日本留学試験およびTOEFLにより語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。

2－(2)　栄養学科

ＤＰ (学位授与の方針)	栄養学科は、超高齢社会の到来や生活習慣病予防が重要視されている現代社会において、食と健康の相互関係を科学理論によって理解し、未知なる事象の解明に向けて研究する姿勢を身に付け、栄養学を人の健康の維持・増進、病気の予防・治療へと応用し、広く地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養】 豊かな教養を身に付けている。 【倫理観】 人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力および高い倫理観を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 多様な文化や価値観を受け容れ、グローバルに活躍できる企画提案力、情報発信力を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 食と健康の専門家に必要な資質として、基本的知識・技術を身に付けている。 【専門性２】 栄養学に関する専門職業人として必要な高度な専門的応用知識・技術を発揮できる能力を身に付けている。 【専門性３】 栄養学の総合的な学びを深め、多職種と連携・協働できるマネジメント力、実践力を身に付けている。 【課題発見・解決力】【生涯学習力】 専門分野における問題発見・解決能力を身に付けている。また、多様な対象者に対して、科学的思考に基づいて適切かつ高度な食・栄養支援を実践するための応用知識や技術を、将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。
ＣＰ (教育課程の編成・実施の方針)	栄養学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 １年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養】 １年次から２年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文・社会科学要論」「自然科学要論」、専門分野共通の基礎として「健康科学要論」などを設けています。 【倫理観１】 共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理学」などの科目を設けています。 【倫理観２】 専門科目における「総合演習及び臨地実習カテゴリー」科目をはじめとして、多くの科目において、倫理観を養い、健康を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。

	【異文化理解・コミュニケーション力１】 「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 「海外研修（保健福祉学）」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。 【専門性１】 １年次から２年次までに学部教育「専門基礎分野」科目を履修します。「社会・環境と健康」「人体の構造と機能・疾病の成り立ち」及び「食べ物と健康」の各カテゴリーの科目の履修を通じて、食と健康の専門家としての基本的な知識や技術について学びます。さらに３～４年次への「専門分野」導入として「基礎栄養学」や「応用栄養学」などの科目について履修をはじめます。 【専門性２】 ２年次から３年次には「専門分野」科目を主に履修します。専門職業人として必要な高度な専門的応用知識として、「栄養教育論」、「臨床栄養学」、「公衆栄養学」や「給食経営管理論」などのカテゴリーの各論において、栄養学に関する応用的な知識と方法、病態と栄養に関する応用的な知識と方法、集団の栄養に関する知識と方法、集団の給食に関する知識やサービスマネジメント能力、さらには栄養指導能力を修得します。さらに他の専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成する「チームガバナビリティ演習」を設けています。 【専門性３】 ３年次から４年次には、専門分野各論の充実した履修とともに、「総合演習」及び「臨地実習」カテゴリー科目の履修を通じて、栄養学の総合的かつ実践的な学びを深めるとともに、学外の関係機関において「臨床栄養学」「公衆栄養学」や「給食運営」などの、実地での履修を通じて、学外の評価を得ながら栄養学に関する実践力を高めます。 【課題発見・解決力】　【生涯学習力】 ４年次には「卒業研究」を履修し、科学的に探求する態度、論理的に思考する態度、計画的に実行する態度を身に付け、専門分野における問題発見・解決能力、実践能力を育成するとともに、これまで身につけた知識や技術を、将来にわたって自ら積み上げていく力を育成します。 【資格取得】 共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には栄養士免許並びに管理栄養士国家試験受験資格が取得可能となるほか、食品衛生管理者並びに食品衛生監視員の任用資格の取得が可能となります。また、教職教育科目を修得することで栄養教諭一種免許状が取得可能となります。 【教育力】　（栄養教諭教職課程） 教職教育科目を履修することで教育の意義や食教育実践に必要な知識と技術を身に付け、教育能力を育成します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 栄養学科は、超高齢社会の到来や生活習慣病予防が重要視されている現代社会において、食と健康の相互関係を科学理論によって理解し、未知なる事象の解明に向けて研究する姿勢を身に付け、栄養学を人の健康の維持・増進、病気の予防・治療へと応用し、広く地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次の通りです。 ● 自然科学に関心を持ち、食物と人の健康との関係について科学的に理解・

	探求しようとする学生 ● 栄養学分野の研究に取り組み、これを発展させて社会に還元しようとする意欲のある学生 ● 様々な人とコミュニケーションができ、真しな態度と思いやりの気持ちを持って人と向き合える学生 【入学者選抜の基本方針】 栄養学科では、高等学校で主体性をもって学習することにより、幅広い基礎学力と共に「化学」や「生物」などの自然科学の基礎をしっかり身に着けており、論理的な思考力、豊かな人間性、多様な人々と協働して学ぶ態度、コミュニケーション能力、倫理観などの素養を磨いている学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。 ・一般入試（前期日程、後期日程） 前期日程では、大学入試センター試験では５教科７科目又は５教科８科目および個別学力検査では理科１科目（化学基礎・化学又は生物基礎・生物）を、後期日程では、大学入試センター試験では５教科７科目又は５教科８科目を課し、高等学校で得た基礎的な知識や技能、思考力、判断力、表現力等を総合評価します。 ・推薦入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、出願書類を参考にし、口頭試問（化学基礎又は生物基礎）も実施し、基礎的な知識に加えて表現力、判断力、学習意欲や多様な人々と協働して学ぶ態度等を総合評価します。 ・帰国生入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格とすることがあります。 ・私費外国人留学生特別入試 日本留学試験およびTOEFLにより語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。 ・編入学試験 学力検査では、英語および総合問題の記述試験を行い、大学初等教育ならびに専門教育で必要な基礎知識や技能、思考力、判断力、表現力などを評価します。面接では、調査書などの書類を参考にし、表現力、判断力、学習意欲や多様な人々と協働して学ぶ態度などを評価します。

2－(3)　保健福祉学科

ＤＰ (学位授与の方針)	保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性を兼ね備え、福祉的視点と方法に基づいて、子ども、障害者、高齢者等すべての人々の自立と自己実現を支援し、健康と幸福の増進に寄与することのできる人材を育成することを目指しています。社会福祉学専攻では、特に社会における多様な福祉課題に対処する問題解決能力と共感力をもった人材を、また子ども学専攻では、教育的視点と方法を併せ持った、子どもの育ちと学びに関わる人材を育成することを目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 ＜社会福祉学専攻＞ 【教養】 豊かな教養を身に付けている。 【倫理観】 人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力および高い倫理観を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 多様な文化や価値観を受け容れ、グローバルに活躍できる企画提案力、情報発信力を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 社会福祉学と健康科学の知識・理論を身に付けている。 【専門性２】 ソーシャルワークの方法および実践的な相談援助技術を身に付けるとともに、多職種と連携できる力を身に付けている。 【専門性３】 ケアワークの方法および実践的な生活支援技術を身に付けるとともに、多職種と連携できるマネジメント力、実践力を身に付けている。 【課題発見・解決力】【生涯学習力】 自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる知識や技能を将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。 ＜子ども学専攻＞ 【教養】 豊かな教養を身に付けている。 【倫理観】 人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力および高い倫理観を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力・企画提案力】 多様な文化や価値観を受け容れ、グローバルに活躍できる企画提案力、情報発信力を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 教育学と発達科学の知識・理論を身に付けている。

	【専門性２】 子どもに対して実践的な保育および教育の指導や支援ができる力を身に付けている。 【専門性３】 子どもの育ちと学びを家庭や地域との関係の中で捉える力を身に付けている。 【課題発見・解決力】【生涯学習力】 自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる知識や技能を将来にわたって自ら積み上げていく力を身に付けている。
ＣＰ (教育課程の編成･実施の方針)	保健福祉学科は、社会福祉学専攻と子ども学専攻の２専攻を設置しています。学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、２専攻は次のような教育課程を編成しています。 ＜社会福祉学専攻＞ 【導入教育】 １年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養】 １年次から２年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文社会科学要論」「自然科学要論」、専門分野共通の基礎として「健康科学要論」などを設けています。 【倫理観１】 共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理学」などの科目を設けています。 【倫理観２】 専門科目における「生活支援及び自立支援カテゴリー」科目をはじめとして、多くの科目において、倫理観を養い、人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。 【異文化理解・コミュニケーション力１】 「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 「海外研修（保健福祉学）」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」「地域福祉論」「地域組織論」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。 【専門性１】 １年次から２年次までに両専攻の「専門共通」科目を履修し、対象者の生活支援に関わる福祉的視点と方法を併せ持った「福祉」専門職の基礎となる知識を修得します。さらに「専門分野」科目として、「生活支援領域」及び「自立支援領域」の各カテゴリー科目の履修を開始し、社会福祉や介護福祉の基礎について履修します。 【専門性２】 ２年次から３年次には「専門分野」科目を主に履修し、対象者の生活支援に関わる福祉的視点と方法を併せ持った「福祉」の専門職として必要な専門領域の知識と技術を修得します。この履修を通じて、社会福祉学と健康科学の知

識・理論の修得、ソーシャルワークの方法および実践的な相談援助技術、ケアワークの方法および実践的な生活支援技術を身に付けます。さらに他の専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成する「チームガバナビリティ演習」を設けています。

【専門性３】

３年次から４年次には、専門分野各論の充実した履修とともに、「専門ゼミナール」で各自が学習テーマを設定し、既存研究のレビューや演習等を通して課題に取り組むほか「研究ゼミナール（卒業研究）」で既存研究を参考にしながら、適切な方法（調査、実験、観察、事例研究、文献研究）を用いて研究することにより、専門性を高めていきます。

【課題発見・解決力】　【生涯学習力】

４年間を通じて、１年次は「入門ゼミナール」、２年次は「基礎ゼミナール」、３年次は「専門ゼミナール」、４年次は「研究ゼミナール（卒業研究）」を履修します。この履修を通じて、自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる力を育成します。特に、研究ゼミナールでは、社会福祉学専攻４年間の学業の集大成として、教員のアドバイスを受けつつ、主に「福祉」に関するテーマを選び、卒業研究とします。

【資格取得】

共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には社会福祉士及び介護福祉士国家試験受験資格取得が可能となります。

＜子ども学専攻＞

【導入教育】

１年次に修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。

【教養】

１年次から２年次までの共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。基礎的知識の体系的理解を得るため「人文・社会科学要論」「自然科学要論」、専門分野共通の基礎として「健康科学要論」などを設けています。

【倫理観１】

共通教育において、高い倫理観を身に付けるため「生命倫理学」などの科目を設けています。

【倫理観２】

専門科目における「専門共通カテゴリー」科目において福祉の心について学ぶとともに、多くの保育及び幼児教育系科目において、倫理観を養い、人を支援する心を醸成し、豊かな感性を育みます。

【異文化理解・コミュニケーション力１】

「English Language Program」をはじめとする語学科目でコミュニケーション能力とグローバルな視点を身に付けます。

【異文化理解・コミュニケーション力２】

「海外研修（保健福祉学）」において異文化理解によるコミュニケーション力を修得します。

【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】

「岡山創生学」等の社会連携科目や「地域保健福祉演習」「地域福祉論」等を通じて地域課題を知り、それを解決に導くための理論と企画提案力を修得します。

【専門性１】

１年次から２年次までに両専攻の「専門共通」科目を履修し、子どもの育ちと学びに関わる保育・教育的視点と方法を併せ持った「保育・教育」専門職の

	基礎となる知識を修得します。 さらに「専門分野」科目の学びをスタートし、保育や幼児教育の基礎について履修します。 【専門性２】 ２年次から３年次には「専門分野」科目を主に履修します。子どもの育ちと学びに関わる保育・教育的視点と方法を併せ持った「保育・教育」の専門職として必要な専門領域の知識と技術を修得します。この履修を通じて、教育学と発達科学の知識・理論の修得、子どもに対して実践的な保育および教育の指導や支援ができる力、子どもの育ちと学びを家庭や地域との関係の中で捉える力を育成します。 【専門性３】 ３年次から４年次には、専門科目の充実した履修とともに、「専門ゼミナール」で各自が学習テーマを設定し、既存研究のレビューや演習等を通して課題に取り組むほか「研究ゼミナール（卒業研究）」で既存研究を参考にしながら、適切な方法（調査、実験、観察、事例研究、文献研究）を用いて研究することにより、専門性を高めていきます。 【課題発見・解決力】　【生涯学習力】 ４年間を通じて、１年次は「入門ゼミナール」、２年次は「基礎ゼミナール」、３年次は「専門ゼミナール」、４年次は「研究ゼミナール（卒業研究）」を履修します。この履修を通じて、自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、福祉や保育・教育の専門性を修得し、問題解決できる力を育成します。特に、研究ゼミナールでは、子ども学専攻４年間の学業の集大成として、教員のアドバイスを受けつつ、主に「保育・教育」に関するテーマを選び、卒業研究とします。 【資格取得】 共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には幼稚園教諭一種免許状及び保育士資格取得が可能となります。教職教育科目を履修することで保育・教育の意義や保育・教育実践に必要な知識と技術を身に付け、保育・幼児教育能力を育成します。 【教育力】　（幼稚園教諭及び保育士養成課程） 教職教育科目を履修することで保育・幼児教育の意義や教育実践に必要な知識と技術を身に付け、教育能力を育成します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	＜社会福祉学専攻＞ 【人材育成像及び求める学生像】 保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性に加えて、多様な社会的課題に対処できる共感力と問題解決能力を兼ね備えた、子ども、障がい者、高齢者等、すべての人々の健康と幸福の増進に寄与できる人材の育成を目指しています。 社会福祉学専攻では、対象者の生活支援に関わる福祉的視点と方法を併せ持った人材を育成することを目指します。 したがって、社会福祉学専攻において、求める学生像は次のとおりです。 ● 福祉領域における対象者の自立や成長を促す知識と専門的援助技術の修得に努める学生 ● 福祉的問題に対して科学的な思考力や分析力を養い、問題解決能力を高めようとする学生 ● 豊かな人間性を育み、福祉的支援を求める人々に対して、共感、共生しようとする学生 ● ２１世紀の福祉社会や地域社会に貢献する意欲のある学生 【入学者選抜の基本方針】 保健福祉学科では、高等学校で主体性をもって学習することにより、幅広い基礎学力と共に、豊かな感性、多様な人々と協働して学ぶことのできる態度、コミュニケーション能力、科学的思考力・分析力、表現力、問題解決能力などを有す

	る学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。 ・一般入試（前期日程、後期日程） 大学入試センター試験では３教科３科目又は３教科４科目で基礎学力を、また個別学力検査では小論文で自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、学習意欲、コミュニケーション能力、福祉専門職としての適性等を総合評価します。さらに、福祉活動に貢献する意欲を評価します。 ・推薦入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、社会福祉学に関連した知識、学習意欲、コミュニケーション能力、専門職としての適性を、評価するとともに、出願書類も参考にしながら、多様な人々と協働して学ぶ態度や福祉社会や地域社会に貢献する意欲等を総合評価します。 ・帰国生入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。 面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。 ・私費外国人留学生特別入試 日本留学試験およびTOEFLにより語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。 ＜子ども学専攻＞ 【人材育成像及び求める学生像】 保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性に加えて、多様な社会的課題に対処できる共感力と問題解決能力を兼ね備えた、子ども、障がい者、高齢者等、すべての人々の健康と幸福の増進に寄与できる人材の育成を目指しています。 子ども学専攻では、子どもの育ちと学びに関わる保育・教育的視点と方法を併せ持った人材を育成することを目指します。 したがって、子ども学専攻において、求める学生像は次のとおりです。 ● 子どもの発達と学びを育む知識と専門的技術の修得に努める学生 ● 保育・教育的問題に対して科学的な思考力や分析力を養い、問題解決能力を高めようとする学生 ● 豊かな人間性を育み、保育・教育的支援を求める人々に対して、共感、共生しようとする学生 ● ２１世紀の保育・教育に貢献する意欲のある学生 【入学者選抜の基本方針】 保健福祉学科では、高等学校で主体性をもって学習することにより、幅広い基礎学力と共に、豊かな感性、多様な人々と協働して学ぶことのできる態度、コミュニケーション能力、科学的思考力・分析力、表現力、問題解決能力などを有する学生を選抜するために、一般入試（前期日程、後期日程）および特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学選抜方式を採用することにより、多様な人材の受け入れを目指しています。

	・一般入試（前期日程、後期日程） 大学入試センター試験では３教科３科目又は３教科４科目で基礎学力を、また個別学力検査では小論文で自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、学習意欲、コミュニケーション能力、保育・教育専門職としての適性等を総合評価します。さらに、保育・教育活動に貢献する意欲を評価します。 ・推薦入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について論述させ、理解力、思考力、文章表現力等を総合評価します。面接では、個人面接を行い、子ども学に関連した知識、学習意欲、コミュニケーション能力、専門職としての適性を、評価するとともに、出願書類も参考にしながら、多様な人々と協働して学ぶ態度や福祉社会や地域社会に貢献する意欲等を総合評価します。 ・帰国生入試 小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。 面接では、日本語による個人面接を行い、適正、意欲、一般教科の基礎学力、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。 ・私費外国人留学生入試 日本留学試験およびTOEFLにより語学能力を含む基礎学力を評価します。小論文では、自然、社会、文化に関する課題について日本語で論述させ、日本語の理解力と文章表現力、思考力等を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、一般教科の基礎学力、思考能力、適正、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。ただし、面接の評価が著しく低い場合は、総得点にかかわらず不合格にすることがあります。

３　情報工学部

ＤＰ （学位授与の方針）	情報工学とは、情報の伝送・認識・処理・利用にかかわるハードウェアとソフトウェアの技術を研究開発するための学問です。情報工学部は、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を目指しています。 したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性２】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性３】 情報工学と関連工学分野の専門知識とそれらを複合的に応用できる能力を身に付けている。 【行動力・課題解決力】 知識を総合的に活用することにより、主体性と協調性を持って課題を発見し、技術者倫理を遵守して解決できる能力を身に付けている。 【生涯学習力】 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	情報工学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力１】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 技術英語、卒業研究をはじめとする実験・演習科目により、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成します。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。 【専門性１】

	数学、物理および工学の基礎に関する科目により、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。 【専門性２】 学部で定めた情報系基礎科目により、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。 【専門性３】 各学科のカリキュラム・ポリシーに準拠した独自の教育課程を用意し、各学科に応じた専門知識と応用力を養成します。 【行動力・課題解決力１】 実験・演習科目により、主体性と協調性を持って課題を工学的に解決する能力を涵養します。 【行動力・課題解決力２】 １年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。 【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより４年間で系統的に修得した情報工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 情報工学部は、情報通信工学科、情報システム工学科、人間情報工学科の３学科で構成されています。 情報工学とは、情報の伝送・認識・処理・利用にかかわるハードウェアとソフトウェアの技術を研究開発するための学問です。本学部は、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● 情報工学の新しい分野の発展に興味を抱いている学生 ● 人間を取り巻く環境によく適合する情報社会を形づくることに貢献する意欲を持つ学生 ● 新技術・知識の創出に関心を持ち、地域と世界に向けて情報発信したいと考える学生 急速に発展している高度情報化社会を支えるインターネット・コミュニケーション技術を用いて、現状の社会を改革し発展させていく夢を持った学生の挑戦を期待しています。

3－(1)　情報通信工学科

ＤＰ (学位授与の方針)	情報通信工学科は、日々進歩し続ける情報通信技術（ICT）を支えている情報工学、通信工学、電子工学の３つの学問領域を共通の基盤として、各種情報システムの知能化等に必要となるソフトウェア技術及びシステムの超高速化等に欠かせないハードウェア技術を有し、情報通信技術（ICT）の利用者視点を理解するとともに、グローバルな視野に立って社会に貢献できる人材の育成を目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点から多面的に物事を捉え先導できる能力を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性２】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性３】 情報工学の知識を基盤として、情報通信技術（ICT）の根幹をなす通信工学・電子工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている。 【行動力・課題解決力】 得られた知識を融合的に活用し、主体性と協調性を持って課題を発見、分析、解決できる能力と、技術者に求められる高い倫理観を身に付けている。 【生涯学習力】 情報通信技術（ICT）の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。
ＣＰ (教育課程の編成・実施の方針)	情報通信工学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力１】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 「技術英語」、「卒業研究」をはじめとする実験・演習科目により、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、技術文書作成能力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成するとともに、グローバルな視点から多面的に物事を捉え先導できる能力を養成します。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目により、地域が果たす役割を考え、地域の

ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。 【専門性１】 カテゴリー「学科共通」の授業科目により、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。 【専門性２】 カテゴリー「情報工学基礎」の授業科目により、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。 【専門性３】 「情報処理工学」、「情報通信工学」、「情報電子工学」の各カテゴリーをバランスよく修得することにより、それぞれの分野に関する幅広い知識と応用力を養成し、さらにそれらを活用して総合的に課題解決に当たる応用力を養成します。 【行動力・課題解決力１】 ３年次までの実験・演習科目を通して情報通信技術（ICT）に関して獲得した専門知識を、主体性と協調性をもって活用し、課題を解決に導くための方法を培います。 【行動力・課題解決力２】 １年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。 【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより４年間で系統的に修得した情報工学、通信工学、電子工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な情報通信技術（ICT）を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 情報通信工学科は、日々進歩し続ける情報通信技術(ICT)を支えている情報工学、通信工学、電子工学の３つの学問領域を共通の基盤として、各種情報システムの知能化等に必要となるソフトウェア技術及びシステムの超高速化等に欠かせないハードウェア技術を有し、情報通信技術(ICT)の利用者視点を理解するとともに、グローバルな視野に立って社会に貢献できる人材の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● インターネットを中心とする情報通信技術を学びたい学生 ● コンピュータやネットワークを構成する電子機器やその特性を学びたい学生 ● 情報技術を利用した新しいソフトウェアの創造に興味のある学生 ● 未来の情報通信技術に対する夢や希望を持っている学生 【入学者選抜の基本方針】 情報通信工学科では、一般入試（前期日程、中期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。 本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で標準的な科目を履修し、特に以下の学力を身に付けていることが望まれます。 １ 情報工学部入学者選抜試験《一般入試》個別学力検査「数学」で指定された範囲の基礎知識を有していること。 ２ 「物理」に関する基礎知識を有していること。

	各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。 ・一般入試（前期日程、中期日程） 基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（4 教科 6 科目）を課すとともに、個別学力検査（数学）では、記述式により解答させ、基礎知識、計算力、論理的な思考力、アイデア及び明快かつ正確な表現力等を総合評価します。中期日程では、個別学力検査に比重を置き、数理的思考力、論理的表現力等を重視します。 ・推薦入試 書類（調査書及び推薦書）の審査及び個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理、英語）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・帰国生入試 書類の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・私費外国人留学生入試 書類(日本留学試験及び TOEFL(iBT))の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。

3-(2)　情報システム工学科

ＤＰ （学位授与の方針）	情報システム工学科は、コンピュータの発展に貢献できる情報工学、力学に基礎を置くものづくりのための機械工学、人間と機械やコンピュータを結びつけるインタフェース工学などの学問を身に付け、領域横断型のエンジニアとしてのセンスを持って、新たな工学的価値の創出に積極的に参加できる人材の育成を目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性２】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性３－１】 情報工学の知識を基盤として、機械工学、インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている。 【専門性３－２】 コンピュータや機械をインテリジェント化した機器や実用的なソフトウェアシステム、組込みシステム、機械システムを設計する基礎能力を身に付けている。 【行動力・課題解決力】 得られた知識を融合的に活用し、主体性と協調性を持って課題を発見し解決できる能力と、技術者に求められる高い倫理観を身に付けている。 【生涯学習力】 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	情報システム工学科では、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力１】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 「技術英語演習」、「システム創造プロジェクト」、「卒業研究」により、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成します。

ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。 【専門性１】 カテゴリー「工学基礎」の授業科目により、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。 【専門性２】 カテゴリー「情報工学基礎」の授業科目により、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。 【専門性３－１】 「ソフトウェアシステム」、「機械システム」、「知的インタフェース」のカテゴリーを設け、情報工学、機械工学、インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力、そして機器設計の基礎能力を養成します。 【専門性３－２】 カテゴリー「総合・創造」の科目をはじめ実験・演習科目により講義で学んだ幅広い知識を総合し設計等に応用する能力を養成します。自律型移動ロボットの設計・製作を学ぶ「システム創造プロジェクト」、CAD・CAE を利用した機械設計を学ぶ「機械デザイン演習」、CPU の設計を学ぶ「回路デザイン演習」、人工知能のプログラミングを学ぶ「知能プログラミング演習」等の授業科目を設けています。 【行動力・課題解決力１】 実験・演習科目により、主体性と協調性を持って課題を工学的に解決する能力を涵養します。 【行動力・課題解決力２】 １年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。 【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより 4 年間で系統的に修得した情報システム工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 情報システム工学科は、コンピュータの発展に貢献できる情報工学、力学に基礎を置くものづくりのための機械工学、人間と機械やコンピュータを結び付けるインタフェース工学などの学問を身に付け、領域横断型のエンジニアとしてのセンスを持って、新たな工学的価値の創出に積極的に参加できる人材の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● 情報技術を積極的に活用したものづくりに興味のある学生 ● 情報工学・機械工学・インタフェース工学を幅広く学びたい学生 ● 人間の生活や社会活動を支援するため、インテリジェント型機器やシステムの設計能力を獲得したい学生 ● 情報工学と他の様々な専門領域を結ぶ領域横断型の新技術を創出したい学生

	【入学者選抜の基本方針】 情報システム工学科では、一般入試（前期日程、中期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。 本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で標準的な科目を履修し、特に以下の学力を身に付けていることが望まれます。 １　情報工学部入学者選抜試験《一般入試》個別学力検査「数学」で指定された範囲の基礎知識を有していること。 ２　「物理」に関する基礎知識を有していること。 各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。 ・一般入試（前期日程、中期日程） 基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（4 教科 6 科目）を課すとともに、個別学力検査（数学）では、記述式により解答させ、基礎知識、計算力、論理的な思考力、アイデア及び明快かつ正確な表現力等を総合評価します。中期日程では、個別学力検査に比重を置き、数理的思考力、論理的表現力等を重視します。 ･推薦入試 書類（調査書及び推薦書）の審査及び個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理、英語）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・帰国生入試 書類の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・私費外国人留学生入試 書類(日本留学試験及び TOEFL(iBT))の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。

3－(3)　人間情報工学科

ＤＰ （学位授与の方針）	人間情報工学科の教育研究のキーワードは「人間中心の設計思想」です。身体とその「うごき」を扱う人間系のサイエンス並びに情報・コミュニケーションと密接に関連する情報系のエンジニアリングを融合的に学び、使う人の様々な特性やニーズの視点に立った「もの」や「サービス」の設計能力を身に付けた人材の育成を目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養・多面的思考力】 幅広く豊かな教養と多面的な思考力を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力】 論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 数学、自然科学に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性２】 情報工学の基礎分野に関する知識とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性３－１】 情報工学の基礎を基盤として、人間工学および機器設計工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている。 【専門性３－２】 人体機能と環境変動の特性や人間の動作・行動の解析結果を活かしたシステムおよび人間の感性や生活環境に適合したソフトウェアを設計する基礎能力を身に付けている。 【行動力・課題解決力】 得られた知識を融合的に活用し、主体性と協調性を持って課題を発見し解決できる能力と、技術者に求められる高い倫理観を身に付けている。 【生涯学習力】 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付けている。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	人間情報工学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目を配置し、大学での学びについての理解を深めます。 【教養・多面的思考力】 自然科学だけでなく人文・社会科学、健康科学、社会連携に関する幅広い共通教育科目を配置し、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力１】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養成します。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 「卒業研究」をはじめとする実験・演習科目を配置することで、論理的思考に基づいた、日本語による記述力、口頭発表力、討議能力、企画提案力、技術英文の読解能力を養成します。

ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、地域と協働する能力を養います。 【専門性１】 「数学系」のカテゴリーを設け、数学、物理および工学の基礎に関する科目を配置することで、自然界の法則や工学技術者としての基礎知識を身につけ、工学上の問題解決に活用する基礎能力を養成します。 【専門性２】 「情報系」のカテゴリーを設け、情報工学基礎の授業科目を配置することで、情報工学の基礎となる知識と応用力を養成します。 【専門性３－１】 カテゴリー「情報系」に情報工学の応用および電気・電子工学の基礎に関する授業科目を配置するとともに、「生体機能系」及び「機器設計系」のカテゴリーを設け、これらに関する基礎から応用までの授業科目を配置することで、情報工学、人間工学および機器設計工学に関する幅広い知識と応用力を養成します。 【専門性３－２】 「実験・演習」のカテゴリーを設け、基本から応用に至るスキルを修得する授業科目を配置するとともに、分野横断的な実験と考察を必要とする授業科目を配置することで、人間の生活環境の変化に適合したシステムの設計基礎能力を養成します. 【行動力・課題解決力１】 実験・演習科目の配置により、主体性と協調性を持って課題を工学的に解決する能力を涵養します。 【行動力・課題解決力２】 １年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、発見した技術課題を解決に導くため、技術者倫理を遵守した計画立案・遂行能力を養います。 【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより４年間で系統的に修得した人間情報工学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する先端的な技術を自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力を育成します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 人間情報工学科の教育研究のキーワードは「人間中心の設計思想」です。身体とその「うごき」を扱う人間系のサイエンス並びに情報・コミュニケーションと密接に関連する情報系のエンジニアリングを融合的に学び、使う人の様々な特性やニーズの視点に立った「もの」や「サービス」の設計能力を身に付けた人材の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● 人体機能の巧みさを工学の視点から解明したい学生 ● 人体機能と人間環境の調和を考慮した「もの」や「サービス」を開発したい学生 ● 情報工学の視点で地域社会の発展や国際社会との連携協力に参加し、貢献したい学生 【入学者選抜の基本方針】 人間情報工学科では、一般入試（前期日程、中期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。 本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で標準的な科目を履修し、特に

ＡＰ （入学者受入の方針）	以下の学力を身に付けていることが望まれます。 １　情報工学部入学者選抜試験《一般入試》個別学力検査「数学」で指定された範囲の基礎知識を有していること。 ２　「物理」に関する基礎知識を有していること。 各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。 ・一般入試（前期日程、中期日程） 基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（4 教科 6 科目）を課すとともに、個別学力検査（数学）では、記述式により解答させ、基礎知識、計算力、論理的な思考力、アイデア及び明快かつ正確な表現力等を総合評価します。中期日程では、個別学力検査に比重を置き、数理的思考力、論理的表現力等を重視します。 ・推薦入試 書類（調査書及び推薦書）の審査及び個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理、英語）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・帰国生入試 書類の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。 ・私費外国人留学生入試 書類(日本留学試験及び TOEFL(iBT))の審査及び日本語による個人面接を行い、一般教科（特に数学、物理）の基礎学力、思考能力、適性、意欲、コミュニケーション能力等を総合評価します。

4　デザイン学部

ＤＰ （学位授与の方針）	デザイン学部では、本学の理念に沿う実学の体現者として、豊かな教養と深い専門性を備え、新しい時代を切り拓く人材の育成を通じて、グローバルな視点で地域や社会の学術文化の進展及び産業の振興に貢献できる人材の育成を目指しています。 したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養・多面的思考力】 人間性を尊ぶ姿勢を学び、社会人としての基礎的教養を身につけ、幅広い視点の獲得により多面的に思考できる。 【倫理観】 デザイナーに求められる高い倫理観を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力】 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 デザイン基礎に関する知識・技能とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性２】 領域デザインに求められる知識・技能を有し、それらを柔軟に活用することができる。 【専門性３】 領域デザインに求められる知識・技能を有し、かつ実社会で自律的に活用するため、学術文化や産業の振興を念頭に、社会の課題に取り組む研究能力や実務能力を有している。 【行動力・課題解決力】 持続的な発展・開発、少子高齢化への対策などの社会の要請に対し、デザインによる新たな視点を活かし、実効性を伴う問題提起ならびに問題解決策の提案ができる。 【生涯学習力】 地域の文化や技術の持続的発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付け、自律的に活動できる。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	デザイン学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。 【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養・多面的思考力】 自然科学、人文・社会科学、健康科学及び社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。また美術の歴史について、デザイン分野の基礎として学びます。さらに社会連携に関する共通教育科目では、地域社会との協働意識を養います。 【倫理観】 フレッシュマンセミナーを通じて、現場のデザイナーによる講義に触れることで、職業人としての良識及び倫理観を培います。また、専門教育において知的財産権などの講義により、デザイナーに求められる規範意識を養います。 【異文化理解・コミュニケーション力 1】

ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養います。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 専門教育における各演習科目のプレゼンテーションや国際交流、卒業研究の発表会を通じて、日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力を養います。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、専門的知識を活用して、地域と協働する能力を養います。 【専門性１】 １年次は、「学部基礎教育科目」や「学科専門教育科目」でデザイン史や色彩学などのデザイン理論やデザイン基礎演習を幅広く学び、デザイン基礎に関する知識・技能を養います。 【専門性２】 ２年次からは両学科とも領域に分かれて、新たな文化価値を創造するために必要な学科専門教育科目及び講義と演習が体系化された領域専門教育科目を履修します。学科専門教育科目では、各自の志向に基づき、自主的に選択できる演習科目を中心として編成しています。企画提案力に必要な発想から情報分析、課題解決までのプロセスを身に付けるために、領域専門教育科目は複数の専門領域が用意されており、横断的に学ぶことができるよう編成しています。 【専門性３】 自ら発見した課題解決のために、１年間を通じて卒業研究を履修します。 【行動力・課題解決力】 演習や正課外において、各種コンペ、地域ならびに国際交流の機会を活かし、作品発表やワークショップにチャレンジするとともに、学外者から与えられた課題や自ら発見した課題に取り組み、課題解決力を養います。 【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより４年間で系統的に修得したデザイン学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する技術やデザインの価値を見極め、自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力・態度を養います。
ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 デザイン学部は、情報化、グローバル化など刻々と変化する社会の動向を的確に把握することにより、自ら課題を発見し、豊かな生活文化の形成に必要な専門力とマネジメント能力を活かして、デザインによる解決を実行し、広く社会に貢献できる人材の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● デザイナーあるいは関連の職種につく明確な意志をもち、そのための努力を惜しまず、挑戦し続けることのできる学生 ● 様々な科学を学ぶことによって、人間・自然・社会の関係性を主体的に分析・考察し、課題に取り組む力を身に付け、デザインによる解決にいかしたい学生 ● 自ら発見した課題をデザインによって表現し、解決するために、知性と感性の融合によるデザイン発想力・技術力・表現力を身に付けたい学生 ● 社会における課題を洞察し、新たな生活・文化の価値を創造するため、デザインによる解決策を考案し企画提案する力を身に付けたい学生 ● 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けたい学生

4－(1)　デザイン工学科

ＤＰ （学位授与の方針）	デザイン工学科では、共通教育に加えて、製品・情報デザイン領域あるいは建築・都市デザイン領域での専門教育により、これらの関係性を知識・技能の修得を通じて学ぶことで、地域社会・国際社会の持続的発展のために、その能力を長きにわたって発揮できる、デザイナー・建築家等の実務担当者の育成を目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養・多面的思考力】 人間性を尊ぶ姿勢を学び、社会人としての基礎的教養を身につけ、幅広い視点の獲得により多面的に思考できる。 【倫理観】 デザイナーに求められる高い倫理観を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力】 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、製品や作品提案等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 デザイン基礎に関する知識・技能とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性２】 製品・情報デザイン領域及び建築・都市デザイン領域に求められる知識・技能を有し、それらを柔軟に活用することができる。 【専門性３】 製品・情報デザイン領域及び建築・都市デザイン領域に求められる知識・技能を活用し、学術文化や産業の振興を念頭に、社会の課題に取り組む研究能力や実務能力を有している。 【行動力・課題解決力】 持続的な発展・開発、少子高齢化への対策などの社会の要請に対し、デザインによる新たな視点やイノベーション対応能力を活かし、実効性を伴う問題提起ならびに問題解決策の提案ができる。 【生涯学習力】 地域の文化や技術の持続的発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付け、自律的に活動できる。
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	デザイン工学科では、入学者受入方針に沿い、かつ学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような専門教育課程を編成しています。 【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養・多面的思考力】 自然科学、人文・社会科学、健康科学及び社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。また、統計学の基礎について、数的データ処理の基礎として学びます。さらに社会連携に関する共通教育科目では、地域社会との協働意識を養います。 【倫理観】 フレッシュマンセミナーを通じて、現場のデザイナーによる講義に触れることで、職業人としての良識及び倫理観を培います。また、専門教育において知的財産権などの講義により、デザイナーに求められる規範意識を養います。

ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	【異文化理解・コミュニケーション力１】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養います。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 専門教育における各演習科目のプレゼンテーションや、海外協定校とのワークショップ及び卒業研究の発表会を通じて、日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力を養います。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、専門的知識を活用して、地域と協働する能力を養います。 【専門性１】 １年次は、「学部基礎教育科目」や「学科専門教育科目」でデザイン史や色彩学などのデザイン理論やデザイン基礎演習を幅広く学び、デザイン基礎に関する知識・技能を養います。なお、デザイン工学科生に求められる、立体や空間表現力の基礎として、モデリングやデザイン・ドローイングを学びます。 【専門性２】 ２年次より「領域専門教育科目」が加わり、学生は「製品・情報デザイン領域」あるいは「建築・都市デザイン領域」何れかの専門科目を新たに履修します。これにより、各領域の学びを深化させ、デザイン基礎技能、発想力、問題発見力、問題解決力としての企画・提案力等の獲得を目指します。 ・製品・情報デザイン領域では、プロダクトデザインや、エクスペリエンスデザイン、情報デザインの講義・演習の横断的に選択出来るよう科目を編制し、招来のキャリアプランへの判断が早期かつ柔軟にできるようにしています。 ・建築・都市デザイン領域では、卒業時に国家資格である一級・二級建築士、木造建築士の受験資格を得るのに必要な国土交通省指定の科目を準備し（ただし受験資格によっては実務経験も要求される）、設計製図・建築計画・環境工学・建築設備・構造力学から法規や都市計画まで幅広く学習します。 ３年次以降は、企業や官公庁でのインターンシップやデザイン実習を通じて、実社会での業務経験の機会を得るように努める一方で、卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、職業としてのデザインの実際に接することに努めます。また各領域においては、ポートフォリオの作成をうながし、進路に応じたアドバイスを受けます。 【専門性３】 ４年次では、各領域で学んだ専門知識と技能を活かし、自ら発見した課題解決のために１年間を費やし「卒業研究」を履修します。卒業研究では、学科全教員の参加する中間・最終の２度の発表とその際の指導を経て、卒業作品ならびに卒業論文もしくは卒業研究ノートを作成します。作品は展覧会形式にて学外で発表され、自己の研究成果を社会に発信し、評価を得る機会としています。 【行動力・課題解決力】 演習や正課外において、各種コンペ、地域ならびに国際交流の機会を活かし、作品発表やワークショップにチャレンジするとともに、学外者から与えられた課題や自ら発見した課題に取り組み、課題解決力を養います。 【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより４年間で系統的に修得したデザイン学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する技術やデザインの価値を見極め、自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力・態度を養います。また「インターンシップ」や卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、継続的な研鑽の必要性を学びます。

ＡＰ （入学者受入の方針）	【人材育成像及び求める学生像】 デザイン工学科は、工業製品のデザイン、情報デザイン、建築設計あるいは都市計画などの領域において、地域社会・国際社会を問わず、その知識・技能を遺憾なく発揮できるデザイナー・建築家の育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● 自己の将来像、職業人像をプロダクトデザイナー、情報デザイナーあるいは関連の職種に求め、そのための自己研鑽により、自己実現に向けて挑戦し続けることのできる学生 ● 自己の将来像、職業人像を建築家あるいは関連の職種に求め、そのための自己研鑽により、自己実現に向け挑戦し続けることのできる学生 ● 諸科学の知識や技能の学びを通じて、知性と感性を融合させ、デザイン工学諸分野に必要なデザイン発想力やコンピュータ等による製品、情報、空間等の造形技術力ならびに表現力を身に付けたい学生 ● 社会における課題を洞察し、新たな生活・文化の価値を創造するため、製品デザイン、情報デザイン、建築デザイン等による解決策を考案し、企画提案力及び企画展開のマネジメント力を身に付けたい学生 ● 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション能力、ならびに外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付け、多様な人々との協働により地域や国際社会に貢献したいと考える学生 【入学者選抜の基本方針】 デザイン工学科では、一般入試（前期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。 各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。 ・一般入試（前期日程） 大学入試センター試験および、個別学力検査として実技試験（鉛筆デッサン）を課します。 大学入試センター試験では、「外国語」を必須とし、その他の科目から 2 又は 3（理科の「基礎を付した科目」から 2 及び理科以外の教科の科目から 1）科目を課すとともに、実技試験では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。 ・推薦入試 実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 実技では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、個人面接を行い、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、出願書類を参考に、高等学校あるいは中等学校で得た基礎学力、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。 ・ 帰国生入試 書類審査、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、日本の高等学校で修得される程度の基礎学力について評価します。 実技では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。 ・私費外国人留学生入試 出願時に書類審査を行い、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。

ＡＰ （入学者受入の方針）	書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、日本語および基礎学力を日本留学試験成績および TOEFL あるいは TOEFL iBT の得点により評価します。 実技試験では、デザイン工学分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、出願書類を参考に、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。

4－(2)　造形デザイン学科

ＤＰ (学位授与の方針)	造形デザイン学科では、共通教育に加えて、ビジュアルデザイン領域あるいは造形デザイン領域における専門教育により、これらの関係性を知識・技能の修得を通じて学ぶことで、地域社会・国際社会の持続的発展のために、その能力を長きにわたって発揮できる、デザイナー・造形スペシャリスト等の実務担当者の育成を目指しています。 したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。 【教養・多面的思考力】 人間性を尊ぶ姿勢を学び、社会人としての基礎的教養を身につけ、幅広い視点の獲得により多面的に思考できる。 【倫理観】 デザイナーに求められる高い倫理観を身に付けている。 【異文化理解・コミュニケーション力】 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品提案等を通じたコミュニケーション力、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 地域におけるコミュニケーション力と専門性を生かした企画提案力を身に付けている。 【専門性１】 デザイン基礎に関する知識・技能とそれらを応用できる能力を身に付けている。 【専門性２】 ビジュアルデザイン領域及び造形デザイン領域に求められる知識・技能を有し、それらを柔軟に活用することができる。 【専門性３】 ビジュアルデザイン領域及び造形デザイン領域に求められる知識・技能を活用し、学術文化や産業の振興を念頭に、社会の課題に取り組む研究能力や実務能力を有している。 【行動力・課題解決力】 持続的な発展・開発、少子高齢化への対策などの社会の要請に対し、デザインによる新たな視点や文化的価値の創造力を活かし、実効性を伴う問題提起ならびに問題解決策の提案ができる。 【生涯学習力】 地域の文化や技術の持続的発展と裾野の広がりに関心をもち、新しい知識や価値観を継続的に学修、吸収する態度を身に付け、自律的に活動できる。
ＣＰ (教育課程の編成・実施の方針)	造形デザイン学科では、入学者受入方針に沿い、かつ学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような専門教育課程を編成しています。 【導入教育】 修学基礎に関する共通教育科目により、大学での学びについての理解を深めます。 【教養・多面的思考力】 自然科学、人文・社会科学、健康科学及び社会連携に関する幅広い共通教育科目により、多面的な視点と社会的な良識を持って考える能力を養成します。また、日本語の文章作法について、ストーリーづくりの基礎として学びます。さらに社会連携に関する共通教育科目では、地域社会との協働意識を養います。 【倫理観】 フレッシュマンセミナーを通じて、現場のデザイナーによる講義に触れるこ

ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	とで、職業人としての良識及び倫理観を培います。また、専門教育において知的財産権などの講義により、デザイナーに求められる規範意識を養います。 【異文化理解・コミュニケーション力１】 語学国際に関する共通教育科目により、外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を養います。 【異文化理解・コミュニケーション力２】 専門教育における各演習科目のプレゼンテーションや海外協定校とのワークショップ及び卒業研究の発表会を通じて、日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション力を養います。 【地域でのコミュニケーション力・企画提案力】 「岡山創生学」等の社会連携科目や専門科目により、地域が果たす役割を考え、地域の課題を発見し、その解決に向けた方策を自ら考え、専門的知識を活用して、地域と協働する能力を養います。 【専門性１】 １年次は、「学部基礎教育科目」や「学科専門教育科目」でデザイン史や色彩学などのデザイン理論やデザイン基礎演習を幅広く学び、デザイン基礎に関する知識・技能を養います。なお、造形デザイン学科生に求められる、造形力・構成力・コミュニケーション力の基礎として、平面構成、立体構成、空間造形ならびにメディアコミュニケーションについて学びます。 【専門性２】 ２年次より「領域専門教育科目」が加わり、学生は「ビジュアルデザイン領域」あるいは「造形デザイン領域」何れかの専門科目を新たに履修します。これにより、各領域の学びを深化させ、デザイン基礎技能、発想力、問題発見力、問題解決力としての企画・提案力等の獲得を目指します。 ・ビジュアルデザイン領域では、グラフィック・写真・映像・CG・Web など様々な分野を組み合わせ社会のニーズを意識しながらビジュアルデザインを学修すると共に、デザインビジネス展開のための企画提案を行います。 ・造形デザイン領域では、木工・陶磁・染織・印刷などの伝統文化に新しい発想を組み入れ、芸術性の高い造形の可能性を探ってゆくと共に、立体・空間・メディア等の特性を活かし生活文化に貢献できる企画提案を行います。 ３年次以降は、領域専門科目の履修を中心に、より深くデザイン専門知識や技能を修得していきます。また、デザイン事務所や企業等での実務経験の機会となる「インターンシップ」や卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、キャリア形成に対する意識を高め卒業後の進路を明確化させ、実社会に通用する力を養ってゆきます。また各領域においては、ポートフォリオの作成をうながし、進路に応じたアドバイスを受けます。 【専門性３】 ４年次では、各領域で学んだ専門知識と技能を活かし、自ら発見した課題解決のために１年間を費やし「卒業研究」を履修します。卒業研究では、学科全教員の参加する中間・最終の２度の発表と指導を経て、卒業作品ならびに卒業研究ノートを作成します。作品は展覧会形式にて学外で発表され、自己の研究成果を社会に発信し、評価を得る機会としています。 【行動力・課題解決力】 演習や正課外において、各種コンペ、地域ならびに国際交流の機会を活かし、作品発表やワークショップにチャレンジするとともに、学外者から与えられた課題や自ら発見した課題に取り組み、課題解決力を養います。 【生涯学習力】 体系的なカリキュラムにより４年間で系統的に修得したデザイン学に関する広範囲な分野の専門的知識を基礎として、常に進展する技術やデザインの価値を見極め、自主的・継続的に学習し、自身の活動に活かすことができる能力・

	態度を養います。また「インターンシップ」や卒業生および社会で活躍するデザイン専門家を招聘した特別講義等により、継続的な研鑽の必要性を学びます。
ＡＰ (入学者受入の方針)	【人材育成像及び求める学生像】 造形デザイン学科は、デザインによって地域特性を考慮した問題及びグローバルな視点で課題解決に取組み、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し、社会に貢献できるデザイナー及び造形のスペシャリストの育成を目指しています。 したがって、求める学生像は次のとおりです。 ● 自己の将来像、職業人像をビジュアルデザイナー、造形デザイナーあるいは関連の職種に求め、そのための自己研鑽により、自己実現に向けて挑戦し続けることのできる学生 ● 豊かな人間性と美を見極める感性、柔軟で論理的な思考力及び社会に企画提案できるデザインマネジメント力を身に付けたいと考える学生 ● 諸科学の知識や技能の学びを通じて、知性と感性を融合させ、造形デザイン諸分野に必要なデザイン発想力や平面、映像、立体、空間等の造形技術力ならびに表現力を身に付けたい学生 ● 社会における課題を洞察し、ビジュアルコミュニケーションデザインを解決策として考案し、企画提案力及び企画展開のマネジメント力を身に付けたい学生、または、アートとクラフトの融合分野において解決策を考案し、企画提案力及び企画展開のマネジメント力を身に付け、生活文化の価値を創造したいと考える学生 ● 日本語による記述力、口頭発表力、企画提案力、作品等を通じたコミュニケーション能力、ならびに外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付け、多様な人々との協働により地域や国際社会に貢献したいと考える学生 【入学者選抜の基本方針】 造形デザイン学科では、一般入試（前期日程）、特別入試（推薦入試など）を実施し、複数の入学者選抜方式によって多様な人材を受け入れることを目指しています。 各入学者選抜方式の概要は以下の通りです。 ・一般入試（前期日程） 大学入試センター試験および、個別学力検査として実技試験（鉛筆デッサン）を課します。 大学入試センター試験では、「外国語」「国語」等の基礎学力の把握のため、大学入試センター試験（３科目３教科）を課すとともに、実技試験では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。 ・推薦入試 実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 実技試験では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、個人面接を行い、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、出願書類を参考に、高等学校あるいは中等学校で得た基礎学力、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。 ・ 帰国生入試 書類審査、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。 書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、日本の高等学校で修得される程度の基礎学力について評価します。 実技では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。

ＡＰ （入学者受入の方針）	・私費外国人留学生入試 　出願時に書類審査を行い、実技試験（鉛筆デッサン）及び面接（書類を含む）を実施します。書類審査では、自然科学や社会科学、歴史などの幅広い学問に主体的に取り組めるよう、日本語および基礎学力を日本留学試験成績および TOEFL あるいは TOEFL iBT の得点により評価します。 実技試験では、造形デザイン分野に必要な、観察力、構成力、描写力を総合評価します。面接では、日本語による個人面接を行い、出願書類を参考に、志望動機、学習意欲、デザインに対する適性、コミュニケーション能力等を、総合評価します。

Ｂ　大学院ディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，アドミッション・ポリシー

※　表における表記は次のとおり．
ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）：ＤＰ
カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）：ＣＰ
アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）：ＡＰ

１　保健福祉学研究科

ＤＰ (学位授与の方針)	保健福祉学研究科は，保健・医療・福祉分野における問題点を提起してそれを解決し得る研究能力を持つとともに，専門職としての高度な知識・技術を身に付けることにより，健康で夢の持てる地域社会の実現に貢献し得る人材の育成を目指しています． したがって，本研究科では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● 保健・医療・福祉分野における問題点を発見し，それを理論的に解決できる研究能力を身に付けている． ● 高度な知識と技術を備え，豊かな地域社会の実現に向けて指導者，実践者として活躍できる能力を身に付けている． ● グローバルな視野を持った専門職として国際貢献できる能力を身に付けている．
ＣＰ (教育課程の編成･実施の方針)	保健福祉学研究科は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　広い視野に立って精深な学識を授け，専攻分野における研究能力とグローバルな視野並びに高度の専門性を要する職業等に必要な能力を養うための博士前期課程と，専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い，又はその他高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識並びにグローバルな視野を養うことを目的とした博士後期課程（保健福祉科学専攻）を置いています． ２　博士前期課程は，看護学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い，看護技術やケアシステムに関連した諸問題を解決できる人材を育成する看護学専攻，栄養学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い，食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる人材を育成する栄養学専攻及び保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い，保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる人材を養成する保健福祉学専攻の３専攻を置いています． ３　博士後期課程は保健福祉科学専攻からなり，看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と，より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うための３大講座を置いています． ４　カリキュラムは，それぞれの専攻のカリキュラム・ポリシーに従って，講義・演習科目と特別研究から編成しています．
ＡＰ (入学者受入の方針)	保健福祉学研究科が求める学生像は次のとおりです． ● 保健・医療・福祉分野における基本的な問題から応用的な問題を解決し得る国際的な研究者を目指す学生 ● 豊かな地域社会の実現に向け，官・民・産を問わず教育，研究機関で活躍する教育者，研究者を目指す学生 ● 高度の知識・技術を身に付けた専門職として，社会において指導的な実践者を目指す学生

1－(1)　看護学専攻（博士前期課程）

ＤＰ (学位授与の方針)	看護学専攻は，学際的で高い看護の専門的知識と基礎的な研究能力を活かして，保健医療福祉分野における課題を解決し，国内外の看護における実践・教育・研究の場で社会のニーズに応え，貢献できる人材の育成を目指しています. したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します. ● ヒューマン・ケアリングと科学的根拠に基づく看護実践力を身に付けている. ● 看護における現象を科学的根拠に基づいて説明し，課題を提起する能力を身に付けている. ● 国際的・研究的視点を持ち看護の質向上に向けて貢献できる能力を身に付けている. ● 看護のリーダーやスペシャリストとして，国内外で活躍できる能力を身に付けている.
ＣＰ (教育課程の編成・実施の方針)	看護学専攻は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています. １　看護学の教育・研究に必要な基礎的理論や研究技法及び外国文献の読解力を学修する「看護学専攻共通科目」と「基礎看護学」「発達看護学」「広域看護学」の各専門分野から構成しています. ２　幅広く保健医療福祉に共通する３専攻共通科目では，保健福祉学特論，災害援助特論・演習や国際コミュニケーション特論等を履修できます. ３　「基礎看護学」では，生命科学特論や基礎看護学特論等の講義・演習を通して，看護のエビデンス検証や確立を志向します. ４　「発達看護学」では，小児・母性・成人・老年期のライフステージ特有の看護に関する課題を探求し，人々の健康と豊かな人生を支援できる看護の方法論やシステム構築に貢献することを目指しています. ５　「広域看護学」では，公衆衛生看護学・在宅看護学・国際保健看護特論・精神保健看護学特論を履修し，生涯を通じた人々の心とからだの健康を学際的に探究し，グローバルな視点から根拠に基づく課題解決を図り，看護の質向上にむけて先導できることを目指しています. ６　「広域看護学」では，修士論文に加えて保健師国家試験受験資格を満たす科目を開講し，高度な実践力とリーダーシップを発揮して社会に貢献できる保健師を養成します.
ＡＰ (入学者受入の方針)	看護学専攻が求める学生像は次のとおりです. ● 看護を科学的，論理的に考究し，ヒューマン・ケアリングと科学的根拠に基づく看護の実践力を身に付けたい学生 ● 専門分野における知識や技術を高めるとともに研究開発能力を身に付けたい学生 ● 新しいケアの方法やシステム開発を目指す学生 ● グローバルな視点で看護実践と研究を志向するとともに国際貢献をしたい学生 ● 保健師として明確な目的意識を持ち，将来地域においてリーダーとして活躍したい学生

1－(2)　栄養学専攻（博士前期課程）

ＤＰ （学位授与の方針）	栄養学専攻は，食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる優れた専門性を備えるとともに，豊かな創造力と問題解決能力を身に付け，それぞれの領域で活躍できる人材の育成を目指しています． したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● 栄養学領域における理論と技術を身に付けている． ● 人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決するための専門性や研究能力を身に付けている． ● 栄養学領域における専門的な技術や知識を地域・世界に向けて発信できる能力を身に付けている． ● 栄養士のリーダーとして，国内外で活躍できる能力を身に付けている．
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	栄養学専攻は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　栄養情報学講座，食デザイン学講座，基礎栄養学講座及び食品栄養学講座を置き，教育研究を実施します． ２　栄養情報学講座では，情報解析技術を活用したデータ解析法と新しい理論構築を基に，近年急速に問題となってきた肥満，糖尿病，脂質異常症をはじめとする生活習慣病の予防と治療を目指した教育・研究並びにスポーツ栄養学の教育・研究を行い，栄養学の最先端の分野で活躍できる能力を育成します． ３　食デザイン学講座では，幼児，児童・生徒，高齢者の栄養指導や調理指導，あるいは一般消費者の食生活全般を対象にした食育において，デザインや色彩の手法を取り入れて効果を得るための教育・研究を行い，食デザイン学の分野のリーダーとして活躍できる能力を育成します． ４　基礎栄養学講座では，一連の生命現象を遺伝子，生体分子，個体，集団などのレベルごとに理解し，さらに未知なる理論を展開して発展させる力を養うための教育・研究を行い，栄養学の基礎と臨床を結ぶことができる能力，並びに栄養学分野の教育・研究機関にて活躍できる能力を育成します． ５　食品栄養学講座では，栄養学を基盤とした天然物化学，酵素化学，分子遺伝学的アプローチにより，新規機能性食品成分の発見や新たな機能性食品素材の開拓，さらに食中毒の原因解明や予防に基づく食品の安全性の評価方法を開発し，健康増進と疾病予防を目標とした安全かつ高機能を有する食品素材の探求を志向した教育・研究を行い，管理栄養士のエキスパートとして食品関連企業，教育研究機関や行政機関において先導的に活躍できる能力を育成します． ６　外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します．
ＡＰ （入学者受入の方針）	栄養学専攻が求める学生像は次のとおりです． ● 栄養学関連の教育施設で教育・研究に携わることを目指す学生 ● 医療機関や保健福祉施設で治療栄養に携わる専門的管理栄養士を目指す学生 ● 栄養研究機関や医療栄養関連企業の栄養研究部門で試験・研究に携わることを目指す学生 ● 自治体などの保健施設で地域栄養活動に携わり，栄養指導などのコーディネータを目指す学生

1－(3)　保健福祉学専攻（博士前期課程）

ＤＰ （学位授与の方針）	保健福祉学専攻は，保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い，保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる優れた専門性を備えた人材の育成を目指しています． したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● 保健福祉領域における高度な知識，理論と技術及び論理性を身に付けている． ● 保健福祉領域における諸問題を解決するための研究を計画・遂行・発表する基礎能力を身に付けている． ● 生涯にわたって自己研鑽する姿勢と習慣を持ち，国内外の新しい問題に創造的に対応できる力を身に付けている．
ＣＰ （教育課程の編成･実施の方針）	保健福祉学専攻は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　政策科学講座，社会福祉支援学講座及び保健福祉支援学講座を置き，教育研究を実施します． ２　政策科学講座では，社会保障や児童・高齢者・障害者福祉分野等における制度，政策行政などに関する理論やデータの分析・評価方法を追求する科目を設置しています． ３　社会福祉支援科学講座では，児童，高齢者，障害者，病者のウェルビーイングを達成するための臨床的方法・技術の開発・評価及びそれらの理論化を追求する科目を設置しています． ４　保健福祉支援科学講座では，児童，高齢者，障害者など多様な人々の適応行動に関わる心理的・身体的特性の科学的な分析を基礎にした保健福祉実践につながる理論と方法を追求する科目を設置しています． ５　当該講座分野の理論と実践の前進に寄与しうる高度な研究成果を生み出すことができるよう，主指導教員を中心としながら段階的・系統的に研究指導を行います．
ＡＰ （入学者受入の方針）	保健福祉学専攻が求める学生像は次のとおりです． ● 「やさしさ」，「思いやり」，「人間性」といった豊かな社会性と科学性を備え，保健福祉領域でのリーダーとして活躍したい学生 ● 保健福祉領域における専門職として明確な目的意識を持ち，高度な知識や技術及び論理性を基礎にして，科学的方法によって問題の解決に当たりたい学生 ● 高い挑戦意欲を持って，保健福祉領域の未開拓の領域の研究に情熱を燃やすことができる学生 ● グローバルな視点での保健福祉実践・研究に興味を持ち，国際貢献を果たしたい学生

1－(4)　保健福祉科学専攻（博士後期課程）

ＤＰ (学位授与の方針)	保健福祉科学専攻は，人間の健康問題に関して，生命や栄養，看護・福祉など各方面からアプローチし，保健福祉科学に係る学問をさらに深化させることにより，保健福祉問題の解決策を提案できる高度な見識を備えた各専門職領域の実践者，指導者，研究者及び教育者の育成を目指しています． したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● 保健福祉科学の学問体系の確立と発展に寄与し，学際的研究を自立して展開する能力を身に付けている． ● 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報収集及び発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている． ● 保健福祉科学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち，科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている．
ＣＰ (教育課程の編成･実施の方針)	保健福祉科学専攻は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　保健福祉に関わる学問をさらに深化させ，看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と，より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うために，本専攻に看護学大講座，栄養学大講座，保健福祉学大講座の３大講座を置いています．また，外国人を担当教員とし，英語で講義する科目の設定並びに海外協定校との共同研究の実施により，グローバル教育を行います． ２　看護学大講座では，看護実践を通して生じる諸現象やケアそのものを科学的に解明していくため，慢性疾患患者やがん患者及びその家族が抱える諸問題や，高齢者等のケアニーズに対応する看護システムやケア開発，看護の質向上に資する教育・研究を行います．教育課程は基礎看護学，成人看護学，小児看護学，母性看護学，地域看護学，精神看護学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした看護学特別研究からなります． ３　栄養学大講座では，食事に伴う栄養現象を分子生物学的アプローチにより解明し，病気の予防に活かすため，食品中の新規有効成分の解明，食品の安全性の追求，慢性疾患における代謝調節系の役割の解明を目指した研究を行います．教育課程は分子生物学，栄養科学，食品科学，病原微生物学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした栄養学特別研究からなります．また，外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します． ４　保健福祉学大講座では，児童，障害者，高齢者を主な対象として，その自立支援に関する研究を行います．教育課程は，家族保健福祉学，児童保健福祉学，高齢者保健福祉学，障害者保健福祉学，地域保健福祉学，国際保健福祉学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした保健福祉学特別研究からなります．
ＡＰ (入学者受入の方針)	保健福祉科学専攻が求める学生像は次のとおりです． ● 人間の健康に関する諸問題を解決するために，専門の知識や技術，高度な学問的見識を修得し，自立して研究できる研究者を目指す学生 ● 地域における保健福祉問題を掘り起こして，その対策を立案して，地域における制度や計画作りに参加できるリーダーシップを持った研究者を目指す学生 ● 教育機関や企業，各種研究機関において自立して高度な教育研究に取り組める教育者及び研究者を目指す学生

２　情報系工学研究科

ＤＰ （学位授与の方針）	情報系工学研究科は，情報工学部における学士課程の教育目標の延長線上にその教育目標を置き，情報技術を活用して，人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に大いに貢献できるグローバル人材の育成を目指しています. したがって，本研究科では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します. ● 情報工学とそれに密接に関連する工学について，高度な専門性と技術を身に付けている. ● 得られた知識を融合的に活用して，新たな技術開発・理論展開を持って社会の発展に貢献できる能力を身に付けている. ● 技術者に求められる高い倫理観，多面的な思考力，それらに培われた実行力や行動力を備えたうえで，自身の専門分野でリーダーシップを発揮できる能力を身に付けている.
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	情報系工学研究科は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています. １　システム工学という専攻名のもと、連携性のある教育・研究体制を敷き、個々の学生が望む価値の多様性に対応できるよう、選択科目を多く設けています。 ２　博士前期課程では、修士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の３つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じた教育・研究ができるようにしています。 ３　博士後期課程では、博士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の３つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じたより深い教育・研究ができるようにしています。 ４　カリキュラムは、それぞれの課程のカリキュラム・ポリシーに従って、講義演習科目と特別研究から編成されています。いずれの課程においても教員による活発な議論と研究指導に加え、研究科として、また他研究科とも協力してグローバルな幅広い視野と高い応用や研究スキルを涵養します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	情報系工学研究科が求める学生像は次のとおりです. ● 情報処理，情報通信，機械システム，人間工学などの分野において，これらに関する理論や技術を深く修得し，急速に発展する高度技術社会に貢献することに情熱を傾けたい学生 ● 現在，情報工学についての知識は十分ではなくとも，今まで培ってきた専門分野に，情報工学関連技術を取り込み活用・発展させようとの希望を抱いている学生 ● 急速に進歩し，変化する産業社会からの多様な要請に応えるべく，既存の枠組みにとらわれない総合的かつ先端的な技術を修得し，産業社会に貢献しようとする学生

2-(1)　システム工学専攻（博士前期課程）

ＤＰ (学位授与の方針)	システム工学専攻は，研究者あるいは技術者の立場から，高度情報化社会の中枢となって産業社会の発展を支えていく人材，幅広い技術的基盤を基に「実システム」の創造的な設計ができる人材，豊かな人間性と倫理観を兼ね備えた人材，環境変化や産業構造の変化に柔軟に適応できる判断力とコミュニケーション能力を持つグローバル人材の育成を目指しています． したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● 工学に対する専門的な知識と応用力を身に付けている． ● 現実の複雑かつ困難な問題に柔軟に対処し，解決できる能力を身に付けている． ● 急速に発展する高度な技術社会をリードできる研究能力を身に付けている．
ＣＰ (教育課程の編成・実施の方針)	システム工学専攻（博士前期課程）は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　情報工学とそれに関連する工学分野の急速な発展に対応できるように、電子情報通信工学、機械情報システム工学及び人間情報システム工学の３つの領域を専攻内に設け、学士課程との連続性も踏まえ、教育研究を実施します。 ２　電子情報通信工学領域では、次世代ICT技術の開発・展開に必要となる情報処理工学、情報通信工学及び情報電子工学の３分野の専門知識を融合的に修得し，応用力を身に付けるための科目を設置しています。 ３　機械情報システム工学領域では、情報工学と機械工学を融合した次世代技術の開発・展開に必要となるソフトウェアシステム工学、知的インタフェースシステム工学及び機械・エネルギーシステム工学の３分野の専門知識を融合的に修得し，応用力を身に付けるための科目を設置しています。 ４　人間情報システム工学領域では、人間の生活支援に関する次世代技術の開発・展開に必要となるインテリジェントシステム、スポーツ・ヒューマンダイナミクス及び人間支援工学の３分野の専門知識を融合的に修得し，応用力を身に付けるための科目を設置しています。 ５　領域にのみ留まらず複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い応用力を涵養します。
ＡＰ(入学者受入の方針)	システム工学専攻が求める学生像は次のとおりです． ● 電子情報通信工学，機械情報システム工学，人間情報システム工学等の分野で高度な専門技術者あるいは研究者を目指す学生 ● 高度情報化社会の発展に，斬新な構想力と実践力を身に付けた技術者として貢献したい学生 ● 専門学術領域を通じて地域産業の振興をリードする意欲のある学生 加速度的に進展する高度情報化社会の中で，産業社会構造の変化に柔軟に対処し，新しい工学分野を共に創造し，新世紀を切り拓く，若さと夢を持った研究指向の技術者を目指す学生の挑戦を期待しています．

2-(2)　システム工学専攻（博士後期課程）

ＤＰ （学位授与の方針）	システム工学専攻は，今後ますます多様化，複雑化する社会からの要請に応えるべく，公的研究機関のみならず民間企業において，情報系の学術分野を現実課題の解決に適応できる研究者及び高度専門技術者を養成することを目標に，専門領域の深化と統合を通じて，新たな問題を発掘し解決する能力を持つグローバル人材の育成を目指しています． したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● 工学に対する深い専門的知識と幅広い応用力を身に付けている． ● 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている． ● システム工学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち，科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている．
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	システム工学専攻（博士後期課程）は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の３つの領域を専攻内に設け、学生は希望する研究分野に応じていずれかの領域に所属します。 ２　電子情報通信工学領域では、情報処理工学、情報通信工学、情報電子工学の３分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 ３　機械情報システム工学領域では、ソフトウェアシステム工学、知的インタフェースシステム工学、機械・エネルギーシステム工学の３分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 ４　人間情報システム工学領域では、インテリジェントシステム、スポーツ・ヒューマンダイナミクス、人間支援工学の３分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 ５　所属領域の講義から高度な専門知識を修得するとともに、所属外領域の講義の履修により知識の展開力を錬成します。 ６　領域にのみ留まらず複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い研究能力を涵養します。
ＡＰ （入学者受入の方針）	システム工学専攻が求める学生像は次のとおりです． ● 情報処理，情報通信，システム工学などの分野において，理論や技術を深く修得し，新たな問題を発見し解決することによって，産業社会に貢献することに情熱を傾ける学生 ● 産業社会の多様な要請に応えるべく，既存の枠組みにとらわれない総合的・先端的知識や技術を切り開くとともに，企業活動を社会貢献に導くことを希求する学生 特色ある３学科を基礎にする岡山県立大学大学院情報系工学研究科において，自らの専門分野の深化と他分野との複合化・融合化を通じて，自ら問題を発見し解決できる総合的能力を身に付けることを期待しています．

３　デザイン学研究科

ＤＰ （学位授与の方針）	デザイン学研究科は，グローバルな視野と感性を持ち，社会を的確にとらえ時代の変化を洞察することで，将来予想される問題を優れたデザインの創出により解決し，豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材の育成を目指しています． したがって，本研究科では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● デザインに係る十分な情報分析能力及び理論構築力を身に付けている． ● 独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けている． ● グローバルな視野と感覚を持ち，独自の優れた個性を発揮できるデザイン制作能力を身に付けている． ● 高度な専門性とマネジメント力を身に付けている．
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	デザイン学研究科は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　グローバルな視野と感性と独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けるために，カリキュラムは，専攻及び領域の連携を図るべく編成されており，専攻共通科目，領域科目に区分しています． ２　専攻共通科目は，両専攻に必要とされる美学・美術史系の科目を中心として編成しており，現代における造形文化を考察し，解明するための視座の獲得を図ります． ３　豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材育成のため，領域科目では，所属する領域での高度な専門知識，能力，技術を養う科目により編成しています．
ＡＰ （入学者受入の方針）	デザイン学研究科が求める学生像は次のとおりです． ● 国際的な視野と感覚を持ち，独自の優れた個性を発揮したデザイン制作に意欲を持つ学生 ● 新しいデザイン領域の開拓やデザイン理論の創出，もの作りに意欲を持つ学生 ● デザインを通して，人間性を豊かにし，幸せな社会作りに貢献しようとする意識を持つ学生

3-(1)　デザイン工学専攻（修士課程）

ＤＰ （学位授与の方針）	デザイン工学専攻は，地域社会と産業界の要請に応えられる，高度な専門的知識・技能・技術をベースにした総合的な思考力を有する高度専門職業人として多様な価値創造が可能なデザイナー及び研究者の育成を目指しています. したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します. ● それぞれの専門領域に関する十分な情報分析力及びデザイン理論による構築力を身に付けている. ● 社会動向などを見据えたうえで，創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている. ● 高度な専門性を活かし，グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている.
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	デザイン工学専攻は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています. １　高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点，高度な専門性を涵養するために，「製品・情報デザイン学領域」，「建築・都市デザイン学領域」の２つの領域を置いています. ２　製品・情報デザイン学領域では，工業製品，日常生活品など製品を対象として，技術と感性の調和を図り，同時にヒトと製品のスムーズな協働（インタラクション）のためにユーザインタフェイスなど情報を整理し，豊かな生活を創造する製品の実践的，総合的な教育研究に取り組みます. ３　建築・都市デザイン学領域では，人間生活の根幹となる建築空間を基軸にして，街づくり，都市や地域環境など広範囲な空間領域を対象として，人と環境の調和を目指した体系的・総合的な建築教育とともに，各分野を深く探究する先進的な研究活動に取り組みます. ４　特別研究は，２年間の研究活動を通じて，高度な研究遂行能力を涵養することを目的としています. 研究テーマは学生の希望と指導教員の助言により設定され，修士論文及び修士作品あるいは研究科委員会で承認を受けた特定の課題における成果物の作成をします.
ＡＰ （入学者受入の方針）	デザイン工学専攻が求める学生像は次のとおりです. ● 既成概念にとらわれず，個性的で，物事の本質を観ようとする自主性のある学生 ● 豊かな創造力と柔軟な思考力を鍛え，自ら問題を提起し，それぞれの創作を通して，解決策を示し，社会や人々の生活・文化の向上に貢献したい学生 ● 最新技術と伝統との融合による総合的なデザイン力によって，ヒトと空間，ヒトとモノ，ヒトとコトの関係性の中から新たな価値を創造し，人々の生活を豊かで潤いのあるものにしたい学生

3-(2)　造形デザイン学専攻（修士課程）

ＤＰ （学位授与の方針）	造形デザイン学専攻は，造形デザイン学の理論と技術を修得する教育研究を行い新たな造形デザイン構築において諸問題を総合的な視点から解決し，社会に貢献することのできる高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者を育成することを目指しています． したがって，本専攻では次の能力を身に付け，かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します． ● それぞれの専門領域に関する十分な情報分析・構築力及びデザイン理論構築力を身に付けている． ● 社会動向などを見据えたうえで，創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている． ● 高度な専門性を活かし，グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている．
ＣＰ （教育課程の編成・実施の方針）	造形デザイン学専攻は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています． １　高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点、高度な専門性を複合的に涵養するために、１専攻１領域制を導入し「造形デザイン学領域」で学生は学んでいきます。 ２　印刷メディアを主体とした造形構成・編集や、デジタルメディアを主体としたコンテンツ形成におけるデザイン性・機能性が研究できるよう、ビジュアルデザインに関する高度な専門知識、能力、技術を育成する科目群を提供しています。 セラミック・テキスタイル・木材等を使ったアイテムのデザイン性・機能性や、現代を意識した表現の可能性が研究できるよう、造形デザインに関する高度な専門知識、能力、技術を育成する科目群を提供しています。 ３　授業の取組としてプロジェクトに関わり、公共機関や企業などに社会提案を行うことで、実践的にデザインマネジメント力を養っていきます。 ４　２年間の特別研究では、研究テーマに基づき調査・分析・考察を進め、論と作品制作を通して造形デザイン学を深く探究していきます。
ＡＰ （入学者受入の方針）	造形デザイン学専攻が求める学生像は次のとおりです． ● 造形や構成などの特性を，柔軟な発想と集積した知識によって分析し，さらに独創的な思考力，表現力などを発揮して，新たな造形デザインの価値創造を目指したい学生 ● 情報化社会のなかで，情報を読み解き，またそれらを組み合わせるなどによって新たな課題発見の可能性を探究し，造形デザインによる社会的価値の創造に結び付けたい学生 ● 社会の動向を注意深く観察する力を養いながら，常に問題意識を持って造形デザインが担うべき役割を追究し，培った力を社会貢献にいかしたい学生

編集後記

大学教育年報は大学教育開発センターと教学課教務班の協働作業として編集・制作が行われてきており，今年度で 4 年目を迎える．担当した初年度（平成 26 年度教育年報）は，大学教育開発センターばかりでなく，国際交流センターも始動した．特に大学教育開発センターは教育企画室をはじめ 6 つの部会（アドミッション部会，共通教育部会，FD 部会，教育評価部会，キャリア形成支援部会，学生支援部会）を擁する大所帯でもあることから，それらを新たに加えることにより，従来とは教育年報の構成が大きく変化した．また 2 年目（平成 27 年度教育年報）には全学教育研究機構が共通教育部に変更され，共通教育のカリキュラムも大幅に変更されたこともあって，それらが当該年度の教育年報にも反映された．

また，学部専門課程における記述内容や統一性にも留意して改善を行った．さらに各学部とその大学院が連続的に記述されていたのを，学部は学部，研究科は研究科ごとにまとめるという形に変更した．平成 28 年度の教育年報は基本的に前年度から踏襲されたものの，「入学者受入」の項のみは学部と大学院を一体化して記述していたため，学部入試は学部の先頭に，研究科入試は研究科の先頭に配置することとした．また，今年度は，懸案であった「地域連携教育」（平成 29 年度から「社会連携教育」と称する）を，第 2 部の大学教育開発センターから第 1 部の第 2 章に置くことにした．本学では，従来の共通教育，専門教育に加え，新たに社会連携教育を加えて，本学の学士課程教育の 3 本柱に据えることが考えられているので，今後これら 3 つの配置の仕方には変更が起きる可能性が考えられる．

第 2 部については，一昨年度の学術研究推進センターの設置と，同センターと大学教育開発センター，国際交流センターが新たに教育研究開発機構の下に置かれたことを受けて 3 章構成としたが，本年度もそれを踏襲している．大学教育開発センターでは，今年度から教学 IR 充実のため，新たに‘教学 IR 部門’が設置された．これは，活動が緒についたばかりであることもあって特に項は設けていない．本部門の設置によって，教学データに基づく分析が進み，教育の質の向上に向けた動きが活発になることが期待される．それは徐々に来年度以降の教育年報にも反映されてくるとものと考えられる．

大学教育開発センター長　田内　雅規
（編集責任者）

発行　〒719-1197
岡山県総社市窪木１１１番地
岡 山 県 立 大 学
TEL 0866-94-2111
URL https://www.oka-pu.ac.jp
編集　岡山県立大学大学教育開発センター
印刷　株式会社プリント・ケイ

岡山県立大学
OKAYAMA PREFECTURAL UNIVERSITY

〒719-1197 岡山県総社市窪木 111　岡山県立大学
TEL:0866-94-2111　FAX:0866-94-2196